

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第79集

深 橋 前 遺 跡

(第2分冊)

2003

財団法人 岐阜県文化財保護センター

ふか ばし まえ い せき
深 橋 前 遺 跡

(第2分冊)

2003

本文目次 (第2分冊)

第6章 科学分析

第1節	窯跡・住居跡焼上の焼成年代推定……………(藤根・Lomtatize Zauri)	1
第2節	土器付着炭化物の放射性炭素年代推定……………(山形)	9
第3節	黑色土の放射性炭素年代推定……………(山形)	11
第4節	窯跡・住居跡出土炭化材の樹種同定……………(植田)	13
第5節	遺構内堆積物のリン・カルシウム分析……………(藤根・宮野)	32
第6節	住居跡・土坑墓出土土器の胎土分析……………(藤根・今村)	34
第7節	窯跡出土の灰軸陶器胎土分析……………(小村・藤根・今村)	52
第8節	堅穴住居跡から出土した銅製品の化学組成……………(藤根)	65
第9節	火葬墓に埋葬された火葬人骨の特徴……………(武内)	67

第7章 考察

第1節	石器の分布について—I期の遺跡の様相を中心にして—……………(松岡)	69
第2節	深橋前遺跡出土の筒状銅製品について(付 無茎銅鏃について)……………(松岡)	72
第3節	1号土坑墓についての若干の考察……………(松岡)	77
第4節	深橋前遺跡とその周辺の遺跡にみられる搬入土器について……………(松岡)	80
第5節	深橋前遺跡の急斜面集落……………(松岡)	83
第6節	深橋前遺跡における埋葬空間の形成と終末……………(安田)	91
第7節	深橋前古窯出土の遺物について……………(安田)	92
第8節	古窯関連祭祀遺跡について……………(安田)	93
第9節	深橋前遺跡の森の歴史—炭化材から周辺の植生を復原—……………(安田)	93

遺構観察表

遺物観察表

写真図版

第1分冊目次

序	
例言	
第1章	調査の概要…………… 1
第2章	遺跡を取りまく環境…………… 7
第3章	基本層序と遺構・遺物の概要…………… 10
第4章	I～III期の遺構と遺物…………… 25
第5章	IV～VI期の遺構と遺物…………… 215

図版目次

図311	広岡・藤澤 (1998) による東海地方の考古地磁気永年変化曲線 (太線) …………… 4	図325	灰釉陶器・粘土類等の主成分分析による第1-第2主成分分布図 (相関行列) …………… 61
図312	Shibuya(1980)による地磁気永年変化曲線 …… 5	図326	SiO ₂ -Na ₂ O分布図 …………… 62
図313	灰釉陶器窯跡 (SY01) 焼土の磁化方向と広岡・藤澤 (1998) による東海地方の考古地磁気永年変化曲線 …………… 7	図327	SiO ₂ -MgO分布図 …………… 62
図314	堅穴住居跡 (SBA05) 焼土の磁化方向とShibuya (1980) による地磁気永年変化曲線 …… 8	図328	SiO ₂ -P ₂ O ₅ 分布図 …………… 62
図315	深橋前古窯跡出土炭化材試料の層位と時期区分 …………… 26	図329	SiO ₂ -K ₂ O分布図 …………… 62
図316	出土炭化材樹種 …………… 27	図330	SiO ₂ -CaO分布図 …………… 62
図317	出土炭化材樹種 …………… 28	図331	SiO ₂ -TiO ₂ 分布図 …………… 63
図318	出土炭化材樹種 …………… 29	図332	SiO ₂ -MnO分布図 …………… 63
図319	出土炭化材樹種 …………… 30	図333	SiO ₂ -Fe ₂ O ₃ 分布図 …………… 63
図320	出土炭化材樹種 …………… 31	図334	SiO ₂ -Rb分布図 …………… 63
図321	土器胎土中の粒子組成図 …………… 47	図335	SiO ₂ -Sr分布図 …………… 63
図322	伊勢-三河河川辺の地層分布図 (藤根, 1998) …………… 50	図336	谷部粘土類出土位置・土層図 …………… 64
図323	土器胎土中の粒子顕微鏡写真 …………… 51	図337	銅鍍・筒状銅製品の蛍光X線スペクトル図 …… 66
図324	Si ₂ O ₃ -Al ₂ O ₃ 分布図 …………… 60	図338	I期の遺物の出土状況 …………… 70
		図339	現在確認できる筒状銅製品 …………… 73
		図340	伊勢型壺を用いた土坑墓 …………… 78
		図341	投入土器及びそれを覆った土器の共存関係 …… 81
		図342	砂行・南青柳遺跡の投入土器及びそれを覆った土器 …………… 82
		図343	深橋前遺跡とその周辺の集落 …………… 87・88

表目次

表6	灰釉陶器窯跡・住居跡の床面焼土の焼成年代推定 …………… 3	表21	深橋前古窯跡出土灰釉陶器・谷部粘土類の粘土および砂粒の特徴 …………… 59
表7	窯跡および住居跡焼土の残留磁化測定結果 (偏角補正前) …………… 6	表22	実測石器の状況 …………… 69
表8	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果 …… 10	表23	弥生時代後期から古墳時代初期の桶状銅製品出土地名表 …………… 72
表9	放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果 …… 12	表24	東海で確認されている無蓋銅鍍出土地名表 …… 75
表10	祭祀遺構および住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧 …………… 21~22	表25	伊勢型壺を用いた土坑墓のいくつかの例 …… 77
表11	祭祀遺構と住居跡の出土炭化材樹種の比較 …… 23	表26	S字壺・有段I線の壺の出土状況 …………… 80
表12	深橋前古窯跡灰原出土炭化材樹種同定結果一覧 …………… 24	表27	II・III期堅穴住居跡小期別軒数 …………… 85
表13	深橋前古窯跡の灰原出土炭化材の年輪数 …… 25	表28	砂行遺跡・南青柳遺跡・深橋前遺跡の時期対応と砂行遺跡の各小期の堅穴住居跡数 …… 86
表14	各遺構埋積物の全リン濃・全カルシウム分析値 …………… 33	表29	堅穴住居跡等観察表 …………… 100・101
表15	弥生・古墳・古代土器とその肉眼的特徴 …… 44	表30	II・III期土器観察表 …………… 102~121
表16	土器胎土中の粒子組成一覧表 …………… 45・46	表31	I期土器観察表 …………… 122
表17	土器胎土中砂粒の起源岩石の組み合わせ …… 48	表32	IV期土器観察表 …………… 122
表18	弥生・古墳・古代土器の粘土および砂粒の特徴 …… 49	表33	金属製品観察表 …………… 122
表19	試料一覧 …………… 57	表34	石器属性表 …………… 123~126
表20	蛍光X線分析による主成分元素・微量元素 …… 58	表35	須恵器観察表 …………… 127~128
		表36	灰釉陶器 (窯内産遺物) 観察表 …… 129~140
		表37	山茶碗観察表 …………… 141

写真図版目次

図版1	調査前の状況	図版6	SBB01・05・06・10・07・08・11・12・13
図版2	調査終了後の状況	図版7	SBD01・03・05・08・10・SBE01・03・04
図版3	調査終了後の状況	図版8	SBF06・05
図版4	SBA01・03・09・04・05・06・07	図版9	SBE01・08・09・10・11・15・16・17・21・32・18・28・29・19
図版5	SBA08・10・14・SBB04		

- 図版10 SBE22・23・25・33・34・24・27
 図版11 SBF01・02
 図版12 東正院尾根橋の平坦部付近・SBF04・05・06・11
 図版13 SBF08・SBF08付近
 図版14 SHF13・15・16・14・17・18・19・20・23・24
 図版15 SBF25
 図版16 SBF27・29・28
 図版17 SBF31・38・34・35・39
 図版18 1～4号方形周溝墓
 図版19 段状遺構・3・4号土坑墓・SKA01・SLA01・作業風景・雲景色
 図版20 深橋前古墳
 図版21 深橋前古墳
 図版22 1・2号土坑墓・SXB01・02・小石冢
 図版23 1・2・3・5号火葬墓
 図版24 4・6号火葬墓・SXD13
 図版25 深橋前古窯跡(1)
 図版26 深橋前古窯跡(2)
 図版27 深橋前古窯跡(3)
 図版28 D区遺構(1)
 図版29 D区遺構(2)
 図版30 遺構出土土器(立面1) 高坏・器台
 図版31 遺構出土土器(立面2) 高坏・器台
 図版32 遺構出土土器(立面3) 高坏・器台
 図版33 遺構出土土器(立面4) 高坏・器台
 図版34 遺構出土土器(立面5) 高坏・器台
 図版35 遺構出土土器(立面6) 壺
 図版36 遺構出土土器(立面7) 甗
 図版37 遺構出土土器(立面8) 甗
 図版38 遺構出土土器(立面9) 甗・鉢
 図版39 遺構出土土器(立面10) 甗・鉢
 図版40 遺構出土土器(立面11) 甗・鉢
 図版41 遺構出土土器(立面12) 甗・鉢
 図版42 遺構出土土器(立面13) 甗・鉢
 図版43 遺構出土土器(立面14) 甗・鉢
 図版44 遺構出土土器(立面15) 甗・鉢
 図版45 包含層出土土器(立面1) 高坏・器台
 図版46 包含層出土土器(立面2) 高坏・器台
 図版47 包含層出土土器(立面3) 高坏・器台・甗・鉢
 図版48 包含層出土土器(立面4) 甗・甗
 図版49 包含層出土土器(立面5) 甗
 図版50 包含層出土土器(立面6) 甗・鉢
 図版51 遺構出土土器(俯瞰1)
 図版52 遺構出土土器(俯瞰2)
 図版53 遺構出土土器(俯瞰3)
 図版54 遺構出土土器(俯瞰4)
 図版55 遺構出土土器(俯瞰5)
 図版56 遺構出土土器(俯瞰6)
 図版57 遺構出土土器(俯瞰7)
 図版58 遺構出土土器(俯瞰8)
 図版59 遺構出土土器(俯瞰9)
 図版60 遺構出土土器(俯瞰10)
 図版61 遺構出土土器(俯瞰11)
 図版62 遺構出土土器(俯瞰12)
 図版63 包含層出土土器(俯瞰1)
 図版64 包含層出土土器(俯瞰2)
 図版65 縄文・弥生土器(俯瞰)
 図版66 石器(1)
 図版67 石器(2)
 図版68 石器(3)
 図版69 石器(4)
 図版70 石器(5)
 図版71 石器(6)
 図版72 石器(7)
 図版73 金属製品
 図版74 遺構出土須恵器(埋約窆・小石室)
 図版75 遺構出土須恵器(火葬墓)
 図版76 遺構出土須恵器・包含層出土須恵器
 図版77 深橋前古窯跡(焼成室・雄道部出土) D区遺構出土遺物
 図版78 深橋前古墳・SXD08・15出土遺物
 図版79 SXD15出土遺物・重ね焼き・筆ぬり・細部
 図版80 はけぬり・つけかけ細部
 図版81 古い層出土碗
 図版82 新しい層出土碗
 図版83 新しい層、SK1・2・3出土碗
 図版84 SK4・SU1・D区出土碗、古い層出土皿
 図版85 新しい層、SK1・2・3、D区出土皿
 図版86 小瓶・深碗・甗・段皿・有台皿・鉢
 図版87 鉢
 図版88 長頸瓶(1)
 図版89 長頸瓶(2)
 図版90 長頸瓶(3)
 図版91 長頸瓶(4)・短頸甗
 図版92 長頸瓶 調整1
 図版93 長頸瓶 調整2・短頸
 図版94 平甗・小瓶・甗
 図版95 文字・棟刺
 図版96 捺・線刺
 図版97 輪花碗(円文)
 図版98 深碗(円文)
 図版99 大皿、皿(円文)
 図版100 底部内面、外面(円文)、爪形圧痕、高台圧痕、回転糸切残
 図版101 皿状焼台
 図版102 皿状焼台、付着物
 図版103 煎道具、煎甗
 図版104 焼台1
 図版105 焼台2
 図版106 分選俵、中近世陶器
 図版107 火葬骨

第6章 科学分析

第1節 窯跡・住居跡焼土の焼成年代推定

藤根 久・Lomtatze Zauri (パレオ・ラボ)

1. はじめに

深橋前遺跡の調査では、灰釉陶器窯跡 (SY01) と竪穴住居跡 (SBA05) が検出された。ここでは、これら窯跡あるいは住居跡の各焼土の熱残留磁化を測定し、焼成年代の推定を行った。

2. 考古地磁気年代推定の原理

地球上には地磁気が存在するために、磁石は北を指す。この地磁気は、その方向と強度 (全磁力) によって表される。方向は、真北からの角度である偏角 (Declination) と水平面からの角度である伏角 (Inclination) によって表す。磁気コンパスが北として示す方向 (磁北) は、真北からずれており、この間の角度が偏角である。また、磁針をその重心で支え磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のN極が水平面より下方を指す。この時の傾斜角が伏角である。現在、この付近の偏角は約 6.98° 、伏角は約 48.87° 、全磁力 (水平分力) は約 30721.7 (aT) である (理科年表, 1993; いずれも1990年値)。これら地磁気の三要素 (偏角・伏角・全磁力) は、観測する地点によって異なった値になる。全世界地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気の分布は、地球の中心に棒磁石を置いた時にできる磁場分布に近似される。また、こうした地磁気は時間の経過とともに変化し、ある地点で観測される偏角や伏角あるいは全磁力の値も時代とともに変化する。この地磁気の変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

過去の地磁気の様子は、高温に焼かれた窯跡や炉跡などの焼土、地表近くで高温から固結した火山岩あるいは堆積物などの残留磁化測定から知ることができる。大半の物質は、ある磁場中に置かれると磁気を帯びるが、強磁性鉱物 (磁鉄鉱など) はこの磁場が取り除かれた後も磁気が残る。これが残留磁化である。考古地磁気では、焼土の残留磁化 (熱残留磁化) が、焼かれた当時の地磁気の方角を記録していることを利用する。こうした地磁気の化石を調べた結果、地磁気の方角は少しづつではあるが変化しており、その変化は地域によって違っていることが分かっている。過去2,000年については、西南日本の窯跡や炉跡の焼土の熱残留磁化測定から、その変化が詳しく調べられている (広岡, 1977; Shibuya, 1980; 図312)。最近では、地磁気に地域差が認められることから、東海地方の地磁気永年変化曲線も求められている (広岡・藤澤, 1998; 図311)。

こうした年代のよく分かっている窯跡焼土や火山岩の熱残留磁化測定などから地磁気永年変化曲線が得られると、逆に年代の確かでない遺跡焼土などの残留磁化測定を行い、先の地磁気永年変化曲線と比較することによって、その焼成時の年代が推定できる。また、年代が推定されている窯跡焼土などについても、土器とは違った方法で焼成時の年代を推定できることから、さらに科学的な裏付けを得ることができる。この年代推定法が考古地磁気による年代推定法である。ただし、この方法は、“C年代測定法など他の絶対年代測定法のように、測定結果単独で年代の決定を決定する方法ではない。すなわち、焼土の熱残留磁化測定から得られる偏角および伏角の値からは複数の年代値が推定される

が、いずれを採用するかは、遺物などの年代が参考となる。

3. 試料採取と残留磁化測定

考古地磁気による年代推定は、a)測定用試料の採取および整形、b)残留磁化測定および統計計算を行い、c)地磁気永年変化曲線との比較を行い、焼成年代を推定する。なお、試料の磁化保持力や焼成以後の二次的な残留磁化の有無などを確認するために、段階交流消磁も行った。

a. 測定用試料の採取および整形

採取した試料は、灰釉陶器窯跡 (SY01) の床面焼土12試料と遷問Ⅰ式住居跡 (SBA05) の床面焼土15試料である。試料は、床焼土面において、①一辺約4cmの立方体試料を取り出すため、瓦用ハンマーなどを用いて、対象とする部分 (良く焼けた部分) の周囲に溝を掘る。②薄く溶いた石膏を試料全体にかけ、試料表面を補強する。③やや固め (練りハミガキ程度) の石膏を試料上面にかけ、すばやく一辺5cmの正方形のアルミ板を押し付け、石膏が固まるまで放置する。④石膏が固まった後、アルミ板を剥し、この面の最大傾斜の方位および傾斜角を磁気コンパス (考古地磁気用に改良したクリノメータ) で測定し、方位を記録すると同時に、この面に方位を示すマークと番号を記入する。⑤試料を振り起こした後、試料の底面に石膏をつけて補強し持ち帰る。⑥持ち帰った試料は、ダイヤモンド・カッターを用いて一辺3.5cm・厚さ2cm程度の立方体に切断する。この際切断面が崩れないように、一面ごとに石膏を塗って補強し、熱残留磁化測定用試料とする。

b. 段階交流消磁、熱残留磁化測定および統計計算の結果

熱残留磁化測定は、リング・コア型スピナ 磁力計 (SMM-85; 榎夏原技研製) を用いて測定した。磁化保持力の様子や放棄された後の二次的な磁化の有無を確認するため、任意1試料 (灰釉陶器窯跡 No. 6、住居跡 No. 5) について交流消磁装置 (DEM-8601; 榎夏原技研製) を用いて段階的に消磁を行い、その都度スピナ磁力計を用いて残留磁化を測定した。その結果、灰釉陶器窯跡および住居跡のいずれの試料においても磁化強度は10³cmuと強い。また、NRM (自然残留磁化) に対する75 Oe消磁の相対強度は、灰釉陶器窯跡が約93%、住居跡が約67%と高い値であった。さらに、磁化方向は、中心に向かって直線的に変化し、安定した方向を記録していることが分かった。

以上の理由から、75 Oeで消磁した際の残留磁化方向が焼成時の磁化方向であると判断した。そこで、これ以外の段階交流消磁を行っていない試料も、75 Oe消磁した後に残留磁化を測定した。

複数試料の測定から得た偏角 (D_i)、伏角 (I_i) を用いて、Fisher (1953) の統計法により平均値 (D_m , I_m) を求めた。信頼度数は、灰釉陶器窯跡が894.63、住居跡が632.24と比較的高い値であった (表7)。

求めた熱残留磁化方向は、真北を基準とする座標に対する数値に補正する。偏角は、建設省国土地理院の1990.0年の磁気偏角近似式から計算した6.98°Wを使用した。その結果は、Shibuya (1980) による地磁気変化曲線とともにプロットした。図中測定点に示した楕円は、フッシャー (1953) の95%傾斜角より算出した偏角および伏角の各誤差から作成したものである。

4. 焼成年代値の推定

図313には、広岡・藤澤（1998）による東海地方の考古地磁気永年変化曲線と灰釉陶器窯跡焼土の磁化方向を示す。また、図314には、Shibuya（1980）による地磁気永年変化曲線の一部と灰釉陶器窯跡と住居跡の各焼土の磁化方向を示す。灰釉陶器窯跡は偏角 14.79° W、伏角 55.70° 、住居跡が偏角 19.08° W、伏角 59.02° にそれぞれプロットされた。なお、灰釉陶器窯跡はA.D.700～800年間の曲線付近に位置し、住居跡はA.D.200年付近に位置する。年代推定は、各磁化方向において最も近い曲線上に移動して推定した。

その結果、灰釉陶器窯跡がA.D.720±20年およびA.D.860±40年、住居跡がA.D.200⁺³⁵、₋₄₅年と推定された。

なお、灰釉陶器窯跡は考古学的には10世紀と推定されていることから、窯跡の移動などが予想される。

表6 灰釉陶器窯跡・住居跡の床面焼土の焼成年代推定

遺構	位置	遺物年代	焼成年代
灰釉陶器窯跡 (SY01)	床面焼土	10世紀	A.D.720±20年、A.D.860±40年
竪穴住居跡 (SBA05)	床面焼土	週間I式	A.D.200 ⁺³⁵ 、 ₋₄₅ 年

引用文献

Fisher, R.A. (1953) Dispersion on a sphere. Proc. Roy. Soc. London, A, 217, 295-305.

広岡公夫 (1977) 考古学地磁気および第四紀占地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、15、200-203.

広岡公夫・藤澤良祐 (1998) 東海地方の地磁気永年変化、日本文化財科学会第15回大会研究発表要旨集、20-21.

理科年表 (1993) 国立天文台編、丸善、952p

Shibuya, H. (1980) Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大学基礎工学部修士論文、54p

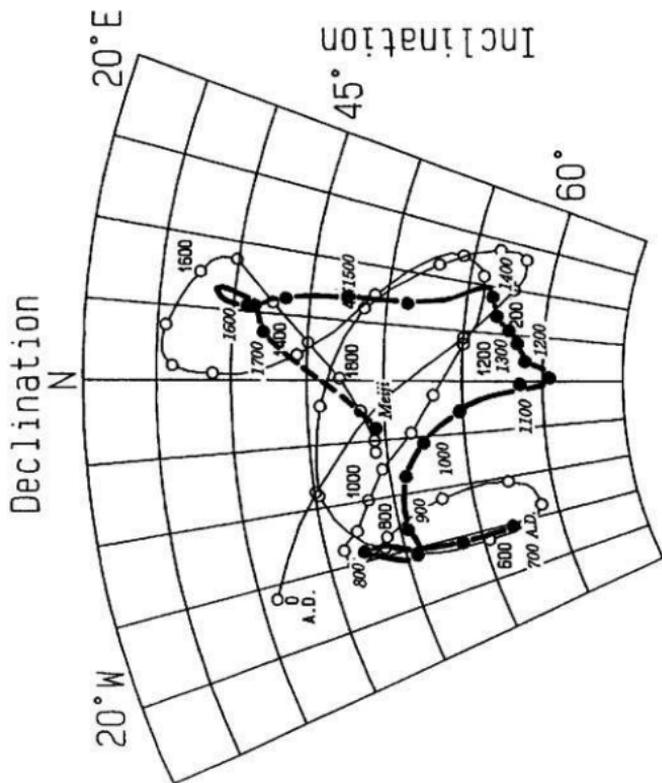


図311 広岡・勝澤 (1998) による東海地方の考古地磁気永年変化曲線 (本線)

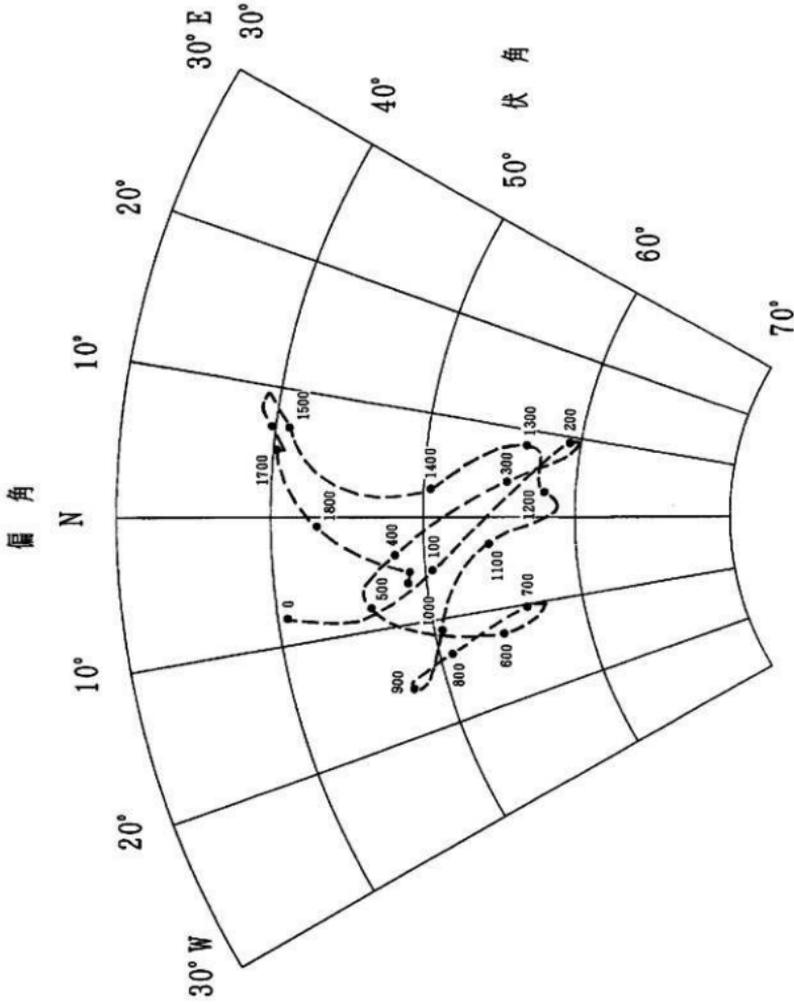


図312 Shibuya (1960) による地磁気年変化曲線

表7 窯跡および住居跡焼土の残留磁化測定結果 (偏角補正前)

遺構名	試料No.	偏角(°E)	伏角(°)	強度($\times 10^{-3}$ emu)	備考	統計処理項目	統計値
灰釉陶器窯跡 (SY01) (75 Oe消磁)	1	-11.0	53.7	9.95		試料数(n)	11
	2	-8.2	57.6	8.41			
	3	-4.8	56.0	5.54		平均偏角Im(°E)	-7.81
	4	-9.7	56.8	6.11			
	5	-7.1	53.7	2.47		平均伏角Dm(°)	55.70
	6	-8.0	54.4	5.71	段階交流消磁		
	7	-21.3	56.4	4.63	計算から除外	誤差角 δD (°)	2.72
	8	-1.9	60.5	5.66			
	9	-8.9	56.8	4.74		誤差角 δI (°)	1.53
	10	-7.5	55.6	5.04			
	11	-7.9	51.8	2.31		信頼度計数(k)	894.63
	12	-10.1	55.6	4.20			
	13					平均磁化強度($\times 10^{-3}$ emu)	5.47
	14						
遺構名	試料No.	偏角(°E)	伏角(°)	強度($\times 10^{-3}$ emu)	備考	統計処理項目	統計値
竪穴住居跡 (SBA05) (75 Oe消磁)	1	24.6	59.6	16.90		試料数(n)	15
	2	29.2	60.0	26.60			
	3	28.0	59.4	10.60		平均偏角Im(°E)	26.06
	4	27.6	60.6	10.60			
	5	24.9	57.3	30.70	段階交流消磁	平均伏角Dm(°)	59.02
	6	26.1	58.9	4.79			
	7	25.6	56.3	4.85		誤差角 δD (°)	2.95
	8	29.4	61.3	11.30			
	9	21.1	58.4	12.10		誤差角 δI (°)	1.52
	10	26.4	64.0	13.90			
	11	31.0	58.5	18.30		信頼度計数(k)	632.24
	12	22.2	61.4	11.10			
	13	19.1	52.0	42.10		平均磁化強度($\times 10^{-3}$ emu)	16.50
	14	29.0	59.3	23.10			
	15	28.3	57.7	10.60			

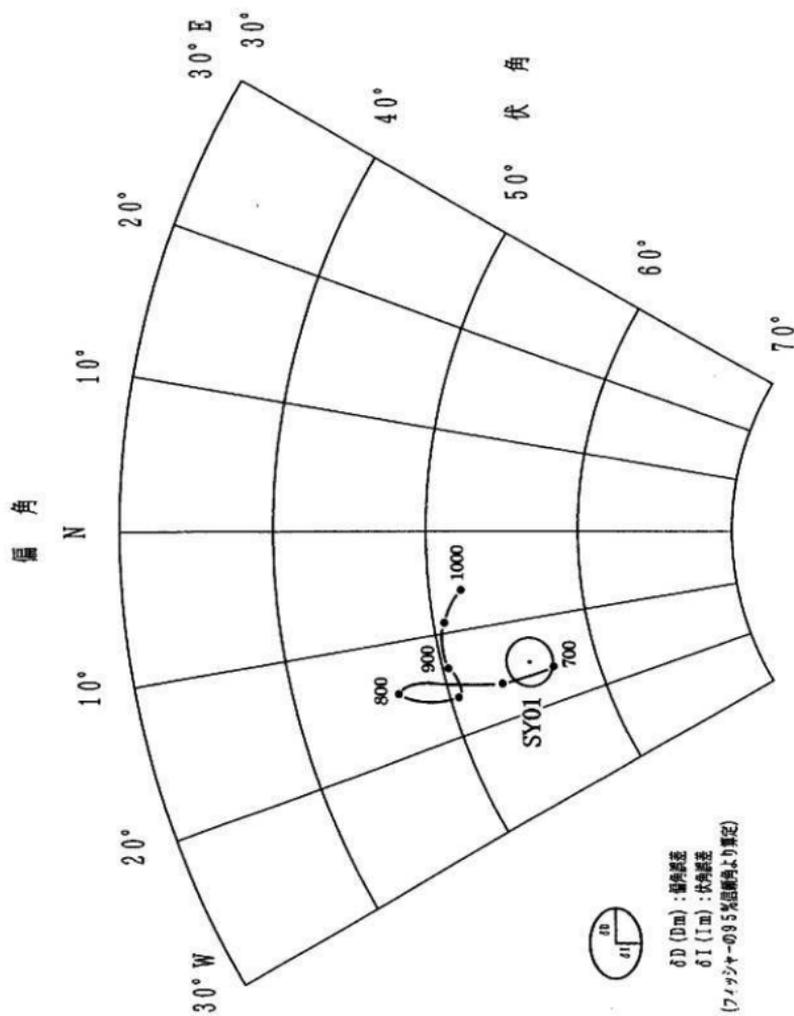


図313 灰釉陶器窯跡 (SY01) 焼土の磁化方向と広角・磁差 (1998) による東海地方の考古地磁気永年変化曲線

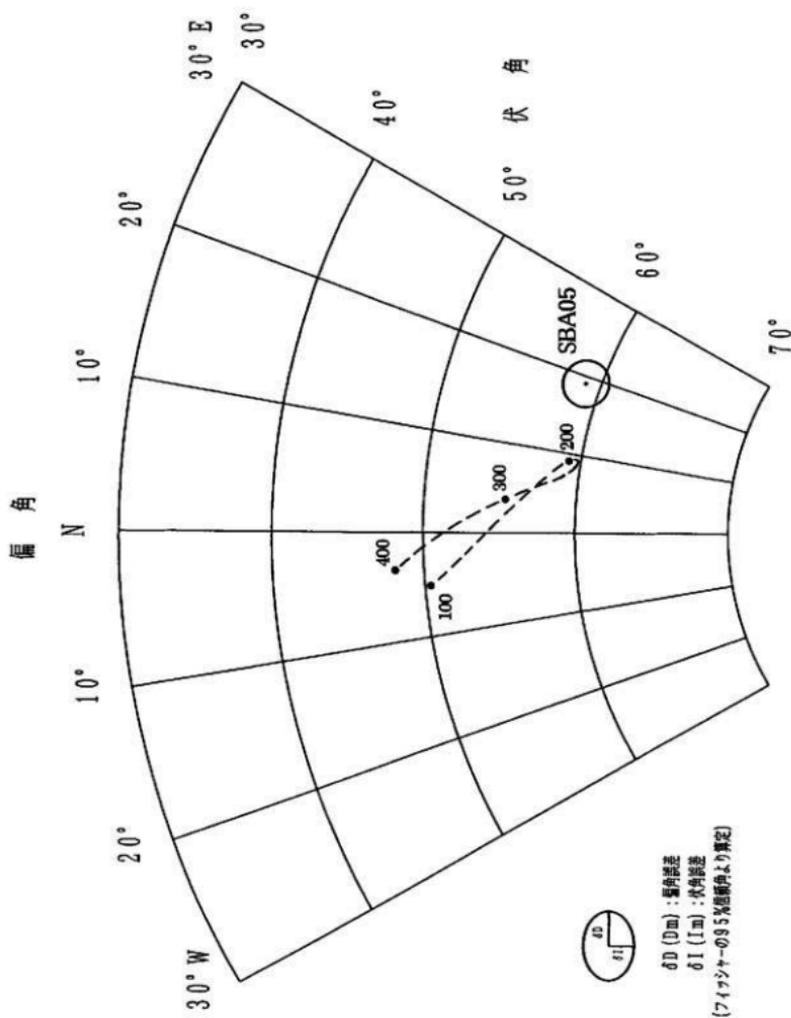


図314 野穴住居跡 (SBA05) 焼土の磁化方向とShibuya (1980) による地磁気永年変化曲線

第2節 土器附着炭化物の放射性炭素年代推定

山形 秀樹 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

深橋前遺跡より出土した土器から採取した附着物の加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、皿状焼台から採取した附着物1点、SBF29より出土した土器片から採取した附着物1点、SBF36より出土した土器片から採取した附着物1点の併せて3点である。

これら試料は、酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨 (グラファイト) に調整した後、加速器質量分析計 (AMS) にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表8に、各試料の同位体分別効果の補正值 (基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値 (yrBP) の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差 (One sigma) に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い (¹⁴Cの半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に較正した年代の算出にCALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。なお、暦年代較正值は¹⁴C年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

4. 考察

各試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲の

うち、その確からしさの確率が高い年代範囲に注目すると、それぞれより確かな年代値の範囲として示された。

なお、PLD-1443の試料は、10世紀の灰軸陶器内側に付着した脂質様物であるが、その年代値は大幅に古い年代値となった。FT-IR分析（フーリエ変換赤外分光分析）を行い同定はできなかったが、仮に脂質物起源であるならば埋没した際に周辺から古い炭素を吸収したことが考えられる。

また、PLD-1444とPLD-1445の試料は、土器外側に付着した炭質物であるが、土器編年に対して1世紀ほど古い年代値であった。AMS法による年代測定は少量の試料でより誤差の小さい年代値が得られることから、土器に付着した炭質物の年代測定法として注目されているが、反対に測定試料が少ないことが試料の質により年代値を左右することにもなる。土器付着物には、外側に付着する煤状物と内側に残存する食べ物残渣としての炭質物とがあるが、食べ物残渣は単年性植物であることから、より優れた試料と考える。ここで測定した試料は、土器外側に付着した炭質物であったことから、複数年の木材燃料の煤であることが原因で古い年代となった可能性も考えられる。

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代, p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended 14C Database and Revised CALIB3.0 14C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

表8 放射性炭素年代測定および暦年代校正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1443 (AMS)	土器付着物 皿上焼台32	-21.4	1630 ± 40	cal AD 420	cal AD 385 - 440 (61.6%) cal AD 450 - 465 (13.0%)
PLD-1444 (AMS)	土器付着物 SBE29 2136	-22.5	1920 ± 40	cal AD 80	cal AD 50 - 130 (91.9%)
PLD-1445 (AMS)	土器付着物 SBF29 2264	-22.7	1900 ± 30	cal AD 85 cal AD 100 cal AD 120	cal AD 70 - 130 (100%)

第3節 黒色土の放射性炭素年代推定

山形秀樹 (パレオ・ラボ)

深橋前遺跡から出土した有機質土試料1点の放射性炭素年代をGPC法にて測定した。測定結果と暦年代較正して得られた結果は表9に記載した。

放射性炭素年代測定について

試料は、酸処理を施して不純物を除去し、酸素気流中で燃焼させて二酸化炭素としたものをアンモニア水に通し、塩化カルシウムの水溶液を加えて炭酸カルシウムを生成する。炭酸カルシウムに過塩素酸を加えて発生させた二酸化炭素を450℃の反応管内でリチウムに吸収させた後、真空ポンプで引きながら800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

測定は、ラドン崩壊のために約一ヶ月放置した後、精製したアセチレンを容量400ccのガス比例計数管（GPC）に充填し、 β -線を計数して ^{14}C 濃度を算出した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、補正した ^{14}C 濃度を用いて14C年代を算出した。

なお、 ^{14}C 年代値（yrBP）の算出には ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、計数値の標準偏差 σ に基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。これは、試料の ^{14}C 年代が、その ^{14}C 年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。試料の β -線計数率と自然計数率との差が 2σ 以下の時は、 3σ に相当する年代を下限の年代値として表記し、試料の β -線計数率と現在の標準炭素（Modern standard carbon）の計数率との差が 2σ 以下の時はModernと表記する。ただし、 $^{14}\text{C}_{\text{Sample}}/^{14}\text{C}_{\text{Modern}} < 1$ であれば、 ^{14}C 年代値と ^{14}C 年代誤差を付記する。

暦年代較正について

暦年代較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期5,730 \pm 40年）を較正し、より正確に真の年代を求めるために、 ^{14}C 年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C 年代の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ^{14}C 年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて ^{14}C 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて較正暦年代を算出する。較正暦年代の算出にRadiocarbon Calibration Program[®] CALIB rev. 4.3 [Reference for datasets used: Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (INTCAL98; Stuiver et al., 1998a). Radiocarbon 40, p.1041-1083]を使用した。なお、暦年代較正値は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、真の年代である可能性が最も高いことを示す。また、 1σ 暦年代範囲および 2σ 暦年代範囲は確率分布を用いて算出した暦年代範囲であり、その範囲内に真の年代が入る可能性が高いことを示す。 1σ 暦年代範囲は ^{14}C 年代誤差に相当する較正曲線上の暦年代範囲であり、真の年代が入る確率が68%であることを示す。 1σ 暦年代範囲のProbabilityは、68%のうちで、さ

らに特定の 1σ 暦年代範囲に入る確率を示す。同様に、 2σ 暦年代範囲は ^{14}C 年代誤差の2倍 ($\pm 2\sigma$) に相当する較正曲線上の暦年代範囲であり、真の年代が入る確率が95%であることを示す。 2σ 暦年代範囲のProbabilityは、95%のうちで、さらに特定の 2σ 暦年代範囲に入る確率を示す。

較正曲線は ^{14}C 濃度の変動のためデコボコしており、そのため ^{14}C 年代値に対応する暦年代較正值、または ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲が複数存在する場合があるが、暦年代較正值はいずれも等しく真の年代である可能性があり、 1σ 暦年代範囲はいずれも68%、 2σ 暦年代範囲はいずれも95%の確率で、さらにProbabilityに示された確率で真の年代が入る。

暦年代較正は約二万年前からAD1,950年までが有効であり、該当しないものについては暦年代較正值を*****またはModernと表記し、 1σ 暦年代範囲および 2σ 暦年代範囲を*****と表記する。また、cal AD1955*は核実験後の年代を指し、Modernを意味する。ただし、一万年以前のデータはまだ不完全であるため注意する必要がある。

表9 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定方法)	試料データ	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代		
			暦年代較正值	1σ 暦年代範囲 (Probability)	2σ 暦年代範囲 (Probability)
PLD-499 (GPC)	有機質土 (黒色土壌) IVa層	4750 \pm 100	cal BC 3625 cal BC 3590 cal BC 3525	cal BC 3640 - 3500 (70.8%) cal BC 3435 - 3380 (26.0%)	cal BC 3715 - 3335 (97.8%)

備考

ModernはAD1,950年以降の新しい年代を指す。yrBPはAD1,950年から過去へ遡った年代を意味する。calは較正した暦年代を意味し、実年代との混同を防ぐためにつけられる。また、Probabilityが10%未満の 1σ 暦年代範囲および 2σ 暦年代範囲については記載を省略した。

^{14}C 年代について同位体効果の補正を施していないので、 ^{14}C 年代および暦年代較正の年代値は試料の同位体比が $\delta^{14}\text{C}_{\text{PDB}}=-25.0\%$ として算出された場合の年代値と同等である。

引用文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

第4節 窯跡・住居跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

当遺跡は関市下有知地内の標高80m前後の小丘陵に位置する。ここでは、弥生時代末から古墳時代初頭の焼失堅穴住居跡6遺構（SBE06・SBA05・SBF38・SBF29・SBF25・SBF05）、平安時代の土坑墓3遺構（SXD13・SXD07・SXD14）、平安時代の灰軸陶器窯1基から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。焼失堅穴住居跡の炭化材からは当時の建築材の樹種利用を、土坑墓の炭化材からは火葬の燃料材とされたであろう樹種を、灰軸陶器窯跡の灰原の炭化材からは窯業用の燃料材樹種を明らかにする目的でこの調査が行われた。このような異なる時期や異なる性格の遺構から出土した炭化材樹種を調査し比較検討することにより、当地で生活や生業に利用されてきた樹種の実体と樹種利用の変遷などを理解する、ひとつの資料を得ることができた。また、焼失堅穴住居跡の炭化材調査は、周辺地域における同時期の調査資料が蓄積しつつあることから、建築材樹種利用の地域全体像を明らかにして行く追加資料となる。平安時代の土坑墓から出土した炭化材の樹種調査は全国的にも事例は少ないようであり、重要な記録事項と思われる。そして、岐阜県から愛知県にかけては古代より窯業活動が盛んであり、近年その燃料材の樹種調査も蓄積されつつあるが、灰軸陶器窯の燃料材の樹種調査事例はあまり多くない。そして当窯跡の炭化材調査は、灰原の分層に基づき比較的多くの炭化材が採取され、更にその分層は堆積状況により大きくA～Cの3時期に区分された。このような好条件により、当古窯では灰軸陶器窯1基の使用期間中の燃料材樹種調査を時間軸に沿って詳細に調査することができた。

2. 炭化材樹種同定の方法

まず、炭化材の横断面（木口）を実体顕微鏡で観察し、アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ・シイノキ属などのように横断面の管孔配列が特徴的な分類群は実体顕微鏡下の観察で同定し、それ以外の分類群については3方向の破断面（横断面・接線断面・放射断面）を走査電子顕微鏡で拡大してその材組織の特徴に基づき同定を決定した。灰原の炭化材は、ほとんどの試料袋に複数から多数の炭化材破片があった。これらは、極めて小さな破片以外はすべて横断面を実体顕微鏡で観察し、各試料ごとに同一分類群に分けた。針葉樹の横断面にはすべて垂直樹脂道がありマツ属と推定されたので、各試料ごとに1～2点を無作為に走査電子顕微鏡で調べその結果を提示した。

走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

残りの炭化材試料は、(財)岐阜県文化財保護センターに保管されている。

3. 結果

表10に土坑墓と住居跡の炭化材樹種同定結果の一覧を示し、表11では土坑墓と住居跡の検出樹種とその点数を比較した。灰軸陶器窯の灰原出土炭化材の樹種同定結果を検出樹種の量比で表12に示

した。図135には、灰原の分層の断面と平面分布を示し、炭化材試料の採取された層位と対応できるようにした。以下に各遺構ごとの樹種調査結果を記す。

【竪穴住居跡（弥生時代後半～古墳時代前半）出土炭化材の樹種構成】

6住居跡からは、ハンノキ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ・クワ属・サクラ属の落葉広葉樹6分類群、アカガシ亜属・シイノキ属・サカキ・ヒサカキの常緑広葉樹4分類群、落葉性が常緑性が材からは判断できないクスノキ科と材組織の保存が悪い不明広葉樹、そのほかにタケ亜科とススキ属類似が検出された（表10）。

住居建築材には、全体的に見ると落葉広葉樹と常緑広葉樹の複数の分類群が利用されていた。特に常緑広葉樹のシイノキ属と落葉広葉樹のクリは、出土数が多かった（表11）。またコナラ節・クリ・サクラ属・アカガシ亜属・シイノキ属・ススキ属類似は2～4の住居跡から検出された（表11）。住居跡出土樹種としてよく知られている落葉広葉樹のクヌギ節とコナラ節は意外と少なかった。

各住居跡から出土した炭化材試料数は一律でないが、SBA05ではクリが、SBF38とSBF29ではシイノキ属が、SBF25ではハンノキ亜属の利用が顕著であった。

【祭祀遺構（平安時代）出土炭化材の樹種構成】

3基の祭祀遺構SXD13・SXD07・SXD14からは、針葉樹のアカマツ、落葉広葉樹のコナラ節とクヌギ節の3分類群が検出された。（表10）クヌギ節はすべての土壌墓から検出されたことから、主要または多量に使われていたと推測される（表11）。

【灰粕陶器窯（平安時代10世紀）出土炭化材の樹種構成】

燃料材の残渣と考えられる灰原から出土した炭化材は、灰原の層位②・④・⑤・⑦・⑧・⑩から採取された。⑤・⑧・⑩は各1袋、②は2袋、④は2袋、⑦は24袋である。複数袋が採取された層位の試料（②・④・⑦）は、それぞれ異なる採取日や地点で一括採取されたものである。

灰原からは、落葉広葉樹のクヌギ節とコナラ節、そして針葉樹のマツ属複雑管束亜属の3分類群が検出された（表12）。クヌギ節は、検討した全試料から検出される量的にも圧倒的に多いことから、この窯の使用期間を通じて常に主要な燃料材であったと考えられる。なおコナラ節とマツ属複雑管束亜属は、⑦の試料からだけ検出され、それ以外の試料からは検出されなかった。そして⑦のほとんどの袋からは、少数または少量ながらもコナラ節とマツ属複雑管束亜属の2分類群か、またはどちらかの分類群が検出されている。

灰原は堆積状況に基づき古い時期（下部）よりA→B→Cに時期区分され、⑦はCに、④と⑤はBに、⑩・⑧・②はAに属する。出土炭化材の樹種構成からも、BとCを境に、A期とB期ではクヌギ節のみが出土、C期からはクヌギ節に少量ではあるがコナラ節とマツ属複雑管束亜属が加わる変化が認められた。

クヌギ節の炭化材は、横断面の観察から、中心部に近い材であるものが多く、横断面の形状は樹心方向を要とする扇形のものが多い。使用した材の太さや樹齢を知る目安として、比較的形状の整

った破片の放射方向の径と数えられた年輪数を表13に記録した。放射径を単純に2倍した太さは、2cm~12cmと様々であり、年輪数は小径であっても20年輪以上あるものがほとんどで、これはぬか目の材が目立った事とも対応している。年輪数の最高は、放射径が3.5cmで84年輪が数えられた。

[同定樹種の材組織記載]

(1) アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図316 1a-1c (SXD13)

垂直および水平樹脂道がある針葉樹材。仮道管と放射組織が交わる分野導孔は、窓状である。放射組織の上下端には放射仮道管があり、その内壁は鋸歯状肥厚が顕著である。

窯跡灰原出土炭化材のマツ属は、放射仮道管の内壁に鋸歯状肥厚が確認されたが、その肥厚の程度は顕著な破片もあるが、保存などの影響もあり不明瞭な破片もあった。また試料袋に含まれたすべての破片を確認したわけではないので、マツ属複雑管束亜属までの同定レベルに留めた。

アカマツは暖帯から温帯下部の低地から山地に分布する。伐採跡地や崩壊地などの空間にいち早く分布拡大する特性があり、人間活動との関連も深く、二次林の主要樹である。材は耐水性が高い。

(2) ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus subgen. Alnus* カバノキ科 図316 2a-2c (SBF25-3)

小型の管孔が放射方向に2~数個複合してほぼ均一に分布し、管孔の分布密度は高く、幅の広い集合放射組織がある散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が20本前後の階段穿孔である。放射組織は異性、単列のものも集合状があり、道管との壁孔は小型で交互状に密在する。

ハンノキ亜属は暖帯から亜寒帯の陽光地に生育する落葉広葉樹で7種が含まれる。低地の湿地に普通のハンノキ、川岸に生育するカワラハンノキ、山中に生育するミヤマカワラハンノキ・ヤハズハンノキ・ケヤマハンノキなどがあるが、材組織は類似しているため種類は特定できない。ハンノキとケヤマハンノキは高木になる。材質は硬さ・重さは中庸、切削性に優れるが保存性は低い。

(3) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科 図316 3a-3c (SBA05-14)

集合放射組織を挟み小型~中型の単独管孔が放射方向に配列する放射孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、単列のものも広放射組織があり、道管との壁孔は大型でその孔口は大きく開き、襷状や交互状に配列する。

アカガシ亜属は常緑広葉樹でいわゆるドングリをつけるカシの仲間、おもに暖温帯に分布する。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがある。材は丈夫で弾性や耐湿性に優れる。

(4) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus subgen. Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図317 4a-4c (SBA05-14)

年輪の始めに中型の管孔が配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では薄壁で多角形の小型管孔が火炎状や放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものも広放射組織がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は乾燥すると割れやすい欠点があるが、固く丈夫である。

(5) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q. subgen. Q. sect. Cerris* ブナ科 図317 5a-5c (SXD07)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、孔圏外には厚壁が厚く孔口が丸い小型の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。接線断面や放射断面の形質は前述のコナラ節と同様である。

クスギ節は暖地の山地に普通の落葉高木で、クスギとアベマキが属する。特に二次林の主要樹種であり、関東ではクスギ、瀬戸内海沿岸地方にはアベマキが多い。材は重厚で割裂性が良い。

(6) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図317 6a-6c (SBF38-13)

年輪の始めに大型の管孔が密接して配列し除々にまたは急に径を減じ、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性のみである。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は加工はやや困難であるが狂いは少なく粘りがあり、広葉樹材の中では特に耐朽性にすぐれている。

(7) シノキ属 *Castanopsis* ブナ科 図318 7a-7c (SBF29-5)

やや楕円形の中型管孔が間隔をあけて配列しさらに数個が放射方向に分布し、晩材部で急に径を減じ小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。年輪界は波状になり、年輪始めの管孔配列も大きくずれて不規則になる傾向が強い。また、幅の狭い集合放射組織が出現する部分では、年輪界が大きくずれる。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は単一同性と幅の狭い緩く集合した放射組織が見られる試料とがある。

シノキ属は暖帯に生育する常緑広葉樹で照葉樹林の主要素である。関東以西・四国・九州に分布するツブラジイ(コジイ)と、木州の福島県と新潟県佐渡以南・四国・九州に分布するスダジイがある。

(8) クワ属 *Morus* クワ科 図318 8a-8c (SBF29-14)

年輪の始めに中型の管孔が配列し多くは除々に径を減じてゆき、晩材部では小型や非常に小型の管孔が集合して斜状・波状に配列する環孔材。道管の壁孔はやや大きくて交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚があり、内腔にはチロースがある。放射組織は異性、1~8細胞幅の紡錘形、上下端に方形細胞があり、周囲の一部に鞘細胞が見られ、道管との壁孔は大きくて交互状に配列している。

クワ属は落葉高木または低木で、温帯から亜熱帯の山中に広く分布するヤマグワと、和歌山県・中国地方・四国・九州の暖帯の山中にまれにあるケグワがある。果実は食用となり、材は重硬・強靱で心材は特に保存性が高い有用材である。

(9) クスノキ科 *Lauraceae* 図318 9a-9c (SBF38-2)

中型の管孔が単独または2~3個が放射方向に複合してやや疎らに分布し、年輪界の管孔の径は小さい散孔材。道管の穿孔は、主に単一穿孔である。放射組織は異性、2細胞幅、上下端に大きく膨らんだ油細胞がある。油細胞はクスノキほどは小さくなく分布数も少ない。中型の管孔であることから、常緑性で高木となる。タブノキ、ヤブニッケイ、シロダモなどの可能性が考えられるが、これ以上は区別できなかった。

クスノキ科は主に暖帯に分布する常緑または落葉の高木または低木である。

(10) サクラ属 *Prunus* バラ科 図319 10a-10c (SBE06-a)

小型の管孔が放射方向・接線方向・斜状に複合して分布している散孔材。道管の壁孔は対列状ま

たは交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性から異性、1~3細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹林の代表的な属であり多くの種がある。材は粘り気が強く、保存性が高い。

(11) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図319 11a-11c (SBE06-c)

非常に小型で多角形の管孔が均一に散在し、管孔の分布数が多い散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が30本前後の階段穿孔、内腔にはほぼ水平のらせん肥厚がある。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

サカキは本州の茨城県および石川県以西より南の暖帯から亜熱帯に生育する常緑小高木である。材は強韌・硬くて割裂困難であり丈夫である。

(12) ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科 図319 12a-12c (SBF25-10F)

非常に小型で多角形の管孔が散在する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、主に2細胞幅、道管との壁孔は交互状・階段状である。

ヒサカキは暖帯の林下にきわめて普通の常緑の小高木である。材は固く緻密な材である。

(13) タケ亜科 Gramineae subfam. Bambusoideae イネ科 図320 13 (SBF38-10)

厚み約1mmの硬質の稈の破片である。稈の最内層に表皮系の細胞層が見られたことから、稈の中心部は中空であることが判る。維管束は多数が同心円状に均質に配置している不整中心柱である。各維管束は、向軸側に原生木部、その左右に後生木部の2個の管孔、背軸側に筋部があり、4~3個の穴の集合に見える。維管束の外周には維管束鞘が発達し稈の外周部では特に厚い。

イネ科タケ亜科はいわゆる多年生木質の稈を形成し、タケ・ササの仲間では約12属が含まれる。稈の破片や組織のみからは、属や種を識別することは難しい。

(14) ススキ属類似 *Miscanthus* cf. イネ科 図320 14 (SBA05-22)

推定直径6~8mmの草本性の稈の破片である。維管束は不整中心柱で、稈はスポンジ状の基本組織で埋まっている。稈の外周には中心部より小さな維管束が1~2層配列している。維管束鞘はタケ・ササ類の稈より薄く、維管束の周囲に均一に形成されている。

ススキ属は大型になる多年草で一般にはカヤ(茅)と呼ばれ、約7種がある。日本全土の平地から山地の陽地に普通に見られるススキ、北海道から九州の湿地に生育するオギ、東北南部から近畿北部の山中の陽地に生育するカリヤス、関東南部以西の堤防の草地に生育するトキワススキなどがあ。現時点では稈の組織から種を識別することはできていない。

4. まとめ

当遺跡の弥生時代末から古墳時代初頭の住居跡6軒から出土した建築材と推定される樹種について、全体的な特徴と各住居跡の樹種構成を比較して以下に述べる。全体的には、落葉広葉樹材と常緑広葉樹材の複数種が利用されていた。特に常緑広葉樹のシノキ属と落葉広葉樹のクリは、出土数が多かった。落葉広葉樹のコナラ節・クリ・サクラ属と常緑広葉樹のアカガシ亜属・シノキ属そして草本のススキ属類似は、2~4軒の住居跡から検出されていて、これらは当時の住居建築材

として利用度の高い樹種であったと推測される。各住居跡ごとの樹種構成を比較して見てみると(表11)、シノキ属はSBF38とSBF26から出土し、クリはSBA05から多く検出され、出土傾向に偏りが見られた。また、SBF38はSBA05の下位から検出された住居跡であり、この2軒の樹種構成はかなり異なっていた。つまり下位のSBF38では常緑広葉樹のシノキ属が多く、上位のSBA05では落葉広葉樹が主体で特にクリが多く検出された。当地域の自然植生である照葉樹樹林要素のシノキ属が下位の住居跡で多く検出され、その上位の住居跡からは二次林要素でもあるクリやコナラ節などが多く検出されたことは、集落の継続や発達により遺跡周辺の森林の二次林化が進行したとも推測される。しかし別な解釈では、多くの住居跡が急傾斜地に建てられているのに対し、SBA05は丘陵頂部の平坦部に位置し銅鏝が発見されている。また土師器片が多く出土したSBF02や、全国で2例目の発見となった弥生時代末の筒状銅製品が出土したSBF05と隣接している事を考えあわせると、SBA05にクリが際立って多く検出されたのは、祭祀的な建物としてクリ材が選択使用されていたためとも考えられる。若干時期は下がるが尾崎遺跡(美濃加茂市)の調査でも、第8号住居跡はクスギ節が主体であったのに対し、祭祀的要素をもつ第24号住居跡の建築材はクリが主体であり、藤根(1993)は遺構の性格とクリ材の使用は何らかの関係が予想されるとしている。当遺跡の結果もそのような視点から見ると、SBA05からはほかの住居跡に比べクリ材が顕著に検出されている。当時の人々がクリの木に対して特別な意味を持って接していた事を教えてくれているのかも知れない。遺跡全般または住居跡出土樹種としてよく知られているクスギ節とコナラ節は、当遺跡の住居跡からは意外と少なかった。次に今までに報告されている周辺遺跡の結果と比較して見た。落葉広葉樹と常緑広葉樹の複数の樹種構成である当遺跡は、関市の砂行遺跡(植田、2000)や後平遺跡(植田、2001)そして岐阜市の下西郷一本松遺跡(植田、2000)の住居跡出土樹種と類似していた。ただし、この3遺跡ではヒノキ・ヒノキ属・スギの針葉樹材も検出されているが、当遺跡からは検出されなかった点が異なる。

平安時代の土墳墓から検出された樹種は、アカマツ・コナラ節・クスギ節の3分類群であった。クスギ節は、すべての土墳墓から検出されたことから主要な燃料材樹種であったと推測される。また平安時代(10世紀)の灰陶器窯の燃料材でも、クスギ節は最優占樹種であり、そのほかにコナラ節とマツ属複雑管束亜属が検出されている。この3分類群は、二次林の主要素であるという共通点がある。アカマツは弥生時代末から古墳時代初期の住居跡からは検出されず、コナラ節とクスギ節もあまり目立った出土はしていない。しかし、この3分類群は建築材としても有用な材である。土墳墓や窯跡と住居跡では遺構の性格が異なるので、樹種選択性も異なる可能性はあるが、弥生時代末から古墳時代初期に比べ平安時代から検出される樹種構成からは、遺跡周辺の森林に二次林化が進行していたことが推測される。当遺跡から南方に位置する船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡の中世～近世の火葬墓からはマツ属複雑管束亜属が圧倒的に多く、次にエノキ属が多く検出されている(植田・藤根、2000)。また、岐阜市の城之内遺跡では戦国時代(16世紀前半)の火葬墓は、クリ・マツ属複雑管束亜属・トチノキ・モモまたはウメなどが検出された(植田、1999)。今までの当地域一帯の資料と比較して、火葬墓の燃料材としてマツ属複雑管束亜属の使用は平安時代にさかのぼることが判った。しかし、人里にも多く燃料材としても有用なクスギ節やコナラ節は、平安時代の火葬墓や灰陶器窯跡からは比較的目立った出土を示しているにもかかわらず、中世以

降の火葬墓では意外と検出されていないことも比較できた。時代により樹種の選択が変化した可能性があり、更に資料の蓄積がなされ検討してゆく必要があると思われる。

当遺跡から出土した灰釉陶器窯1基の灰原から出土した炭化材樹種は全体的には、クスギ節・コナラ節・マツ属複雑管束亜属の3分類群であった。このうちクスギ節が、量的にも出土地点・層位においても圧倒的に多く、この窯が使われていた全期間において主要な燃料材であったと考えられる。また、クスギ節の材は放射径を単純に2倍した推定直径が2~12cmの太さで、その年輪数は20年輪以上のものが多く、最高では84年輪が数えられ、ぬか目の材が目立った。当窯跡では、灰原の堆積状況により古い時期からA→B→Cと大きく3時期に区分されている。その区分に従い樹種同定結果を配列したところ(表12)、B期とC期を境に樹種構成に違いが見られた。下位のA期とB期からはクスギ節のみが検出されたが、上位のC期からはクスギ節に加えコナラ節とマツ属複雑管束亜属が検出されるようになった。この原因のひとつとして、クスギ節の樹木が大量かつ継続的に伐採されたために不足しがちとなり、C期ではクスギ節のほかにコナラ節やマツ属複雑管束亜属の材を補足するようになったとも考えられる。灰釉陶器窯である恵那市の正家1号窯(11世紀)では、全体的には落葉広葉樹のクスギ節とコナラ節を含めたナラ類が多くこのほかに若下の二葉松(マツ属複雑管束亜属に対応する)が報告されている(恵那市教育委員会、1983)。樹種構成を灰原の層位と対応して見ると、上層の黒色灰層からはクスギ節と若干の二葉松が検出され、下層の赤色灰層からはクスギ節のみが検出されている。当窯跡の全体的な樹種構成と灰原の下層から上層への樹種構成の変化は、正家1号窯跡と当窯跡では類似していた。しかし事例は少ないので、このような傾向が普通に見られるものなのかどうか、今後も注意して検討しなければならないと思われる。やはり灰釉陶器窯である名古屋市緑区のNA207号窯(11世紀初頭)では検討できた試料が非常に少ないが、コナラまたはクリである落葉広葉樹の微破片とマツ属複雑管束亜属が検出されている(植田、1998)。また、岐阜県下の各務原市に所在する船山北古窯群の9世紀前半の須恵器窯では、灰原から出土した炭化材はマツ属複雑管束亜属が優占し次にクスギ節が多く、この他にコナラ節そしてハンノキ亜属・クリ・ムクノギが検出されている(植田・藤根、2000)。須恵器窯についても灰釉陶器窯についても燃料材樹種の報告は少ないので、今後の事例の増加を待ち、比較検討する必要がある。

引用文献

- 植田弥生(1998)「砂行遺跡の堅穴住居跡出土炭化材の樹種同定」『砂行遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第65集)(財)岐阜県文化財保護センター
- 植田弥生(2002)「後平遺跡出土炭化材の樹種同定」『後平白古墳・後平遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第77集)(財)岐阜県文化財保護センター
- 植田弥生(2000)「下西郷一本松遺跡の住居跡出土炭化材樹種同定」164-176 (財)岐阜市教育文化振興事業団
- 藤根 久(1993)「尾崎遺跡住居址出土炭化材の樹種」『尾崎遺跡』135-138、図版27-29、財団法人岐阜県文化財保護センター
- 植田弥生・藤根 久(2000)「船山北古墳群・船山北古窯群・船山北遺跡出土炭化材の樹種同定」

『船山北古墳群・船山北古窯跡群・船山北遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第52集）

（財）岐阜県文化財保護センター 18-30、図版130-136

植田弥生、1999、城之内遺跡の火葬臺SX18から出土した炭化材の樹種、107-112、「城之内遺跡」、

（財）岐阜市教育文化振興事業団

「正家1号窯発掘調査報告書」、1983、恵那市教育委員会

植田弥生、1998、炭化材の樹種同定、「大高南地区遺跡発掘調査報告書」、名古屋市教育委員会

表10 祭祀遺構および住居跡出土炭化材樹種同定結果一覧

遺構	土器形式・時期	材用途	試料	樹種	備考	
SXD13	祭祀遺構	9世紀	燃料材	一拵	アカマツ	2分類群はほぼ同量
SXD13	祭祀遺構	9世紀	燃料材	一括	コナラ属クヌギ節	
SXD07	祭祀遺構	9世紀前半	燃料材	一括	コナラ属クヌギ節(4点)	
SXD07	祭祀遺構	9世紀前半	燃料材	一括	コナラ属コナラ節(2点)	φ1.5~2.0cm,樹皮付き有り
SXD14	祭祀遺構	9世紀平安時代	燃料材		コナラ属クヌギ節	r:2.0cm 破片
SBE06	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	a	サクラ属	φ4.0cm 半割れ
SBE06	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	b	サクラ属	φ3.0cm 半割れ
SBE06	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	c	サカキ	φ3.5cm 半割れ
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	1	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	2	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	3	サクラ属	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	4	サクラ属	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	5	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	6	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	7	コナラ属コナラ節	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	8	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	9	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	10	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	11	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	12	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	13	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	14	コナラ属アカガシ亜属	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	15	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	16	コナラ属コナラ節	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	17	サクラ属	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	18	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	19	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	20	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	21	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	22	ススキ属類似	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	23	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	24	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	25	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	26	クリ	
SBA05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	27	コナラ属コナラ節	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	1	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	2	クスノキ科	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	3	クスノキ科	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	4	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	5	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	6	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	7	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	8	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	9	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	燃料材	10A	タクア科(タク・サザ類)	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	燃料材	10B	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	11	シノキ属	
SBF38	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	12	クリ	
SBF38	住居跡土坑内	廻間Ⅰ		13	コナラ属コナラ節	小破片
SBF38	住居跡土坑内	廻間Ⅰ		13	クリ	
SBF05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	1	コナラ属コナラ節	
SBF05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	2	コナラ属コナラ節	
SBF05	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	3	広葉樹	

遺構		土器形式・時期	材用途	試料	動種	備考
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	1	クリ?	微破片
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	2	コナラ属アカガシ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	3	ハンノキ属ハンノキ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	4	コナラ属アカガシ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	5	クリ	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	6	ススキ属類似	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	7	ハンノキ属ハンノキ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	8	ハンノキ属ハンノキ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	9	ハンノキ属ハンノキ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	10-1	クリ	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	10-2	ヒサカキ	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	11	コナラ属クスギ節	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	12	コナラ属クスギ節	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	13	コナラ属クスギ節	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	14	ハンノキ属ハンノキ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	15	ススキ属類似	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	16	ハンノキ属ハンノキ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	17	ハンノキ属ハンノキ亜属	
SBF25	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	18	サクラ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	1	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	2	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	3	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	4	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	5	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	6	クリ	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	7	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	8	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	9	クリ	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	10	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	11	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	12	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	13	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	14	クワ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	15	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	16	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	17	クリ	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	18	コナラ属コナラ節	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	19	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	20	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	21	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	22	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	23	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	24	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	25	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	26	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	27	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	28	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	29	コナラ属コナラ節	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	30	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	31	シノキ属	
SBF29	住居跡	廻間Ⅰ	建築材	32	シノキ属	

表11 祭祀遺構と住居跡の出土炭化材樹種の比較

検出樹種	祭祀遺構 平安時代			住居跡 弥生後半～古墳前半						合計	
	SXD13	SXD07	SXD14	SBF06	SBA05	SBF38	SBF29	SBF25	SBP05	建築材	その他
針葉樹	(1)										(1)
アカマツ											
落葉	ハンノキ亜属							7		7	
広葉樹	コナラ節				(2)				2	7	(3)
	(1)	(4)	(1)	3		(1)	2	3		3	(6)
						(1)	3	3		26	(1)
				19	1		1			1	
							1			1	
				2	3			1		6	
									2	3	
常緑	アカガシ亜属			1							
広葉樹	シイノキ属					8	(1)	26		34	(1)
	クスノキ科					2				2	
	サカキ			1						1	
	ヒサカキ								1	1	
その他	広葉樹								1	1	
	タケ亜科						(1)				(1)
	ススキ属類似			1				2		3	
合計	(2)	(6)	(1)	3	27	11	(4)	32	19	3	(13)

{ } : 建築材ではない炭化材試料を示す。

SBF38は、SBA05の下位から検出された住居跡である。

表12 深橋前古窯跡灰原出土炭化材構種同定結果一覧

層位	時期 区分	試料 袋No	炭化材 検出箇種の集北	出土グリット	取り上げ 時期	土色	取り上げ 日付
⑦	C	27	クスギ節> マツ属縦管束重属> コナラ節	グリット一括		黒色灰	980714
⑦	C	28	クスギ節> コナラ節=マツ属縦管束重属	グリット一括		黒色灰	980714
⑦	C	29	クスギ節> コナラ節> マツ属縦管束重属	グリット一括		黒色灰	980714
⑦	C	31	クスギ節> マツ属縦管束重属	グリット一括		黒色灰	980715
⑦	C	24	クスギ節多数、加工?角形あり	グリット一括		黒色灰	980717
⑦	C	30	クスギ節> コナラ節> マツ属縦管束重属	グリット一括		黒色灰	980721
⑦	C	26	クスギ節> コナラ節	グリット一括		黒色灰	980723
⑦	C	25	クスギ節> コナラ節	グリット一括		黒色灰	980728
⑦	C	9	クスギ節> コナラ節> マツ属縦管束重属	グリット一括		黒灰	980714
⑦	C	10	クスギ節> コナラ節=マツ属縦管束重属	グリット一括		黒灰	980715
⑦	C	3	クスギ節複数	ベルト	1層	黒灰	980910
⑦	C	11	クスギ節> マツ属縦管束重属> コナラ節	グリット一括		黒灰	980714
⑦	C	12	クスギ節> コナラ節> マツ属縦管束重属	グリット一括		黒灰	980715
⑦	C	13	クスギ節多数	グリット一括		黒灰	980717
⑦	C	14	クスギ節> コナラ節=マツ属縦管束重属	グリット一括		黒灰	980717
⑦	C	15	クスギ節複数	グリット一括		黒灰	980717
⑦	C	20	クスギ節> マツ属縦管束重属	グリット一括		黒灰	980714
⑦	C	19	クスギ節2片	グリット一括		黒灰	980717
⑦	C	16	クスギ節> マツ属縦管束重属	グリット一括		黒灰	980721
⑦	C	17	クスギ節> コナラ節	グリット一括		黒灰	980722
⑦	C	22	クスギ節> マツ属縦管束重属	グリット一括		黒灰	980723
⑦	C	21	クスギ節複数	グリット一括		黒灰	980728
⑦	C	18	クスギ節4片	グリット一括		黒灰	980731
⑦	C	23	クスギ節> コナラ節	ベルト	5層 遺物層	うすい黒	980914
④	B	1	クスギ節複数	ベルト	遺物層	980910	980910
④	B	5	クスギ節1片	ベルト	遺物層	黒灰	980911
④	B	7	クスギ節多数	ベルト	3層	黒灰	980911
④	A (Bに近い)	8	クスギ節多数	ベルト	4層	赤	980914
④	A (Bに近い)	6	クスギ節多数	ベルト	4層	赤	980914
②	A	2	クスギ節1片	ベルト	遺物層	にぶい赤褐	980911
②	A	4	クスギ節1片	ベルト	遺物層		

表13 深橋前古窯跡の灰原出土炭化材の年輪数

比較的形状の整った破片について横断面の放射方向の径と計数した年輪数を記録した。

土層図 層位	時期 区分	試料 袋No	計測した 炭化材樹種	放射方向 径	計測 年輪数
⑦	C	27	クスギ節	1.2	16
			マツ属税維管束亜属	1.6	40
⑦	C	28	クスギ節	5.5	18
			クスギ節	4.0	36
			クスギ節	3.5	32
			クスギ節	3.0	40
			クスギ節	2.3	31
			マツ属税維管束亜属	3.0	20
⑦	C	29	クスギ節	6.0	34
			クスギ節	3.0	25
			クスギ節	2.3	25
			クスギ節	2.3	47
			クスギ節	1.8	29
⑦	C	31	クスギ節	2.5	38
⑦	C	30	クスギ節	3.5	84
			クスギ節	3.5	74
			クスギ節	3.0	47
			クスギ節	2.0	30
			クスギ節	1.5	34
			クスギ節	1.5	25
⑦	C	26	クスギ節	2.0	39
			クスギ節	1.7	50
			クスギ節	1.2	22
⑦	C	25	クスギ節	3.5	47
			クスギ節	1.8	36
			クスギ節	1.5	20
⑦	C	9	クスギ節	4.0	13
			コナツ節	2.5	23
⑦	C	10	コナツ節	1.3	26
⑦	C	11	クスギ節	3.0	28
			クスギ節	2.0	30
			クスギ節	1.7	30
			クスギ節	1.5	29
			クスギ節	0.7	8
⑦	C	12	クスギ節	4.5	30
			クスギ節	2.5	22
			クスギ節	1.0	25
⑦	C	13	クスギ節	1.5	24
⑦	C	14	クスギ節	3.3	44
			クスギ節	2.0	28
⑦	C	15	クスギ節	2.3	23
⑦	C	19	クスギ節	2.5	17
			クスギ節	2.0	19
⑦	C	16	クスギ節	2.0	47
⑦	C	17	クスギ節	1.5	35
⑦	C	22	クスギ節	1.5	30
			クスギ節	0.6	13
⑦	C	21	クスギ節	3.0	19
			クスギ節	1.8	29
			クスギ節	1.5	37
⑧	A (Bに近い)	8	クスギ節	4.5	20
			クスギ節	1.3	28
			クスギ節	2.0	18
⑧	A (Bに近い)	6	クスギ節	1.8	33
			クスギ節	1.5	22
			クスギ節	1.2	40
			クスギ節	1.0	23
			クスギ節	0.9	20

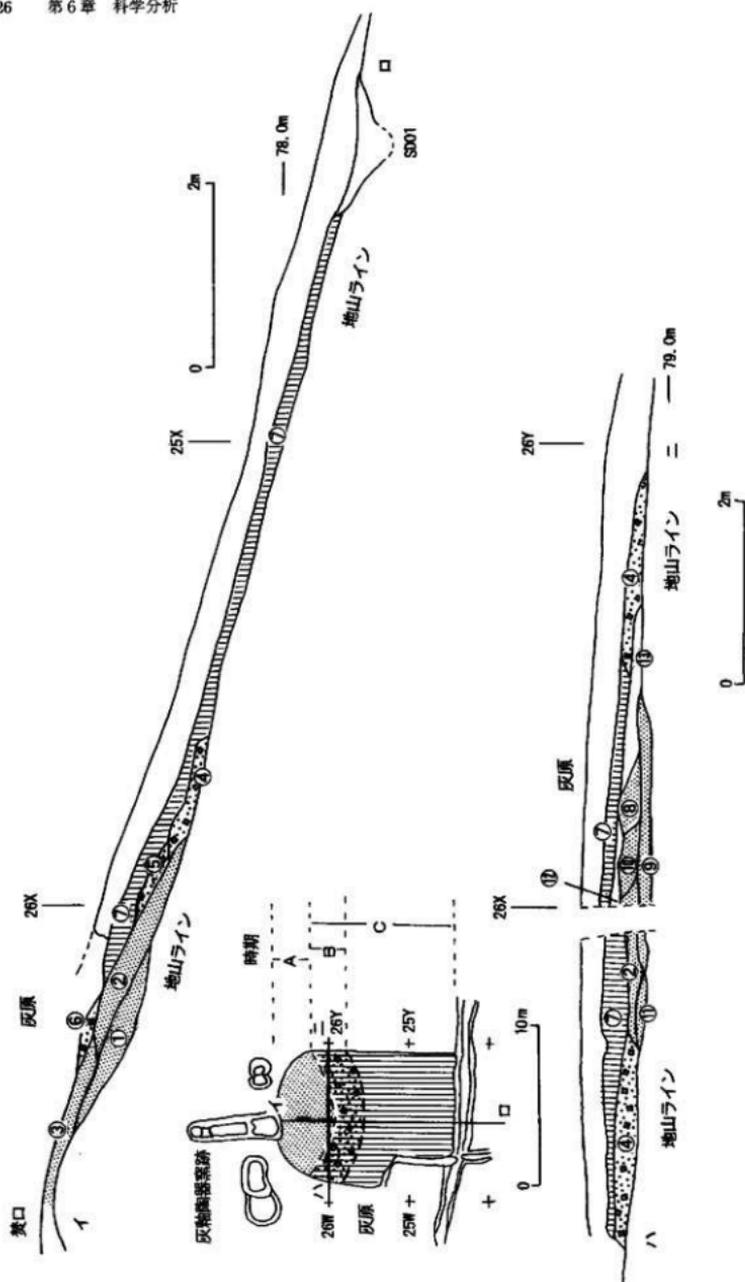
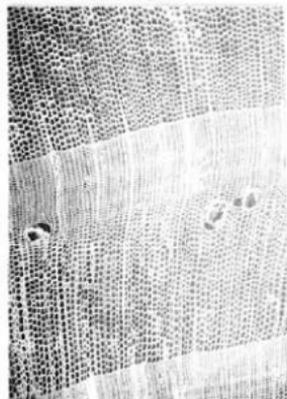
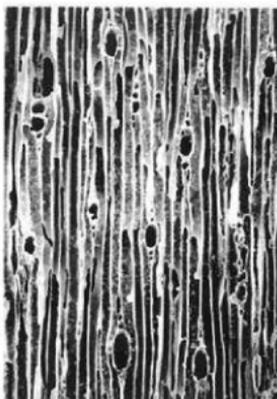


図315 深溝前古家跡出土炭化材料試料の層位と時期区分



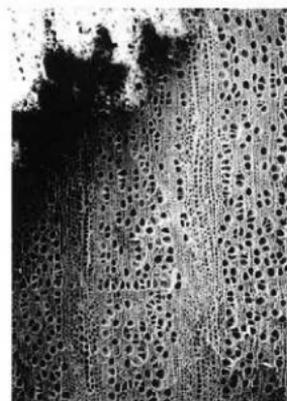
1a アカマツ (横断面)
SXD13 bar: 0.5mm



1b アカマツ (接線断面)
bar: 0.1mm



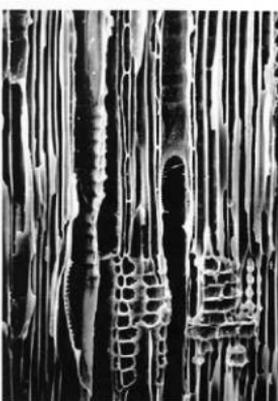
1c アカマツ (放射断面)
bar: 0.05mm



2a ハンノキ亜属 (横断面)
SBF25-3 bar: 0.5mm



2b ハンノキ亜属 (接線断面)
bar: 0.1mm



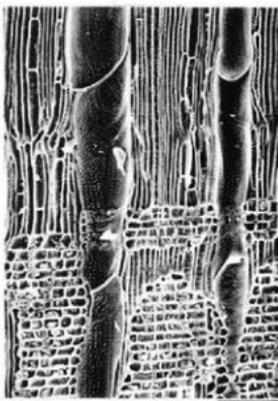
2c ハンノキ亜属 (放射断面)
bar: 0.1mm



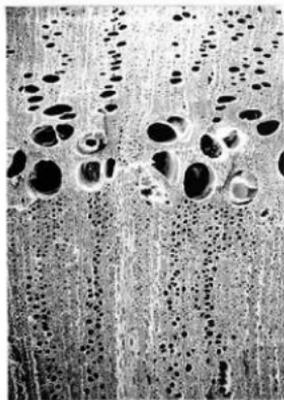
3a アカガシ亜属 (横断面)
SBA05-14 bar: 1.0mm



3b アカガシ亜属 (接線断面)
bar: 0.5mm



3c アカガシ亜属 (放射断面)
bar: 0.1mm



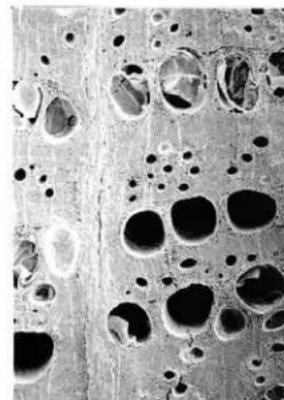
4a コナラ属コナラ節 (横断面)
SBA05-14 bar: 1.0mm



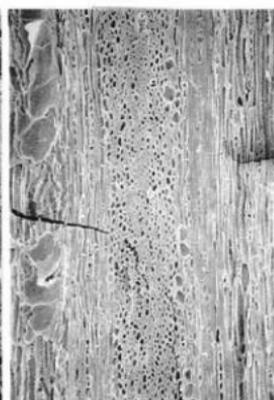
4b コナラ属コナラ節 (接線断面)
bar: 0.5mm



4c コナラ属コナラ節 (放射断面)
bar: 0.1mm



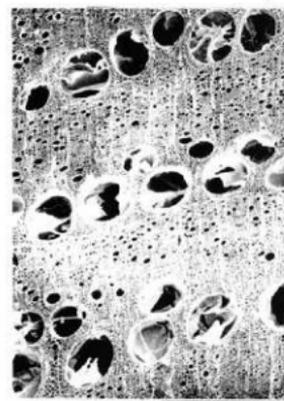
5a コナラ属クスギ節 (横断面)
SXD07 bar: 0.5mm



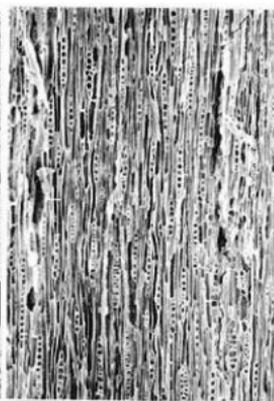
5b コナラ属クスギ節 (接線断面)
bar: 0.1mm



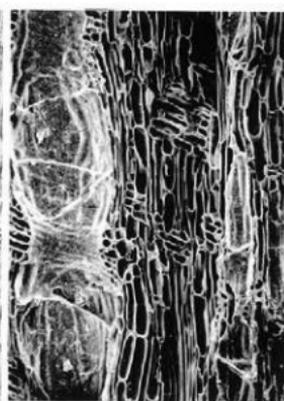
5c コナラ属クスギ節 (放射断面)
bar: 0.1mm



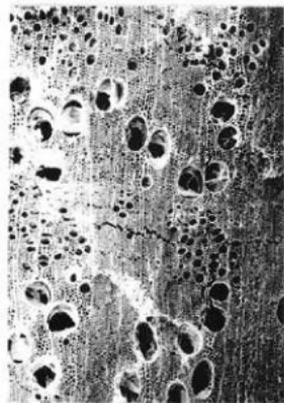
6a クリ (横断面)
SBF38-13 bar: 0.5mm



6b クリ (接線断面)
bar: 0.5mm



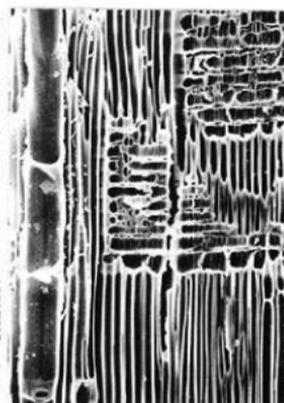
6c クリ (放射断面)
bar: 0.1mm



7a シイノキ属 (横断面)
SBF29-5 bar: 0.5mm



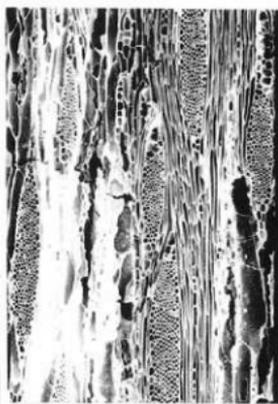
7b シイノキ属 (接線断面)
bar: 0.5mm



7c シイノキ属 (放射断面)
bar: 0.1mm



8a クワ属 (横断面)
SBF29-14 bar: 1.0mm



8b クワ属 (接線断面)
bar: 0.5mm



8c クワ属 (放射断面)
bar: 0.1mm



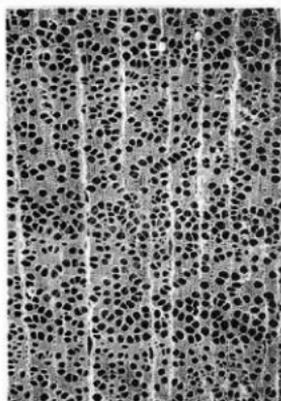
9a クスノキ科 (横断面)
SBF38-2 bar: 0.5mm



9b クスノキ科 (接線断面)
bar: 0.1mm



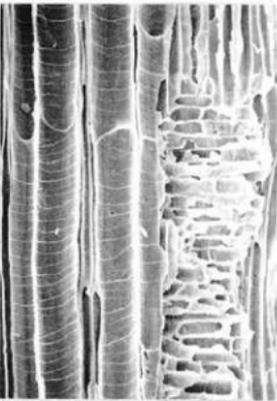
9c クスノキ科 (放射断面)
bar: 0.1mm



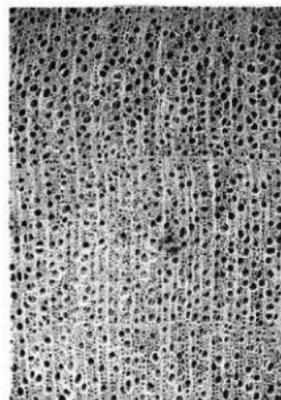
10a サクラ属 (横断面)
SBE06-a bar: 0.5mm



10b サクラ属 (接線断面)
bar: 0.5mm



10c サクラ属 (放射断面)
bar: 0.1mm



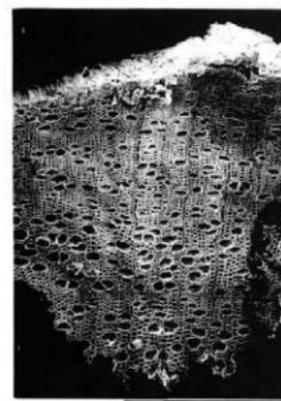
11a サカキ (横断面)
SBE06-c bar: 0.5mm



11b サカキ (接線断面)
bar: 0.5mm



11c サカキ (放射断面)
bar: 0.1mm



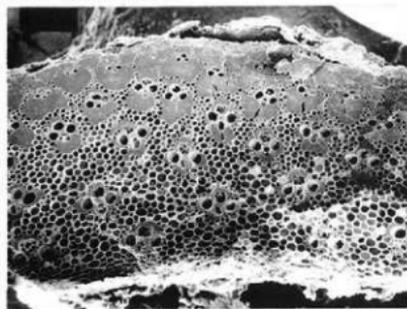
12a ヒサカキ (横断面)
SBF25-10³ bar: 0.5mm



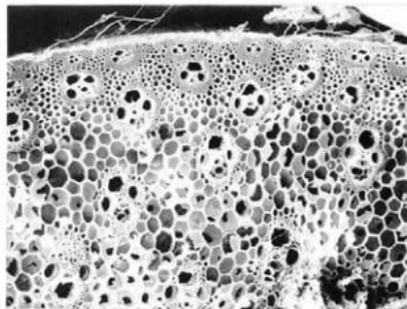
12b ヒサカキ (接線断面)
bar: 0.1mm



12c ヒサカキ (放射断面)
bar: 0.1mm



13 タケ亜科 (タケ・ササ類) (横断面)
SBF38-10 bar : 0.5mm



14 ススキ属類似 (横断面)
SBA05-22 bar : 0.5mm

第5節 遺構内堆積物のリン・カルシウム分析

藤根 久・宮野義剛 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

調査では、複数の土坑墓や土坑が検出されている。ここでは土坑の用途を調べるために、土坑内堆積物のリンおよびカルシウムを定量した。

リンは、動植物必須の元素であるので、これらの体内には自然的土壌含有量（バックグラウンド）よりも多く濃縮されている。そのため、人間を含め、動植物が生息した生活面には、遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰、建築材などに由来するリンが蓄積し、バックグラウンドよりも多く存在することになる（竹迫 1993）。その上、リンは土壌中の所謂、活性Alや活性Feに吸着され難溶性のリン酸塩となるため、土壌に保持されやすい。以上のことから、全リン酸の濃度分布を調査・比較することにより、生活面の検出等に利用できる。基本的には、濃度が高い方が人為的な影響が強いと類推される。特に、埋葬された遺構内土壌では、リンあるいはカルシウムが高いことが期待される。

2. 試料と方法

試料は、1基の火葬墓2基の上坑墓および11基の土坑内土壌である。試料は、予め炭化材や礫などを丁寧に取り除いた。

[全リン酸分析]

風乾細土2.00gを300mlのトールビーカーにとり濃硝酸10~20mlを加え、湯浴中または110°C前後の砂浴皿上で、10~20分加熱した後、電気式砂浴皿上で5~10分間加熱分解する。この間分解物から目を離さないで注意する。分解が進んだら冷却後、過塩素酸20mlを加え電気式砂浴皿上ではじめは弱く、後ほど強くして分解を行う。分解・冷却後水30mlを加えて沈殿物を攪拌し、200mlの定容フラスコにろ紙J6を用いてろ過し、熱水で白砂状の沈殿物を洗浄する。200mlに満たした分解液から一定量（10~20ml）を取り、バナドモリブデン酸法により全リン酸を比色定量した。

[全カルシウム分析]

風乾細土5gを200ml容コニカルビーカーにとり、硫酸1ml、硝酸5mlおよび過塩素酸20mlを加え、時計皿でふたをして、ホットプレート上で3時間加熱分解する。このとき分解温度130°Cを越えないようにする。次に時計皿を取り去り、内容物がシロップ状になるまで徐々に温度を上げつつ過熱濃縮を行う。法令後1M塩酸30mlおよび熱水50mlを加え、急速に加熱して沸騰寸前まで暖める。上澄み液を200~250mlのメスフラスコ中へろ別する。次いで少量の1M塩酸で数回、続いて熱水でコニカルビーカー中の残渣を数回洗浄・デカントする。法令後、原子吸光法により全カルシウム（CaO）を定量分析した。

3. 結果および考察

ここでは、上坑墓・火葬墓と上坑類について、埋積する土壌の全リン酸および全カルシウムを定量した。その結果、2号土坑墓と6号火葬墓では、いずれも全リン酸が高く3.47~7.25mg/gであった。

これは、基盤層とされるSXD14Ⅲ層の2.92mg/gに比べて明らかに高い数値を示している。ただし、全カルシウムは、SZ06①において0.11mg/gと高いものの、他の試料は必ずしも高いとは言えない。

一方、土坑類では、全リン酸が高い試料として、SXD08②や②b、SXD14の④aや④b、SXD15のS2が挙げられ、土坑墓などと同様に墓遺構である可能性が考えられる。

なお、SXD06の①、SXD07の①b、SXD13②などでは、全カルシウムがやや高い数値を示していることから、これらも可能性があると考える。

表14 各遺構堆積物の全リン酸・全カルシウム分析値

墓遺構の可能性(備考欄)、◎：特に高い、○：高い、△；可能性有り

試料No.	遺構	層位	全リン酸 (mg/g)	全カルシウム (mg/g)	備考
1	2号土坑墓	①	7.25	0.11	◎
2		⑤	4.45	0.02	△
3	6号火葬墓	③	3.47	0.03	△
4		⑦	6.59	0.02	○
5	1号土坑墓	③	0.98	0.02	
6	SXD06	①	0.76	0.05	△
7	SXD07	①a	2.28	0.01	
8		①b	1.10	0.05	△
9	SXD08	②	3.23	0.04	△
10		②b	3.45	0.03	△
11		③	0.79	0.04	
12	SXD13	②	1.25	0.06	△
13		⑥	1.29	0.02	
14		Pit2	0.68	0.03	
15	SXD14	④a	4.92	0.03	△
16		④b	6.29	0.04	○
17		Ⅲ	2.92	0.02	地山試料
18	SXD15	347	0.97	0.04	
19		348	1.52	0.04	
20	SXD15	④	1.11	0.04	
21		S1	2.01	0.04	
22		S2	3.56	0.03	△
23		S3	1.76	0.03	
24	SXD16	①	2.83	0.03	

引用文献

竹迫 敏 (1993) リン分析法。第四紀試料分析法 2研究対象別分析法。東京大学出版会、38-45pp.

第6節 住居跡・土坑墓出土土器の胎土材料

藤根 久・今村美智子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

これまで、土器の胎土分析と言った場合には、対象とした土器の生産地推定が目的である場合が大半であった。その方法は、薄片などによる胎土の顕微鏡観察や分析機器を用いた化学組成の検討などさまざまである。

しかし、土器胎土は粘土と混和材（砂、繊維、灰、火山灰など）から構成される人工物であるため、例えば、土器の薄片観察などによって得られた砂の岩石組成が示す地域が具体的に何処であるかを判断することは困難である場合が多い。ある種の土器において、その胎土の持つ特徴が十分理解され、普遍的な特徴であることを示すことができれば、その特徴が示す地域を検討することによって土器の生産地推定が可能になると思われる。この土器胎土が示す特徴とは、まさに材料とした粘土の特徴であり、混和材の特徴である。

ここでは、遺跡から出土した弥生～古墳時代の土器胎土について、その胎土の材料の特徴を調べ、生産地推定も試みた。

2. 試料と方法

試料は、弥生～古墳時代あるいは古代の土器60試料である（表15）。これら土器は、に示す次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し（面積約6cm²程度（2 x 3cm））、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で分類群ごとに同定・計数した。同定・計数は、100 μ m格子目盛を用いて任意の位置における約50 μ m（0.05mm）以上の鉱物や岩石片あるいは微化石類を対象とし、微化石類と石英・長石類以外の粒子が約100個以上になるまで行った。また、この計数とは別に薄片全面について、微化石類（放射虫化石、珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。以下に、ここで用いた粒子分類群について、その概略を述べる。

3. 胎土中の粒子分類群

細砂～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類した（菱田ほか、1993）。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載と

その特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

【放射虫化石】

放射虫は、放射状足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは硫酸からなる。放射虫化石は、海生浮遊性珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

【珪藻化石】

珪藻質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉(1988)や安藤(1990)によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石(淡水種)、珪藻化石(海水種)と分類し、同定できないものは珪藻化石(?)とした。なお、各胎土中の珪藻化石は、その詳細を記載した。

【骨針化石】

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

【植物珪藻化石】

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や環状型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

【胞子化石】

胞子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30 μm 程度の小型無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

【石英・長石類】

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類(雲母)は、黄色などの細粒雲母類が含まれる石英または長石類である。

【長石類】

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶(主として平行な縞)を示すものと葉帯構造(同心円状の縞)を示すものに細分される(これらの縞は組成の違いを反映している)。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの(パーサイト構造)と格子状構造(微斜長石構造)を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶8面体構造(という)である。葉帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶(顕晶)の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの SiO_2 の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

【雲母類】

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき面(規則正しい割れ目)にそって板状には割れ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの SiO_2 の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

【輝石類】

主として斜方輝石と単斜輝石がある。斜方輝石(主に紫輝石)は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および緑黄色などの色を呈し、形は長柱状である。 SiO_2 が少ない深成岩、 SiO_2 が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石(主に普通輝石)は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として SiO_2 が中間から少ない火山岩によく見られ、 SiO_2 の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

【角閃石類】

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような SiO_2 が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

【ガラス質】

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス(バブル・ウォール型)や小さな泡をたくさんもつガラス(軽石型)などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。なお、薄ガラスは、非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

【珪品質・完晶質】

珪晶質は珪晶(鉱物の結晶)状の部分と石英状のガラス質の部分で明確に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石英の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの珪晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い

【凝灰岩質】

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山降塵物などから構成され、非晶質でモザイクな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

【複合鉱物類】

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類(含雲母類)、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類(含輝石類)、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類(角閃石類)とした。

【複合石英類】

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類(等粒)として分類した。この複合石英類(等粒)は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

【砂岩質・泥岩質】

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

【不透明・不明】

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩片として同定不可能な粒子を不明とする。

4. 各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(表16)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No1: 60~300 μ mが多い(最大粒径700 μ m)。石英・長石類 複合石英類(微細) 斜長石(双晶)、複合石英類、ガラス質、ジルコン多い、斜方輝石、雲母類、角閃石類、単斜輝石、[凝灰岩質]、胎子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No2: 50~280 μ mが多い(最大粒径600 μ m)。石英・長石類 複合石英類(微細) 砂岩質、雲母類、斜方輝石、ジルコン多い、凝灰岩質、ガラス質、角閃石類、単斜輝石、チャート放散虫化石や多い、珪藻化石(淡水種*Eunotia*属)、植物珪酸体化石、植物遺体

No3: 40~400 μ mが多い(最大粒径550 μ m)。石英・長石類 複合石英類(微細) 砂岩質、雲母類、角閃石類、ガラス質、凝灰岩質、斜方輝石、チャート放散虫化石や多い、珪藻化石(淡水種*Eunotia*属)、骨針化石、胎子化石、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)、植物遺体

No4: 70~400 μ mが多い(最大粒径600 μ m)。石英・長石類 複合石英類(微細) 雲母類、斜長石(双晶)、凝灰岩質、ジルコン多い、角閃石類、ガラス質、単斜輝石、チャート放散虫化石や多い、珪藻化石(淡水種*Eunotia*属)、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)、植物遺体

No5: 50~300 μ mが多い(最大粒径600 μ m)。石英・長石類 複合石英類(微細) 斜長石(双晶)、ジルコン多い、角閃石類、凝灰岩質、単斜輝石、斜方輝石、ガラス質、チャート放散虫化石や多い、珪藻化石(淡水種*Cymbella*属)、骨針化石、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)、植物遺体

No6: 80~600 μ mが多い(最大粒径3.6mm)。石英・長石類 複合石英類(微細) 砂岩質、カリ長石(パ-サイト)、ジルコン多い、角閃石類、雲母類、泥岩質、[凝灰岩質、ガラス質]、チャート放散虫化石、珪藻化石(淡水種*Pinnularia*属)、骨針化石、胎子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No7: 70~500 μ mが多い(最大粒径1mm)。石英・長石類 複合石英類(微細) 砂岩質、珪晶質、角閃石類、ガラス質、ジルコン多い、凝灰岩質、単斜輝石、斜方輝石、泥岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石(淡水種*Pinnularia*属)、骨針化石、胎子化石、植物珪酸体化石

No8: 40~170 μ mが多い(最大粒径700 μ m)。石英・長石類 ガラス質 角閃石類、ジルコン、雲母類、[複合石英類(微細)、

凝灰岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石（淡水種*Famotia biareofera*、*Melosira*属、*Cymbella*属、*Eunotia*属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）、植物遺体

No9: 60~400 μ mが多い（最大粒径1mm）。石英・長石類）ガラス質）複合石英類（微細）砂岩質、カリ長石（パーサイト）、複合石英類、雲母類、角閃石類、ジルコン多い、珪藻化石（淡水種*Eunotia*属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No10: 60~300 μ mが多い（最大粒径600 μ m）。石英・長石類）複合石英類（微細）、雲母類、ガラス質、凝灰岩質、ジルコン多い、角閃石類、斜方輝石、泥岩質、植物珪酸体化石、植物遺体

No11: 50~400 μ mが多い（最大粒径650 μ m）。石英・長石類）複合石英類（微細）角閃石類、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、ガラス質、凝灰岩質、単斜輝石、ジルコン多い、雲母類、斜方輝石、チャート放散虫化石、珪藻化石（淡水種*Eunotia biareofera*）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No12: 50~120 μ mが多い（最大粒径950 μ m）。石英・長石類）複合石英類（微細）斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、ガラス質、斜方輝石、角閃石類、凝灰岩質、ジルコンやや多い、珪藻化石（淡水種*Eunotia biareofera*、*Cymbella*属、*Eunotia*属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No13: 80~900 μ mが多い（最大粒径3.4mm）。石英・長石類）複合石英類）複合石英類（微細）複合石英類（雲母類）、斜長石（双晶）、サクロ石類、雲母類、ジルコン、角閃石類、珪藻化石（淡水種*Eunotia biareofera*、*Cymbella*属、*Eunotia*属、*Pinnularia*属、不明種）、胞子化石、植物珪酸体化石

No14: 70~400 μ mが多い（最大粒径550 μ m）。凝灰岩質胎土。石英・長石類）凝灰岩質）複合石英類（微細）角閃石類、ガラス質、ジルコン、単斜輝石、斜方輝石、泥岩質、骨針化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）、植物遺体

No15: 90~700 μ mが多い（最大粒径1.7mm）。複合石英類）ガラス質）複合石英類（微細）斜長石（双晶）、角閃石類多い、ジルコン多い、凝灰岩質、雲母類、珪藻化石（淡水種*Eunotia*属、*Pinnularia*属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No16: 80~800 μ mが多い（最大粒径1.5mm）。石英・長石類）複合石英類）複合石英類（微細）角閃石類多い、ジルコン多い、斜長石（双晶）、雲母類、凝灰岩質、ガラス質、珪藻化石（淡水種*Famotia biareofera*、*Eunotia*属多量、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No17: 70 μ m~1.0mmが多い（最大粒径2.8mm）。凝灰岩質胎土。石英・長石類）複合石英類（微細）凝灰岩質）複合石英類）雲母類、ジルコン多い、角閃石類、[ガラス質]、単斜輝石、斜方輝石、泥岩質、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No18: 70~700 μ mが多い（最大粒径1.9mm）。石英・長石類）複合石英類（微細）複合石英類、斜長石（双晶）、ジルコン多い、雲母類、角閃石類、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No19: 70~800 μ mが多い（最大粒径2.2mm）。凝灰岩質胎土。石英・長石類）複合石英類（微細）泥岩質、砂岩質、重晶質、角閃石類、斜方輝石、ガラス質、凝灰岩質、ジルコン、チャート放散虫化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No20: 70~600 μ mが多い（最大粒径2.3mm）。石英・長石類）複合石英類（微細）砂岩質、雲母類、カリ長石（微斜長石）、角閃石類、ジルコン多い、斜方輝石、泥岩質、チャート放散虫化石、植物珪酸体化石

No21: 50~500 μ mが多い（最大粒径1.6mm）。凝灰岩質胎土。石英・長石類）複合石英類（微細）凝灰岩質）角閃石類、ガラス質、ジルコンやや多い、斜方輝石、泥岩質、チャート放散虫化石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No22: 80~750 μ mが多い（最大粒径6mm）。凝灰岩質胎土。石英・長石類）複合石英類（微細）砂岩質、凝灰岩質、ガラス質、ジルコンやや多い、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、チャート放散虫化石、珪藻化石（淡水種*Pinnularia*属）、骨針化石、植物珪酸体化石

No23: 60~300 μ mが多い（最大粒径500 μ m）。石英・長石類）複合石英類（微細）凝灰岩質）角閃石類、ジルコンやや多い、チャート放散虫化石、骨針化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No24: 70~400 μ mが多い（最大粒径1mm）。石英・長石類）複合石英類（微細）ジルコン多い、雲母類、角閃石類、凝灰岩質、単斜輝石、[ガラス質]、チャート放散虫化石、植物珪酸体化石

No25: 50~400 μ mが多い（最大粒径600 μ m）。石英・長石類）複合石英類（微細）凝灰岩質、角閃石類多い、ガラス質、ジルコンやや多い、単斜輝石、チャート放散虫化石、珪藻化石（淡水種*Pinnularia*属）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No26: 60~500 μ mが多い（最大粒径2mm）。石英・長石類）複合石英類（微細）凝灰岩質）斜長石（双晶）、角閃石類やや多い、複合石英類、砂岩質、ガラス質、ジルコンやや多い、雲母類、単斜輝石、泥岩質、骨針化石、植物珪酸体化石

No27: 60 μ m~1.4mmが多い（最大粒径3.5mm）。凝灰岩質胎土。石英・長石類）複合石英類（微細）砂岩質、砂岩質、ガラス質、ジルコン多い、角閃石類やや多い、単斜輝石、凝灰岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石（淡水種*Eunotia*属、不明種）、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No28: 60~500 μ mが多い(最大粒径2.4mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)複合石英類、ジルコン多い、斜方輝石、角閃石類、雲母類、ガラス質、チャート放散虫化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No29: 50~300 μ mが多い(最大粒径3.1mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)[珪晶質]、ガラス質、角閃石類、単斜輝石、凝灰岩質、ジルコン多い、雲母類、珪藻化石(淡水種*Pinnularia*属、*Eumotia*属)、胞子化石、植物珪酸体化石多量、植物遺体

No30: 50~400 μ mが多い(最大粒径1.1mm)。凝灰岩質粘土。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質、カリ長石(微斜長石)、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、角閃石類多い、ガラス質、凝灰岩質、ジルコン多い、斜方輝石、ザクロ石類、チャート放散虫化石やや多い、珪藻化石(淡水種*Eumotia*属)、胞子化石、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)

No31: 50~280 μ mが多い(最大粒径2.5mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質、泥岩質、変質火成岩質、カリ長石(パーサイト)、凝灰岩質、ガラス質、単斜輝石、ジルコン多い、角閃石類、珪晶質、泥岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No32: 60~500 μ mが多い(最大粒径3mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質、複合石英類、ガラス質、凝灰岩質、ジルコンやや多い、角閃石類やや多い、斜方輝石、単斜輝石、泥岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石(*Eumotia*属)、胞子化石、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)

No33: 50~220 μ mが多い(最大粒径900 μ m)。石英・長石類)複合石英類(微細)カリ長石(パーサイト)、ジルコン多い、単斜輝石、ガラス質、角閃石類、雲母類、[凝灰岩質]、チャート放散虫化石やや多い、植物珪酸体化石、植物遺体

No34: 50~800 μ mが多い(最大粒径2.8mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)斜長石(双晶)、カリ長石(微斜長石)、凝灰岩質、砂岩質、ガラス質、変質火成岩質、ジルコン多い、角閃石類やや多い、[珪晶質]、複合雲母類、雲母類、泥岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石(淡水種*Eumotia biareofera*、*Eumotia*属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No35: 50~500 μ mが多い(最大粒径1.7mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)複合石英類、凝灰岩質、斜長石(茶帯)、ガラス質、雲母類、ジルコン多い、角閃石類、単斜輝石、斜長石(双晶)、泥岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石(淡水種*Eumotia*属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No36: 70~600 μ mが多い(最大粒径500 μ m)。石英・長石類)複合石英類(微細)斜長石(双晶)、角閃石類多い、ガラス質、単斜輝石、カリ長石(微斜長石)、凝灰岩質、斜方輝石、ジルコン多い、泥岩質、チャート放散虫化石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No37: 50~300 μ mが多い(最大粒径550 μ m)。石英・長石類)複合石英類(微細)カリ長石(微斜長石)、斜長石(双晶)、角閃石類やや多い、ガラス質、単斜輝石、斜方輝石、ジルコン多い、凝灰岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石(淡水種*Pinnularia*属、*Eumotia*属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)

No38: 50~400 μ mが多い(最大粒径600 μ m)。凝灰岩質粘土。石英・長石類)複合石英類(微細)カリ長石(パーサイト)、角閃石類多い、斜長石(双晶)、ジルコンやや多い、ガラス質、雲母類、単斜輝石、チャート放散虫化石、珪藻化石(不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No39: 50~750 μ mが多い(最大粒径1.3mm)。石英・長石類)複合石英類)斜長石(双晶)、複合石英類(微細)、複合雲母類、角閃石類多い、ジルコンやや多い、雲母類、斜方輝石、複合石英類(角閃石類)、単斜輝石、凝灰岩質、ザクロ石類、放散虫化石(5個体)、珪藻化石(海水種*Arachnoidiscus ehrenbergii*、*Coccolofiscus*属/*Thalassiosira*属多い)、骨針化石多い、植物珪酸体化石

No40: 60~800 μ mが多い(最大粒径1.9mm)。石英・長石類)複合石英類)複合石英類(微細)斜長石(双晶)、雲母類、複合石英類(角閃石類)、複合石英類(雲母類)、ジルコン多い、角閃石類やや多い、凝灰岩質(角閃石類)、ザクロ石類、複合石英類、斜方輝石、珪藻化石(淡水種*Eumotia biareofera*、*Eumotia*属、不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No41: 50~400 μ mが多い(最大粒径1mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)角閃石類多い、斜長石(双晶)、複合石英類、凝灰岩質、砂岩質、ジルコンやや多い、ガラス質、斜方輝石、泥岩質、チャート放散虫化石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No42: 50~750 μ mが多い(最大粒径2.2mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質、角閃石類多い、凝灰岩類、ガラス質、単斜輝石、ジルコンやや多い、板岩質、泥岩質、チャート放散虫化石、珪藻化石(淡水種*Eumotia biareofera*)、胞子化石、植物珪酸体化石

No43: 50~500 μ mが多い(最大粒径2.1mm)。石英・長石類)ガラス質)複合石英類(微細)砂岩質、複合石英類、単斜輝石、ジルコン多い、角閃石類多い、ザクロ石類、チャート放散虫化石、珪藻化石(淡水種*Eumotia biareofera*、*Cymbella*属、*Eumotia*属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No44: 40~170 μ m前後が多い(最大粒径1.4mm)。石英・長石類)ガラス質)複合石英類(微細)雲母類、珪晶質、ジルコンやや多い、角閃石類、凝灰岩質、珪藻化石(淡水種*Eumotia biareofera*、*Melosira pensacola*、*Pinnularia*属、*Eumotia*属、不明種)、

骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No45: 60~800 μ mが多い(最大粒径1.3mm)。石英・長石類)複合石英類)複合動物類(含雲母類)、斜長石(双晶)、雲母類、砂岩質、角閃石類多い、ジルコン多い、ガラス質、斜方輝石、凝灰岩質、ザクロ石類、放射虫化石(16個体)、珪藻化石(海水種*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属多い)、骨針化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No46: 40~400 μ mが多い(最大粒径800 μ m)。凝灰岩質胎土。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質、複合石英類、斜長石(双晶)、カリ長石(パーサイト)、ガラス質、凝灰岩質、角閃石類多い、ジルコン、単斜輝石、雲母類、チャート放射虫化石やや多い、海水種珪藻化石密集塊、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)

No47: 70~600 μ mが多い(最大粒径2.1mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質、複合石英類、ガラス質、[凝灰岩質)、ジルコンやや多い、角閃石類やや多い、泥岩質、チャート放射虫化石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No48: 60~700 μ mが多い(最大粒径1.3mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)凝灰岩質)カリ長石(微斜長石)、ガラス質、斜長石(双晶)、ジルコン、角閃石類やや多い、単斜輝石、泥岩質、チャート放射虫化石、植物珪酸体化石

No49: 70~600 μ mが多い(最大粒径2mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)凝灰岩質)砂岩質、ガラス質、角閃石類やや多い、珪晶質、ジルコン、単斜輝石、ザクロ石類、ガラス質、泥岩質、チャート放射虫化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No50: 70~300 μ mが多い(最大粒径600 μ m)。石英・長石類)複合石英類(微細)角閃石類やや多い、斜長石(双晶)、ガラス質、斜方輝石、凝灰岩質、雲母類、ジルコン、単斜輝石、泥岩質、チャート放射虫化石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No51: 50~450 μ mが多い(最大粒径2.1mm)。凝灰岩質胎土。石英・長石類)複合石英類(微細)凝灰岩質)斜長石(双晶)、ジルコンやや多い、角閃石類多い、単斜輝石、雲母類、ガラス質、泥岩質、チャート放射虫化石、珪藻化石(淡水種*Eunotia biarcifera*)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No52: 60~250 μ mが多い(最大粒径600 μ m)。凝灰岩質胎土。石英・長石類)複合石英類(微細)凝灰岩質)斜長石(双晶)、角閃石類やや多い、ガラス質、単斜輝石、ジルコン、泥岩質、珪藻化石(淡水種*Eunotia*属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No53: 70~700 μ mが多い(最大粒径1.2mm)。凝灰岩質胎土。石英・長石類)複合石英類(微細)砂岩質)珪晶質、紋岩質、ジルコンやや多い、角閃石類、凝灰岩質、ガラス質、雲母類、泥岩質、チャート放射虫化石、珪藻化石(淡水種*Pinnularia*属、*Eunotia*属)、骨針化石、植物珪酸体化石

No54: 40~700 μ mが多い(最大粒径2.7mm)。凝灰岩質胎土。石英・長石類)複合石英類)珪晶質、ジルコン、ガラス質、雲母類、斜方輝石、砂岩質、胞子化石、泥岩質、チャート放射虫化石、植物珪酸体化石

No55: 50~120 μ mが多い(最大粒径900 μ m)。石英・長石類)ガラス質)複合石英類(微細)角閃石類やや多い、凝灰岩質、ジルコンやや多い、斜方輝石、チャート放射虫化石、珪藻化石(淡水種*Eunotia*属)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石、植物遺体

No56: 80~500 μ mが多い(最大粒径2.2mm)。凝灰岩質胎土。石英・長石類)複合石英類(微細)泥岩質)砂岩質、珪晶質、複合石英類、単斜輝石、雲母類、ジルコンやや多い、角閃石類やや多い、ガラス質、斜方輝石、複合角閃石類、泥岩質、チャート放射虫化石、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)、植物遺体

No57: 70~400 μ mが多い(最大粒径550 μ m)。石英・長石類)凝灰岩類)複合石英類(微細)カリ長石(パーサイト)、カリ長石(微斜長石)、砂岩質、ガラス質、角閃石類多い、ジルコン、泥岩質、チャート放射虫化石、珪藻化石(海水種*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属、淡水種*Eunotia biarcifera*、*Eunotia*属)、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No58: 60 μ m~1.0mmが多い(最大粒径2.9mm)。石英・長石類)複合石英類)片理複合石英類、複合石英類(微細)、ジルコン多い、角閃石類やや多い、単斜輝石、雲母類、凝灰岩類、ガラス質、斜方輝石、植物珪酸体化石少ない

No59: 70~500 μ mが多い(最大粒径950 μ m)。ガラス質)石英・長石類)複合石英類(微細)カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)、角閃石類、ジルコン、単斜輝石、泥岩質、チャート放射虫化石、珪藻化石(湖沼淨産生指標種群*Melosira granulata*、淡水種*Eunotia biarcifera*、*Pinnularia*属、*Eunotia*属多産、陸域指標種群*Pinnularia borealis*、不明種)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No60: 70~900 μ mが多い(最大粒径1.4mm)。石英・長石類)複合石英類)珪晶質)複合石英類(微細)、斜長石(双晶)、ガラス質、凝灰岩質、単斜輝石、角閃石類、雲母類、チャート放射虫化石、珪藻化石(海水種*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属、沼沢湿地付着生指標種群*Eunotia praerupta var. bidens*、淡水種*Eunotia monodonta*、*Melosira italica*、*Pinnularia*属、*Eunotia*属、陸域指標種群*Pinnularia borealis*、不明種多産)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

5. 微化石類による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10~概100 μm （実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μm 程度）、放射虫化石が数百 μm 、骨針化石が10~100 μm 前後である（植物珪藻化石が10~50 μm 前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9~62.5 μm 、砂が62.5 μm ~2mmである（地学団体研究会・地学参事編集委員会編、1981）。このことから、植物珪藻化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪藻化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

なお、放射虫化石などは、古い地層から再堆積した微化石類である場合が多く、牛産地の地質学的状況を指標しているものと考えられる。

検討した胎土は、微化石類により、a) 外洋成粘土を用いた胎土、b) 海成粘土を用いた胎土、c) 淡水成粘土を用いた胎土、d) 水成粘土を用いた胎土、e) その他の粘土を用いた胎土、に分類された。以下では、分類された胎土の特徴について述べる。

a) 外洋成粘土を用いた胎土（2胎土）

これらの胎土中には、放射虫化石や海水種珪藻化石あるいは多量の骨針化石が含まれていた。

b) 海成粘土を用いた胎土（1胎土）

この胎土中には、海水種珪藻化石の*Coccolithus*属/*Thalassiosira*属が含まれていた。

c) 淡水成粘土を用いた胎土（33胎土）

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石の*Eunotia*属、*Pinnularia*属などが含まれていた。なお、多くの胎土中ではこれら珪藻化石が少ない（第18表では少ない胎土を（淡水成）とした）。一方、No.8、No.11、No.12、No.15、No.16、No.59、No.60の胎土中には多く含まれていた。また、No.60の胎土中には海水種珪藻化石が含まれていた。

d) 水成粘土を用いた胎土（11胎土）

これらの胎土中には、不明種珪藻化石や骨針化石が含まれていた。ただし、珪藻化石は破片であるため、海成であるか淡水成であるかは不明である。

e) その他の粘土を用いた胎土（13胎土）

これらの胎土中には、水成を指標するような珪藻化石や骨針化石は含まれていなかった。

6. 胎土中の砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表18）。岩石の推定は、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類（大型）や複合鉱物類（含輝石類・含角閃石類・含雲母類）が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、斑晶質が火山岩類、片理複合石英類が片岩類、ガラス質がテフラ（火山噴出物）である。

さらに、推定した起源岩石は、表17の組み合わせに従って分類した。

最もおおく出現するC b群は、堆積岩類を主体として深成岩類からなり、凝灰岩類やテフラなどを伴う組成である（22胎土）。次いで、C e群は、堆積岩類を主体として凝灰岩類からなり、深成岩類やテフラなどを伴う組成である（13胎土）。また、B c群は、深成岩類を主体として堆積岩類からなり、凝灰岩類やテフラなどを伴う組成である（11胎土）。

その他では、凝灰岩類を主体として堆積岩類からなるB c群（3胎土）、堆積岩類を主体としてテフラからなるC f群（2胎土）、堆積岩類を主体として火山岩類からなるB d群（1胎土）、深成岩類を主体としてテフラからなるB f群（2胎土）、テフラを主体として堆積岩類からなるF c群（2胎土）、堆積岩類を主体として火山岩類からなるC d群（3胎土）、テフラを主体として深成岩類からなるF b群（1胎土）であった。

7. 考察

ここでは、深溝前遺跡から出土した主に弥生～古墳時代の土器についてその胎土材料について、粘土および砂粒物の特徴について調べた。以下では、対象とした土器について、a) 胎土材料、b) 生産地推定、c) その他の特徴、をそれぞれ述べる。

a) 胎土材料

対象とした土器の粘土材料では、淡水種珪藻化石を比較的多く含む胎土が6胎土見られたが、多くは数個体の珪藻化石が検出される程度の胎土が大半であった。こうした状況は、材料とした粘土層自身が珪藻化石などの微化石類が乏しいかあるいは全く含まない粘土層を利用したことが考えられる。胎土中の微化石類は、後述するように、放散虫化石のように主に中新統など古い地層から再堆積した場合もあることから、粘土の起源すなわち堆積環境を推定する場合は、十分な数の微化石類が検出されないと、使用した粘土層の適正な判断には至らない。

土器材料から見ると、東海地域では比較的良好な粘土層が広く分布し、山茶碗などの材料として利用された鮮新統（約2330～520万年前）の東海層群瀬戸陶土層や矢田川累層、第四紀更新統（約164～1万年）の段丘堆積物などがある。また、深溝前遺跡の灰釉陶器のように、美濃須南古窯が成立した中生代ジュラ紀（約2億年～1億4500万年前）の那比エニートの砂岩層が風化した堆積した泥質堆積物を利用した堆積物ともある（藤根、1998）。

しかし、東海層群は、古東海湖で堆積した湖沼堆積物でありながら、湖沼環境を示すような微化石類は乏しい。また、段丘堆積物は、旧河川で堆積して形成された堆積物でありながら、全国的に見ても微化石類をほとんど含まないと言った事情がある。

ここで検討したNo.39やNo.40あるいはNo.45のS字状口縁台付甕は、放散虫化石や海水種珪藻化石を特徴的に含み、鉱物群において角閃石類やジルコンのほかゼクロ石類を特徴的に含むことから、生産地として三重県伊勢北部の中新統が分布する周辺域が予想される。しかし、中新統自体は過積した地層であり直接土器材料として利用したとは考え難いことから、このS字状口縁台付甕の製作は、放散虫化石を含む中新統の周辺域に分布する主に段丘堆積物中の粘土層が利用されたものと推定される。なお、深溝前遺跡灰釉陶器のように、谷内において固結した蒸気層が泥化した軟質の粘土質堆積物を利用したことは否定できない。

ここで検討した土器群の多くは、微化石類が乏しいかあるいは全く含まない粘土層を利用したことが推定されることから、同様の事情が考えられる。

b) 生産地推定

縄文時代や弥生時代などの土器の生産地推定は、須恵器や山茶碗などの窯で焼かれた焼物のように比較による推定法とは異なった方法が必要となる。

従来では、胎土中の岩石組成あるいは鉱物組成に注目する方法が一般的であったが、得られた岩石組成あるいは鉱物組成からその組成が示す地域が何処であるかを推定することは容易でない。これは、得られた組成が示す地域がどの程度の範囲であるかを精緻に調べる必要があるばかりか、製作時の組成を調べる必要があるなど現実的には困難であると思われる。実際にも、現在の河川砂の組成と比較するなどの試みが行われているが、これらから得られた地域は曖昧である場合が多い。

本来、土器の胎土材料は、粘土と砂粒などの混和物から構成された人工物であるが、土器材料については十分な検討がなされてこなかったため、粘土の特徴については全く知られていなかった。

著書者は、弥生土器の薄片について顕微鏡による観察を行った結果、粘土部分に放散虫化石や珪藻化石あるいは骨針化石が含まれていることを見出した（車崎ほか、1996）。これら微化石類は、材料とした粘土の特徴であり、利用した粘土層の特徴であり、地域指標として利用することが可能である。また、従来から調べられていた砂粒物の岩石組成あるいは鉱物組成と組み合わせることにより、より確かな推定が引けると考える。

幾何学的には、平面内における定点がX座標とY座標により示されると同様に、生産地の位置は、例えばX座標が粘土の特徴であり、Y座標が砂粒物の岩石学的あるいは鉱物学的な特徴により決定される。

なお、土器生産地と言った場合土器が作られた場所を示すが、材料面から見ると粘土あるいは砂などの混和材を採取した場所と同義と考える。なお、土器の生産地推定は、粘土と砂粒物の採取地が共に同じ場所であると仮定して行う。

第一に、No.39やNo.40あるいはNo.45のS字状口縁台付甕は、放散虫化石や海水種珪藻化石を特徴的に含み、鉱物群において角閃石類やジルコンのほかゼクロ石類を特徴的に含んでいる。この放散虫化石は外洋域で堆積した地層中に含まれるが、伊勢—三河海湖周辺域では伊勢地域、知多半島先渚部、東濃～瀬戸地域、岡崎地域、奥三河地域などに分布する中新統（約2330～520万年前）に堆積した地層（図322の黒塗り部）に含まれている。これらの地域では、付随する砂粒において違いがあり、伊勢地域では片岩類を特徴的に伴い、東濃地域では流成岩類を特徴的に伴い、奥三河地域では火山岩類を特徴的に伴うなどである。なお、

美濃加茂一見周辺域では、主に淡水環境に堆積した地層であるほか、凝灰岩類を特徴的に含む。

先のS字状口縁台付甕は、放射虫化石などの外洋成堆積物であるほか、砂粒物において深成岩類を主体としたB c群あるいはC b群のほか、鉱物群として角閃石類やジルコンあるいはザクロ石類を特徴的に含んでいる。こうしたことから、伊勢北部地域に分布する中新統分布域およびその周辺部が製作地と推定される(表18の総合評価)。¹⁾なお、矢作ほか(1997)は、これらS字状口縁台付甕の重鉱物組成を調べ、角閃石やザクロ石を特徴的に含むことから、三重県に流域をもつ雲出川下流地域で作られた土器である可能性を示唆している。

ここで検討した多くの土器群は、これらの材料粘土が、淡水産植化石などの微化石類の乏しい胎土である。残念ながら、微化石類が乏しいかあるいは全く含まない粘土層を利用していたため粘土層分布域については言及できない。ただし、砂粒の推定岩石の組み合わせにおいてC e群やB c群あるいはC b群などを示す多くの土器は、凝灰岩類を特徴的に伴う胎土であった。先に述べたように、美濃加茂一見周辺域には、新第三紀中新世前-中期の礫層群が分布するが、その下部層の礫層系層は、流紋岩・安山岩・玄武岩の火砕岩および溶岩が分布し、また、その上部においては砂岩・泥岩・礫岩および凝灰岩から構成されている(地質調査所、1990;図322の中新統)。一方、遺跡周辺域は、中生代ジュラ紀(約2億年~1億4500万年前)の那比ユニットの砂岩層が分布し、灰釉陶器の材料分析として行った谷内堆積物の顕微鏡観察では、堆積岩類を主体として深成岩類やテフラを伴う組成であった(灰釉陶器の化学組成参照)。

こうしたことから、これら凝灰岩類を特徴的に含む土器群は、少なくとも遺跡周辺の組成ではなく、むしろ美濃加茂一見周辺に近い組成と予想される(表18の総合評価Ⅱ a群およびⅡ b群)。

なお、凝灰岩類を特徴的に含む胎土のうち、火山岩類を伴わないⅡ a群と火山岩類を伴うⅡ b群に分類した。ただし、これらは大きな違いとは考えられない。

こうした状況は、隣接する南青柳遺跡や砂行遺跡の同時代の土器においても見られた傾向である(藤根・今村、2001南青柳遺跡、藤根・今村、2000砂行遺跡)。

さらに、凝灰岩類を伴わない胎土のうち、火山岩類を伴わないⅢ a群と火山岩類を伴うⅢ b群に分類した。このうち、淡輪前遺跡の粘土材料はⅢ a群に属し、このうちNo10、No18、No20、No28、No43の胎土は近い組成を示す。ただし、生産地については特定できない。

No58の伊勢型甕の胎土中には、深成岩類や堆積岩類のほか片岩類が含まれていたため、総合評価をⅣ群とした。

c) その他の特徴

No 8やNo 9あるいはNo44やNo55の土器では、テフラ起源の火山ガラスが多量に含まれていた。No 8やNo 9あるいはNo55は高坏であるが、木目の細かな胎土である。こうした例として、東海地域に特徴的に出現した弥生時代のバレスタイル土器では、砂粒が少ないもののガラスが多量に含まれ、全体の3分の1程度の胎土で見られ、混和材として火山ガラスを意図的に使用した可能性が予想されている(藤根、1998)。

また、No 9やNo29あるいはNo57の土器では、イネ科植物の葉で形成されるガラス質細胞の植物珪酸体の化石が多量に含まれていた。こうした植物珪酸体化石の多量は、同じ材料粘土を利用している他の土器に比べて特に多く含まれていることから、本来の粘土層の特徴ではなくその土器固有の特徴と理解される。この植物珪酸体化石は、イネ科植物を焼いた際にそのまま残ることから、土器製作時に除粘材として混和したことも考えられる。ただし、土器製作場は、本来灰が多い場所でもあることから、混入したことも否定できない。

8. おわりに

ここでは、弥生~古墳時代の土器胎土について、粘土と砂粒物などの特徴について調べ、土器材料のほか土器生産地の推定あるいはその他の特徴について検討した。

土器生産地の推定については、一部のS字状口縁台付甕はより確かな推定を行うことが出来たが、多くの土器については状況証拠を示すに留まった。なお、粘土および砂粒組成の特徴から、総合評価としてⅠ、Ⅱ a、Ⅱ b、Ⅲ a、Ⅲ b、Ⅳに分類した。

土器胎土の特徴に関する再検討、比較土器の検討、材料に関する地質学的調査など、今後検討すべき課題が多いと考える。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産硅藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理，42,273-88。
- 地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』，平凡社，1612p。
- 地質調査所（1990）20万分の1地質図「飯田」、地質調査所
- 藤根 久（1998）東海地域（伊勢-三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料。第6回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・窯が語る、108-117。
- 菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について-弥生時代後期の土器を例にして-。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集、34-35。
- 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究，27,1-20。
- 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料-粘土の起源を心に-。日本考古学協会第62回大会研究発表要旨、153-156。
- 矢作隆二・服部俊之・赤塚次郎（1997）東海地域におけるS字状口縁台付甕の産地について-胎土分析による予察。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集、126-127。
- 188。
- 藤根 久・今村美智子（2000）『弥生後期-古墳中期土器の胎土材料』『砂行遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第65集）（財）岐阜県文化財保護センター
- 藤根 久・今村美智子（2001）『南青柳遺跡山上弥生末～古墳中期土器の胎土材料』『南青柳遺跡 南青柳古墳 大平前遺跡』（岐阜県文化財保護センター調査報告書 第68集）（財）岐阜県文化財保護センター

表15 弥生・古墳・古代土器とその肉眼的特徴

資料 番号	住居跡	器種	遺物No	時期	色用標準泥	色	切断面胎上の肉眼的特徴					その他の特徴	中黒層 の有無	
							白色粒子	赤褐色	赤色粒子	黒灰色粒子	その他			
1	SRA10	高坏H	2028	Ⅱ	7.5YR 7/4	にぶい橙						木目細かい		なし
2	SBB01	器内D1	2032	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙						木目細かい		なし
3	SBB01	鉢B	2033	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙						木目細かい		なし
4	SBB01	高坏C	2030	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙						木目細かい		なし
5	SBB02	鉢B	2034	Ⅱ	10YR 3/3	暗黄						木目細かい		有
6	SBB04	高坏B	2039	Ⅱ	5YR 6/6	橙						木目細かい		有
7	SBB04	器A1	2045	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙	△			△				有
8	SBD01	高坏A	2066	Ⅱ	2.5Y 8/2	灰白						木目細かい		なし
9	SBD08	高坏A	2067	Ⅱ	2.5Y 8/3	浅黄						木目細かい		なし
10	SBD09	器台B1	2070	Ⅱ	2.5Y 8/2	灰白						木目細かい		有
11	SBD10	器A3	2082	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙				△			赤影	なし
12	SBD10	高坏	2079	Ⅱ	2.5Y 8/3	浅黄	△					木目細かい		なし
13	SBE05	器E	2102	Ⅱ	10YR 2/1	黒	○		△					なし
14	SBL05	器B	2103	Ⅱ	10YR 4/4	緑	○					シルト質		有
15	SBE06	器B	2100	Ⅱ	5YR 7/4	にぶい橙	○		△					なし
16	SBE06	器E	2101	Ⅱ	10YR 7/3	にぶい黄橙	○							有
17	SBE27	高坏	2147	Ⅱ	7.5YR 5/4	にぶい黄	○							なし
18	SBE27	器B1	2152	Ⅱ	7.5YR 7/6	橙				○				なし
19	SBE07	高坏F	2109	Ⅱ	5YR 5/6	明赤褐	○			△				なし
20	SBE27	器B1	2151	Ⅱ	7.5YR 7/6	橙	○							なし
21	SBE29	高坏A	2120	Ⅱ	7.5YR 7/4	にぶい橙	○			△				有
22	SHI29	器	2136	Ⅱ	7.5YR 5/3	にぶい橙	○			△				なし
23	SBE29	御付鉢	2131	Ⅱ	10YR 7/3	にぶい黄橙						木目細かい		なし
24	SBU29	高坏	2123	Ⅱ	2.5Y 8/3	浅黄	△					木目細かい		なし
25	SBF02	高坏D	2175	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙				○				なし
26	SBF02	器G2	2186	Ⅱ	10YR 7/6	明黄褐	○			△				なし
27	SBF02	器	2185	Ⅱ	10YR 6/4	にぶい黄橙	△			△				有
28	SHI02	高坏C	2169	Ⅱ	10YR 8/3	浅黄褐	○							なし
29	SBF02	器D	2181	Ⅱ	7.5Y 6/6	橙				○				有
30	SBF02	鉢	2190	Ⅱ	10YR 7/6	明黄褐	△			△				有
31	SBF02	器	2167	Ⅱ	10YR 6/6	明黄褐					○			有
32	SBF02	器	2187	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙	△							なし
33	SBF02	高坏	2166	Ⅱ	7.5YR 6/6	橙	△			○				なし
34	SBF24	器B	2229	Ⅱ	10YR 6/4	にぶい黄橙	△			○				有
35	SBF05	鉢H	2195	Ⅱ	7.5YR 6/6	橙	○							有
36	SBU05	器台	2192	Ⅱ	10YR 7/6	明黄褐						木目細かい		なし
37	SBF08	高坏C	2201	Ⅱ	5YR 8/4	淡橙						木目細かい		なし
38	SBU25	器	2235	Ⅱ	7.5YR 6/6	橙	△			△				有
39	SBF25	器E	2238	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙	○							有
40	SBF25	器E	2239	Ⅱ	10YR 4/3	にぶい黄褐	○					骨針化石		有
41	SBF34	鉢B	2297	Ⅱ	10YR 5/4	にぶい黄褐	○					シルト質		有
42	SBF34	器H	2300	Ⅱ	10YR 6/4	にぶい黄橙	○					シルト質		有
43	SBU34	器F	2309	Ⅱ	10YR 5/4	にぶい黄褐	△							なし
44	SBU29	器C	2268	Ⅱ	2.5Y 8/3	浅黄				△	○			有
45	SBF29	器E	2272	Ⅱ	10YR 7/3	にぶい黄橙	○							なし
46	SBF36	高坏C	2251	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙	△			△		シルト質		なし
47	SBF01	器	2156	Ⅱ	2.5Y 8/3	浅黄	○				○			淡灰
48	SBF38	器D	2326	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙	○							有
49	4号土器	器B2	2355	Ⅱ	7.5YR 4/1	褐灰	○			△				なし
50	持取鉢	高坏	2335	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙				○		シルト質		なし
51	持取鉢	器C1	2338	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙				○		シルト質		なし
52	持取鉢	鉢A	2350	Ⅱ	7.5YR 5/4	にぶい黄	○					シルト質		なし
53	SXK02	器B	2373	Ⅱ	10YR 7/3	にぶい黄橙	○			○				淡灰
54	SXB01	器	3060	Ⅳ	2.5Y 7/3	浅黄	○							淡灰
55	SBF38	高坏E	2324	Ⅱ	2.5Y 8/3	浅黄						木目細かい		なし
56	SBA10	器F	2026	Ⅱ	10YR 7/4	にぶい黄橙				△				なし
57	SBA03	高坏D	2002	Ⅱ	7.5Y 6/4	にぶい橙	△							なし
58	伊勢型土器	伊勢型器	3001	Ⅳ	10YR 7/6	にぶい黄橙					○			なし
59	SBA05	高坏	2009	Ⅱ	10YR 8/4	浅黄橙				△		シルト質		なし
60	22Y	弥生寺	1022	I	10YR 6/3	にぶい黄橙	○			△				淡灰

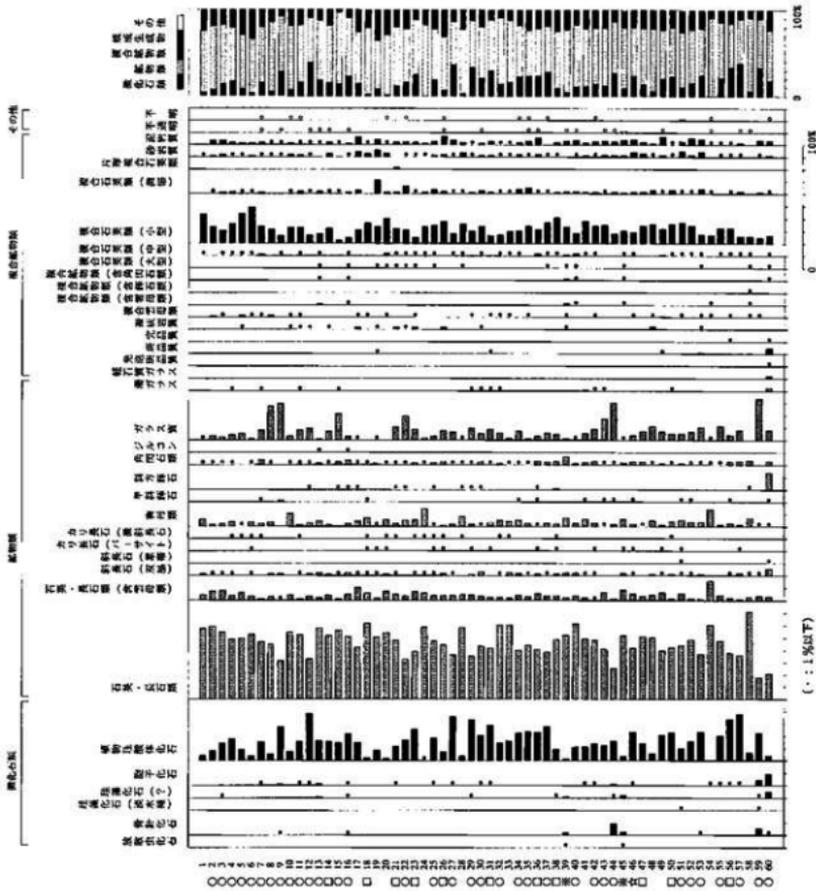


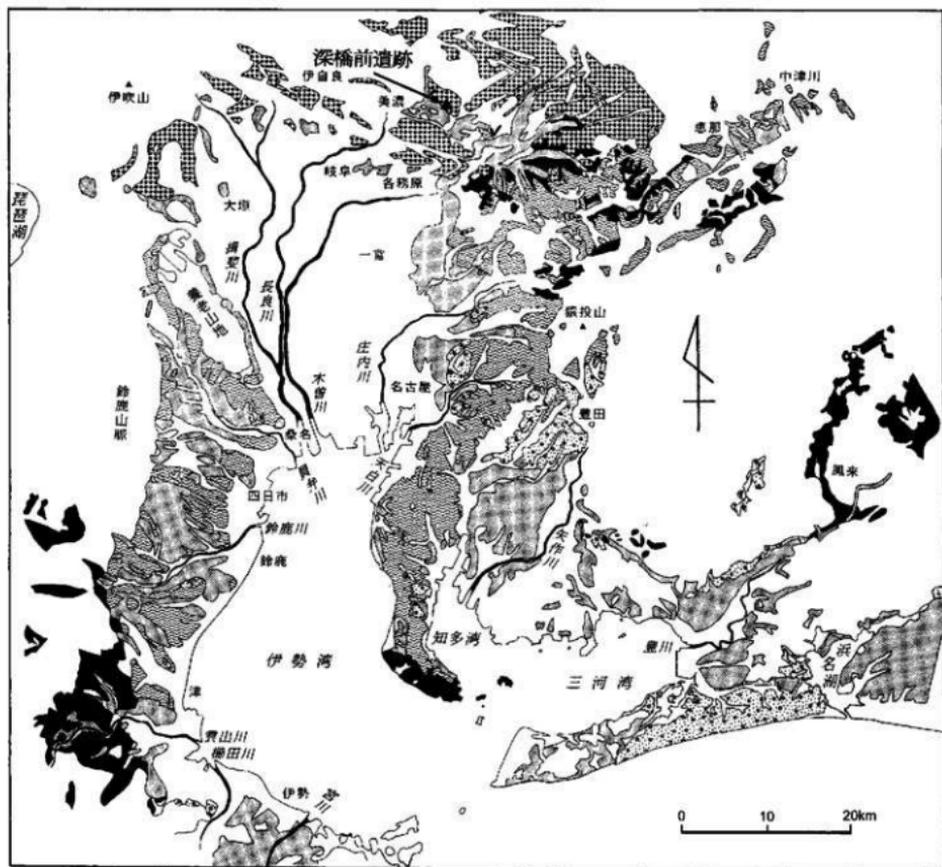
図321 土器胎土中の粒子組成図 (全分類群を基数とした百分率で表示)

[粘土の区分 (試料番号左)]
 差：外洋成粘土 (酸化心質などの出現)
 差：淡水成粘土 (酸化心質などとの出現)
 〇：淡水成粘土 (淡水成柱状化石などの出現)
 無印：その他粘土 (酸化心質を含まない)
 ☆：海成粘土 (海水層柱状化石などの出現)
 一：水成粘土 (不明層柱状化石などの出現)

表17 土器胎土中砂粒の起源岩石の組み合わせ

		第1出現群					
		A	B	C	D	E	F
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	テフラ
a	片岩類	-	Ba	Ca	Da	Ea	Fa
b	深成岩類	Ab	-	Cb	Db	Eb	Fb
c	堆積岩類	Ac	Bc	-	Dc	Ec	Fc
d	火山岩類	Ad	Bd	Cd	-	Ed	Fd
e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De	-	Fe
f	テフラ	Af	Bf	Cf	Df	Ef	-

第2出現群



古生代部比ユニット



新第三紀中新統



新第三紀後期中新統～鮮新統（東海層群）



第四紀中部更新統（高位段丘堆積物）



第四紀後期更新統（熱田層および相当層など）

図322 伊勢—三河湾周辺の地層分布図（藤根、1998）

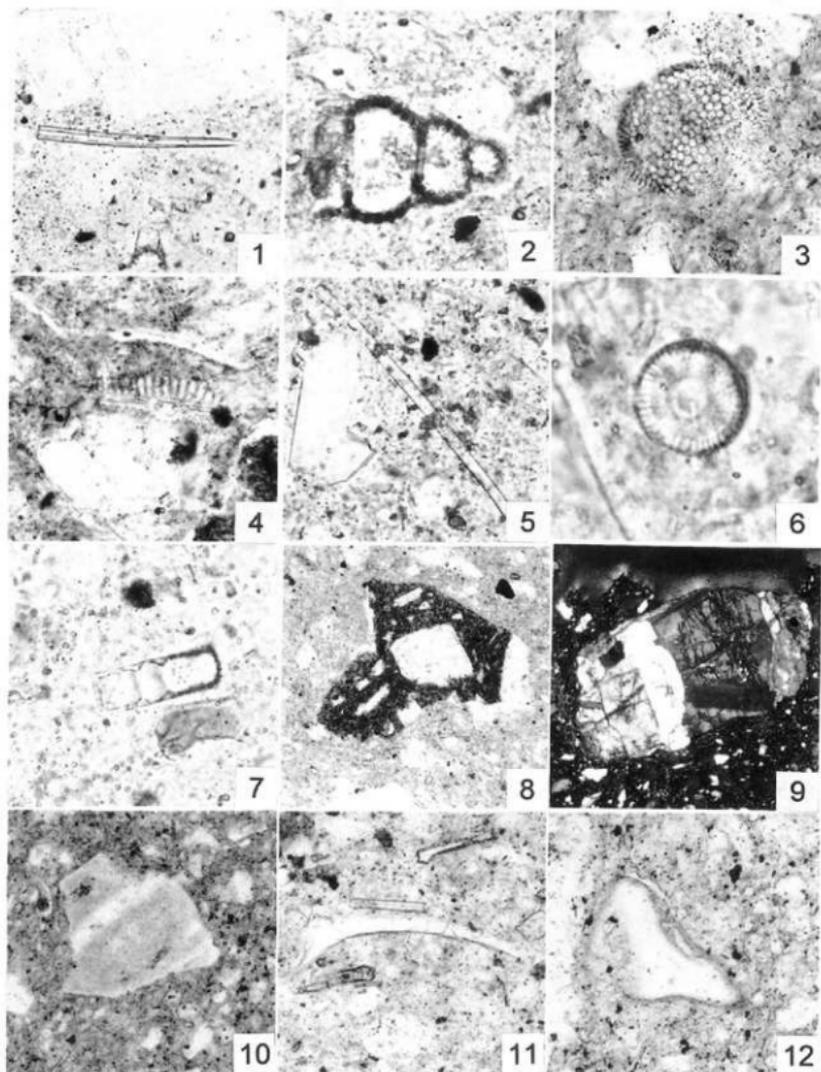


図323 土器胎土中の粒子顕微鏡写真

(スケール: 1~5: 50 μ m, 6: 10 μ m, 7: 20 μ m, 8,9: 500 μ m, 10: 250 μ m, 11,12: 100 μ m)

- | | | |
|---|--|---|
| 1. 骨針化石 No.49 | 2. 放射虫化石 No.45 | 3. 柱藻化石 (<i>Coscinodiscus</i> 属/ <i>Thalassiosira</i> 属) No.39 |
| 4. 柱藻化石 (<i>Pinnularia</i> 属) No.59 | 5. 柱藻化石 (<i>Eumoti barreiferi</i>) No.12 | 6. 柱藻化石 (<i>Melosira</i> 属) No.59 |
| 7. 柱藻化石 (<i>Melosira pensacola</i>) No.44 | 8. 珽品質 No.44 | 9. 複合鉱物類 (含角閃石類) No.13 |
| 10. 泥岩質 No.3 | 11. ガラス質 No.44 | 12. リンダ・ガラス 灰釉陶器 No.20 |

第7節 窯跡出土灰釉陶器の胎土分析

小村美代子、藤根 久、今村美智子（パレオ・ラボ）

1. 目的

深橋前遺跡では10世紀の灰釉陶器の窯跡1基が検出された。今回、以下に述べる目的を検討するため蛍光X線分析及び一部薄片分析を行った。蛍光X線分析は小村、薄片分析は藤根・今村が担当した。

①深橋前古窯跡のある丘陵を形成する基盤層は、中生代の硬質の塊状砂岩から構成されるため、灰釉陶器の材料とはなり得ない。こうした状況は、この地域に分布する美濃須衛窯の設置域における地質学的に共通した事柄である。一方、深橋前遺跡の谷内には、基盤層が泥化した比較的軟質の粘土質堆積物が堆積していることから、これら粘土層が灰釉陶器の材料である可能性が考えられる。

ここでは、窯跡出土灰釉陶器及びこの谷部粘土層からランダムに採取した粘土類について、化学組成を把握するため蛍光X線分析を行った。なお、比較試料として深橋前遺跡の近郊に位置する砂行遺跡及び舟山北遺跡で採取した粘土類も分析した。

また一部焼きの甘い灰釉陶器及びこの谷部粘土層については、薄片を作成し顕微鏡による観察を行い、灰釉陶器の材料について岩石学的あるいは鉱物学的な検討を行った。

②深橋前古窯跡灰原は古い層と新しい層に分かれ、大きく2期に区分される。この古い層と新しい層で出土した生産時期の異なる灰釉陶器では化学組成に違いが見られるのかについて蛍光X線分析による検討を行った。

③深橋前古窯跡から谷をはさんで西に約50m程のところに、奈良時代の火葬墓や平安時代の土坑墓が集中する（D区）。このうちの不明遺構SXD15は中央に焼土があり、白っぽい粘土がしかれ、祭祀系遺構ではないかと考えられている。この中央焼土及び白っぽい粘土中より出土した粘土塊（中央焼土中の粘土塊は草本植物の痕跡有り）を分析し、灰釉陶器の材料と同じ粘土であるのかについて蛍光X線分析による検討を行った。

④深橋前古窯跡の窯壁（草本植物の痕跡有り）についての材料を探るため、蛍光X線分析による検討を行った。

⑤今回蛍光X線分析を行った深橋前古窯跡出土灰釉陶器と、以前に蛍光X線分析した今回と同じ深橋前古窯及び砂行古窯、榎ノ木洞1号窯出土灰釉陶器（（財）岐阜県埋蔵文化財保護センター、2000）との化学組成の比較を行った。なお、現在の蛍光X線分析装置はプログラム変更がされているので、以前分析した深橋前古窯、砂行古窯、榎ノ木洞1号窯出土灰釉陶器については再測定を行い、その分析値と比較を行った。

2. 試料と方法

<蛍光X線分析>

試料の点数及び器種等の詳細については表19に示す。

灰釉陶器についてはそれぞれ約3g岩石カッターで切り出し、付着する釉薬等を取り除くため表面を削り超音波洗浄した。灰釉陶器以外の粘土類については塊を割って内部の汚染を受けていない部分を約3g採取した。これらを恒温乾燥機で乾燥した後、セラミック乳鉢（成分Al₂O₃:93.4%、SiO₂:5%）で粉碎し粉末化した。この内、粘土類については水分を多く含んでおり、蛍光X線分析で強度が低下することが予想されたので、予め電気炉を用いて750℃、6時間焼成した。これら粉末を1.8000g秤量し乾燥させた融剤（無水四ホウ酸リチウム（Li₂B₄O₇）：リチウムメタボレイド（LiBO₂）＝8：2）3.6000gと十分混ぜ合わせた。混合試料は、白金をつまみに移した後、ビードサンプラー（株）東京科学製NT-2000型）により、約1100℃で220秒間溶融・135秒間混合を行い、測定用ガラスビードを作成した。

測定は、波長分散型蛍光X線分析装置（株）リガク製System3080）を使用し、データ処理シス

テムDATAFLEX-152(検量線法)を用いて定量分析を行った。測定元素は、主成分元素(Na₂O、MgO、Al₂O₃、SiO₂、P₂O₅、K₂O、CaO、TiO₂、MnO、Fe₂O₃)と微量元素(Rb、Sr)である。

<薄片分析>

ここでは、粘土および焼きの甘い灰釉陶器の薄片を作成し偏光顕微鏡による観察による方法を行った。なお、谷内から採取した粘土類は、予め電気炉を用いて750℃、6時間焼成した。これら試料は、弥生時代および古墳時代の土器と同様に薄片を作成した。

また、ここで使用した粒子および鉱物群の名称は、発泡ガラスとリング・ガラス以外は同様である(弥生および古墳土器の胎土分析参照)。

[リング・ガラス]

光学的に消光しない鉱物群のうち、周辺部にガラス質を伴うものである。比較的高温で焼成された瓦などで見られる。

[発泡ガラス]

全体的にはガラス質であるが、高温焼成された際に揮発成分が発泡した跡を伴う。ムライトなどの二次鉱物が見られることがある。

3. 分析結果

<蛍光X線分析>

分析結果を表20に示す。深橋前古窯跡出土灰釉陶器(Na1~22)では、No21の碗の分析値でSiO₂、Rb、Srが若干他試料より低く、Fe₂O₃はやや高い結果となっている。それ以外については、SiO₂が平均約72%、Al₂O₃が平均約20%、K₂Oが平均約2.6%、Fe₂O₃が平均約1.8%となっている。

谷部粘土層(Na26~35)については、分析値は全体にばらつきが大きい。特に、No33(遺物番号h)とNo34(遺物番号i)はAl₂O₃が10%以下、SiO₂が83%以上で他試料とは分析値が大きく異なる。

砂行遺跡の粘土類(Na36~39)については、特にNo36とNo37のFe₂O₃が9.41%、14.43%と抜きん出て高い。船山北遺跡の粘土類(Na36~39)については、No36~38については分析値が比較的類似するが、No39の粘土については、Al₂O₃が26.16%と高い。

不明遺構SXD15より出土したNo23、No24の粘土塊を深橋前古窯跡出土灰釉陶器(Na1~18)の分析値と比較すると、粘土塊は灰釉陶器より、MgO、CaO、Srが若干低く、P₂O₅は高い。特にNo23のP₂O₅が0.253%と突出して高い。またNo23はFe₂O₃が3.29%と高い。

窯壁(Na25)については、深橋前古窯跡出土灰釉陶器と比較するとAl₂O₃が13.05%と低い。

<薄片分析>

[各試料の特徴記載]

微化石類や鉱物あるいは岩石片の特徴を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No19: 50~500 μ mが多い(最大粒径900 μ m)。石英・長石類)複合石英類(微細)、複合雲母類、雲母類、ジルコン多い、単斜輝石、角閃石類、発泡ガラス、ガラス質、植物珪酸体化石や多い(ヨシ属含む)

No20: 50~300 μ mが多い(最大粒径1.2mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)>複合石英類、雲母類、ジルコン多い、単斜輝石、角閃石類、発泡ガラス、リング・ガラス、ガラス質、植物珪酸体化石

No21: 50~400 μ mが多い(最大粒径1.3mm)。石英・長石類)複合石英類(微細)>複合石英類、雲母類、ジルコン多い、単斜輝石、角閃石類、発泡ガラス、リング・ガラス、ガラス質、植物珪酸

体化石やや多い、植物遺体

No22: 40~250 μ mが多い(最大粒径850 μ m)。石英・長石類) 複合石英類(微細) > ガラス質、ジルコン多い、単斜輝石、角閃石類、リング・ガラス、ガラス質、植物珪酸体化石(ヨシ属含む)

No26 (遺物番号a): 50~500 μ mが多い(最大粒径700 μ m)。石英・長石類) 雲母類) 複合石英類(微細)、複合雲母類、カリ長石(微斜長石)、砂岩質、複合石英類、ガラス質、単斜輝石、ジルコン多い、斜方輝石、角閃石類、植物珪酸体化石少ない

No27 (遺物番号b): 50~300 μ mが多い(最大粒径700 μ m)。石英・長石類) 雲母類) 複合石英類(微細) > 砂岩質、複合雲母類、ガラス質、ジルコン多い、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、植物珪酸体化石少ない

No28 (遺物番号c): 50~700 μ mが多い(最大粒径800 μ m)。石英・長石類) 複合石英類(微細) > 雲母類) 砂岩質、複合石英類(小型)、ガラス質、ジルコン、角閃石類、斜長石(双晶)、植物珪酸体化石少ない

No29 (遺物番号d): 40~700 μ mが多い(最大粒径2.5mm)。石英・長石類) 砂岩質) 雲母類、複合石英類(微細)、複合石英類(小型)、複合石英類、ガラス質、ジルコン多い、斜方輝石、単斜輝石、角閃石類、植物珪酸体化石少ない

No30 (遺物番号e): 50~360 μ mが多い(最大粒径700 μ m)。細粒雲母類) 石英・長石類) 複合石英類(微細) > 砂岩質、複合石英類、ジルコン多い、単斜輝石、角閃石類、単斜輝石、植物珪酸体化石未検出

No31 (遺物番号f): 50~600 μ mが多い(最大粒径900 μ m)。石英・長石類) 雲母類) 複合石英類(微細) > 砂岩質、複合石英類(小~中型)、ガラス質、角閃石類、ジルコンやや少ない、単斜輝石、複合石英類(含雲母類)、カリ長石(ハート)、複合石英類、植物珪酸体化石やや多い

No32 (遺物番号g): 70~900 μ mが多い(最大粒径2.9mm)。石英・長石類) 砂岩質) 複合石英類(微細) > 複合石英類(小~中型)、ガラス質、ジルコン多い、斜方輝石、雲母類、角閃石類、植物珪酸体化石少ない

No33 (遺物番号h): 60 μ m~1.2mmが多い(最大粒径1.5mm)。石英・長石類) 複合石英類(小~中型) > 複合石英類(微細)、泥岩質、複合雲母類、ガラス質、角閃石類、ジルコン多い、植物珪酸体化石少ない

No34 (遺物番号i): 60 μ m~1.0mmが多い(最大粒径2.4mm)。石英・長石類) 複合石英類(小~中型) > 複合雲母類) 複合石英類(微細)、泥岩質、ガラス質、ジルコン多い、角閃石類、雲母類、植物珪酸体化石少ない

No35 (遺物番号j): 50~300 μ mが多い(最大粒径1.0mm)。石英・長石類) 砂岩質、複合石英類(微細)、ガラス質、ジルコン多い、微細雲母類多い、単斜輝石、植物珪酸体化石少ない

4. 考察

<蛍光X線分析>

①深橋前古窯跡出土灰釉陶器(No1~22)が谷部粘土層(No26~35)の粘土類を使用した可能性について、分析値から検討を行った。図324にSiO₂-Al₂O₃図を示す。図324より各試料が一定の傾きで直線的に分布する。一般にSiO₂が高いほど砂粒分が多く、Al₂O₃が多いほど粘土分が高くなる傾向があり、混合度を示す化学ライン(小村・藤根、2000)であることが分かる。

白水(2000)によると、「粘土化作用のうち、風化作用(weathering)は地表またはその直下で、太陽、大気、地表水、生物などの作用によって行われ、岩石を微細片に破壊する物理的風化作用(あるいは機械的風化作用)と造岩鉱物を質的に変える化学的風化作用とが相伴って進行する。(中略)。化学的風化作用は主に水に起因するもので、降水に由来する地表水は空気中のCO₂を溶かし込んでいるので、炭酸として溶解作用を営み、また、水の一部はH⁺とOH⁻に解離して加水分解を行う。(中略)。化学的風化作用によって風化残留物中に増加する成分はH₂Oであり、Fe²⁺は酸化されてFe³⁺

になる。一方、溶脱して減少しやすい元素はNa、Mg、Ca、ついでK、Siであり、AlとFe²⁺が最も減少しにくい。」とある。このことから、Siが減少するとFe、Alの割合が相対的に増加することがうかがえる。図324より、深橋前古窯跡灰釉陶器も谷部粘土層もSiO₂が少なくなるほど、Al₂O₃が増加する同様の傾きで分布していることが分かる。

また、谷部粘土層 (No26~35) の比較試料として、深橋前遺跡近郊の砂行遺跡で採取した粘土類 (No36~39) に注目する。図324より砂行遺跡の住居域から採取した土壌 (No36、No37) はFe₂O₃が9.41%、14.43%と抜き出でて高いことから、相対的にSiO₂とAl₂O₃の分析値が低くなり、深橋前古窯跡谷部粘土層 (No26~35) とは傾きの割合、特に切片が異なる。これについては、谷部粘土層 (No26~35) とは起源が異なること、住居域の土壌であるため、何らかの人為的な影響などが考えられる。砂行遺跡の低地部及び基盤砂層から採取した粘土類 (No38、No39) と船山北遺跡で採取した粘土類 (No40~43) は深橋前古窯跡谷部粘土層の分布と重なる。このことから、同一基盤層にある粘土類はSiO₂-Al₂O₃間で直線的に分布する傾向が見られる。

また測定元素全元素を指標とした、主成分分析による第1-第2主成分散布図を図325に作成した。各プロットの点が近い試料ほど、化学組成が類似していることを示す。図325より、深橋前古窯跡谷部粘土層 (No26~35) のNo26、No28、No30、No35が、比較的深橋前古窯跡出土灰釉陶器 (No1~22) 分布に近いと思われるが、それ以外の粘土類については離れて分布する。これらは灰釉陶器の材料に比べ砂粒分の多いSiに富むもので、このため相対的に化学組成に違いが現れたためと思われる。また、砂行遺跡の土壌 (No36、No37) はFe₂O₃が非常に高いことから、他試料とは大きく離れて分布する。砂行遺跡の粘土類 (No38、No39) と船山北遺跡の粘土類 (No40~43) は谷部粘土層 (No26~35) の試料に近い位置に分布する。

このことから、深橋前古窯跡出土灰釉陶器 (No1~22) と谷部粘土層 (No26~35) の大部分の粘土類は、化学組成が全て類似するものはないことが分かった。これについては谷部粘土層 (No26~35) はランダムに採取してきたものなので、灰釉陶器の材料と同じ粘土を採取できていないことは予想されていた。更に各元素の試料の分析値を詳しく見るため、図326~335にSiO₂-各元素図を作成した。灰釉陶器を含めた焼物は粘土を材料にしているもの、何らかの人為的な作用 (例えば混和材、水箒など) を受けた人工物である。このため、焼物を製作した粘土が分かっていたとしても、化学組成が異なる可能性があり、比較対象が「自然物」と「人工物」であるということをおく必要がある。

図325~335より、深橋前古窯跡出土灰釉陶器 (No1~22) と谷部粘土層 (No26~35) の分布は重なる又は隣接している。深橋前古窯跡出土灰釉陶器 (No1~22) 全元素中では、Na₂O、CaO、Sr等の元素が他元素より分散した分析値を示す。また、谷部粘土層 (No26~35) は大部分の元素で直線的な分布をする中、Na₂O、CaO、Sr等の元素で分散した分析値を示す共通が見られる。

よって現段階では、深橋前古窯跡出土灰釉陶器と谷部粘土層が全く異なるものではなく、類似性が見られることから、深橋前古窯跡出土灰釉陶器が谷部粘土層を材料にしたと考えても問題はないものと考えられる。

②深橋前古窯跡灰原出土灰釉陶器は古い層と新しい層の大きく2期に分類される。この古い層 (No1、2、14) と新しい層 (No3~8、15~18) より出土した灰釉陶器の分析値は、この2つの時期による土器胎土の分析値の大きな差は見られなかった。このことから、2期に渡って粘土採取をしていた場所は大きく変わっていないことが窺える。また、碗や長頸瓶、皿など異なる器種でも分析値は類似することから、器種ごとに粘土を使い分けていた可能性は低いものと思われる。

③不明遺構SXD15の粘土塊2点 (No23、24) については特にP₂O₅とFe₂O₃の含有量が異なる。No23は草本植物の痕跡が見られたことから、そのことが分析値に影響している可能性が高い。このため、図325の主成分散布図でも粘土塊No24は谷部粘土層 (No26~35) の分布と近いがNo23は孤立して分布したものと考えられる。よってNo24は谷部の粘土を使用した可能性がある。

④窯壁 (No25) については、内部に植物自体は焼失した跡のような草本類の茎の筋が多量にあった

ことから、窯を作る際に草本植物（例えばイネ科植物）を混ぜたものと思われる。図324及び図325では谷部粘土層（No26～35）の分布と重なることから、谷部の粘土を使用したことが考えられる。しかし、殆ど焼失したものの植物が入っていたことから粘土そのものの材料とは異なること、植物にはSiO₂が多く含まれ、窯壁中の植物が分析値に影響したことも考慮する必要がある。

⑤今回蛍光X線分析を行った深橋前古窯跡出土灰軸陶器と、以前蛍光X線分析した深橋前古窯、砂行古窯、樽ノ木洞1号窯出土灰軸陶器を比較すると、図325より、樽ノ木洞1号窯の灰軸陶器がやや離れて分布するものの、深橋前古窯と砂行古窯はほとんど同じ位置に分布し、全体に化学組成が類似することが分かる。

<薄片分析>

谷部粘土類は、イネ科植物の珪酸体化石は僅かに含まれるものの、珪藻化石などの微化石類は全く含まれない。これらは、遺跡谷内から採取した堆積物であるが、珪藻化石が含まれないことから、比較的短時間に堆積した水成堆積物と考えられる。また、砂粒組成は、主に砂岩質や複合石英類（微細）あるいは泥岩質の砂粒物から構成され、基盤岩類の砂岩類が風化再堆積した堆積物である。この地域の基盤岩類は、中生代那比ユニットの塊状砂岩などから構成され、美濃須南窯が成立する地域の基盤岩類である（藤根、1998）。なお、花崗岩類に特徴的に多く含まれるジルコンが比較的多いことから、深成岩類起源の砂粒も含まれる。

一方、焼きの甘い灰軸陶器の胎土では、概ね谷部粘土類と同様の特徴を示す。ただし、焼成温度がやや高く、長石類や輝石類あるいは角閃石類が溶融している。

このように薄片による粘土および砂粒物の特徴から、谷部粘土類と灰軸陶器の材料はほぼ同様のものと考えられる。

5. まとめ

一般に窯は良質の粘土を採取できる土地近くに作られるものと考えられている。今回の蛍光X線分析結果では化学組成に突出した大きな差が見られず、薄片分析結果では珪藻化石が全く含まれていないことが分かった。この2つの分析結果から、深橋前古窯跡出土灰軸陶器は深橋前遺跡谷部粘土層を材料として使用したものとして問題はないものと思われる。また、それは2期に渡って続いたこと、器種ごとによる材料の使い分けは見られず、1つの窯で、同一材料を用いた灰軸陶器の製作をしていたことが窺える。

焼物の化学分析による材料科学的な検討は行われていないため、焼物の化学組成についての解釈は現状で不明である。今後、焼物（人工物）の化学的な解釈の検討が望まれる。

引用文献

- (財)岐阜県埋蔵文化財センター（2000）「樽ノ木洞遺跡」、213-216。
 小村美代子・藤根 久（2001）須恵質土器胎土中の砂粒分の化学的評価、日本文化財科学会第18回大会研究発表要旨集、114-115。
 白水晴雄（2000）粘土鉱物学—粘土科学の基礎—、朝倉書店、103。
 藤根 久（1998）東海地域（伊勢—三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料、第6回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108-117。

表19 試料一覧 ※(色相 明度/彩度)(色)は断面の色を記載してある。(分析項目)は○:蛍光X線分析、■:薄片分析である。

深橋前古窯跡出土						
No	遺物	出土地点	遺物番号	その他	注記	色相 明度/彩度 色 分析項目
1	灰輪陶器 碗	2層	207	古い層	26X-26Y2	5Y8/1 灰白 ○
2	灰輪陶器 碗	8層	317	古い層	26X-26Y8	5Y8/1 灰白 ○
3	灰輪陶器 碗	4.7層	219	新しい層	26W.25W	N8/ 灰白 ○
4	灰輪陶器 碗	SK1,SK2	81	新しい	26X.26Y1	5Y8/1 灰白 ○
5	灰輪陶器 碗	SK3	353	新しい	SYSKAMI-3	N8/ 灰白 ○
6	灰輪陶器 碗	SXD15	331	D区新しい		5Y8/1 灰白 ○
7	灰輪陶器 皿	7層	46	新しい	25X	N8/ 灰白 ○
8	灰輪陶器 皿	SXD15	26	D区新しい	SXD15	5Y8/1 灰白 ○
9	灰輪陶器 大皿	D区	317		SXD15ML10A III	5Y8/1 灰白 ○
10	灰輪陶器 鉢(胴7.5)	D区			10Z, B.4.20	5Y8/1 灰白 ○
11	灰輪陶器 鉢	8層	5	生焼け	26X-26Y ハイ8	5Y8/2 灰白 ○
12	灰輪陶器 皿状機台		74		24YS001	5Y8/1 灰白 ○
13	灰輪陶器 壺	D区			10Z	5Y8/1 灰白 ○
14	灰輪陶器 長楕圓	2.8層	47	古い層	26X	5Y8/1 灰白 ○
15	灰輪陶器 長楕圓	4層	69	新しい層	25X-26X4	5Y8/1 灰白 ○
16	灰輪陶器 長楕圓	7層	96	新しい層	25W	5Y8/1 灰白 ○
17	灰輪陶器 長楕圓	4.SK2	29	新しい	26W	5Y8/1 灰白 ○
18	灰輪陶器 長楕圓	SK1,SK2	21	新しい	26X	5Y8/1 灰白 ○
19	灰輪陶器 碗	4層	48	生焼け	26X	5Y7/1 灰白 ○・■
20	灰輪陶器 碗	4層	205	生焼け	25W	5Y7/1 灰白 ○・■
21	灰輪陶器 碗	4層	285	生焼け	26X-26Y4	7.5YR6/4 濃い黄 〇・■
22	灰輪陶器 皿	SK01	103	生焼け	26X	2.5Y7/2 灰黄 〇・■
23	粘土塊	SXD15中央部土中			990318	2.5Y8/3 淡黄 〇・■
24	粘土塊	SXD15白粘土中			990323	2.5Y8/2 灰白 〇・■
25	窯底					2.5Y8/1 灰白 〇・■
谷部粘土層(*No.36~43は砂行遺跡、船山北遺跡で採取した粘土類で、深橋前粘土層との比較試料である。)						
No	遺跡	地積物	遺物番号	取込 部位	色相 明度/彩度	色 分析項目
26	深橋前	シルト質粘土	a	B区	Vb層	2.5Y7/2 灰黄 〇・■
27	深橋前	シルト	b	A区	Va層	2.5Y5/3 黄緑 〇・■
28	深橋前	シルト質粘土	c	A区	Vc層	2.5Y5/3 黄緑 〇・■
29	深橋前	粘土	d	D区	Va層	2.5Y7/2 灰黄 〇・■
30	深橋前	粘土	e	D区	Vb層	5Y8/1 灰白 〇・■
31	深橋前	シルト質粘土	f	F区	10YR4/2	灰黄褐 〇・■
32	深橋前	粘土	g	E区	2.5Y4/2	暗灰黄 〇・■
33	深橋前	シルト質粘土	h	F区	2.5Y4/2	暗灰黄 〇・■
34	深橋前	シルト	i	E区	2.5Y6/2	灰黄 〇・■
35	深橋前	粘土	j	F区	10YR6/3	濃い黄緑 〇・■
36	砂行	土壌	k	大溝西側(住居域)	10YR2/6	切黄泥 〇
37	砂行	土壌	l	大溝西側(住居域)	5YR5/8	褐色泥 〇
38	砂行	粘土	m	基盤砂層	7.5Y7/1	灰白 〇
39	砂行	砂質シルト	n	基盤砂層	2.5Y8/3	淡黄 〇
40	船山北	粘土	o	KY-4灰黄土層直上	2.5Y8/2	灰白 〇
41	船山北	粘土	p	KY-4灰黄土層直上	2.5Y8/3	淡黄 〇
42	船山北	シルト	q	基盤砂層	5Y8/2	灰白 〇
43	船山北	粘土	r	基盤層粘土層	5Y8/1	灰白 〇
灰輪陶器比較試料						
No	遺跡	遺物	報告書番号	報告書	分析項目	
44	深橋前古窯	灰輪陶器	36	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
45	深橋前古窯	灰輪陶器	37	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
46	深橋前古窯	灰輪陶器	38	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
47	深橋前古窯	灰輪陶器	39	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
48	深橋前古窯	灰輪陶器	40	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
49	深橋前古窯	灰輪陶器	41	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
50	砂行古窯	灰輪陶器	24	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
51	砂行古窯	灰輪陶器	25	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
52	砂行古窯	灰輪陶器	26	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
53	砂行古窯	灰輪陶器	27	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
54	砂行古窯	灰輪陶器	28	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
55	砂行古窯	灰輪陶器	29	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
56	桜ノ木洞1号窯	灰輪陶器	30	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
57	桜ノ木洞1号窯	灰輪陶器	31	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
58	桜ノ木洞1号窯	灰輪陶器	32	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
59	桜ノ木洞1号窯	灰輪陶器	33	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
60	桜ノ木洞1号窯	灰輪陶器	34	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	
61	桜ノ木洞1号窯	灰輪陶器	35	岐阜県埋蔵文化財センター(2000)、「桜ノ木洞遺跡」、213-216	〇	

表21 深溝前古窯跡出土灰軸陶器・谷部粘土類の粘土および砂粒の特徴

No	試料	地区	層位	粘土上の特徴				砂粒の特徴				窯跡の特徴		備考			
				分類	層類	数量 %	炭素質 土質化石	高岭土 土質化石	高岭土 土質化石	高岭土 土質化石	高岭土 土質化石	高岭土 土質化石	高岭土 土質化石		高岭土 土質化石		
																分級	組成
19	灰軸陶器 破		4層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+	
20	灰軸陶器 破		4層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+
21	灰軸陶器 破		4層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+
22	灰軸陶器 皿		SK1	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+
26	シルト質粘土	B区	Va層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	++
27	シルト	C区	Va層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	++
28	シルト質粘土	C区	Va層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	++
29	粘土	D区	Va層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+
30	粘土	D区	Vb層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+
31	シルト質粘土	E区		その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+
32	粘土	E区		その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+
33	シルト質粘土	E区	Va層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	++
34	シルト	E区	Va層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+
35	粘土	E区	Vc層	その他	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	+	+++	+

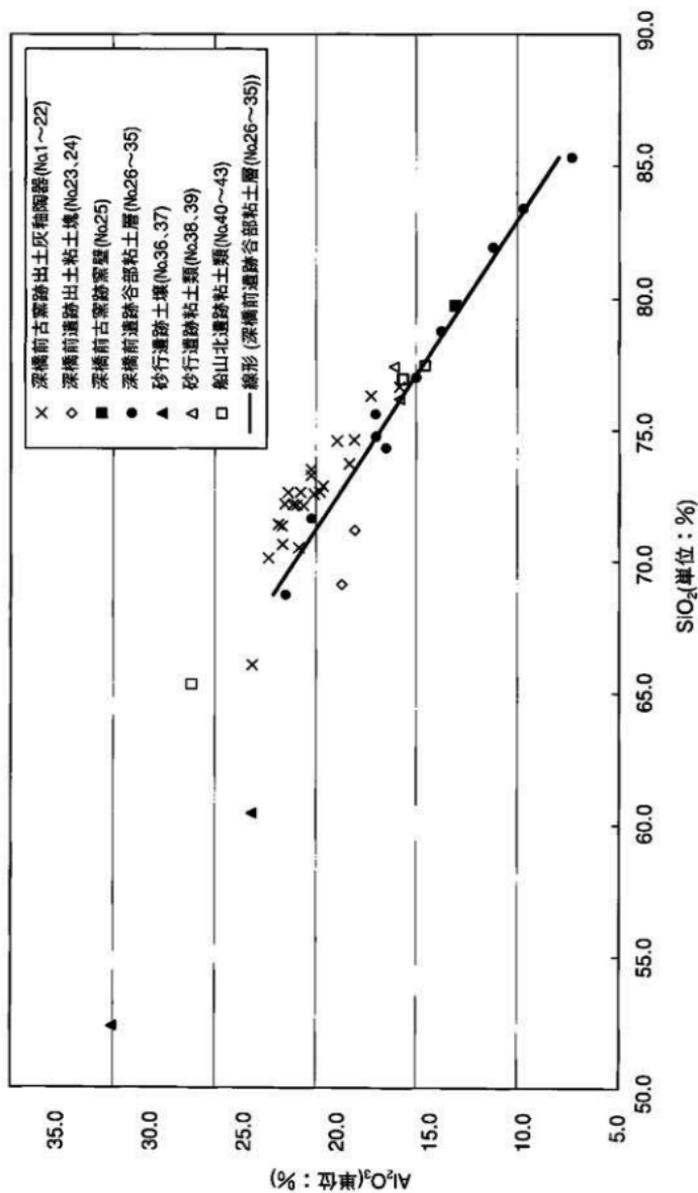
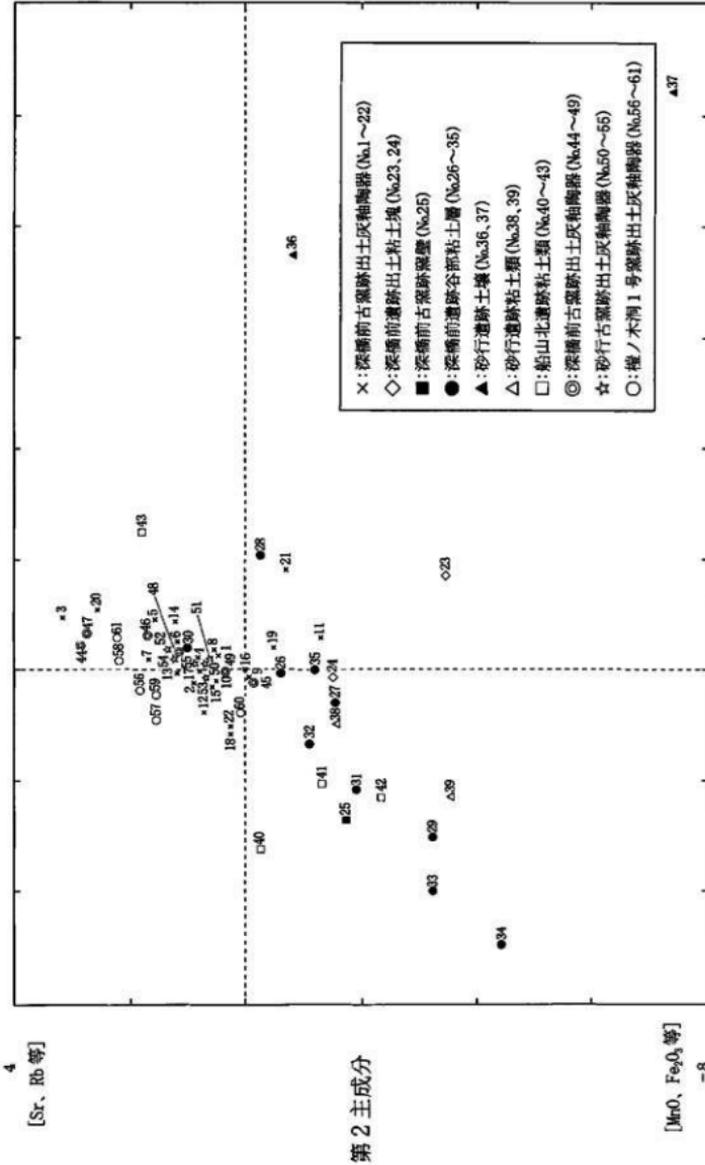


圖324 SiO₂-Al₂O₃分布圖



-6 [SiO₂, Na₂O 等]

第1主成分

[Al₂O₃, Fe₂O₃ 等] - 1.2

図325 灰軸陶器・粘土類等の主成分分析による第1-第2主成分散布図 (相關行列)

[化学組成] Na₂O, 酸化ナトリウム, Al₂O₃, 酸化アルミニウム, SiO₂, 酸化ケイ素, MnO, 酸化マンガン, Fe₂O₃, 酸化鉄, Rb, カルシウム, Sr, ストロロンチウム

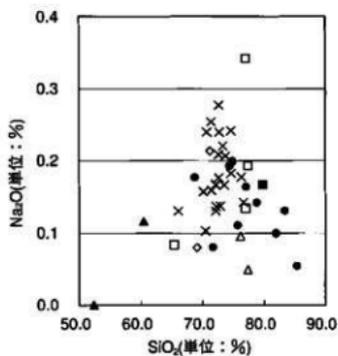


图326 SiO_2 - Na_2O 分布图

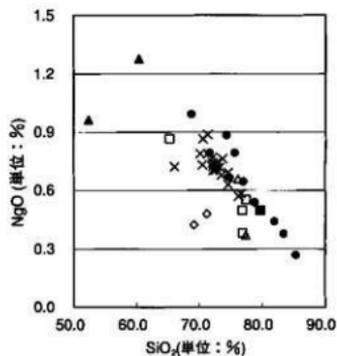


图327 SiO_2 - MgO 分布图

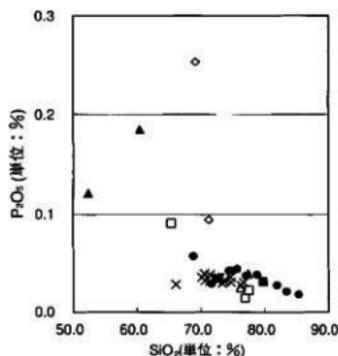


图328 SiO_2 - P_2O_5 分布图

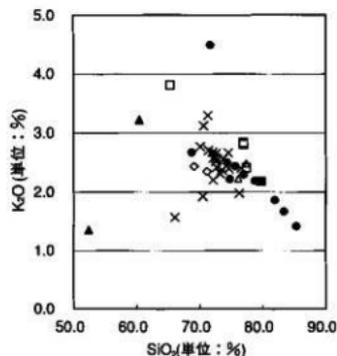


图329 SiO_2 - K_2O 分布图

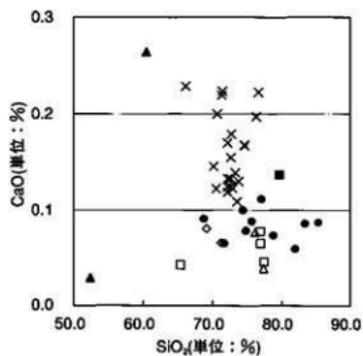


图330 SiO_2 - CaO 分布图



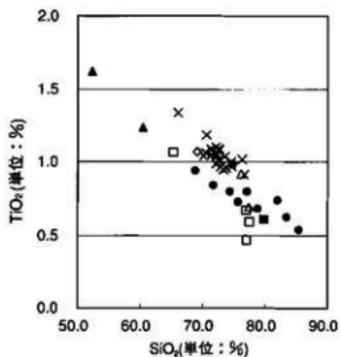


図331 SiO₂-TiO₂分布図

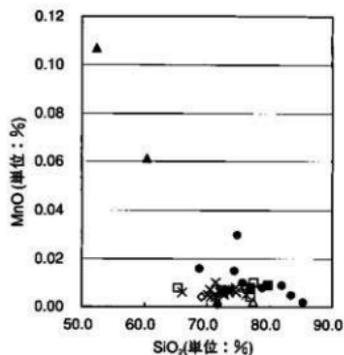


図332 SiO₂-MnO分布図

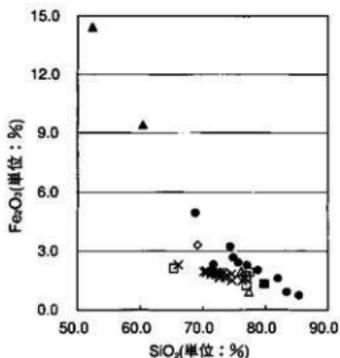


図333 SiO₂-Fe₂O₃分布図

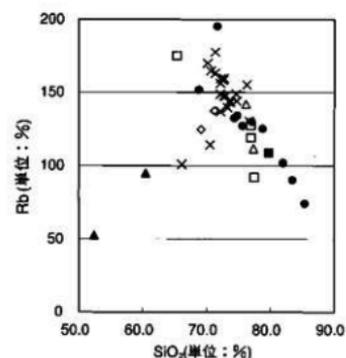


図334 SiO₂-Rb分布図

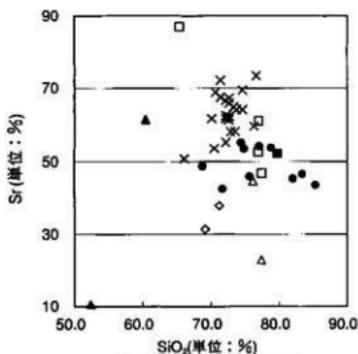
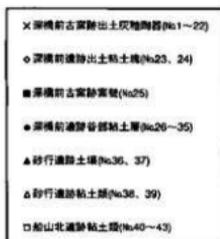


図335 SiO₂-Sr分布図



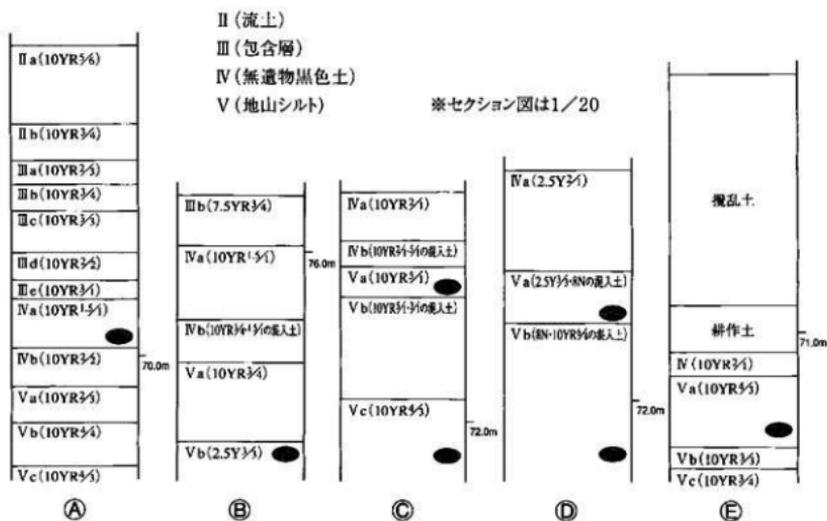
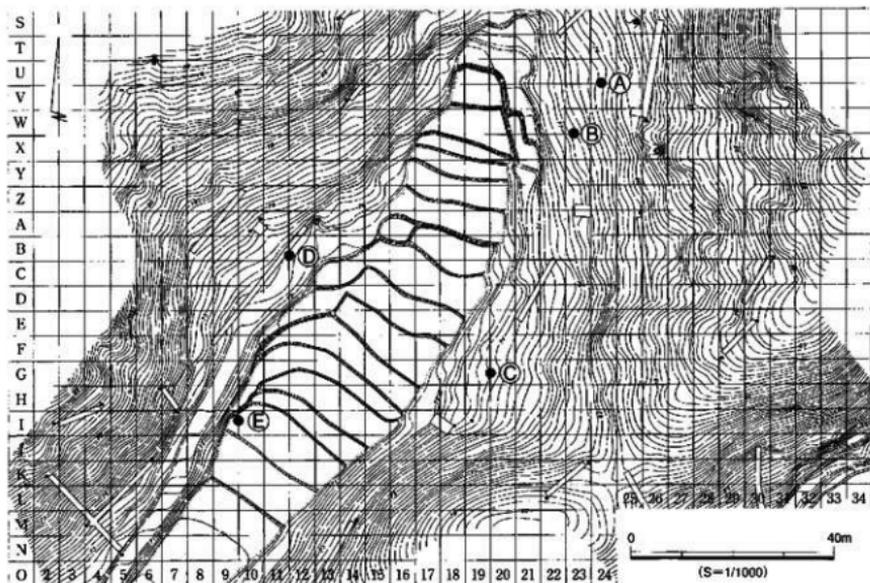


図336 谷部粘土類出土位置・土層図

第8節 竪穴住居跡から出土した銅製品の化学組成

藤根 久 (パレオ・ラボ)

1. 試料と方法

試料は、SBA05から出土した銅鏝 (No23) とSBF08から出土した筒状銅製品である。

SBA05から出土した銅鏝は、非破壊で測定するため、測定部分について筆を用いてアルコール洗浄した。

SBF08から出土した筒状銅製品は、その一部の小片を両面テープを用いて専用ホルダーに固定した。

蛍光X線分析は、セイコー電子工業 (株) 製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA-2001Lを用いた。X線発生部の管球はロジウム (Rh) ターゲット、ベリリウム (Be) 窓、X線検出器はSi (Li) 半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電流6~40 μ m、電圧50KV、試料室内真空である。

2. 結果および考察

[SBA05から出土した銅鏝]

測定結果では、金属元素として鉄 (Fe)、銅 (Cu)、鉛 (Pb)、水銀 (Hg)、スズ (Sn) のピークが顕著に検出された。なお、その他の元素では、アルミニウム (Al)、ケイ素 (Si) が検出されている (第337図)。

こうした結果から、この銅鏝の主な成分は、銅、鉛、スズから構成される青銅である。なお、検出された水銀は、表面に付着した赤色顔料と考える。

[SBF08から出土した筒状銅製品]

測定結果では、金属元素として鉄 (Fe)、銅 (Cu)、鉛 (Pb)、水銀 (Hg)、スズ (Sn) のピークが顕著に検出された。なお、その他の元素では、アルミニウム (Al) などが検出されている (第337図)。

こうした結果から、この銅鏝の主な成分は、銅、鉛、スズから構成される青銅である。

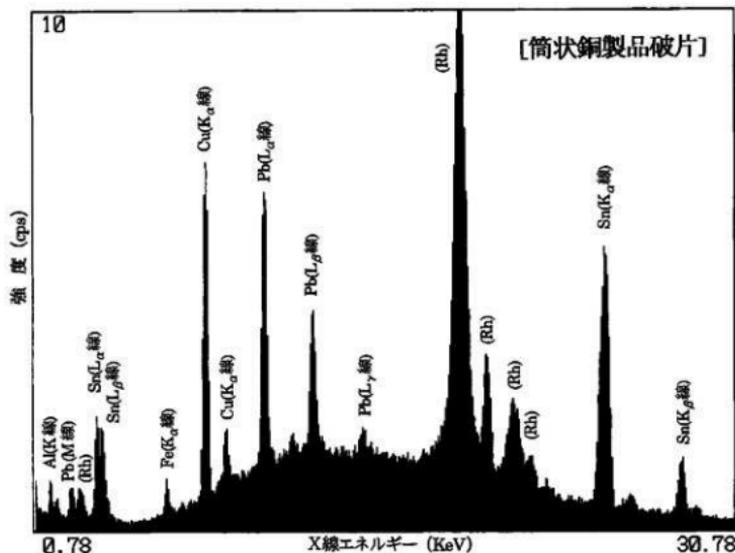
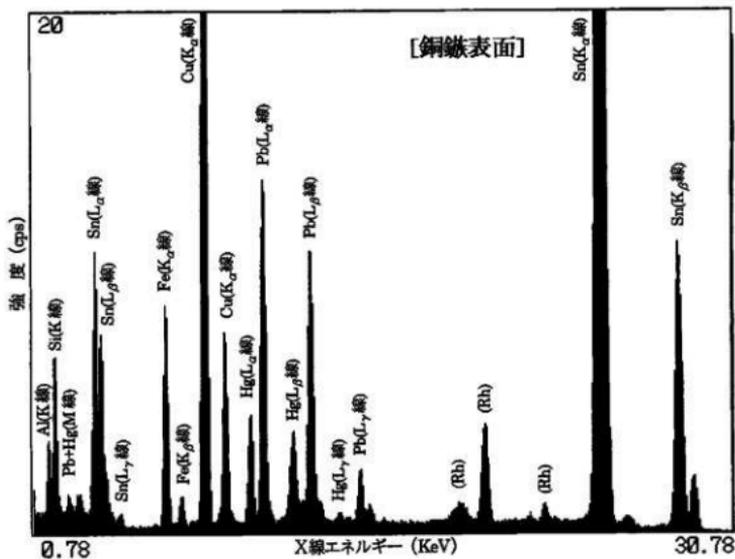


図337 鋼鉄・筒状銅製品の蛍光X線スペクトル図

[元素記号] Al:アルミニウム、Si:ケイ素、Fe:鉄、Cu:銅、Pb:鉛、Hg:水銀、Sn:スズ、Rh:ロジウム (管球から)

第9節 火葬墓に埋葬された火葬人骨の特徴

武内康雄（岐阜大学医学部）

3号火葬墓

出土火葬人骨の特徴

①色調及び遺存状態

人骨は全体的に灰白色を呈す。遺存状態は固く良好である。また、骨には多数の亀裂を認め、長管骨では亀裂は主に長軸に対して垂直に生じている。歯はエナメル質が失われている。総量は241.2gを測り、一体分の火葬人骨に満たない。骨は殆どが細片化され、同定が困難であるが、形態学的に頭蓋骨片、下顎骨前部の骨片、第2頰椎（軸椎）歯突起を含む頰椎骨片、2個の尺骨近位骨頭（肘関節側の骨頭）片が同定される。また、切歯1本も認めた。骨は細片化されているため、重複する骨の有無を検査することは困難であるが、その量等から推定するに1一体分の埋葬として矛盾はしない。

②年齢の推定

骨は細片化されており、年齢を推定する材料となる形態学的特徴を見いだすことができなかった。しかし、埋葬されていた切歯はエナメル質を失っているが、歯髄先端に達する咬耗を認め、主体者が、現代人と著しく異なる食生活を送っていたと仮定すると、60歳前後と推定される。

③火葬人骨の性別

骨からの性別は、頭蓋骨や骨盤の形態学的特徴を基に判断するのが最も正確であり、四肢の長管骨や胸骨等からも推定することができるが、いずれの場合においてもそれらの骨が特徴のある部位を残しているかまたはほぼ特徴ある部位が復元できる場合においてのみ可能なのである。本例では、骨は細片化され、性の特徴を示す部位は認められず、また、骨は一部のみが残存し、復元も不可能なので、性別の判断は不可能である。

なお、本例は比較的高温で火葬され、有機物を認めない状態であるので、DNAからの性別の判定も不可能であると考えられる。

④その他

本例では殆どの骨が細片化しているが、骨は比較的硬く保たれている。また、細片化した骨の中には比較的緻密質の厚い長管骨の骨片も含まれており、火葬やその後の埋葬中の変化のみによって骨が細片化したとは考え難く、火葬後骨を砕き埋葬した可能性が考えられる。

以上のように火葬墓の主体者は性別は不詳であるが、60歳前後の成人である可能性が高い。火葬は比較的高温で行われ、その後、骨を砕いた可能性が考えられる。また、蔵骨器に第2頰椎歯突起（京場で喉仏として説明を受けている部位）を納めるなどの現在の習慣に通ずる習慣があった可能性が推定される。

1号火葬墓

①色調及び遺存状態

人骨は全体的に灰白色を呈す。遺存状態は固く良好である。また、骨には多数の亀裂を認め、長管骨では亀裂は主に長軸に対して垂直に生じている。歯はエナメル質が失われている。総量は414gを測り、一人体分の火葬人骨に満たない。骨は殆どが細片化され、同定が困難であるが、形態学的に後頭骨、右前頭骨等の頭蓋骨片、第2頸椎(軸椎)齒突起を含む頸椎骨片、大腿骨近位骨頭(股関節側の骨頭)片が同定される。また、第1小臼歯2本も認めた。骨は細片化されているため、重複する骨の有無を検査することは困難であるが、その量等から推定するに1人体分の埋葬として矛盾はしない。

②年齢の推定

骨及び歯牙には以下の特徴を認めた。

- ・頭蓋骨の縫合は比較的良好に残遺する。

- ・大腿骨近位骨頭には骨端線の明瞭な残遺を認めない。海綿質の骨梁構築は疎であるが、網目状構造を呈し、空胞化は認められない。

- ・歯牙はエナメル質を失っているが、歯牙切端には残存する象牙質に達する咬耗を認める。

骨の所見や歯牙の咬耗度等からの年齢推定はよく行われているが、骨の年齢に伴う変化には個体差があり、また、歯牙の咬耗度も食生活等により差があるため、それぞれの所見単独では正確な年齢推定の材料とはならず、各所見を総合的に判断して年齢推定を行う必要がある。本例には年齢推定の材料となる上記の所見を認めるが、頭蓋骨の縫合の癒合時期には大きな個体差が認められるため、年齢推定の根拠としてはさほど当てにはなるとはいえず、また、頭蓋骨の一部が骨片化して残存するのみで、頭蓋骨縫合の癒合の状態を全体的に観察することができないため、頭蓋骨縫合の癒合の状態からの年齢推定は困難といわざるえない。一方、大腿骨近位骨頭の骨端線の消失時期にも個体差が認められるが、頭蓋骨縫合の癒合状態よりは信がおける所見であり、上記所見からは50歳～60歳前後と推定される。また、歯牙の咬耗度も食生活週間等の影響を受けるため、年齢推定は困難であるが、現代人と著しく異なる食生活を送っていたと仮定すると、50歳前後と推定される。

③火葬人骨の性別

骨からの性別は、頭蓋骨や骨盤の形態学的特徴を基に判断するのが最も正確であり、四肢の長管骨や胸骨等からも推定することができるが、いずれの場合においてもそれらの骨が特徴のある部位を残しているかまたはほぼ特徴ある部位が復元できる場合においてのみ可能なのである。本例では、骨は細片化され、性の特徴を示す部位は認められず、また、骨は一部のみが残存し、復元も不可能なので、性別の判断は不可能である。

なお、本例は比較的高温で火葬され、有機物を認めない状態であるので、DNAからの性別の判定も不可能であると考えられる。

④その他

本例では殆どの骨が細片化しているが、骨は比較硬く保たれている。また、細片化した骨の中には比較密緻質の厚い長管骨の骨片も含まれており、火葬やその後の埋葬中の変化のみによって骨が細片化したとは考え難く、火葬後骨を砕き埋葬した可能性が考えられる。

以上のように火葬墓の主体者は性別は不詳であるが、50歳～60歳前後の成人である可能性が高い。火葬は比較的高温で行われ、その後、骨を砕いた可能性が考えられる。また、蔵骨器に第2頸椎齒突起(齋場で喉仏として説明を受けている部位)を納めるなどの現在の習慣に通ずる習慣があった可能性が推定される。

第7章 考察

第1節 石器の分布について—I期の遺跡の様相を中心にして—

はじめに

深橋前遺跡では、I・II期の遺構は検出されていない。そのため、包含層から出土した旧石器・縄文時代の石器・土器、遺構・包含層から出土した弥生時代以降の石器のうち、旧石器16点、縄文時代の石器76点・土器17点、弥生時代の石器32点・弥生時代前・中期の土器6点、縄文時代以降の石器30点・弥生時代以降の石器7点を実測し図示した。なおこれらのなかには、発掘現場で確認したもののほか、内寸45.4cm×310cm×115cmのコンテナ30箱に及ぶ石器の可能性のある礫の中から、整理作業中に確認したものもある。ここでは、I・II期の石器・土器の出土分布と共に、III期の可能性のある石器の分布を概観し、若干の考察を加えたい。

第1項 各時期の石器（図338参照）

①旧石器（図230・231参照）

旧石器時代の石器の総点数は少ないが、周辺の榎ノ木洞遺跡・砂行遺跡・南青柳遺跡に比べ出土量も多く、バラエティーに富んでいる。

②縄文時代の石器（図232～234参照）

石器の中ではこの時期に所属するものが最も多く、早期、早期末～中期初頭、中期に比定できる可能性のあるものを含んでいる。

③縄文時代以降の石器（図237～239参照）

石錘・特殊磨石・磨石・叩石の類で、縄文時代の石器と断定はできないが、少なくともこの時代以降の石器と考えられるものをここにまとめた。

④弥生時代の石器（図227～229参照）

弥生時代に所属すると考えられるもので、このうち、6001～6009は、遺構から出土したものである。

表22 実測石器の状況

時期	実測遺物数	内 容
旧石器	16	台形縁石器群(4)・台形石器断片(1)・ナイフ型石器(2)・横長剥片石核(1)・鋭角縁石器(1)・石核(1)・ノッチ(1)・剥片(1)・二次加工石刃(1)・器種不明(3)
縄文時代	76	石鏃(39)・楕形鏃(2)・石匙(11)・削器(7)・石錐(6)・打製石斧(5)・尖頭器(1)・掻器(1)・両極石器(1)・使用痕剥片(1)・器種不明(2)
縄文時代以降	30	石錘(11)・特殊磨石(2)・磨石(8)・叩石(9)
弥生時代	32	石鏃(25)・磨製石鏃(1)・打製石器(1)・削器(1)・石錐(1)・磨製石剣(1)・磨製石矛(1)・砥石(1)
弥生時代以降	7	砥石(4)・石球(2)・磨製石斧(1)

⑤弥生時代以降の石器 (図229参照)

砥石・石球・磨製石斧の類で、弥生時代の石器とは断定できないが、少なくともこの時代以降の石器と考えられるものをここにまとめた。

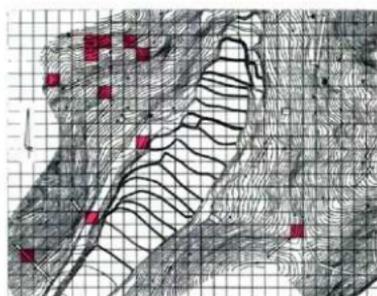
第2項 土器の出土分布

①縄文土器の出土分布 (図338参照)

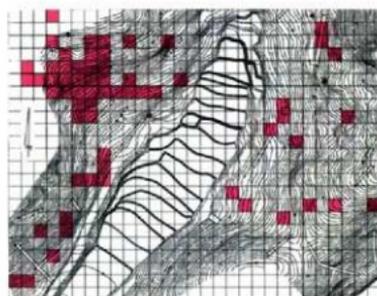
縄文土器は、すべて西丘陵から出土している。総点数は少ないが、D区の尾根に近い急傾斜地に比較的集中して出土している。

②Ⅱ・Ⅲ期の土器 (弥生時代から古墳時代前期)の土器 (第1章第3節 図7参照)

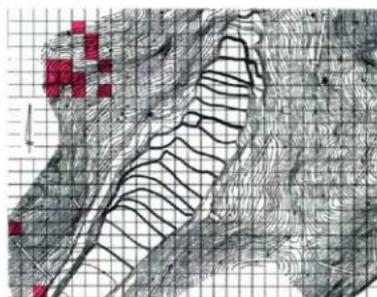
A・B・D・E・F区のはほぼ全域から出土している。



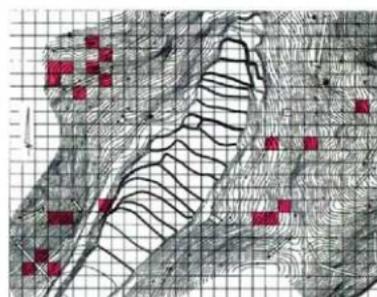
■ 旧石器時代の石器出土グリッド



■ 縄文時代の石器出土グリッド



■ 縄文時代の土器出土グリッド



■ 弥生時代の石器出土グリッド

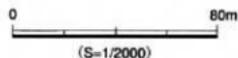


図338 I期の遺物の出土状況

第3項 各時期の遺跡の様相

①旧石器時代

ほとんどの旧石器は、西丘陵から出土している。そのうちでも、頂上部に近い急傾斜地からの出土が多く、岩盤直上に堆積した褐色土から、10cm～3cm角の多量の礫に混じて出土したものである。この堆積土は、第3章第3節図5の基本層序でIV層とした地山の上層の堆積土で、東丘陵ではIII層にあたる。この時期の人がこの地に存在したことは証明できるものの、遺物の量が少ないことから、どのような生活を営んでいたものかは、今のところ明らかにはできない。

なお、周辺の遺跡で出土したこの時期の遺物は、砂行遺跡のナイフ型石器のみである。詳細分布調査を含めて、今後の資料の蓄積が望まれる。

ところで、この堆積土の下層の黒色土は、放射性炭素年代測定でBC3,640～BC3,500年と示されている。そのため、この上層のIV層から旧石器が出土しているのはいかにも不合理である。しかし、IV層は丘陵頂上部から幾度となく崩落した流土である。おそらくこれらの石器は、この崩落で押し流された土砂に混入していたものと考えられる。

②縄文時代

丘陵の高い部分を中心に、遺跡範囲の全域から出土しているが、旧石器と同様に、西丘陵から集中して出土している。時期が比定できる可能性のある石器は早期～中期に及ぶ。(第4章第5節)一方、深橋前遺跡で出土した縄文土器のうち、時期のわかるものも早期前葉から中期に及んでいる。(第4章第4節)また、石器と土器の出土状況はほぼ重なっている。もっとも、土器の出土は非常に少なく、旧石器時代と同様に生活の様相をつかむまでには至らない。

なお、周辺の遺跡で出土した縄文土器・石器は非常に少なく、縄文時代の深橋前遺跡周辺は生活の密度はかなり薄かったものと考えられる。

③弥生時代(前期～中期)

弥生時代の石器は、遺跡範囲の全域から出土している。旧石器時代～縄文時代と同様に西丘陵に集中区が見られるが、他の時代と比べると集中の度合いはやや薄い。これは遺跡範囲全体に広がった弥生時代末～古墳時代初頭の石器を含んでいるためである。弥生土器は、前期の浅鉢・壺、中期の壺・甕あわせて6点と、図示しなかった壺・甕の細片、計58点(接合後、図示したものを含まず)に過ぎない。

旧石器時代から縄文時代と同様、周辺の遺跡でもこの時代の遺物の出土は薄く、弥生時代前期から中期の深橋前遺跡周辺は生活の密度はかなり薄かったものと考えられる。

第4項 小結

本節では、I期の石器と土器の梗概を述べたが、旧石器時代から弥生時代中期に至るまで、断片的な遺物の出土はみられるものの、その生活の様子を明らかにするには至らなかった。また、これは深橋前遺跡周辺の遺跡でも同様であり、この時期の深橋前遺跡周辺の人の動きは、非常に小さかったものと考えられる。

第2節 深橋前遺跡出土の筒状銅製品について（付 無茎銅鏝について）

はじめに

東丘陵の頂上部の平坦地に立地するSBF08から、円筒状の青銅製品（7002）が出土した。これは、片方が3角形を呈する細長い透し穴が互い違いに4単位入れられているほか、両端の観察から、1方の端は閉塞していたと考えられる。中期古墳や朝鮮半島で出土する筒形銅器に形状が類似している。しかしながら、弥生時代末から古墳時代初頭の段階では、このような青銅製品の出土はほとんど知られていないので、この節において若干の考察を述べることにする。ところで筒形銅器とは、円筒形で片方が閉塞する、キャップ状の青銅製品であり、槍の柄や幡の旗竿の石突として用いられていたと考えられている威具⁽⁶⁾の1つである。なお、筒状銅製品という用語を用いる根拠については、はじめて出土した夜臼三代遺跡において同様の青銅製品を、筒状青銅製品と呼んでいるのに倣った。⁽⁷⁾

第2項 弥生時代後期から古墳時代初頭の筒状銅製品の出土状況

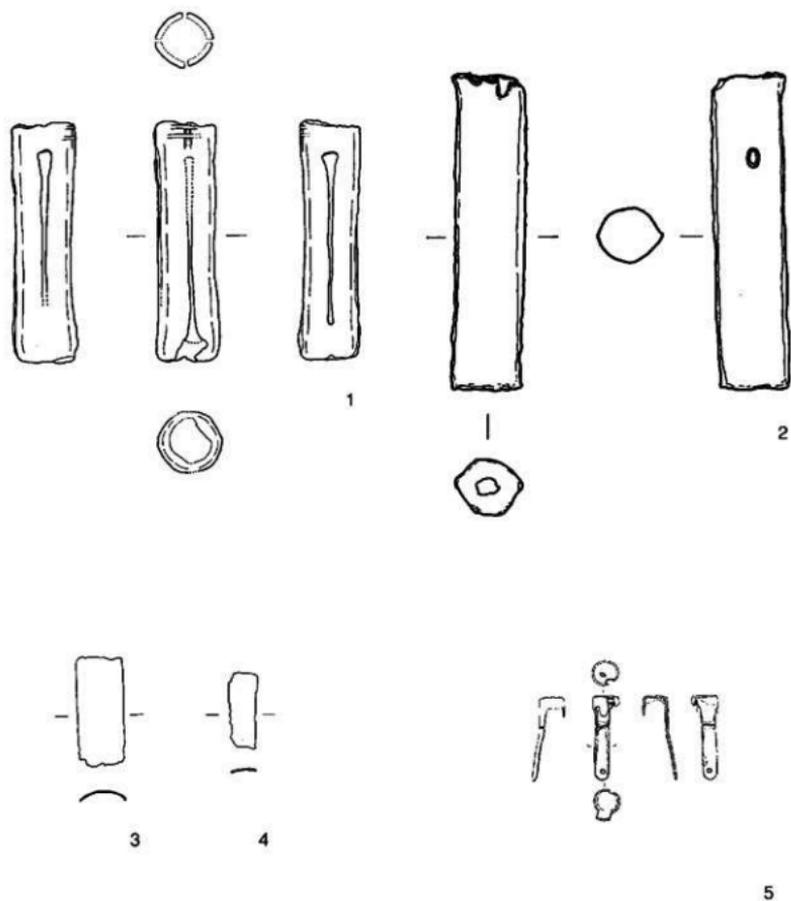
現在までに単見及んだ、弥生時代末から古墳時代初頭の筒状銅製品は表23のとおりである。深橋前遺跡SBF08出土の1については、第2章第1節で詳述したのでここを参照されたい。なおこれらの遺物は、「はじめに」で定義した筒状銅製品と考えられるが、本稿における個々の遺物名称は、すべて所引報告書等でつけられている名称を用いた。

②夜臼三代遺跡群出土「筒状青銅製品」

夜臼三代遺跡群の夜臼地区第1区の大溝から出土したもので、時期は出土した土器の編年観から、弥生時代後期に所属するものと考えられる。報告書には「いわゆる筒形銅製品ではない。・・・類例を見つけることができなかったため、筒状銅製品として報告する。」とある。上端部には鋳流れと思われるあとがあり、中央部よりやや上方に目釘孔と考えられる穿孔があげられている。下方は閉塞していたようである。なお、この筒状銅製品の鋳型が、夜臼三代遺跡群の所在する福岡県粕屋郡新宮町の隣町である春日市須玖坂本遺跡から出土している。これは、青銅器生産を行った鋳造工房群に隣接する傾斜地から、6点まとまって出土した石製の青銅器鋳型のうちの1点で、長さ17.0cm・幅6.79cmで側面には無茎銅鏝の鋳型が彫り込まれている。⁽⁸⁾これらの遺物は、平成12年度「発掘された日本列島2000」に出品され、同年9月に岐阜市歴史博物館で実見した。この筒状銅製品は、深橋前遺跡のものより大きく、緑青が全体に附着しているものの、残存状態は良好であるように感じた。

表23 弥生時代後期から古墳時代初頭の筒状銅製品出土地名表

遺物名称	出土遺跡		法 量		出土遺構	時 期	出展等
			長さ	径			
1 筒状銅製品	深橋前遺跡	岐阜県	(10.0cm)	2.4cm	住居跡	週間1-3	本書
2 筒状青銅製品	夜臼三代遺跡群	福岡県	12.3cm	2.8cm	大溝	弥生後期	(1)
3 銅板	雌鹿塚遺跡	静岡県	(4.4cm)	(1.8cm)	包含層	弥生	(2)
4 銅板	雌鹿塚遺跡	静岡県	(3.0cm)	(1.2cm)	包含層	弥生	(2)
5 銅製品	高原遺跡	神奈川県	10.5cm	2.5cm	住居跡	弥生後期	(3)
6 小銅鏝鋳損品	朝日遺跡	愛知県	(6.6cm)	(1.8cm)	包含層	山中 欠山	(4)(5)



1. 深橋前遺跡出土筒状銅製品
2. 夜白三代遺跡出土筒状青銅製品
3. 離鹿塚遺跡出土銅板
4. 離鹿塚遺跡出土銅板
5. 朝日遺跡出土銅鐸鑄じ品

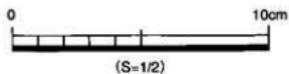


図339 現在確認できる筒状銅製品

③④ 鹿塚遺跡出土の「銅板」

弥生時代後期から古墳時代後期の土器が90%を占める遺跡で、住居跡の集中している地点付近から出土したものである。報告書には「短軸方向が湾曲する銅板で、両端を欠損している。」とのみ記されている。この2点は非常に薄いものであるが、短軸方向に湾曲していることから、筒状銅製品の可能性が窺える。またこの2点以外に、報告書には載せられていないが、長さ約5.2cm（両端部ともに完存）・径2.47cmの筒状の銅製品が出土しており、上方に2孔の穿孔・下方には4単位の透し穴があれ、そのまま閉塞せずに開放している。⁽⁹⁾ この形状などから石突き、もしくは把頭を想定できそうである。⁽¹⁰⁾ まだ、実見していないが、筒状銅製品と考えてよいものと考えられる。

⑤ 高原遺跡出土の「銅製品」

竪穴住居跡の埋土から出土したもので、『横須賀考古学会年報No36』には、「61号住居跡（弥生後期末～古墳時代初頭の貯蔵穴覆土上面から出土したものの・・・）」とあり、透し穴が3方向に入れられ、小孔が開放部に2対4箇所、閉塞部に1箇所見られる。高原遺跡を含む佐島の丘遺跡群の発掘現場とともに、筒状銅製品を実見したが、深橋前遺跡のものとは同じ大きさで、透し穴も3方向ながらも入れられており非常に類似すると考えられる。また、高原遺跡は標高約60mながらも海岸線からの比高差が非常に大きい台地上に合計290軒の竪穴住居跡が検出されていた。尾根の頂上部がなだらかであったために急傾斜地に竪穴住居跡を立てることはなかったが、深橋前遺跡の景観に近いものを感じた。筒状銅製品は緑青の附着も少なく、残存状況も良好であった。

⑥ 朝日遺跡出土の「銅鐸鍔損じ品」

包含層から出土したものであり、報告書には「N2H11区の黒色中位より、銅鐸の鍔耳とともに検出された。所属時期は伴出土器より山中期・欠山期の間と推定される。」⁽¹¹⁾ とある。1方は閉塞しており、3方向に透し穴がある。もう一方は、そのまま開放し、下方には穿孔が1孔みられる。近年古田広氏が、型持たせの配置などから「・・・もはや小銅鐸しかありえない。」⁽¹²⁾ と断定されているが、赤塚次郎氏は、「朝日遺跡の筒状青銅器」⁽¹³⁾ とされているほか、鈴木敏則氏からも「筒状銅製品の可能性が高い」とご教示を得た。実見によれば、下部の破片は実測図ほど開かず、より筒形に近いように感じた。深橋前遺跡や高原遺跡のものに比べてやや小さいながらも、形状などが非常に類似することから、筒状銅製品と考えられる。

第3項 小結

筒状銅製品は、「弥生時代後期から古墳時代初頭の筒状の青銅製品で、透し穴や目釘孔が有り、中には棒を差し込んで石突として用いられた可能性があるもの」として整理できる。深橋前遺跡の筒状銅製品は、伴出土器の編年観からⅡ-4期と判断しており、関美濃地域Ⅲ-4段階⁽¹⁴⁾ に併行するものと考えられる。現在のところ、この時期に北九州から関東にまで及ぶ地域で、点的にしか分布しないながらも、7点の筒状銅製品を確認することができた。今後は、青銅の小片で短軸方向に湾曲するもので、文様もなく、銅鐸の破片とするには薄いとされるものに検討を加えることが必要になろう。また本節第3項の②で紹介したように、夜臼三代遺跡群出土筒状銅製品の製作にあたっては、近隣の須玖坂本遺跡から、これを鍔込んだものと考えられる鋳型が出土している。しかし深橋前遺跡の近辺はもちろん、岐阜県内全域においても、それに相当するこの時期の鋳造関連遺構は確認されて

いない。平成12年度に石川県の一針B遺跡の鍛冶関連遺物の中から、組み合わせて用いたと考えられる半円筒形の鑄型が出土した。これについて筒状銅製品の鑄型としての可能性を想定したが、久田正弘氏は「筒形銅製品は、厚さの点から無理である。」⁽¹³⁾と指摘されている。今後の研究の進展を待つほかなかろう。

筒状銅製品は、透し穴や目釘孔などもあることから、中期古墳に副葬される筒形銅器の粗形の可能性が考えられる⁽¹⁴⁾。しかしながら、当時の青銅製品が、極めて貴重なものであったことを考えあわせれば、石突という威儀としての使用の可否は問題にならず、この集落の中心に存在する者の、レガリアであったことに間違いはなかろう。この銅製品も、後述する無茎銅鏃と同様に、「銅鏃や銅類は所属する氏族や部族を表象する文物」⁽¹⁵⁾であるとともに、これらの出土する地域の政治的もしくは経済的な何らかのつながりを想定する要素の1つにすることができるものと考えられる。

最後に、第6章第8節に銅製品の化学組成を載せた。しかしこの結果を本稿では、組上に載せるに至らなかった。そのため、「これまでの歴史資料の自然科学的な分析はともすれば、人文科学分野の研究者がデータを自然科学的な立場から考察することなくアクセサリ的に論文に分析値を付加するためや、・・・」⁽¹⁶⁾という諷刺を免れないが、近年銅製品の出土例が増加している銅製品の基礎データとして、あえて分析し載せることにした。

付 無茎銅鏃について

SBA05から無茎銅鏃(7001)が出土した。(筒状銅製品の出土したSBF08に南東側を切られる)これについては、第4章第3節で詳述したのでここでは繰り返さないが、現在までに美濃地域において確認されている23点の銅鏃のうちの1点である。⁽¹⁷⁾深橋前遺跡出土の銅鏃以外はすべて有茎で、挟み込み式の着柄部を持つ無茎の銅鏃は、これが唯一である。また、岐阜県近辺においても発掘調査により確認されているものは、愛知県一宮市の法寺野田遺跡出土のみである。なお、このほか朝日遺跡付近でも表採されているほか、長野県下伊那郡神橋村でも発見されている。(表24)以上のようにこの銅鏃の類例は少ないため、今のところさらなる考察をするに至らなかった。したがって紹介にとどめたい。

表24 東海で確認されている無茎銅鏃(挟み込み式の着柄部を持つもの)出土地名表

出土(表採)地		法 量			出土遺構	時 期	出展等
		長さ	幅	厚さ			
1	岐阜県 深橋前遺跡	3.6cm	2.4cm	0.3cm	住居跡	瀬間I-3	本書
2	愛知県 伝法寺野田遺跡	3.0cm	1.3cm	0.4cm	大畔町の跡	弥生後期	(17)
3	愛知県 朝日遺跡付近	3.5cm	1.4cm	2.8cm	表採	弥生?	(18)
4	長野県 下伊那郡神橋村	3.0cm	1.9cm	0.7cm	表採	古墳時代中期以前	(19)

- (1) 西田大輔 1993 『夜口三代地区遺跡群 第1分冊』(新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書第6集) 新宮町教育委員会
- (2) 鈴木裕篤編 1989 『雄飛塚遺跡発掘調査報告書』(沼津市文化財調査報告書46集) 沼津市教育委員会
- (3) 横山太郎 2001 『横須賀考古学会年報No.36』横須賀考古学会
- (4) 加藤安招編 1982 『朝日遺跡II』愛知県教育委員会
- (5) 吉田広 2000 『朝日遺跡の青銅器生産—青銅器生産の当方展開に占める位置—』朝日遺跡VI—新資料館地点の調査— 愛知県埋蔵文化財センター
- (6) 筒形銅器の用途の論議については、山田良三 1990 『筒形銅器の再考察』『権原考古学研究所紀要 考古学論叢第23冊』に要領よくまとまっているので、そのまま載せる。

1	短剣の柄、剣の把ではないか。	鳥居龍藏『東京人類学会報』17 高橋健自『考古学雑誌』2ノ3 末永雅雄『日本上代武器』
2	槍・先端につけた石突	梅原末治『佐味田及び新山古墳研究』『京都府文化財調査報告』21
3	剣の把もしくは銚	森本六爾『日本考古学研究』
4	裝飾的器物の柄に付属	小林行雄『日本考古学概説』
5	鈴として鳴らす用途の杖か石突か杖頭	三木文雄・小林行雄『世界考古学大系』 西谷真治『考古学事典』
6	響鳴音に重要な意味を有す一種の聖杖	大塚初重『三池平古墳』 森沢長次『日本の考古学』

- (7) 筒状青銅製品としなかったのは、銅鐻、銅鏡、銅剣、銅剣など青銅製品を銅器と呼ぶことが多いからである。
- (8) 平田定幸氏のご教示による
- (9) 山本恵一氏のご教示による。
- (10) 鈴木敏則氏のご教示による。
- (11) 赤塚次郎 2002 『東海の青銅器発掘』『考古学フォーラム15』東海考古学フォーラム編集部
- (12) 高木宏和 2002 『美濃(飛騨)地域! 弥生土器の様式と編年』木耳社
- (13) 久田正弘 2002 『小松市一針B遺跡・一針C遺跡』石川県教育委員会 (財)石川県埋蔵文化財センター
- (14) 八坂晋氏のご教示による。
- (15) 齋藤勇 2001 『自然科学分野の研究者が果たす役割』、『月刊 考古学ジャーナル3 No. 470, 2001』ニュー・サイエンス社
- (16) 鈴木元 2001 『一資料紹介—兎馬南遺跡出土銅鏡』『大垣市埋蔵文化財調査概要 平成12年度』大垣市教育委員会
- (17) 早野浩二 1999 『伝法寺野田遺跡(遺跡調査の概要・口絵カラー写真)』『年報 平成10年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- (18) 篠々瀬享・増子康貞 2001 『愛知県朝日遺跡表探の銅鏡から』『古代人61号』名古屋考古学会
- (19) 永峯栄一 1952 『長野県下伊那郡神岡村出土の銅鏡』『信濃4—7』信濃学会

その他の参考文献

- 村上隆 2001 『青銅器の科学的探究における課題と役割』、『月刊 考古学ジャーナル3 No. 470, 2001』ニュー・サイエンス社
- 平尾良光 2001 『鉛同位体比法の可能性』、『月刊 考古学ジャーナル3 No. 470, 2001』ニュー・サイエンス社
- 岩永省三 2001 『考古学からみた青銅器の科学分析』、『月刊 考古学ジャーナル3 No. 470, 2001』ニュー・サイエンス社

第3節 1号土坑墓についての若干の考察

はじめに

東丘陵西向き斜面の端部より少し上った場所から、逆位に埋納された丸底の長胴甕を出土した。石組み等は無く、比較的小さな土坑墓の中にすっぽりと埋められており、甕の内部には何も入っていない。そのため土坑墓であるかどうかの確認はない。しかし深橋前遺跡の範囲内には、古墳時代後期から古代の前半にかけて、深橋前古墳のほか、土坑墓や石組墓・火葬墓などが造られており、逆位に埋納している点の不合理性とあわせて土坑墓とする蓋然性は高いように考えられる。したがって、本書では、これを不明遺構とはせず1号土坑墓とすることにし、以下の若干の考察を加えたい。

第1項 1号土坑墓の丸底長胴甕

1号土坑墓に埋納された、丸底の長胴甕は第5章第2節で詳述したが、ここで若干の補足を加えたい。この甕は、甕A1類と分類されているもので⁽⁴⁾、おそらくは北野産⁽⁵⁾と考えられる⁽⁶⁾。6世紀～7世紀にかけての煮炊き具は、東濃地域で平底甕、西濃地域で丸底甕が用いられており、関美濃地域はその両者が使われていたようである。このことは、この丸底の甕と同時に、3002のような平底甕が出土することからも窺える。しかし深橋前遺跡では、古墳時代後期から古代前半の、建物跡などの遺構は確認することはできず、遺物の出土もわずかであり、どちらが主体であったかはわからない。したがって埋納されたこの甕も、特別に西方から運んで来て甕棺に転用されたものか、日常に用いていたものを転用したものかははっきりしない。

第2項 伊勢型甕を用いた土坑墓の例

1号土坑墓は前述のように土坑墓とすることにしたが、伊勢型甕を上坑に埋納するいくつかの類例が、三重県内にある事を知り⁽⁷⁾、以下これを紹介する。そこで、伊勢型甕を用いた土坑墓（土器棺墓）のうち、正位・合わせ・逆位のもの掲げた。（表25・図340）

①本書第5章第2節参照

②落合古墳群の上器棺墓

直径約0.6mの土坑に口縁部を上にして正位で埋納されている。副葬品はみられないが、甕の底部に5カ所の焼成後穿孔がみられる。5世紀前葉から6世紀末の古墳群内に有り、石組墓も3基存在する。「落合古墳群」には「土坑墓の可能性も考えられるが、断定はできない。」とある。

表25 伊勢型甕を用いた土坑墓のいくつかの例

遺跡	遺構名	所在地	口径	器高	埋納	個体数	時期	出典他
①	深橋前遺跡1号土坑墓	関市下有知	19.6cm	35.6cm	逆位	1	6世紀	本書
②	落合古墳群上器棺墓	伊勢市津村町	22.2cm		不明	1	5C中葉	(1)
③	伊勢寺庵寺SX13	松阪市伊勢寺町	25.0cm	39.3cm	合わせ	2	奈良	(2)
			24.8cm	36.1cm				
④	焼野遺跡SX15	一志郡焼野町島田	22.0cm	36.4cm	逆位	1	飛鳥～奈良	(3)

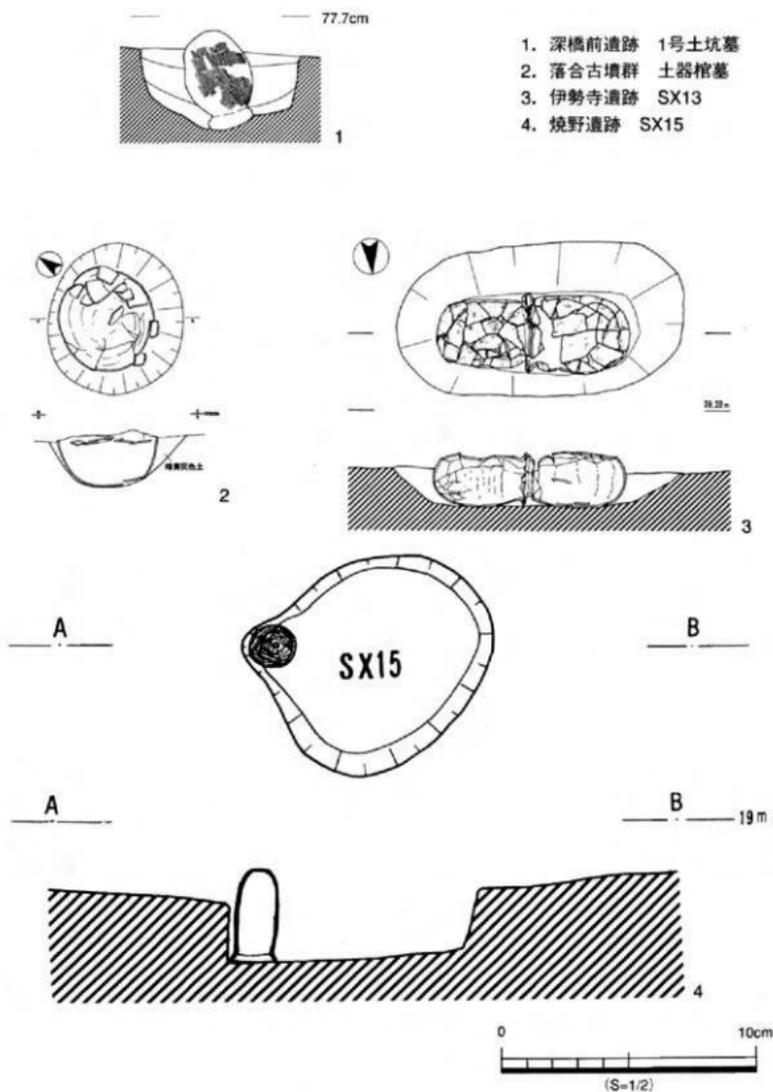


図340 伊勢型甕を用いた土坑墓

③伊勢寺廃寺のSX13

1.1m×0.6mの土坑に口縁部を合わせて埋納されている。副葬品はみられない。2個体の甕は調整や、胴部のやや上方にみられる「×」印のへつ記号など、同じ特徴を有している。報告書には「火葬骨でないとすれば乳幼児を葬ったものと思われる。」とある。「伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか」には「土師器長甕を転用した合わせ口上器棺墓」とある。

④焼野遺跡SX15

0.9m×0.75mの土坑の北東隅に逆位で埋納されている。甕の底部中央には穿孔を有する。「西野7号墳・焼野遺跡」には「性格不明の遺構」とある。

第3項 古墳時代から古代前半の様相と1号土坑墓

深橋前遺跡では、須恵器を伴う竪穴住居跡以降の建物跡は確認されていない。従ってこれ以後今日に至るまで、この地に集落が造られることはなかったが、古墳時代後半から古代前半にかけては、墓所として利用されていた。深橋前古墳・火葬墓・土坑墓などがこれであるが、その中でもこの1号土坑墓は、最も古いものとして注目できよう。

さて最後に、この墓を造った人々について少し考えてみたい。深橋前遺跡の東側に榎ノ木洞遺跡が存在する。この遺跡は、関市と(財)岐阜県文化財保護センターがそれぞれ発掘調査を行っているが、5世紀～9世紀までの竪穴住居跡が115軒検出されている。⁽¹⁾⁽²⁾ もっとも一時期あたりの住居数は少ないが、400年にも亘って住居跡が造られ続けている。また時代は下がるが、石丸瓶や美濃国刻印須恵器も出土していることから、比較的力を持った集落の可能性があり、榎ノ木洞遺跡の集落と、深橋前遺跡の墓所との関係が想定できる可能性が高いのではなからうか。

- (1) 伊藤裕保1992『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告第7分冊 落合古墳群』(三重県埋蔵文化財調査報告101-7)三重県埋蔵文化財センター
 - (2) 倉田直純1990『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』(三重県埋蔵文化財調査報告9-2)三重県埋蔵文化財センター
 - (3) 新田洋1991『近畿自動車道(久居～勢和)埋蔵文化財発掘調査報告第3分冊4 西野7号墳 焼野遺跡』(三重県埋蔵文化財調査報告87-10)三重県埋蔵文化財センター
 - (4) 内堀信雄・井川祥子『湖と甕そのデザイン』(第4回東海考古学フォーラム 尾張大会実行委員会)、なおその後、内堀信雄1999『城之内遺跡一良公園整備事業に伴う緊急発掘調査一(第1分冊)』(岐阜市教育委員会)では、伊勢型1類甕とされている。
 - (5) 三重県度会郡明和町の富宮跡の南方に存在した土師器の生産地。この遺跡を中心に隅九二等辺三角形の土器流域が、400基以上も確認されている。
 - (6) 上村安生・永井幸壽氏のご教示による。
 - (7) 上村安生氏のご教示による。
 - (8) 関市教育委員会1994『新修 関市史 考古文化財編』関市教育委員会
 - (9) 藤正人2000『榎ノ木洞遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第59集)(財)岐阜県文化財保護センター
- その他の参考文献

下村登良男1986『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会

上村安生1998『三重県内の土師器生産について』『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 三重県埋蔵文化財センター

第4節 深橋前遺跡とその周辺の遺跡にみられる搬入土器について

はじめに

深橋前遺跡周辺で出土する土器で、当地の独自色が認められる器種は、条痕文系の甕・器台と、口縁部が長く外傾する平底甕しか定義されていない¹¹⁾。そのため、ここで出土する土器は、尾張低地部を中心とする地域などからの影響を色濃く残すものであるが、様々な地域色を融合しながら広がっていくために、搬入元が明らかな搬入品かそれを模して作られたと考えられる土器は、意外に確認しにくい。しかしこのうち、北陸を中心とした日本海側から広がる直立口縁の甕と、尾張低地部を中心に平野部に広がって出土するS字甕は、その特徴を比較的崩さないまま周辺に広がっていくため、搬入品もしくはこれを模して作られたと考えられる土器と確認しやすい。そこで本稿では、深橋前遺跡・砂行遺跡・南青柳遺跡から出土した、直立口縁の甕とS字甕について紹介し、以下若干の考察を加えたい。

第1項 S字甕・有段口縁の甕とその出土状況

深橋前遺跡・砂行遺跡・南青柳遺跡¹²⁾における、S字甕・有段口縁の甕の出土状況は表26のとおりであり、このうちS字甕は、すべて口縁部外面に押し刺突を入れたS字甕A類であり、尾張低地部を中心とした地域から直接搬入されたものと考えられる。一方直立口縁の甕は、口縁部外面の擬門線を入れてあるものと入れていないものが存在するほか、また口縁部の成形方法などが、北陸で作られたものとはかなり違うため、直接搬入されたものではなく、これを模して作られたものと考えられる。

深橋前遺跡からS字甕が、南青柳遺跡から直立口縁の甕が比較的多く出土しているが、S字甕24点・直立口縁の甕42点といった非常に限られた数量のなかでの比較であるために一概に特色づけるわけにはいけない。しかしこれらは、遺構内出土量の多寡と同様であり、あながち見当はずれの比較ではないのかもしれない。

表26 S字甕・有段口縁の甕の出土状況

遺跡名	器種	数量	出土遺構等
深橋前遺跡	S字甕	15点	2015・2016 (SBA06)、2100～2102 (SBE06)、2153 (SBE27)、238・2239 (SBF25)、2269・2272 (SBF29)、2759～2763 (包含層)
	直立口縁甕	6点	2026 (SBA10)、2215 (SBF23)、2306 (SHI34) 2764～2766 (包含層)
砂行遺跡	S字甕	2点	1621 (砂行大溝)、1846 (包含層)
	直立口縁甕	8点	1622～1626 (砂行大溝)、1847～1849 (包含層)
南青柳遺跡	S字甕	7点	197 (SB46)、256 (SB54)、288・289 (SB57)、299 (SB58)、626・627 (包含層)
	直立口縁甕	28点	15 (SB05)、31・32 (SB09)、115 (SB26)、120 (SB28)、216・217 (SB50)、386 (SB73)、459・460 (SU02)、628～645 (包含層)
出土総数	S字甕	24点	遺構内出土11点 包含層出土 7点 (砂行遺跡大溝を含む)
	直立口縁甕	42点	遺構内出土12点 包含層出土17点 (砂行遺跡大溝を含む)

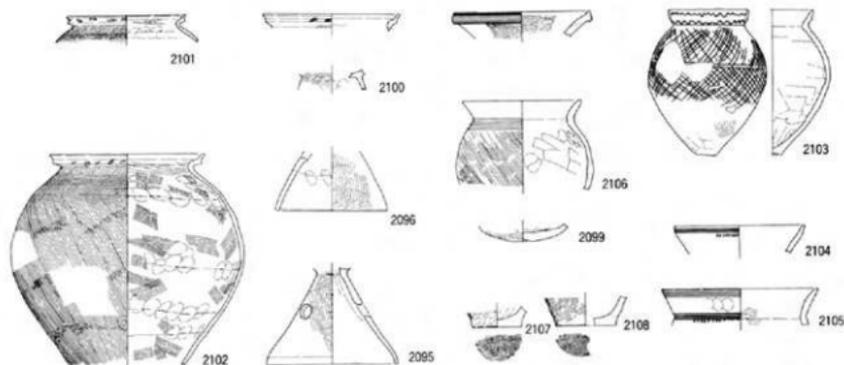
第2項 搬入土器の共伴関係

①S字甕（深橋前遺跡SBE06）

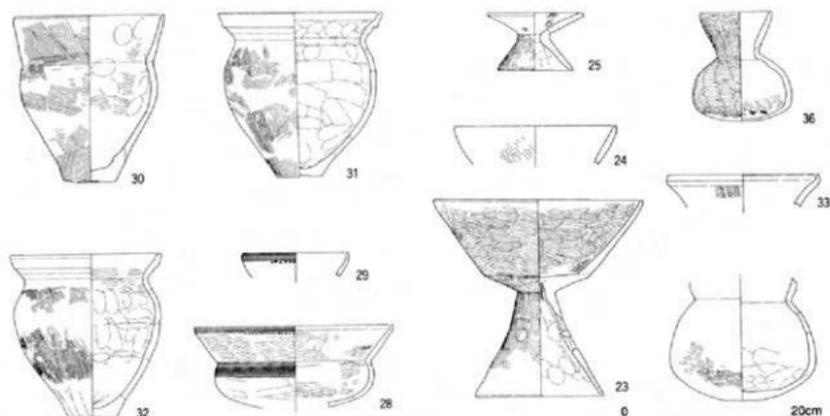
丘陵端部に造られた堅穴住居跡で、3個体のS字甕が出土している。2100・2101・2102は床面直上で出土したもので、この堅穴住居跡に伴うものと考えられる。なお2103も搬入品に模した土器の可能性が高いもので、近江の影響が強いと考えられる。時期はおおよそ廻間1-4と考えている。

②直立口縁の甕（南青柳遺跡SB09）

北谷を囲む急斜面に北西方向を向いて立てられており、2個体の直立口縁の甕が出土している。これらの土器のほとんどは床面直上で出土したものであり、この堅穴住居跡に伴う一括性の高いものである。ここからは、在地の口縁の長い甕30や、尾張の影響を大きく受けつつ在地化した高坏23が出土している。卓見によれば、時期はおおよそ廻間1-2と考えられる。



深橋前遺跡（SBE06）



南青柳遺跡（SB09）

図341 搬入土器及びそれを模した土器の共伴関係

(S=1/6)

第3項 まとめにかえて

美濃地方の内陸部の遺跡の多くがそうであるように、深橋前遺跡周辺でのS字甕の出土は非常に断片的で少ない。(砂行・南青柳遺跡の搬入土器、それを模した土器を、図342に示した。なお深橋前遺跡については省略したので、表26によって参照されたい) また関・美濃市の同一立地の遺跡においても、S字甕A類が美濃市の南山遺跡⁽¹⁾で、B・C類が関市の松原遺跡⁽⁴⁾で出土するのみである。これを、遺跡間の政治的な背景の違いと捉えるか、時間的な違いと捉えるかはなかなか難しい。しかし、廻間Ⅰ期の後半～廻間Ⅱにピークを迎える遺跡にS字甕が出土する割合が多いように見受けられそうな状況である。今後、北陸の影響を持つ土器などもあわせて搬入品の位置づけが必要であろう。

- (1) 成瀬正勝 2000 「砂行遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第59集)(財)岐阜県文化財保護センター
- (2) 岡田吉孝 2002 「南青柳遺跡」(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第67集)(財)岐阜県文化財保護センター
- (3) 高木宏和 1997 「南山遺跡」(美濃市調査報告 第8号)美濃市教育委員会
- (4) 篠原英政 1994 「松原遺跡」(関市文化財調査報告 大19号)関市教育委員会

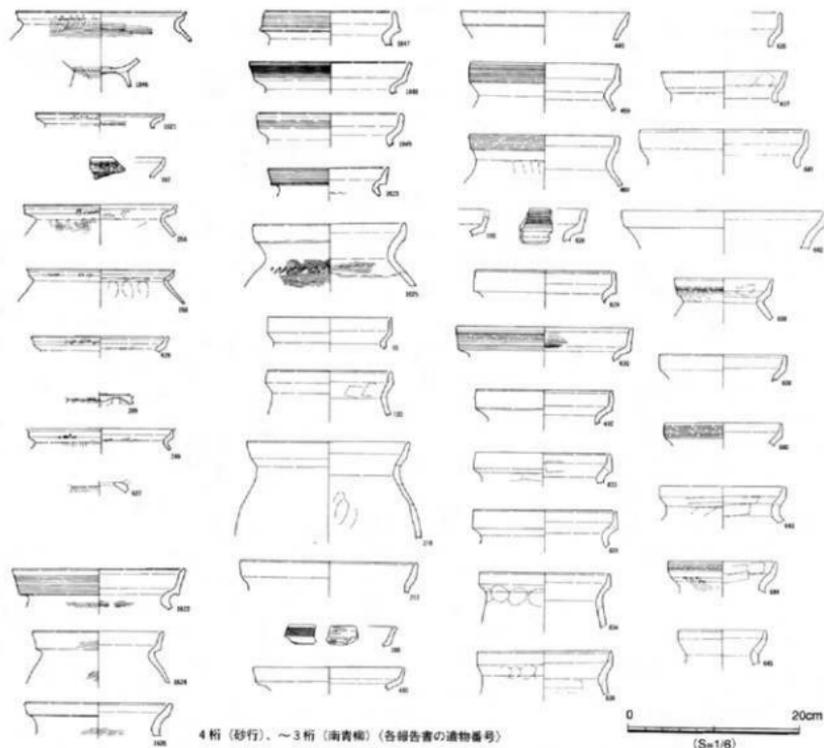


図342 砂行・南青柳遺跡の搬入土器及びそれを模した土器

第5節 深橋前遺跡の急斜面集落

はじめに

深橋前遺跡では、Ⅱ～Ⅲ期に所属すると考えられる竪穴住居跡を80軒検出した。この所属は出土した土器の編年観と遺構の切り合いから判断したものである。またこれは、先行の土器編年にあてはめられるならば、山中Ⅱ式から宇田Ⅰ様式、弥生時代後期から古墳時代中期に併行するものである。本稿ではこの住居群が構成する集落形態について発掘調査によって知り得た知見を整理すると共に、岡テクノハイランド開発伴う発掘調査の掉尾にあたって、岡市西北部の丘陵で集落の状況について若下のまとめを行いたい。それは砂行遺跡・南青柳遺跡が、直線距離で1kmも離れていない場所に存在し、相互に関連、もしくは断絶して存在していたことが考えられるためである。もっとも、加茂郡富加町の後平遺跡でも同様の急斜面集落が確認されており、今後さらに確認される可能性はあるが、現在当該地域の開発は一段落した感があるので、一応の途中経過を報告したい。なお、本稿を進めるにあたって、砂行遺跡・南青柳遺跡の遺構配置図を図343に載せたので参考とされたい。

第1項 住居の形態について

深橋前遺跡の竪穴住居跡のほとんどは、急斜面に造られており、成瀬正勝氏が「砂行遺跡における住居形態と集落形態」で「砂行型急斜面集落」と名付けた定義⁽¹⁾にほぼあてはまる。また、その後これに沿って考察を重ねられた岡田古孝氏の「南青柳遺跡の竪穴住居と集落形態の特徴」⁽²⁾ともほとんど矛盾しないが、深橋前遺跡の立地等の特色によって補足が必要な部分もあるので、若干の整理を行いたい。

①斜面の傾斜度について

深橋前遺跡の竪穴住居跡は、最大傾斜度34.9° 砂行遺跡・南青柳遺跡に劣らない急傾斜地に立地する。これは丘陵端部の湧水から近く、さらに竪穴住居跡の床面に湿気を持たせないために山側に上がらざるを得なかったためと考えられる。

②竪穴住居の方位

竪穴住居跡の方位は、山側の壁面を等高線に対して平行になるように設定されており、日照を考慮して南方に向かせるような配慮はされていない。これは、砂行遺跡・南青柳遺跡と同様に、急傾斜地という制約の中でできるだけ広い床面積を得る事を最優先させた結果であろう。

③竪穴住居の平面形

竪穴住居跡が長方形のプランをとらざるを得なかったことについては、第4章第1節のSBB11で少し述べたが、やはり立地上の問題のみならず、長方形の平面プランの志向は捨てがたいと考える。なぜなら、中濃地域の弥生時代中期以降、長方形の平面プランが多く、その例として、貝田町期では、美濃加茂市の牧野小山遺跡SB14⁽³⁾、高歳期では可見市の藤田坂遺跡SB01⁽⁴⁾、ブレ山中期では美濃加茂市の南野遺跡SB01⁽⁵⁾を挙げることができ、これらはすべて平坦地に立地している。また、現在整理中の柿田遺跡においても、中期～廻間期の竪穴住居跡の多くは、長方形の平面プランに造られる傾向がある。このことは、立地の影響と共に、考慮に入れなければならない要素の一つと考える。

④山側周溝

急斜面の竪穴住居跡の周溝は、谷側には全周させる必要はない。したがってコの字型に竪穴住居跡の山側のみを囲むため、山側周溝としている。山側周溝は、砂行遺跡9/53 (17%)、南青柳遺跡3/82 (37%) 対して、深橋前遺跡では8/80 (10%) 存在する。これについては、第4章第1節のSBB04で簡単に述べたが、竪穴住居跡の掘形と非常に接近したものがほとんどであった。比較的大きな竪穴住居跡に多いとはいっても、時期・住居の特殊性などによって斉一性があったとは考えられないのではなかろうか。

⑤竪穴住居の掘形と掘削方法

深橋前遺跡の急傾斜地の竪穴住居跡は、できるだけ広い室内面積を確保するために、山側を大きく掘り、これを谷側に積むことによって平坦な床面を造っている。そのため、斜面が緩いほど多くの掘り抜き排土を得ることが必要である。完掘時の山側の壁溝は、最も深いものでも75cmしかない。また、実際には掘り抜き排土で積み上げた床面は谷側へ崩落してしまっている。これが、第1章第3節で述べた包含総遺物の分布に関連する。

第2項 竪穴住居内の施設等について

竪穴住居跡内の施設等に関する用語については、第4章第1節の冒頭で簡単に定義したが、多少の補足を加えておく。

①床面 (貼り床等について)

竪穴住居跡の定義の中で、最も基礎的な要素は「平らな床面」である。一般に低地の竪穴住居では、床面をやや深く掘って粘質土を平らに貼って、貼り床とすることが多いが、深橋前遺跡では岩盤掘り込みの竪穴住居跡では、貼り床が少なく、粘質土を地山にしているものには、砂質土を平らに敷いてある場合が多い。SBE07・08などはその好例で、粘質土の上に砂質土を盛って平坦にしている。またその上面は最初に踏み固めたものか、生活しているうちに踏み固まったものかは不明であるが、非常に硬く締まっている。

②柱穴 (主柱穴)

柱穴の有無も、竪穴住居跡を決定する重要な要素であるが、深橋前遺跡では柱穴が検出できなかったものが多かった。床面検出後、かなり念入りに調査したが結局確認できなかった場合も多かった。

③壁溝

壁の土砂の崩落を防止するために並べられた割り板材の痕跡である。岩盤掘り込みの竪穴住居跡から検出される場合が多いので排水溝の役割も果たしていたのではないかと¹¹⁾も考えられている。

④地床炉

深橋前遺跡にはカマドを持つ竪穴住居跡は無く、地床炉を用いて煮炊きを行っていた。地床炉については、第4章第1節のSBD03で若干の推測を述べたので合わせて参照されたい。

⑤土坑

竪穴住居には、廃棄土坑や貯蔵穴などが掘られることもあるが、深橋前遺跡では比較的少なかった。SBF38には2基の土坑があるが、その性格は不明である。

第3項 II・III期の集落の様相について

II・III期の竪穴住居跡の各小期別の軒数を表27に示した。II期としてあるものは、出土遺物が小片であるために小期区分はできなかったが、確実にII期と考えてよいものである。また不明は、遺物の出土がなかったものであるが、立地などから考えてII・III期以外の時期は考えられないものである。

①II-1期の集落の様相

SBD01 SBD03

確実にII-1期と考えられる竪穴住居跡は、わずかに2軒であるため、この時期の集落を明らかにすることはなかなか難しい。2軒とも小規模なものと考えられ、標高80mを超す急斜面を選んでおり、すべて西丘陵に立地している。これは、本章第1節でI期の遺物を概観した際、旧石器時代から弥生時代中期に亘る間、常に遺物が集中していたのが、このD区高位置の急斜面である(図338参照)。この場所は東向き斜面のために、日当たりが良好で、冬場の強風がしのげるなどの理山で、生活の場になりやすかったのではなかろうか。いずれにせよこの小期の深橋前遺跡への人の出入りは小さかったものと考えられる。なおこの時期には、すでに砂行遺跡が集落を形成しており、ややまとまった土器を持つ、竪穴住居跡がみられるようになる。やや踏み込んだ考察は項を変えて述べることにする。

②II-2期の集落の様相

SBA08 SBB04 SBB12 SBE05 SBE23 SBF29 SBF38 4号方形周溝墓
段状遺構 SKA01

II-2期になると、竪穴住居跡は谷の下方面にも造られるようになる。そして、SBB04やSBF29のような、山側周溝を持ち床面積も大きな住居跡が造られるようになる。また、この後の時期に銅鏃や筒状銅製品、遺物が集中して捨てられる特殊な住居跡が集まる場所となる、東丘陵の尾根筋の平坦地に、はじめてSBF38が造られる。確実にこの時期の竪穴住居跡と考えられるものは少ないけれども、II-1期と比較してこの集落に拡大の気運が窺える。集落拡大の準備期と考えられよう。ところで4号方形周溝墓からも、この時期の土器が出土しているが、これは、伝世しやすい墓資料のために慎重に考える必要があろう。

③II-3期の集落の様相

SBA07 SBA10 SBB01 SBB07 SBD08 SBD10 SBE01 SBE09
SBE27 SBF01 SBF02 SBF05 SBF20 SBF31 2号方形周溝墓
3号土坑墓

II-2期になると、深橋前遺跡の調査範囲の全域に竪穴住居跡が広がり、遺物の量も爆発的に増え、

表27 II・III期竪穴住居跡各小期別軒数

	総数	II-1	II-2	II-3	II-4	III	II	不明	立地
A区	10	0	1	2	2	0	5	0	東丘陵西向き斜面
B区	10	0	2	2	2	0	4	0	東丘陵西向き斜面
D区	5	2	0	2	0	0	1	0	西丘陵東向き斜面
E区	27	0	2	3	4	3	7	8	西丘陵東向き斜面
F区	28	0	2	5	6	0	14	1	東丘陵東向き斜面
総数	80	2	7	14	14	3	31	9	

器種もバラエティーに富み、北陸の月影式の影響を持つ土器や、S字壺などの搬入土器も増える。集落自体が力をつけると共に、人々の動きが活発になった時期である。また、東丘陵尾根筋の平坦地は継続して床面積が大きく床面直上の遺物を多く含む竪穴住居跡が造られ続ける。Ⅱ-3～4期が深橋前遺跡の集落がもっとも拡大する時期である。なおこの時期は、砂行遺跡・南青柳遺跡が拡大期を迎えている。

④Ⅱ-4期

SBA03	SBA05	SBB05	SBB11	SBE06	SBE24	SBE25	SBE29
SBF04	SBF08	SBF24	SBF25	SBF34	SBF35	3号方形周溝墓 4号土坑墓	

Ⅱ-4期もⅡ-3期と同じ様相である。それに加えて、銅鏃や筒状銅製品を持つ竪穴住居が東丘陵尾根筋の平坦地に立てられ、ここが引き続き集落の中心になっていった。この期になると、集落はこの尾根を経て、東斜面にも大きく展開することになる。さらに、住居跡の切り合いも多くなり、立て替えが頻繁に行われるようになる。この期の終わりは、週間Ⅰ式の終わりと考えているが、ここで、砂行遺跡や南青柳遺跡で忽然と竪穴住居跡が造られなくなるのと同様に、深橋前遺跡でも突然にして竪穴住居が造られなくなる。このことについては、項を変えて述べることにする。

⑤Ⅲ期

SBE07	SBE15	SBE16	SUA01
-------	-------	-------	-------

Ⅱ-4期の終わりに深橋前遺跡の竪穴住居が、突然造られなくなってから、Ⅲ期に至るまでの遺構は確認されていない。砂行遺跡では宇田期まで続くが、深橋前遺跡では松戸河期に3軒の竪穴住居造られ、また集落は断絶する。おそらく、砂行遺跡の宇田期の竪穴住居と同様に、Ⅱ期の集落を構成していた人々とは無関係な人々が住んでいたと考えてよいのではないか。

第3項 深橋前遺跡の集落の消長と周辺の遺跡との関連

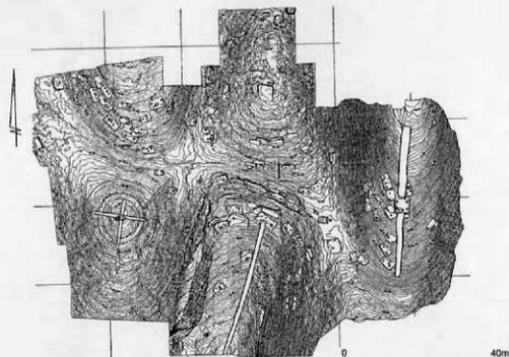
①集落の消長

深橋前遺跡では、Ⅰ期（旧石器時代から弥生時代中期）の長きに亘って、断続的ながらも人の動きの形跡が見られる、その後西丘陵の頂上部に近い急斜面に造られ始めた。これはⅡ-Ⅰ期頃のことであるが、Ⅱ-3になると急激に拡大する。この集落は、おそらく東丘陵尾根筋の平坦面をその中心として拡大し、Ⅱ-4期に至っても集落の規模を維持したまま突然と断絶する。この後、Ⅲ期にわずか

表28 砂行遺跡・南青柳遺跡・深橋前遺跡の時期対応と砂行遺跡の各小期の竪穴住居跡数

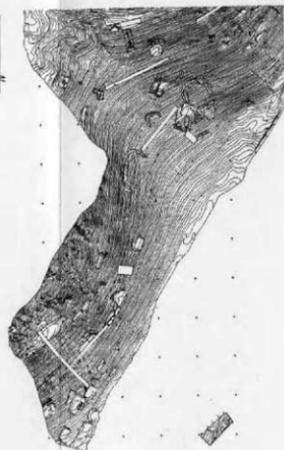
砂行遺跡				南青柳遺跡		深橋前遺跡	編年との対応	備考
Ⅰ-1	⑦	Ⅰ-2	④	Ⅰ-1	Ⅰ-2	Ⅰ-1	山中後半期	
							週間Ⅰ-0	
Ⅰ-3			⑩	Ⅰ-3		Ⅰ-2	週間Ⅰ-1	
Ⅰ-4			⑮	Ⅰ-4		Ⅰ-3	週間Ⅰ-2	
				Ⅰ-5		Ⅰ-4	週間Ⅰ-3	
						Ⅰ-4	週間Ⅰ-4	

○囲み字は竪穴住居跡の軒数



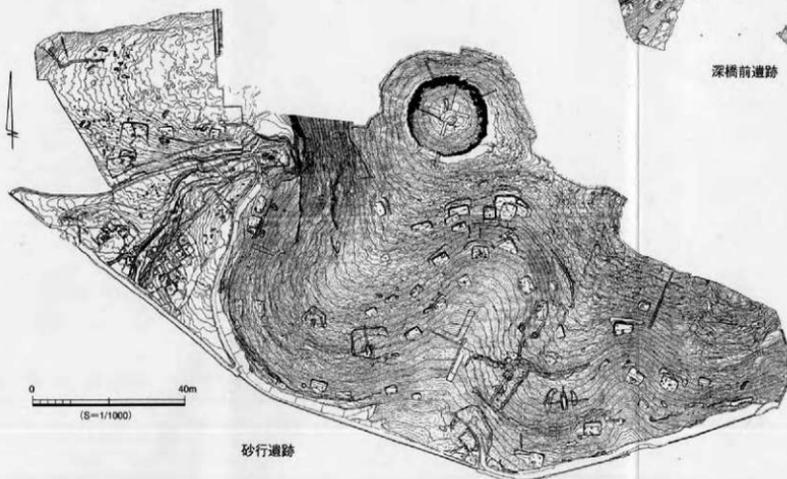
南青柳遺跡

(S=1/1000)



深橋前遺跡

0 40m
(S=1/1000)



砂行遺跡

0 40m
(S=1/1000)



0 1000m
(S=1/25000)

図343 深橋前遺跡とその周辺の集落（弥生時代末から古墳時代初頭）

な人の流入があるが、これは集落を形成するに至らず、今に至るまで、ここに集落が形成されることはなかった。これは表28にあるように、砂行遺跡の竪穴住居跡の動きと同様であると共に、南青柳遺跡でも同様であったと考えられる。⁶¹⁾

②周辺の遺跡との関連

深橋前遺跡周辺の集落の消長を土器の変化から概観する。この地域で最初のややまとまった集落は、弥生時代後期に砂行遺跡で形成された。その後弥生時代末～古墳時代初頭に、砂行遺跡・南青柳遺跡・深橋前遺跡の順にまとまった集落が形成され、ほぼ同時にピークを迎える。これらの集落がどの程度関連していたかは不明であるが、直線距離で1km未満でほぼ同じ様相の上器を用いていた3つの集落が没交渉であったことはあり得ないであろう。そして、砂行遺跡・南青柳遺跡の集落はほとんど時期を同じくして廃絶し、やや遅れて深橋前遺跡の集落も廃絶する。この間を長く見積もっても100年には満たない。したがって、砂行遺跡の57軒・南青柳遺跡の82軒・深橋前遺跡の80軒の竪穴住居のいくつかから構成される集落は、それぞれがほぼ同時に存在していたと考えられる。もともと、集落内で何度も立て替えを行っているので、219軒の大集落が形成されていたとは考えられないが、当初考えていたよりは多少大規模な集落群があったものと考えられる。

なお第6章第1節で、Ⅱ-4期と考えられるSBA05の床面焼土の年代がA.D.200³⁵⁾と推定されている。いかにも納得できそうな年代であるが、一方同章第2節では、Ⅱ-4期と考えられるSBE29出土土器からA.D.50-130、Ⅱ-2期と考えられるSBF29出土土器からA.D.70-130の測定年代が出されている。そのため、集落と出土した土器の実年代についてはより慎重にならざるを得ないが、現在までの先行の研究などから、深橋前の集落の盛期を、おおよそ3世紀前半としておくことは、それほど無理なことではないように考える。

第4項 竪穴住居跡の選地（まとめにかえて）

①深橋前遺跡における竪穴住居跡の選地

深橋前遺跡の集落は、南西向きに開放した谷を囲む丘陵の斜面を中心に展開する。途中、東丘陵尾根筋の平坦部に、集落の中心的な場所を造つたために、ここから東方向に展開する斜面にも竪穴住居跡が造られるようになる。いずれも急傾斜地に多くの竪穴住居を造る。また多時期の竪穴住居跡が混在するので、それぞれを支群とはいえないが、A・B・D・E・F区はすべて小さな尾根によって区画された小さな谷部にまとまって造られている。そして、各区は小さな尾根によって隣の区の竪穴住居跡への視界を遮り、やや閉塞した空間が作られている。なお、大きな谷の最奥部とその付近には竪穴住居は造られない。これは、平安時代になって深橋前古竈跡が操業していたことから窺えるように、偏西風の強い場所であり、居住に適さなかったためと考えられる。

②竪穴住居跡の選地の理由

深橋前遺跡とその周辺の人々が、なぜ農耕生産に有利な平地の平坦部に集落を形成せず、あえて丘陵の急斜面に集落を形成したのかについて、今のところ説得力のある根拠は示されていない。今まで弥生時代において高地に集落を形成することは、生業を無視した場所に集落を形成することであり、その要因は生命の危機に違いないと考えられていた。そして、軍事的な諸要件を満たさなくても高所に立地するというだけで、「高地性集落」の漠然とした定義を援用し、一軍事的要素を帯びた集落一

と説明しがちであった。しかし、断崖絶壁に囲まれた台地上ならともかく、深橋前遺跡のような支丘陵の斜面では、敵の攻撃に対してそれほどの有利さは感じられない。その上、西日本における高地性集落のように尾根を分断するような環壕や、櫓を立てていたと考えられるような柱列・櫓列の可能性のある等高線に沿うような柱列も検出されていないし、過剰な武具の類も出土していない。やはり、ここを血なまぐさい丘とするのにはまったく無理があろう⁽¹⁾。やはり、他にももう少し合理的な理由があったのではなかろうか。

ところで私たちの住む岐阜県は、濃尾平野の広大な平野とともに、山地を多く持つ県である。平地からの展望で容易に集落が確認できるほど、傾斜地に造られた住宅は多い。また、現在でも中濃・東濃・飛騨などでは、急峻な山の斜面を削って造られている集落は多い。この立地は深橋前遺跡の集落と大きな変わりはないのではなかろうか。まず飲料水をはじめとする水は、丘陵の傾斜変換点に湧水がありふんだんに使うことができる。山からは、建築材や毎日かなりの量が必要であった燃料材を多く得ることができるほか、木の実・キノコ・果実などの他、小動物を得ることもできるのである。そして、丘陵の周辺は低湿地であり、谷に囲まれた開塞谷には溜池を造ることが容易で、水稻耕作をした可能性も十分にある⁽²⁾。さらにこのころの交通路は、山越えの道が多かったと考えられ、関市北部の丘陵に主要な流通道路があった可能性もある。かなり推測に走ってしまったが、このような諸要素が集落形成の要因になった可能性を指摘しておきたい。

しかし問題は廃絶の要因である。かなり拡大した集落がそのピークを迎えたまま、Ⅱ-4期をもって突然と廃絶する。砂行遺跡・南青柳遺跡もこれより少し前に同じように廃絶する。やはりこれも推測の域を超えないが、古墳時代初頭の社会の変化が影響していた可能性があるほか、山林資源等を使い尽くし、さらによい場所への移動がなされたことも想定できるのではなかろうか。

最後にこれらの拙い考査をまとめるにあたって、石黒立人・高木宏和・藤田英博・鈴木元の諸氏に多面的な指導を受けたほか、関テクノハイランド開発予定地で苦楽を共にした調査員諸氏、さらに実際の調査の最前線に汗を流された発掘・整理の作業員の方々から多大なる指導・協力と励ましの言葉をいただいた。心より御礼申し上げます。

- (1) 成瀬正勝 2000 『砂行遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第59集)(財)岐阜県文化財保護センター
- (2) 岡田吉孝 2001 『南青柳遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第68集)(財)岐阜県文化財保護センター
- (3) 佐野康郎 1998 『牧野小山遺跡C地点』(岐阜県文化財保護センター調査報告書 第39集)(財)岐阜県文化財保護センター
- (4) 三島誠 2002 『藤田坂遺跡発掘調査概要』(岐阜県新発見考古雑誌 2002.2)(財)岐阜県文化財保護センター
- (5) 吉田英敏 1976 『南野遺跡発掘調査報告』(愛媛県教育委員会)
- (6) 岡田吉孝氏のご教示による。
- (7) 弥生時代の高地性集落については、菅原書はもちろんのこと高等学校の教科書や大学入試の解答に至るまで用いられる、かなりポピュラーな歴史用語の一つとなっている。そして弥生時代は、後因内乱の血なまぐさい抗争が全面的に展開した時期であり、高地性集落がどこでもあったかのような印象を与えている。なお最近、『古代文化第54巻第4号』(財団法人 古代学協会)が弥生時代高地性集落研究の現状と課題という特集を組んで、やや冷静に先行の研究を確認し、今後の研究の指針を与えている。
- (8) 深橋前遺跡の谷内の低湿地では、水田面を確認することはできなかった。

第6節 深橋前遺跡における埋葬空間の形成と終末

本遺跡には弥生時代末～平安時代まで時代幅広く埋葬施設が集まっている。特にD区・E区にある南東方向に開く小さな谷は、まさに聖なる谷、墓所である。遺跡全体の埋葬施設は弥生時代末～古墳時代初めには方形周溝墓が3基、等高線上に並んでいる。また湧水地点付近からは須恵器が出土しており、5世紀には砂行遺跡と同じような水辺の祭祀が行われた可能性も考えられる。6世紀前半の土坑墓が1基、7世紀後半の土坑墓が2基、7世紀後半の古墳が1基、7世紀後半の小石塚が1基、8世紀中頃の火葬墓が6基、9世紀前半の上坑墓1基、10世紀の古墳の再利用があるがほとんどがD区・E区という本遺跡の西側斜面にかたまっている。特に弥生時代末～古墳時代初めの時期の遺構は方形周溝墓以外にも86軒の堅穴住居跡が検出されているが、D区の方形周溝墓周辺には極端に住居跡が少ないため、墓域として認識された谷なのかもしれない。

また、一地域の後期古墳から平安時代と、多様の古代の埋葬施設の変遷がみられる点が興味深い。平安時代には墓域という空間ではなくなり、谷全体が古窯に関連した生産の空間に変化している。あえていうならD区の谷は墓域から窯に関連した祭祀の空間になったようである。神聖な場所には替わりはないのかもしれない。

1号火葬墓に埋葬された人物像

6基ある火葬墓から出土した蔵骨器のほとんどは小壺・短頸壺といった壺であるのに対して、1号火葬墓の蔵骨器は横瓶であった。しかも馬具の鉸具が副葬されていた。奈良時代の馬と関わりが深い有力者であることには間違いないであろう。早川万年氏からは榎ノ木洞1号窯から出土した、「馬使直（マカヒナジ）」とある線刻に関連する直の姓を持つ馬飼の豪族との関連を注目したいと御教示を頂いた。8世紀中頃に火葬を行えた人物は少数であった可能性は高い。本遺跡で確認された人骨（1・3・6号火葬墓）にはすべて人為的に刃物で切った小さくした痕跡がみられ、選骨の技術者がいたことが考えられる。

深橋前1号～6号火葬墓について

深橋前遺跡から検出した6基の火葬墓はいずれも出土遺物、遺構の構造から8世紀中頃～後半のものである。これら6基の火葬墓は勾配が20～30度の急斜面上部（D区出土はは標高80m付近）に散在している。大きく分けるとD区の谷（4基）とE区の谷（2基）にかたまっているようである。いずれも石組みの構造、蔵骨器の出土位置ともに埋納当時の形をとどめるものはなかった。その理由は斜面に形成されているため流失が激しかったことと、それに伴い地表面から浅いところにあったため、土流除去の重機掘削によってほとんどがこわれてしまったことにある。火葬墓のほとんどは斜面上部にあり表土も薄く、重機掘削では砂行遺跡・南青柳遺跡と同様、弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡の検出に重きが置かれていたものと思われる。

石組みの構造がかるうじて残存しているのは1号・5号・6号火葬墓で、ほぼ同じ構造と思われるが、使用されている石材は加工されている可能性が高い。節理面を利用して剥離した平らな面を蔵骨器を埋納する方（上坑内側部）に向けて奥壁、側壁、天井石を組んでいる。また石材はほぼ10～15cmの厚さに加工されている。さらに本遺跡周辺は砂岩の岩盤でチャートの岩盤は本遺跡北に20kmのと

ころにありそこから運び出す必要がある。もしくは深橋前古墳で使用されて転落したチャートの天井石や咽喉を転用したのかもしれないが、これについては検討材料がない。6号火葬墓は遺構の残りがよく、燃やした灰層の上に石室のような石組みをしており、横穴式石室の形態を踏襲した石組みの構造がよくわかる。蔵骨器が残存しているのは1・2・3・4号火葬墓で3号火葬墓以外は蓋も出土している。1号火葬墓からは横瓶、蓋、鉸具が、2号火葬墓からは小型壺、蓋が、3号火葬墓からは短頸壺が、4号火葬墓からは短頸壺、蓋が出土している。

1・3号火葬墓から出土した火葬人骨は蔵骨器の中に残存しており、6号火葬墓から出土した火葬人骨は炭層の上から出土したものである。1号・3号から出土した火葬人骨はともに性別、年齢ともに不明の成人である、性別がわかるほど大きな骨がないのがその理由である。埋納してある部位は頭蓋骨・後頭骨・歯・喉仏（第2頸椎骨頭）・肋骨・手足の中手骨・中足骨・長骨骨・大腿骨骨頭等、一つの蔵骨器の中の人骨には重複がないということからも1つの蔵骨器には一人分の火葬人骨のみを納めていたことになる。現在の火葬後の選骨と変わらない、逆に言えば奈良時代からの火葬方法が現在にも引き継がれているといったほうがよい。その他火葬人骨からわかったことは薪で野焼きした時の熱による亀裂が入っており、火葬方法も明らかになった。また1・3・6号火葬墓出土火葬人骨から共通して見られるものでは小さい骨が多く選んで入れているということ、一部厚さのある骨を割ったり刃物で切っているということ、細かく砕いて入れているものもあるということである。火葬人骨を力を入れて割ったり、切っていることから神官や処理班・埋葬屋といった人たちがいたのではないかということである（第6章参照）。

本遺跡の火葬墓以外に県内で知られている火葬墓は、1997年に発掘調査された砂行火葬墓や、関市重竹遺跡B地点の調査で検出された2例（8世紀中葉）、その他に5例あるが調査による出土ではない。砂行火葬墓はこのうちの最古のものである⁸¹。長良川中流域における火葬墓の背景には、中央に出仕した地方豪族のムゲツ氏の存在が大きいことは確実であろう。

注1 1999財団法人文化財保護センター「砂行遺跡」財団法人文化財保護センター報告書第65集

第7節 深橋前古窯出土の遺物について

碗・皿・瓶を主に焼成した窯で、K90号窯式の新しい時期（9世紀末）からO53号窯式の古い時期（10世紀前半）に操業していたと考える。灰釉陶器のほとんどは灰原から出土しており、灰原の堆積状況から上層群と下層群に分かれる。上層群には深碗と大皿がセットで出てくるとともに長頸瓶も胴部で張る大型のものになる。上層群と下層群には分けることができ、碗・皿・瓶の法量分布より下層群と上層群のそれぞれで、小型・中型・より大型の3つのグループに分けることができる。また高台についても法量分布から、多様化下層群から上層群へは多様化するといえる。口縁部の形状と高台の形状の分類でははっきりと古い時期のものと新しい時期のものと分けることができるものは少ないが、高台にはっきりとした稜がみられるものは古く高台が長くなるものは新しいといえるが、大きな差が見られず短期間の操業であったと考える。碗は器高が低くなる傾向にあり、碗と皿の区別がつけにくくなる。高台も胴部につくようになる。一貫して文字や線刻絵画のあるものが100点に1点の割

合でみられる。全体的につくりが雑で色は白く分厚い。古い要素と新しい要素が混じっているといえる。周辺の古窯跡との時期関係はおそらく榎ノ木洞1号窯・砂行古窯の操業とやや重なって始まったものと思われる。

D区の火と水を伴う祭祀遺構は、谷向かいのB区の灰釉陶器窯を意識しているもので、窯の操業終了とともに廃棄されたものと考えられる。D区の祭祀遺構は火守も兼ねた、まじないの場であったと思われる。

第8節 古窯関連祭祀遺跡について

深橋前古窯で焼成されたと思われる灰釉陶器が出土する遺構が古窯とは谷を隔てた対岸で検出された。この深橋前古窯の灰釉陶器を伴う遺構には大きく2種類のものがある。一つは灰釉陶器の破片が出土し、遺構は楕円形で浅いが炭化材が多く検出されるもので、もう一つは土坑や堅穴住居跡の構造をしていて床（底）に白色粘土が敷き詰められ、灰釉陶器の碗が2つもしくは3つ完形で地鎮祭祀として埋められている遺構である。また検出状況からこれら2種類の遺構はセットになっているようである。特にSXD08はSXD07を切っており、薪をたくさん燃やして火を伴う祭祀を行った後に碗を据えて床を張る地鎮祭祀を行うといった一連の祭祀が考えられる。炭化材の多い遺構はSXD07、SXD14、SXD16で白色粘土を敷き灰釉陶器が出土する遺構はSXD08、SXD15、SXD06、SXD14でありこちらも白色粘土を敷いた後に火を伴う祭祀を行っているものもある。

特にSXD08とSXD15は一連のもので火を使って特殊な役割を果たしていたものと思われる。火と関わる祭祀的な施設で、火を絶やさない等、宗教的な場であったと考えられる。深橋前古墳で火を使って再利用したところから出土した灰釉陶器も深橋前古窯で焼成された碗と考えられ、この古墳の石室内再利用の遺構も、SXD08・SXD15に関連して火を使う祭祀を行っていたようである。

第9節 深橋前遺跡の森の歴史 —炭化材から周辺の植生を復元—

本遺跡において樹種同定を行った炭化材は、弥生時代末～古墳時代初頭の焼失堅穴住居跡出土の建築材、平安時代の火を用いる祭祀遺構の燃料材、灰釉陶器窯跡灰原出土の燃料材である。時期と出土状況は異なるが、本古窯の窯業の燃料材はどのような樹種を利用していたのか、4世紀から10世紀の間に樹種利用に変化があったか、またその樹種から当時の遺跡周辺はどのような森林環境であったかが分析によって明らかになった。分析は植田弥生氏（パレオ・ラボ）が行った。

ただし、遺構に伴うシルトが検出されなかったため花粉分析は行っていない。そのため時代別本遺跡の森全体の植生がどのようなであったかは未解明で、建築材・燃料材として選択されている樹種のみからでは用途によって使用される材が違うということもあって潜在植生が明らかにならない。よって本遺跡の植生の変化については推定の域である。

弥生時代末～古墳時代初頭の焼失堅穴住居跡6軒から検出された炭化材は出土状況から、住居の建

築材と判断し分析した。その結果SBA05からは他の5軒（SBE06・SBF38・SBF29・SBF25・SBF05）にくらべ、多くクリが検出されている。SBA05は、他の多くの住居跡が急斜面につくられているのに対して尾根頂部の平坦部に位置し、水銀朱の付着した銅鏝が出土している。またSBA05に隣接して、祭祀的な意味が考えられる遺物が多く出土したSBF02や、筒状銅製品が出土したSBF05がある。植田弥生氏は祭祀的な建物として固いクリ材が選択使用されていたと考えている。藤根久氏はほぼ同時期の尾崎遺跡でも祭祀的な要素を持つ第24号住居跡の建築材はクリが主体であるのに対し、第8号住居跡はクスギ節が主体であり、遺構の性格とクリ材の使用は何かの関係が予想されるとしている。

平安時代の土坑墓3基（SXD13・SXD07・SXD14）は、火を用いる祭祀遺構と考えているため分析した炭化材は燃料材と考えた。3基ともクスギ節が検出されたがSXD13からは油の多いアカマツが検出された。クスギ節は主要または多量に燃料材として使われていたと推測される。

灰軸陶器窯跡灰原から出土した炭化材は、窯業用の燃料材と判断した。また、灰原の分層に基づいて採取した炭化材を、層位ごとに分析している。灰原の分層を堆積状況から大きくA・B・Cと区分して分析に出したところ、興味深い結果が出た。灰原下層のA・Bではクスギ節のみが出土するのに対して、上層のCからはクスギ節にコナラ節とマツ属複雑管束重属が加わるという変化が認められた。更にクスギ節の年輪数は20年輪以上で、最高では放射径3.5cmで84年輪が数えられた。このことから本古窯の燃料材はクスギ節が最優先樹種で、自然の森を伐採して使用していたが、次第にクスギがなくなり二次林としてはえてきたマツ・コナラが補足され、クスギがなくなると窯を捨て移動したのではないとも考えられる。正家1号窯でも灰原の下層の赤色灰層からはクスギ節とコナラ節を含めたナラ類のみが検出され、上層の黒色灰層からはナラ類と若干の二葉松が検出されている。ただし、このように灰原から検出された炭化材を分層ごとに分析した事例が少ないため、このような傾向が灰軸陶器窯に共通しているとは断言できないが、本古窯では自然軸をクスギ節にこだわっていたのではないだろうか。

本遺跡検出遺構は①弥生時代末～古墳時代初頭の堅穴住居跡86軒、②古墳時代の土坑墓2基、③後期古墳1基、④奈良時代火葬墓6基、⑤平安時代土坑墓6基、⑥灰軸陶器窯跡1基であり大量に樹木を伐採するのは①と⑥であると考えられる。①から⑥の間には極端な森の植生の変化が見られないのではないと思われる。

本遺跡の弥生時代末～古墳時代初頭の建築材に、他の遺跡では住居跡出土樹種としてよく知られている落葉広葉樹のクスギ節とコナラ節が以外と使われていないことから、この時期にはあまりクスギ節とコナラ節が遺跡周辺になかったのかもしれない。ところが平安時代の灰軸陶器窯跡の窯業用の燃料材からは多量のクスギ節が検出されることから、堅穴住居跡の建築材に使われたコナラ節・クリ・サクラ属・アカガシ亜属・シイノキ属・ススキ属類似が多く伐採され2次林化がすすみクスギ節が増えていったともかんがえられる。そして更に窯業用としてクスギ節が大量に使われることにより2次林化が生じ徐々にコナラ・マツが混じるようになったとも推測される。このように炭化材に利用された樹種構成から、遺跡周辺の森林に2次林化が進行していった過程が推測される。

注2 藤根久 1993 尾崎遺跡住居跡出土炭化材樹種 | 尾崎遺跡 | 財団法人岐阜県文化財保護センター。135～138、図版27～

参考文献 —文章中で出典を述べたものは除いた—

- 赤塚次郎 1990 「廻間式土器」『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1990 「土器・土器群の形成」『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1992 「山中式土器について」『廻間遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1995 「壺を加飾する」『考古学フォーラム7』（考古学フォーラム）
- 赤塚次郎 1997 「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西定免遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2001 「川原上層Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式の設定」『川原遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河口・宇田様式の再編」『研究紀要第2号』愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2002 「八王子古宮式土器について」『八王子遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第92集）愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2002 「考古資料大観 第2巻 弥生・古墳時代土器Ⅱ」小学館
- 池端清行 2000 「一般国道23号中勢道路（9区画）建設事業に伴う長遺跡発掘調査報告書」（三重県埋蔵文化財調査報告書115-9）三重県埋蔵文化財センター
- 石黒立人 1994 「弥生土器研究をめぐる一視点」『朝日遺跡V（土器編・総集編）』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第34集）愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人 1999a 「土器からみた古墳時代初頭の地域類型—器種組成を指標に—」『門沼遺跡』（愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集）愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人 1999b 「弥生時代美濃地方とその特質」その後—弥生時代における文化的多様性を如何に把握するか—」『岐阜史学』第96号 岐阜史学会
- 石黒立人 2000 「集落と土器」『YAY! 弥生土器を語る会2 0 回到達記念論文集』弥生土器を語る会
- 石黒立人 2002 「遺跡と集落」『第5 回例会発表要旨集』中部弥生時代研究会
- 石野博信 1990 『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
- 市毛勲 1998 『新版 朱の考古学』（雄山閣）
- 岩瀬彰利 1996 「縄文・弥生時代の煮炊き方法—大西貝塚・橋良遺跡例より推測した一例—」『鍋と壺 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 内堀信雄・井川祥子 1996 「美濃における古代土器煮炊具の様相」『鍋と壺そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 内堀信雄 1999 「城之内遺跡—長之公園整備事業に伴う緊急発掘調査—（第1分冊）」岐阜市教育委員会
- 奥野充 2001 「テフクロノロジーと14Cクロノロジー」『第四紀研究』第40巻第6号 日本第四紀学会
- 恩田知美 2002 「美濃地域における弥生時代後期から古墳出現前夜の土器様相—高坪を中心として—」『勢濃屋』創刊号（勢濃尾研究会）
- 春日井恒 1998 「今宿遺跡」（岐阜県文化財保護センター調査報告書第37集）（財）岐阜県文化財保護センター
- 坂井尚美 2001 「鶴沼古市場遺跡B地区」（各務原市文化財調査報告書）各務原埋蔵文化財調査センター
- 加納俊介 2000 「S字壺の分類を考える」『第7回東海考古学フォーラム三重大会資料集 S字壺を考える』東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
- 加納俊介・石黒立人 2002 「弥生土器の様式と編年—東海編—」木耳社
- 河上邦彦 1999 「終末期古墳の立地と風水思想」『東明神古墳の研究』（檀原考古学研究所研究成果第2冊）（奈良県檀原考古学研究所）
- 紅村弘 1973 a 「弥生式土器」『北裏遺跡』可見町教育委員会
- 紅村弘 1973 b 「牧野小山遺跡 県道七宗可兒線道路工事埋蔵文化財調査報告書」美濃加茂市教育委員会
- 紅村弘 1980 「条痕弥生式土器の諸問題について」『岐阜県八百津町南森遺跡発掘調査報告』八百津町教育委員会

- 紅村弘 1981『東海先史文化の諸段階 補足改訂版』
 紅村弘 1987『西日本・中部日本における弥生時代成立論』
 甲元真之 1986『弥生時代の食料』(『季刊考古学』第13号) 雄山閣
 佐野康雄 1998『牧野甕』『牧野小山遺跡C地点』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第39集)(財)岐阜県文化財保護センター
 佐野康雄・村木誠 1993『弥生時代後期後半の土器に現れた地域差について』(『尾崎遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第13集)(財)岐阜県文化財保護センター
 佐野康雄 1997『岐阜県の石器』(『農耕開始期の石器組成4 中部・近畿(三重・滋賀・京都・奈良・和歌山)』(国立歴史民俗博物館資料調査報告書7) 国立歴史民俗博物館
 佐原真 2001『考古学の年代』(『第四紀研究』第40巻第6号 日本第四紀学会)
 篠原英政・田中弘志 1999『弥勒寺東遺跡』(関市文化財調査報告第21号) 関市教育委員会
 篠原英政・吉川英敏 1985『神野遺跡』 関市教育委員会
 鈴木元 2002『美濃の弥生墓制』(『美濃の考古学』第5号 美濃の考古学刊行会)
 鈴木裕篤 1989『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』(沼津市文化財調査報告書第46集) 沼津市教育委員会
 千藤克彦 2000『野登遺跡Ⅰ』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第66集)(財)岐阜県文化財保護センター
 東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996『銅と甕そのデザイン』
 東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会 1998『土器・墓が語る～弥生から古墳へ～』
 東海考古学フォーラム三重大会実行委員会 2000『S字甕を考える』
 高木洋 2000『土器を分類するということ～牛物の分類と進化論からの連想～』(『美濃の考古学』第4号) 美濃の考古学刊行会
 田崎博之 1986『コメ』(『季刊考古学』第13号) 雄山閣
 都立比呂志 1998『都市形成と国家論』(『日本古代の国家と村落』 培書房)
 寺崎薫 1986『畿内式古式土器の編年と二・三の問題』(『矢部遺跡』(奈良県史跡名勝天然記念物報告書第49集) 奈良県教育委員会
 中島勝国・亀谷泰隆 1979『欠ノ上遺跡発掘調査報告書』 可見町教育委員会
 中村俊夫 2001『放射性炭素年代とその高精度化』(『第四紀研究』第40巻第6号 日本第四紀学会)
 長野県考古学会弥生部会 1999『長野県弥生土器集成図録』 長野県考古学会弥生部会
 直海俊一郎 1994『分類学の黎明期における生物分類と種概念—リンネとアンダーソンの分類理論を中心に—』(『リンネと博物学—自然誌科学の源流—』 千葉県立中央博物館)
 奈良国立博物館 1984『昭和59年正台展覧 目録』 奈良国立博物館
 原田幹 1995『東海型小型高杯考』(『考古学フォーラム7』 考古学フォーラム)
 原田幹 2000『S字甕の波及と定着をめぐる問題』(『第7回東海考古学フォーラム三重大会資料集 S字甕を考える』 東海考古学フォーラム三重大会実行委員会)
 平井勝 1991『弥生時代の石器』(考古学ライブラリー64) ニューサイエンス社
 藤村俊他 2002『尾崎遺跡発掘調査報告書』 美濃加茂市教育委員会
 北條芳隆 2002『考古資料大観第9巻 弥生・古墳時代』 小学館
 増子康廣・山下勝年 2002『東海西部の縄文中期前葉土器編年』(『古代人』62 名古屋考古学会)
 増子康廣・長江洋一 1995『クダリヤマ遺跡』 稲武町教育委員会
 松浦晋平・藤本強福 1999『考古学と年代測定学・地球科学』(考古学と自然科学④) 同成社
 宮川芳照 1983『愛知県丹羽郡大口町仁所野遺跡』(大口町埋蔵文化財調査報告書第4集) 大口町教育委員会
 村木誠 1993『弥生時代後期後半の土器に現れた地域差について』(『尾崎遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第13集)(財)岐阜県文化財保護センター
 村瀬泰啓 2002『富田清友遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第72号)(財)岐阜県文化財保護センター
 森岡秀人 2002『高地性集落の現状と今後の展望』(『古代文化』第54巻第4号) 財団法人古代学協会
 吉田英敏 1994『川谷遺跡』 可見市教育委員会
 吉田英敏 1984『重竹遺跡—その3—』 関市教育委員会
 渡辺誠 1986『堅果類』(『季刊考古学』第13号) 雄山閣

遺構・遺物觀察表

凡 例

1. ここには、深橋前遺跡で検出された遺構と、出土した遺物の観察表をまとめた。
2. 遺構番号・遺物番号は、本文・挿図・図版で用いた呼称と一致する。
3. 以下、各観察表ごとに述べる。

表29 竪穴住居跡等観察表

- ①ここには竪穴住居跡・方形周溝墓・土坑墓・段状遺構・土坑・不明遺構・土器集積の観察表を掲げた。
- ②記述にあたって用いた用語については、第4章第1節冒頭に定義したものと参照願いたい。
- ③掲載遺物点数の（ ）内は金属製品・石器の外数である。

表30 II・III期土器観察表

- ①法量の（ ）は残存率6/12未満で、2本の垂直2等分線によって推定したものである。
- ②記述にあたって用いた用語については、第4章第1節冒頭に定義したものを参照願いたい。
- ③調整等の細かな表記については、先行の報告書、特に『砂行遺跡』『南青柳遺跡』によるものが多い。

表31 I期土器観察表

- ①土器様式については、根拠となる編年資料を統一することができなかったが、参考まで載せたものである。

表32 IV期土器観察表

- ①表30II・III期土器観察表に準ずる。

表33 金属製品観察表

- ①7001～7003は青銅製品、その他は鉄製品である。

表34 石器属性表

- ①属性表の項目等の基準については第4章第5節参照

表35 須恵器観察表

表36 灰釉陶器（窯跡関連遺物）

- ①計測方法について98ページ参照

表37 山茶碗観察表

深橋前古宮跡仮掘出土遺物計測方法

出土遺構・グリッド:	室内・室付等土坑から出土しているもの、灰原の層位が分かるもの、遺構から出土しているもの、一番破片の多いグリッド、主に出土しているのが「A」は灰原の26W、26 X、25W、25 X、24W、24 Xである。		
層位:	遺構出土のものは土上。 灰原から出土しているものは層位で分かるもの(高1→9→2→10→8→4→5→7順) 灰原の層位は発掘調査時の灰原の断面図に対応する。		
接合できたグリッド:	接合できたグリッドすべて。		
口径 (cm)、底径 (cm):	直径を同心円で計測。単位は5mm。ゆがんでいるものは本来の形に近い部分で計測。		
高さ (cm):	本来の高さに近い部分で計測。		
口縁残存、底付残存:	全周するものを12とし、12分の1残存のものを1と記入。1~12、同心円で計測。小数点以下は四捨五入。1無い場合は1以下。		
最大幅 (縦断のみ):	肩幅から胴部の間で一番狭いところ。		
胴部高 (縦断のみ):	袖基径から高台付け根(高台との境)までの高さ。		
頸部高 (縦断のみ):	器高一(胴部高+高台高)		
焼成:	ほとんどは自然焼だが焼成は良好である。 不良は室内部の夾の隅りのわらひところにあつたもので、焼成がやや不良でもらうもの。 焼成不良のものは消費地で使用していたかは不明。		
重ね焼き痕:	遺部内面に付着している高台や痕跡で(自然焼の有無等)、上に重ねたものの底径を計測。		
口縁形:	(縦断以外) (縦断)		
(小文字)	Z: 内溝	f: 上と下につまみ出す	柄りは先の丸い工具による柄り。
	a: 直	g: 上と横につまみ出す	つまみ出すものは柄り付けた上を先の丸い工具で押さえる。
	b: 先丸	h: 下へつまみ出す	dはほぼ直角に深く折れるもの。
	c: やや外反	i: 横へつまみ出す	
	d: 外反折れ	j: 上につまむ下へ重れる	重れるものは平らな面のある工具で押さえている。
	e: 先曲げ	k: 下へ重れる	
高台形:	(縦断以外) 高台外面 (縦断)		
(大文字)	A: まっすぐ・横有	I: 2段階柄り(中央浅い+内側深い)	押さえ: 胴部と高台の境目を工具で押さえるもの。
	B: 押さえ・まっすぐ	J: 内側柄り(浅い)	まっすぐ: 平らな工具をあてるもの。
	C: まっすぐ	K: 中央柄り(深い)	横有り: 工具を使ってくっきりと線をつくるもの。
	D: 押さえ・まっすぐ	L: 柄り無し	丸み: まっすぐなものに比べ丸みエッジが丸いもの。
	E: 斜め・重れる	M: 高台無し	幅広い: 平らな工具で磨る。
	F: 斜め・横有		幅広い: 丸みのある工具で磨る。
	G: 丸み		柄り無し: 断面が台形。
	H: 押さえ・丸み		
	長さ短い(4~5mm) ... 1 蓋		
	高さ普通(8, 9mm) ... 2 瓶・皿		
	長さ長い(1.4mm以上) ... 3 深輪		
	蓋は焼き資料4291(皿)より口縁形と高台形の組み合わせで時期の近いものがわかる。		
	a+G	b+G	c+G b+F
	a+H	c+H	c+E
			c+F
高台高:	胴部との境までの垂直高さ。		
高台幅:	断面が三日月形のものほど幅が小さくなると考え計測。		
高台断面:	高台の内面がまっすぐのもの、内溝するものとに区別。 内溝する方が三日月形に近いもの。		
胴部上・下半部つなぎ目:	なかさの後の粘土層のつなぎ目を推定したと思われる。		
(縦断のみ)	最大幅の上下が下に残る深い痕跡の境。		
胴部の痕跡でとへう柄り:	ほとんどが高台を付ける前に、L1層部を下にした状況で胴部を多くて半分の高さまでへうで磨る。 柄りないものもある。特に皿状縁台はへう柄りをしてない。		
へう柄り位置:	キ・・・胴の半分から下を削る 下・・・胴の下部を削る		
底部糸切り痕:	皿状縁台はほとんど糸切り痕が磨る。 瓶・皿・瓶はまれに糸切り痕が残るものもある。 磨削方向 筒状糸切り痕・静止糸切り痕 残っている・残っていない		
圧痕:	爪形状圧痕、へう。あるものは○。		
	爪形状圧痕は底部外面中央に放射状に響く爪痕である。何らかの調整に伴い付いたものか?		
内文:	文様の一掃か断面へつぎで底部中央を削り削っている。底部内面が多いが、外側にもある。		
施釉方法:	刷毛塗り・・・刷毛塗りのかすの痕跡が残りに染み込んでいるもの。 塗り付け・・・くっきりと輪のかかりのわかるもの。刷毛塗りならこういつけたらほしくないというもの。 種類によって(形の違ひに対応して)施釉の境目が異なっている。 瓶・皿の日常品はほとんど塗り付けである。 小瓶・輪花輪・深輪・大皿などで、皿類でも特殊な器形のものには刷毛塗りである。 鉢・瓶類は手塗りである。 刷毛塗り、筆塗りのものは内外面とも全面に塗る傾向がある。 縦断以外はほとんど内面、外面とも施釉を施す。 深輪でも口縁部の内面に施釉のみ残るものがあるが自然焼との区別がつけにくい。 駒爪縁台が底部外面に付着していたものは高台が削られた痕跡が多くなることから判断。		
備考:	文字・彫刻		
高台に付着:			

G, Hはほぼ同じ。
cがeになりやすい。
GとDもほぼ同時期。
cともほぼ同時期。
D, Hは断面が多い。

F 取割穴付基礎設置表 (2 基群)

グリッド	棟別	海抜	主軸方位	隅角	幅	奥行	傾斜方向	深さ	溝溝	基礎	地床厚	柱丈	時期	切り合い関係	備考	経測物点数	拓測物点数		
SBF01	26J	13.4	N33° E	丸	方形	3.50	2.05	南西	0.15	無	有	有	丸	無	II-3		10	3	
SBF02	24L	足塚海抜	78.5	N133° W	丸	方形	4.73	3.68	南東	0.25	無	有	有	有	III-3		631	30	
SBF03	女																		
SBF04	25L	足塚海抜	77.9	N82° W	丸	方形	4.20	1.25	南東	0.08	無	無	無	無	II-4	SBF05を切る	99	1	
SBF05	25L	足塚海抜	78.2	N49° W	丸	方形	2.80	2.65	南西	0.09	無	無	有	有	II-3	SBF08を切り、SBF09・06に切られる	91	4	
SBF06	25L	18.4	77.6	N78° W	丸	方形	1.80	0.20	南東	0.12	無	無	無	無	II	SBF05を切る	6	0	
SBF07	女																		
SBF08	24K	足塚海抜	78.3	N34° W	丸	方形	4.85	4.50	南東	0.50	無	有	無	無	III-4	SBA05・SBF38・11を切り、SBF05に切られる	269	6(1)	
SBF09	女																		
SBF10	女																		
SBF11	25J	足塚海抜	78.7	N45° E	丸	方形	3.15	2.05	南西	0.19	無	無	無	無	II	SBF08に切られる	277	3	
SBF12	女																		
SBF13	26L	22.0	76.0	N36° W	丸	方形	2.20	2.05	南東	0.78	無	無	無	無	II	SBF14を切り、SBF15に切られる	139	2	
SBF14	26L	25.4	75.9	N20° W	丸	方形	2.55	1.20	南東	0.28	無	無	無	無	II	SBF13を切る	5	1	
SBF15	27L	20.4	76.0	N32° W	丸	方形	5.30	2.68	南東	0.52	無	無	無	無	4	II	SBF09・SBF15・54を切る	116	1
SBF16	27M	19.8	75.2	N46° W	丸	方形	3.92	1.95	南東	0.43	有	有	有	有	II	SBF15を切る	47	3	
SBF17	26M	20.4	75.0	N70° W	丸	方形	1.95	1.20	南東	0.35	無	無	無	無	2	II	無	34	0
SBF18	27O	31.8	72.8	N48° W	丸	方形	3.13	0.95	南東	0.38	無	無	無	無	2	II	無	83	0
SBF19	27N	27.8	73.6	N42° W	丸	方形	3.13	0.96	南東	0.36	無	無	有	有	無	II	F区上層 SBF20に切られる	42	0
SBF20	27N	23.4	73.2	N41° W	丸	方形	2.90	1.08	南東	0.38	無	無	無	無	II-3	F2上層 SBF16に切られる	87	2	
SBF21	女																		
SBF22	27M	26.8	79.3	N43° W	丸	不明	1.95	1.35	南東	0.35	有	有	無	無	無	II	F区上層	2	0
SBF23	29K	25.5	76.3	N38° W	丸	方形	3.65	1.28	南東	0.71	無	無	無	無	無	II	SBF24を切る	83	5
SBF24	29J	26.8	76.3	N36° W	丸	方形	3.43	2.13	南東	0.47	無	無	無	無	無	II-4	SBF25を切り、SBF23に切られる	169	12
SBF25	30J	28.5	76.0	N30° W	丸	方形	3.56	1.66	南東	0.75	有	有	無	無	II-4	SBF24に切られる	193	12	
SBF26	女																		
SBF27	33J	34.3	73.7	N27° W	丸	方形	3.02	0.93	南東	0.25	無	無	無	無	無	無	無	7	1
SBF28	34J	33.9	72.4	N25° W	丸	方形	1.35	0.40	南東	0.18	無	無	無	無	不明	無	0	0	
SBF29	29M	18.0	71.9	N34° W	丸	方形	4.55	1.85	南東	0.56	有	無	有	有	2	II-2	山崎側溝がSBF33に切られる	301	31
SBF30	女																		
SBF31	27N	31.0	72.5	N56° W	丸	方形	6.88	1.25	南東	0.15	無	無	無	無	II-3	SBF18・33を切る	70	5	
SBF32	女																		
SBF33	28M	21.3	72.4	N41° W	丸	方形	4.55	1.03	南東	0.22	無	有	無	無	無	II	SBF29を切り、SBF31に切られる	12	0
SBF34	30L	17.3	72.4	N39° W	丸	方形	3.78	1.80	南東	0.38	無	有	無	無	2	II-4	SBF29・33を切る	562	39
SBF35	31K	18.0	72.5	N31° W	丸	方形	2.55	1.95	南東	0.35	無	無	無	無	無	II-4	SBF34に切られる	115	5
SBF36	女																		
SBF37	女																		
SBF38	24K	足塚海抜	78.2	N92° E	丸	長方	3.62	4.11	西	0.06	無	無	有	有	II-2	SBA05・SBF08に切られる	45	7	
SBF39	28J	22.4	79.3	不明	丸	不明	2.95	1.35	南東	0.17	無	無	無	無	II	F区上層	10	0	

方角測量制御表 (4基)

グリッド	棟別	海抜	主軸方位	隅角	幅	奥行	溝幅	溝深	時期	切り合い関係	備考	経測物点数	拓測物点数	
1号方角測量	10Y	20.00	76.9	N29.5° W	丸	7.90	5.25	1.25	0.54	II	SED15cに切られる	D区	25	0
2号方角測量	8Z	13.50	77.2	N30.5° W	丸	4.20	3.23	1.13	0.25	II-3	無	D区	19	4
3号方角測量	7B	16.60	76.5	N80.5° W	丸	11.1	5.81	1.56	0.52	II-4	無	E区	43	9
4号方角測量	5I	26.60	77.2	N70.5° W	丸	3.91	2.75	0.92	0.21	II-2	無	D区	57	9

土壌基礎設置表 (2基)

グリッド	棟別	海抜	主軸方位	形状	長さ	幅	時期	切り合い関係	備考	経測物点数	拓測物点数	
3号土壌	9M	15.1	72.3	N72.3° W	円形	0.71	0.64	II-3	4号土壌中に切られる	D区	1	1
4号土壌	9M	15.1	72.2	不明	不明	0.54	0.62	II-4	3号土壌を切る	D区	2	2

経測導線設置表 (1基)

グリッド	棟別	海抜	主軸方位	隅角	幅	奥行	時期	切り合い関係	備考	経測物点数	拓測物点数	
足塚導線	2K	39.4	77.7	N40.5° W	丸	8.00	1.40	II-2	無	E区	311	12

土気観測点 (6基)

グリッド	棟別	海抜	主軸方位	形状	長さ	幅	時期	切り合い関係	備考	経測物点数	拓測物点数	
SKA01	21J	19.0	74.7	不明	縦長正方形	1.08	1.07	無	無	II-2	4	1
SKA02	24J	10.4	77.7	不明	縦長正方形	1.10	0.76	無	不明	0	0	
SKA03	26O	10.4	73.3	不明	縦長正方形	2.66	1.08	無	不明	2	2	
SKB03	26B	14.2	76.5	N90° E	縦長正方形	1.32	1.10	無	不明	1	1	
SKF01	26O	29.8	74.6	不明	縦長正方形	2.05	1.50	無	不明	0	0	
SKF02	26M	19.4	75.4	N72° E	縦長正方形	1.97	0.88	無	不明	0	0	

不明導線設置表 (2基)

グリッド	棟別	海抜	長さ	幅	切り合い関係	備考	経測物点数	拓測物点数	
SKB06	26Z	17.90	79.80	3.23	0.76	無	不明	43	0
SXD02	11A	19.00	74.10	(3.08)	0.95	無	不明	55	2

土気調査観測点 (2基)

グリッド	棟別	海抜	距離	幅	時期	備考	経測物点数	拓測物点数	
SUA 01	21G	10.2	76.6	0.19	0.57	II	43	6	
SUF 01	30L	19.7	72.2	12.50	6.50	II	SBF29・35上層	55	13

遺物番号	出土状況	層	器種	数量(口)	口徑	高さ	底径	形状	装			色			保存状態	備考	所在	図号		
									柄	口	内	外	内	外						
2126	SBE29	7	蓋付						10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	101	33
2129	SBE29	7	蓋付						タテ方向の2分の1	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	101	35
2130	SBE29	7	蓋付	B	13.3				0.5-1.0cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	101	33
2131	SBE29	7	蓋付	(13.0)	(14.0)	(17.0)			10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	101	38
2132	SBE29	7	蓋付	B	14.0				10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	58
2133	SBE29	7	蓋付						10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	55
2134	SBE29	7	蓋付						2.4	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	55
2135	SBE29	7	蓋付						7.3	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	44
2136	SBE29	7	蓋付						0.6	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	40
2137	SBE29	7	蓋付	C	(17.2)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	50
2138	SBE29	7	蓋付	A	(15.4)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	39
2139	SBE29	7	蓋付	B					5.2	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	44
2140	SBE29	7	蓋付						1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	50
2141	SBE29	7	蓋付	A	15.7	21.0	4.8		1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	38
2142	SBE29	7	蓋付	B	17.4				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	50
2143	SBE29	7	蓋付		(18.0)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	50
2144	SBE29	7	蓋付	B	(16.0)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	50
2145	SBE29	7	蓋付	A	(22.1)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	50
2146	SBE29	7	蓋付	B	(10.2)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	102	50
2147	SBE29	7	蓋付	B	(18.5)				10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	30
2148	SBE29	7	蓋付	A	(11.9)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	55
2149	SBE29	7	蓋付	B	2.5				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	58
2150	SBE29	7	蓋付	A	2.2				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	55
2151	SBE29	7	蓋付	B	7.7				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	35
2152	SBE29	7	蓋付	B	47.0				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	30
2153	SBE29	7	蓋付	A	(19.2)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	55
2154	SBE29	7	蓋付	B	(16.2)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	39
2155	SBE29	7	蓋付	B	(16.0)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	112	38
2156	SBE01	2	蓋付	H	(21.0)				10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	40
2157	SBE01	2	蓋付	B	(15.4)				10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	55
2158	SBE01	2	蓋付						10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	33
2159	SBE02	8	蓋付	B	18.0				0.5-1.0cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	31
2160	SBE02	8	蓋付	B	21.5				0.5-1.0cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	31
2161	SBE02	8	蓋付	C	(22.4)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	34
2162	SBE02	8	蓋付						1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	50
2163	SBE02	8	蓋付	B					1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	55
2164	SBE02	8	蓋付						10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	50
2165	SBE02	8	蓋付						10cm以下の砂状土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	55
2166	SBE02	8	蓋付	B					0.5-1.0cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	34
2167	SBE02	8	蓋付		(11.4)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	35
2168	SBE02	8	蓋付	C	(15.9)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	34
2169	SBE02	8	蓋付	B	(23.8)				1.0-1.5cm程度の土をわずかに含む	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	黒	115	31

遺構番号	出土場所	層	特徴	位置 (m)			出土	形状			色・式			現状状況	備考	採掘	図録	
				口幅	長さ	深さ		材質	内径	外径	高さ	内径	外径					断面
2170	SBF02	3	高H C7				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	タテ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	浅黄褐色 (F.5YR8/2)	浅黄褐色 (F.5YR8/2)	浮遊物			118	55
2171	SBF02	2	高H				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	横向き土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			118	55
2172	SBF02	2	高H				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	横向き土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			118	55
2173	SBF02	2	高H D				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ・ヨコ方向の土ガキ	タテ・ヨコ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			118	55
2174	SBF02	2	高H C				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ・ヨコ方向の土ガキ	タテ・ヨコ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			118	55
2175	SBF02	2	高H C	13.4	11.1	9.9	0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ・ヨコ方向の土ガキ	タテ・ヨコ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			118	31
2176	SBF02	2	高A 1	02.03			0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	タテ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			118	56
2177	SBF02	3	高				0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ・ヨコ方向の土ガキ	縦横直線	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			118	56
2178	SBF02	3	高H	02.41			0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ・ヨコ方向の土ガキ	縦横直線	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			118	56
2179	SBF02	3	高H	02.33			0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ・ヨコ方向の土ガキ	タテ・ヨコ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			119	56
2180	SBF02	2	高D	09.7			0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	タテ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			119	56
2181	SBF02	2	高D	18.4			0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	縦横直線	ナシ	褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			119	40
2182	SBF02	7	高A 2	15.4			0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ハケ	赤褐色・ハケ	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			119	40
2183	SBF02	2	高				0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	縦横直線	褐色 (F.5YR7/2)	黄褐色 (F.5YR7/2)	黄褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			119	56
2184	SBF02	3	高				0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	縦横直線	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			119	56	
2185	SBF02	7	高C 2			3.4	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ハケ	赤褐色・ハケ	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			119	40
2186	SBF02	2	高C 2	14.08	14.1	3.6	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	ハケ・タテ	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			119	41
2187	SBF02	3	高				0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ハケ	赤褐色・ハケ	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			119	56
2188	SBF02	2	高				0.5~1.2mの砂粒をわすれかき	土	ハケ・縦横直線	赤褐色・ハケ、縦横直線	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			119	44
2189	SBF02	3	高				0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ・ヨコ方向の土ガキ	タテ・ヨコ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			119	40
2190	SBF02	2	高	7.9	8.2	3.0	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ハケ	褐色	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			119	36
2191	SBF04	1	高H			14.59	0.5~4.0mの砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	横方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			121	31
2192	SBF05	2	高C 2			11.83	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	縦横直線・ナシ	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	31
2193	SBF05	2	高C 2			02.03	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ナシ	ナシ	黄褐色 (F.5YR6/2)	褐色 (F.5YR6/2)	褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	56
2194	SBF05	2	高C 2			02.23	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ハケ	ナシ	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	56
2195	SBF05	2	高D			17.4	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	口縁ナシ	浮遊物	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			122	41
2196	SBF06	3	高H C			15.9	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	縦横直線	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	31
2197	SBF06	3	高H C7				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	ハケ	褐色	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			122	56
2198	SBF06	2	高C			19.91	0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	タテ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			122	56
2199	SBF06	3	高			5.4	0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	ハケ	褐色	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	56
2200	SBF06	2	高A 2				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	ハケ	褐色	褐色 (F.5YR6/2)	褐色 (F.5YR6/2)	褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	56
2201	SBF06	3	高H C				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	タテ方向の土ガキ	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	褐色 (F.5YR7/2)	浮遊物			122	56
2202	SBF 11	13	高C 7			19.6	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ナシ	ナシ	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	51
2203	SBF 11	13	高			5.0	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ハケ	褐色	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	51
2204	SBF 11	13	高			0.1	0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	高H	赤褐色	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	51
2205	SBF 12	3	高H D7				0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	縦横直線	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	59
2206	SBF 12	3	高			19.81	0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	縦横直線	褐色	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			122	59
2207	SBF 15	2	高C 7			2.0	0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	赤・ハケ	褐色	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			130	56
2208	SBF 16	3	高			8.5	0.1m以下の砂粒をわすれかき	土	ハケ	褐色	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			131	44
2209	SBF 16	2	高			4.4	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	タテ方向の土ガキ	ナシ	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			131	56
2210	SBF 16	2	高			6.2	0.1~0.2mの砂粒をわすれかき	土	ナシ	褐色	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	黄褐色 (F.5YR6/2)	浮遊物			131	56

遺物番号	出土状況	遺物	注 意 点	形状	遺 留		色 調			保存状態	備 考	写真			
					外 形	内 形	外 色	内 色	断面						
2300	50F34	3	遺B	(13.5)	1m以下の段状をいくつかに築	土	ナブ	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	161	60	
2301	50F34	3	遺B	(16.5)	1m以下の段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	161	60	
2302	50F34	3	遺D	(17.8)	前	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	161	60	
2303	50F34	3	遺	(15.0)	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	外周縁部1/3	161	42	
2304	50F34	3	遺D	(14.8)	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3、底縁部	161	40	
2305	50F34	3	遺F	14.1	10.0	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80	0.80	161	40
2306	50F34	3	遺F	(19.0)	1.0-2mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	外周縁部1/3	161	51	
2307	50F34	4	遺	(5.0)	1-2mの段状をいくつかに築	土	ナブ	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	60	
2308	50F34	4	遺	4.5	1m以下の段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	60	
2309	50F34	3	遺	(5.4)	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	44	
2310	50F34	3	遺	(5.4)	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	60	
2311	50F34	3	遺	(5.4)	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	60	
2312	50F34	3	遺	(5.2)	0.5-2mほど段状をいくつかに築	土	ナブ	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	にじみ黄褐色 (10YR7/4)	口縁部1/12	外周縁部1/3	162	44	
2313	50F34	4	遺	(5.2)	1-2mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	60	
2314	50F34	3	遺	6.0	1-2mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	44	
2315	50F34	3	遺	4	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	44	
2316	50F34	3	遺	8.0	1-2mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	44	
2317	50F34	3	遺	8.0	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	44	
2318	50F34	4	遺A	8.7	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	162	44	
2319	50F35	10	遺A	7	18.0	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	163	36
2320	50F35	9	遺B	1	18.1	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	163	36
2321	50F35	9	遺	(19.0)	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	163	36	
2322	50F35	9	遺C	2	15.5	1m以下の段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	163	60
2323	50F35	9	遺A	2	6.4	前	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	163	60
2324	50F35	8	遺F	2	(17.4)	16.0	11.5	11.5	11.5	11.5	11.5	11.5	163	30	
2325	50F35	5	遺D	1	(21.4)	20.5	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	163	30	
2326	50F35	5	遺D	(17.8)	20.5	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	163	30	
2327	50F35	4	遺D	1	(20.2)	19.5	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	14.0	163	30	
2328	50F35	4	遺D	1	(21.4)	20.5	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	163	30	
2329	50F35	1	遺B	1	18.0	0.5-1mの段状をいくつかに築	土	ナブ	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	褐色 (7.5YR7/6)	口縁部1/12	口縁部外周縁部2/3	163	42
2330	50F35	8	遺B	1	15.5	20.1	5.8	5.8	5.8	5.8	5.8	5.8	163	40	
2331	2m四方形瓦片	3	西F	1	1	1	1	1	1	1	1	1	171	34	
2332	2m四方形瓦片	3	遺	1	1	1	1	1	1	1	1	1	171	61	
2333	2m四方形瓦片	3	遺A	1	(21.0)	1	1	1	1	1	1	1	171	61	
2334	2m四方形瓦片	3	遺B	1	0.4	1	1	1	1	1	1	1	171	43	
2335	2m四方形瓦片	12	高F	C	27.1	20.8	18.2	18.2	18.2	18.2	18.2	18.2	174	32	
2336	2m四方形瓦片	13	高F	C	(28.2)	1	1	1	1	1	1	1	174	30	
2337	2m四方形瓦片	12	高F	1	(14.8)	1	1	1	1	1	1	1	174	24	
2338	2m四方形瓦片	15	高C	1	13.0	(19.0)	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	2.4	174	37	
2339	2m四方形瓦片	13	高B	1	17.0	33.5	7.2	7.2	7.2	7.2	7.2	7.2	174	37	

遺物 番号	出土区	層	種類	位置 (cm)	出土 状況	調査		分類		保存状態	備考	写真	図面
						区画	部	外	内				
2386	SUP1	西	土	118.0	0.1-2mの砂層 中に多量に	灰		灰					
2387	SUP1	西	土	118.0	0.1-2mの砂層 中に多量に	灰	ナデ	ナデ	灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	壊れ4/2	口縁部破損	200 62
2388	SUP1	西	土	118.0	0.1-2mの砂層 中に多量に	灰	ナデ	ナデ	灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	200 62
2389	SUP1	西	土	118.0	0.1-2mの砂層 中に多量に	灰	ナデ	ナデ	灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	200 62
2390	SUP1	西	土	118.0	0.1-2mの砂層 中に多量に	灰	ナデ	ナデ	灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	200 62
2391	SUP1	西	土	118.0	0.1-2mの砂層 中に多量に	灰	ナデ	ナデ	灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	200 62
2392	SUP1	西	土	118.0	0.1-2mの砂層 中に多量に	灰	ナデ	ナデ	灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	200 62
2393	22	東	土	118.0	0.1-1mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	200 62
2394	25D	東	土	118.0	0.1-1mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	200 62
2395	23	東	土	125.0	0.1-4mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202 63
2396	4P	東	土	124.0	0.1-1mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2397	12V	東	土	124.0	0.1-1mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202 63
2398	4C	東	土	124.4	0.1-1mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2399	4O	東	土	127.0	1m以下の砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2400	23A	東	土	127.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2401	8V	東	土	131.1	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2402	25D	東	土	126.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202 45
2403	4W	東	土	127.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202 45
2404	11A	東	土	127.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2405	15X	東	土	134.1	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2406	11Y	東	土	127.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2407	7K	東	土	117.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202 45
2408	25A	東	土	126.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202
2409	26C	東	土	129.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202 63
2410	8Z	東	土	126.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202 45
2411	3C	東	土	121.7	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	202 45
2412	25J	東	土	128.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2413	30K	東	土	128.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203 63
2414	21F	東	土	128.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2415	5M	東	土	128.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2416	30L	東	土	134.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2417	31L	東	土	123.1	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2418	31K	東	土	124.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2419	23X	東	土	130.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203 46
2420	39N	東	土	133.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2421	27Y	東	土	131.1	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2422	3P	東	土	127.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2423	23H	東	土	121.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203
2424	7M	東	土	123.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203 46
2425	5I	東	土	112.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	203 45
2426	24	東	土	123.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	204
2427	19H	東	土	123.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	204 47
2428	7I	東	土	123.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	204
2429	8I	東	土	123.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	204
2430	2J	東	土	123.0	1-2mの砂層 中に多量に	灰			灰 10YR7/2	灰 10YR7/2	口縁部1/2	口縁部破損	204 4

遺物番号	出土状況	層位	形状	度量 (cm)	出土	状態	材質			色調			保存状態	備考	坪径 (cm)
							表面	内面	断面	表面	内面	断面			
2431	12E	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/4)	黒色 (10YR0/1)			204
2432	24E	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	緑褐色 (7.5YR7/2)	褐色 (7.5YR7/2)	褐色 (7.5YR7/2)			204	
2433	20K	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2434	9G	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2435	9L	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2436	23K	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2437	27E	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2438	8	Ⅱ	高杯				(12.2) 土	1~2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2439	21J	Ⅱ	高杯				(11.1) 土	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2440	21L	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2441	6M	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2442	19M	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2443	30B	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2444	26E	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2445	30L	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2446	8W	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2447	23J	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2448	28C	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2449	7M	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2450	13M	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2451	13X	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2452	25L	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2453	3P	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2454	28L	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2455	6K	Ⅱ	高杯				1~2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2456	21I	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2457	29M	Ⅱ	高杯				0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2458	29L	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2459	24B	Ⅱ	高杯				(12.2) 土	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2460	6M	Ⅱ	高杯				(15.2) 土	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2461	30L	Ⅱ	高杯				(12.0) 土	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2462	5I	Ⅱ	高杯				(11.2) 土	0.2cm以下の砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2463	30M	Ⅱ	高杯				(16.0) 土	0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2464	6Z	Ⅱ	高杯				14.2	0.1~0.2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2465	8Y	Ⅱ	高杯				土	0.2cm以下の砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2466	30L	Ⅱ	高杯				(9.8) 土	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2467	遺構	Ⅱ	高杯				1~2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2468	20C	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2469	22B	Ⅱ	高杯				ヤヤね	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2470	9C	Ⅱ	高杯				4cm以下の砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2471	21I	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2472	22I	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	
2473	3Z	Ⅱ	高杯				1~2cmの砂粒を多く含む	土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204
2474	23K	Ⅱ	高杯				土	斜方向の土片	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)	淡黄褐色 (10YR7/3)			204	

遺物番号	出土状況	種別	位置 [cm]	出土	調査				保存状態	備考	測図
					発見	位置	材質	色調			
2475	20F	土器片		1-2cmの破片を多く含む	片	破り込み、破片ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR1/2)	褐色 (SYR65)	残部約1/2	206
2476	20F	土器片		0.1-2cmの破片を多く含む	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 46
2477	20F	土器片		1-2cmの破片を多く含む	片	破り込み、破片ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 47
2478	10F	土器片		破	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 47
2479	24E	土器片		破	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 46
2480	21M	土器片		1-2cmの破片を多く含む	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206
2481	21K	土器片		破	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206
2482	7L	土器片		1cm以下の破片を多く含む	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206
2483	29L	土器片		破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206
2484	8L	土器片		2cm以下の破片を多く含む	片	破り込み、破片ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206
2485	23F	土器片		破	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206
2486	27F	土器片		破	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 46
2487	5M	土器片		破	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 46
2488	24C	土器片	(19.8)	0.1-1cmの破片を多く含む	片	破り込み、破片ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 47
2489	25L	土器片	(12.1)	2cm以下の破片を多く含む	片	破り込み、破片ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 63
2490	34	土器片		1cm以下の破片を多く含む	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 47
2491	3M	土器片		0.5-3cmの破片を多く含む	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 47
2492	25V	土器片	(19.6)	0.1-2cmの破片を多く含む	片	破	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 47
2493	4M	土器片	(11.2)	3cm以下の破片を多く含む	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 45
2494	24D	土器片A1	17.8	0.1-1cmの破片を多く含む	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 45
2495	10A	土器片	19.3	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 45
2496	9C	土器片	(17.5)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2497	4M	土器片	(17.6)	0.5-3cm以下の破片を多く含む	片	破	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2498	8B	土器片	17.8	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2499	11A	土器片	(21.0)	0.5-1cmの破片を多く含む	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2500	8C	土器片	19.6	0.1-1cmの破片を多く含む	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2501	5M	土器片	(22.8)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2502	4M	土器片	(19.1)	0.1-2cmの破片を多く含む	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2503	24Z	土器片	(20.9)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2504	11V	土器片	(11.0)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2505	8V	土器片		破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2506	29L	土器片	(13.2)	0.5-1cmの破片を多く含む	片	破	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2507	10A	土器片	(16.4)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2508	5M	土器片	(17.4)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2509	7H	土器片	(19.2)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2510	9L	土器片	(18.7)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2511	25D	土器片	(18.2)	破	片	少ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207, 83
2512	7A	土器片		破	片	破	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2513	4L	土器片		1-2cmの破片を多く含む	片	破ナシ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2514	22K	土器片		1-3cmの破片を多く含む	片	破	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207, 46
2515	31F	土器片	(12.6)	破	片	ハケ	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	207
2516	26J	土器片A1	(16.5)	破	片	破	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206
2517	21J	土器片A2	(17.8)	破	片	破	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206, 84
2518	10Z	土器片		0.5-4cmの破片を多く含む	片	破	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	褐色 (SYR65)	残部約3/4	206

遺物 番号	出土地点	層位	経緯	法 量 (cm)			取上	用途	遺 物					発 見 時 代	出 土 者	検出 回数
				口径	高さ	重量			外 面		内 面					
									外 面	内 面	外 面	内 面	裏 面			
2518	51	Ⅲ	ⅢA				2m以下の砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10YR7/4)	浅褐色 (2.5Y7/2)	浅褐色 (2.5Y7/2)	片断	1/12	内宮列石文(竹筵)・縁 部・縁部以上、外宮部	200	
2520	132	Ⅲ	ⅢA				1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	褐色 (2.5Y7/2)	褐色 (10YR7/2)	褐色 (5Y7/2)	片断	2/12	外宮列石文(102番、列石文 の縁部以上、外宮部)	200	
2521	63	Ⅲ	ⅢA	17.2			2m以下の砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (5Y7/2)	赤褐色 (5Y7/2)	片断	1/12	内宮列石文(102番、内宮 部)	200	
2522	8A	Ⅲ	ⅢA	110.0			1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (10YR7/4)	赤褐色 (5Y7/2)	片断	2/12	内宮列石文(102番、赤褐色 部)	200	
2523	30A	Ⅲ	Ⅲ	116.0			1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2524	27B	Ⅲ	Ⅲ				砂	片断	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2525	30L	Ⅲ	ⅢA		5.0		砂	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2526	22E	Ⅲ	ⅢA		5.0		5m以下の砂を すくうのに使 った	片断	褐色 (2.5Y6/2)	褐色 (2.5Y6/2)	褐色 (2.5Y6/2)	片断	4/12	赤褐色部	200	
2527	30M	Ⅲ	ⅢA		1.0		砂	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	3/12	赤褐色部	200	
2528	211	Ⅲ	Ⅲ	15.0			0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	片断	2/12	内宮列石文(102番、内宮 部)	200	
2529	30L	Ⅲ	Ⅲ	12.0			砂	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2530	30L	Ⅲ	ⅢA	16.0			1m以下の砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	4/12	赤褐色部	200	
2531	20K	Ⅲ	Ⅲ	15.0			砂	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	4/12	赤褐色部	200	
2532	5M	Ⅲ	Ⅲ	14.4			0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2533	82	Ⅲ	Ⅲ	15.0			0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2534	23A	Ⅲ	ⅢB	15.0			1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2535	3Y	Ⅲ	Ⅲ	14.0			砂	片断	赤褐色 (5Y7/2)	赤褐色 (5Y7/2)	赤褐色 (5Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2536	82	Ⅲ	ⅢB	17.0			砂	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2537	8Y	Ⅲ	Ⅲ	18.0			1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2538	73J	Ⅲ	Ⅲ	14.0			1m以下の砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (5Y7/2)	赤褐色 (5Y7/2)	赤褐色 (5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2539	9A	Ⅲ	Ⅲ	19.0			1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2540	9Y	Ⅲ	Ⅲ	20.0			砂	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2541	15L	Ⅲ	Ⅲ	22.0			1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2542	19	Ⅲ	Ⅲ	22.0			0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2543	24J	Ⅲ	Ⅲ	21.0			1m以下の砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2544	30M	Ⅲ	Ⅲ	13.0			1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2545	25D	Ⅲ	Ⅲ	14.0			0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2546	25Y	Ⅲ	Ⅲ	13.0			1m以下の砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2547	9H	Ⅲ	Ⅲ	15.0			1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2548	20L	Ⅲ	Ⅲ	17.0			0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2549	25H	Ⅲ	Ⅲ	17.0			1m以下の砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2550	22X	Ⅲ	Ⅲ	15.0			砂	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2551	62	Ⅲ	Ⅲ	16.0			2m以下の砂を すくうのに使 った	片断	褐色 (7.5Y7/2)	褐色 (10Y7/2)	褐色 (10Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2552	21K	Ⅲ	Ⅲ	17.0			0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	200	
2553	22K	Ⅲ	Ⅲ	14.5			砂	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	200	
2554	25O	Ⅲ	Ⅲ				0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	210	
2555	21J	Ⅲ	Ⅲ				2m以下の砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	赤褐色 (2.5Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	210	
2556	81	Ⅲ	Ⅲ				1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	210	
2557	82	Ⅲ	Ⅲ				0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	210	
2558	5Y	Ⅲ	Ⅲ				砂	片断	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	赤褐色 (7.5Y7/2)	片断	2/12	赤褐色部	210	
2559	22Y	Ⅲ	Ⅲ				0.1-2mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	210	
2560	8X	Ⅲ	Ⅲ				2-3mの砂を すくうのに使 った	片断	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	赤褐色 (10Y7/2)	片断	1/12	赤褐色部	210	

遺物番号	出土地点	層位	形状	数量(個)	出土	説明	材質			色調			現在所蔵	備考	測尺	
							材質	表面	内面	表面	内面	裏面				
2561	22J	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	緑褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210	
2562	30	Ⅱ	器		0.5-1cm以下の砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2563	29C	ⅡB	(15.0)		0.5-2cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2564	11A	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2565	9L	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2566	22K	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2567	22K	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2568	8Z	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2569	30M	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2570	21L	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2571	7K	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2572	13Z	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2573	24A	Ⅱ	(10.3)		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	210		
2574	25D	Ⅱ	(11.8)		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2575	22N	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2576	7H	Ⅱ	(17.0)		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2577	8A	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2578	8D	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2579	7K	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2580	30N	Ⅱ	(11.3)		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2581	30M	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2582	29M	Ⅱ	器	15.1	0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2583	11Z	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2584	8J	Ⅱ	器	(6.0)	0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2585	22N	Ⅱ	器	8.8	0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	211		
2586	26C	Ⅱ	(9.3)	11.3	9.0	3.4							外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2587	2L	Ⅱ	(9.2)										外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2588	21J	Ⅱ	器		0.5-1.0cmの砂粒を多く含む	粘結土	褐色	白色	黄褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2589	8	Ⅱ	器	(4.8)									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2590	30K	Ⅱ	器	(5.0)									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2591	7K	Ⅱ	器										外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2592	3M	Ⅱ	器	2.8									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2593	5P	Ⅱ	器	17.88									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2594	8Z	Ⅱ	器	17.88									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2595	7K・7L・8K	Ⅱ	器	17.21									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2596	22H	Ⅱ	器	19.43									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2597	26L	Ⅱ	器	4.1									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2598	8V	Ⅱ	器	16.43									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2599	29K・29L	Ⅱ	器	5.6									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2600	26F	Ⅱ	器	3.0									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2601	5N	Ⅱ	器	4.8									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2602	20N	Ⅱ	器	3.2									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2603	29L	Ⅱ	器	5.6									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2604	23K	Ⅱ	器	5.0									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2605	8F	Ⅱ	器	17.88									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		
2606	31K	Ⅱ	器	(6.2)									外蔵館蔵書・羽文4巻	212		

遺物番号	出土地	層位	形状	法 規 (cm)			出土	注	類 型		色 調			保存形式	備 考	採出 図
				寸法	重量	厚さ			材質	内 面	外 面		厚 度			
											材質	色 調				
2607	250	Ⅲ	器			7.0	1-2cmの粉粒を多く含む	瓦			にじみ褐色(7.5YR7/4)	淺褐色(7.5YR7/4)	淺褐色(7.5YR7/4)	断面4/12		212
2608	250	Ⅲ	器			5.2	器	磁ナデ			にじみ褐色(7.5YR7/4)	にじみ褐色(7.5YR7/4)	褐色(5YR5/8)	断面3/12		212
2609	300	Ⅲ	器			16.0	1-3cmの粉粒を多く含む	瓦	ハナ		褐色(7.5YR7/4)	褐色(7.5YR7/4)	褐色(7.5YR7/4)	断面6/12		212
2610	300	Ⅲ	器			2.0	1cm以下の粉粒を多く含む	瓦	タテ方向の土片		にじみ褐色(7.5YR7/4)	にじみ褐色(7.5YR7/4)	にじみ褐色(7.5YR7/4)	断面2/12	外底・外縁部付着	212
2611	40	Ⅲ	器			1.6	1cm以下の粉粒を多く含む	瓦	磁ナデ		にじみ褐色(7.5YR7/4)	にじみ褐色(7.5YR7/4)	にじみ褐色(7.5YR7/4)	断面2/12		212
2612	300	Ⅲ	器			4.4	器	磁ナデ	断面正産		淡黄色(10YR7/6)	灰白色(10YR7/6)	灰白色(10YR7/6)	断面2/12		212
2613	6M	Ⅲ	器			7.0	0.5-1cmの粉粒を多く含む	瓦	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	灰白色(10YR7/6)	灰白色(10YR7/6)	断面1/12		212
2614	5M	Ⅲ	器			12.0	1-5cmの粉粒を多く含む	瓦	ハナ		にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面4/12		212
2615	25M	Ⅲ	器			3.6	断面正産	磁ナデ	磁ナデ		にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	灰白色(5YR4/1)	断面1/12		212
2616	8K	Ⅲ	器			6.0	0.5-1cmの粉粒を多く含む	瓦	磁ナデ		にじみ褐色(7.5YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	灰白色(10YR7/6)	断面3/12		212
2617	60	Ⅲ	器			2.3	器	磁ナデ	ハナ		褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	断面2/12		210
2618	3P	Ⅲ	器			17.0	1-3cmの粉粒を多く含む	瓦	タテ方向の土片		褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面3/12		213
2619	30M	Ⅲ	器			16.0	断面正産	磁ナデ	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面3/12		213
2620	5V	Ⅲ	器			7.8	0.5-2cmの粉粒を多く含む	瓦	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面6/12	外縁部付着	213
2621	5S	Ⅲ	器			5.4	断面正産	磁ナデ	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	灰白色(5YR4/1)	断面2/12	外縁部付着	213
2622	23K	Ⅲ	器			14.2	断面正産	磁ナデ	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	灰白色(5YR4/1)	断面4/12	外縁部付着	213
2623	26N	Ⅲ	器			9.4	0.5-1cmの粉粒を多く含む	瓦	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面2/12		213
2624	22K	Ⅲ	器			16.0	断面正産	磁ナデ	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面3/12		213
2625	SR03	Ⅲ	器			4.7	断面正産	磁ナデ	断面正産		淡黄色(10YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	断面2/12		213
2626	35J	Ⅲ	器			4.4	断面正産	磁ナデ	ハナ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面6/12	内面底部に黒塗ししている乳白色の塗料付着	213
2627	5K	Ⅲ	器			8.4	断面正産	磁ナデ	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面3/12		213
2628	5J	Ⅲ	器			6.6	断面正産	磁ナデ	磁ナデ		淡黄色(10YR7/6)	淡黄色(10YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面4/12		213
2629	5M	Ⅲ	器	116.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		213
2630	2M	Ⅲ	器	117.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2631	30	Ⅲ	器	116.2			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面2/12		214
2632	26M	Ⅲ	器	117.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面2/12		214
2633	SX01	Ⅲ	器	117.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面2/12		214
2634	25L	Ⅲ	器	116.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面2/12		214
2635	3M	Ⅲ	器	119.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2636	64	Ⅲ	器				断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2637	10C	Ⅲ	器	67.2			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面2/12		214
2638	26C	Ⅲ	器	126.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2639	30K	Ⅲ	器	114.5			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面2/12		214
2640	3M	Ⅲ	器	119.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2641	25Z	Ⅲ	器	116.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2642	5M	Ⅲ	器	17.4			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2643	11A	Ⅲ	器	116.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2644	23A	Ⅲ	器	117.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2645	20N	Ⅲ	器	17.1			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2646	25V	Ⅲ	器	20.8			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2647	10C	Ⅲ	器	67.2			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2648	7K	Ⅲ	器	122.0			断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2649	8	Ⅲ	器				断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		214
2650	3M	Ⅲ	器				断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		215
2651	25A	Ⅲ	器				断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		215
2652	3M	Ⅲ	器				断面正産	瓦	瓦	ナデ	にじみ褐色(7.5YR7/6)	にじみ褐色(7.5YR7/6)	褐色(7.5YR7/6)	断面1/12		215

遺物番号	出土状況	種別	正 量 (g)	形状	用途	色 調	色 調		保存状態	備 考	検出 段階
							内 色	外 色			
2736	22L	Ⅱ 磁器	14.0		1-2cmの破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	L線跡12	新橋外周縁部、列点文	220
2737	30J	Ⅱ 磁器	6.4			茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡19	口縁部・新橋外周縁部、新橋式文、横付	220
2738	24L	Ⅱ 磁器	15.4			茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡19	口縁部新橋式文、横付	220 48
2739	4M	Ⅱ 磁器	114.0			茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	内周縁部4条	221
2740	20H	Ⅱ 磁器	17.8		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	L線跡219		221
2741	3F	Ⅱ 磁器	17.6			茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	L線跡219		221
2742	20H	Ⅱ 磁器	18.2		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	L線跡12		221
2743	28L	Ⅱ 磁器	19.0		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2744	30N	Ⅱ 磁器	20.8		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	外周キズ	221
2745	8C	Ⅱ 磁器	22.4		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	外周キズ	221
2746	5M	Ⅱ 磁器	19.8		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2747	29E	Ⅱ 磁器	21.0		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡19	口縁部外周縁部文、横付	221
2748	17G	Ⅱ 磁器	19.0		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2749	42F	Ⅱ 磁器	17.4			茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2750	10G	Ⅱ 磁器	15.6		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2751	11G	Ⅱ 磁器	13.0		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2752	4A・5A	Ⅱ 磁器	18.8		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2753	23L	Ⅱ 磁器	17.6		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2754	25J	Ⅱ 磁器	17.2		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2755	26E	Ⅱ 磁器	14.2			茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2756	4G	Ⅱ 磁器	15.6		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		21 49
2757	27E	Ⅱ 磁器	14.8		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2758	2P・4P	Ⅱ 磁器	14.6		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		221
2759	25K	Ⅱ 磁器			0.5-1cmの破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	押印痕	222
2760	2D	Ⅱ 磁器				茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2761	22K	Ⅱ 磁器				茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2762	22I	Ⅱ 磁器				茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2763	21I	Ⅱ 磁器			0.5-1cmの破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2764	30L	Ⅱ 磁器	10.9			茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2765	30M	Ⅱ 磁器	15.0		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2766	31K	Ⅱ 磁器	18.3		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2767	29M	Ⅱ 磁器	18.5		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2768	29K	Ⅱ 磁器	15.2			茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	口縁部外周縁部 (ハケ)	222
2769	31	Ⅱ 磁器	17.0		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2770	10Z	Ⅱ 磁器	22.8		0.5-1cmの破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2771	13Y	Ⅱ 磁器				茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2772	24X	Ⅱ 磁器			0.5-1cmの破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2773	8W	Ⅱ 磁器				茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2774	4M	Ⅱ 磁器				茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2775	新橋	Ⅱ 磁器			1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2776	30N	Ⅱ 磁器				茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2777	SXU27	Ⅱ 磁器			0.5-1cmの破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2778	26Z	Ⅱ 磁器	17.8		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12		222
2779	25D	Ⅱ 磁器	17.8		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2780	7J	Ⅱ 磁器	16.4		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2781	28G	Ⅱ 磁器	18.0		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2782	25B	Ⅱ 磁器	16.9		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2783	7K	Ⅱ 磁器	7.0		0.5-1cmの破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222
2784	32J	Ⅱ 磁器	5.7		1cm以下の破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	222 50
2785	3N	Ⅱ 磁器	17.0		0.5-1cmの破片を多く含む	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	茶褐色 (SYR74)	口縁跡12	新橋式文、横付	223

遺構 番号	出土地点	層位	形状	法 量 (cm)	出土 時期	出土 状況	形 状		材 質		保存状態	備 考	種別	図番
							外 形	内 容	外 形	内 容				
2766	24B	Ⅲ	鉢		14.8	1~5cmの破片 を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	灰赤 (R5G)	破損		223	
2767	7J	Ⅲ	鉢		6.0	3~5cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	黄褐色 (F5YR4G)	黄褐色 (F5YR4G)	破損	破口部?	223	
2768	30	Ⅲ	鉢		4.2		片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	49
2769	31B	Ⅲ	鉢		10.0		片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2770	25E	Ⅲ	鉢		14.0	1~3cmの破片 を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2771	25Z	Ⅲ	鉢		14.0	1~3cmの破片 を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2772	6Z	Ⅲ	鉢		13.0	1~5cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2773	群坑	Ⅲ	鉢		18.4	3cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2774	25J	Ⅲ	鉢		15.2	10cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2775	20K	Ⅲ	鉢		15.0	4cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2776	26A	Ⅲ	鉢		14.2	1~4cmの破 片を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2777	24E	Ⅲ	鉢		10.0		片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2778	30	Ⅲ	鉢		5.6	3~1cmの破 片を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2799	7L	Ⅲ	鉢		14.8		片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2800	25D	Ⅲ	鉢		16.2	1~3cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2801	26A	Ⅲ	鉢		5.1	1~3cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2802	9Z	Ⅲ	鉢		14.0	3~1cmの破 片を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2803	24K	Ⅲ	鉢		10.0	3~3cmの破片 を多く含む	片ハケ	ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2804	9B	Ⅲ	鉢		15.4	1~3cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2805	23B	Ⅲ	鉢		8.4	10cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2806	13A	Ⅲ	鉢		15.0	3cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	49
2807	11H	Ⅲ	鉢		14.0	1~3cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		223	
2808	4G	Ⅲ	鉢		14.0	3cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2809	10	Ⅲ	鉢		14.2	3~2cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2810	31K	Ⅲ	鉢		15.4	1~4cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2811	25J	Ⅲ	鉢		14.0		片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2812	5A	Ⅲ	鉢		5.3	1~3cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2813	26M	Ⅲ	鉢		16.0		片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2814	26M	Ⅲ	鉢		15.2	1~2cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2815	30C	Ⅲ	鉢		15.0	1~3cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	49
2816	31L	Ⅲ	鉢		15.0	4cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2817	29L	Ⅲ	鉢		1.8		片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2818	21Z	Ⅲ	鉢		15.0	6cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2819	24D	Ⅲ	鉢		16.0	3~5cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2820	6K	Ⅲ	鉢		7.0	3cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2821	7I	Ⅲ	鉢		14.0	3~2cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2822	3P	Ⅲ	鉢		1~5cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224		
2823	25A	Ⅲ	鉢		1~5cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224		
2824	21J	Ⅲ	鉢		15.0	1~5cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2825	26E	Ⅲ	鉢		6.5	4cm以下の破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2826	21K	Ⅲ	鉢		15.0	5cmの破片 を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	64
2827	群坑	Ⅲ	鉢		1~6cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224		
2828	31K	Ⅲ	鉢		6.2	3~2cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2829	13Z	Ⅲ	鉢		14.0	1~5cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2830	20C	Ⅲ	鉢		5.0		片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	
2831	8A	Ⅲ	鉢		7.0	1~1.5cmの破 片を多く含む	片ハケ	片ハケ	白色 (F5Y7H1)	白色 (F5Y7H1)	破損		224	

遺物番号	出土地点	層	資料	位置 (cm)			形状	遺物			色調			保存状態	備考	規格	図説
				口縁	高さ	底径		外	内	外	内	裏面					
2632	26N	Ⅲ	土	8.1			1~2mmの粒を多く含む	灰	無装飾。ハケ	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	新築形	片割		204	50
2633	25E	Ⅰ	土	16.0			1~1mmの粒を多く含む	灰	ハケ	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	遺跡212	片割		204	
2634	26E	Ⅲ	土	16.8			1~1mmの粒を多く含む	灰	ハケ	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	遺跡212	片割		204	
2635	26L・30	Ⅲ	土	18.0			1~2mmの粒を多く含む	灰	ハケ	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		204	
2636	26M	Ⅲ	土	18.0			1~2mmの粒を多く含む	灰	横ナデ	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		204	
2637	10V	Ⅰ	土	19.0			1~2mmの粒を多く含む	灰	ハケ・縦線	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	遺跡212	片割		204	
2638	試掘	Ⅲ	土	9.6			1mm以下の粒を多く含む	灰	縦線付	灰褐色 (10YR6/4)	灰褐色 (10YR6/4)	灰褐色 (10YR6/4)	遺跡212	片割		204	
2639	21J	Ⅲ	土	6.0				灰	横ナデ・縦線付	褐色 (10YR6/3)	褐色 (10YR6/3)	褐色 (10YR6/3)	遺跡1012	片割		204	50
2640	3E	Ⅲ	土	8.1			0.1~1mmの粒を多く含む	灰	横ナデ・縦線付	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		205	
2641	20・40	Ⅲ	土	14.8				灰	不定方向の1方ナ	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		205	
2642	24M・N	Ⅲ	土	12.0				灰	横ナデ	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2643	30	Ⅲ	土	11.8				灰	横ナデ	褐色 (5YR7/6)	褐色 (5YR7/6)	褐色 (5YR7/6)	遺跡212	片割		205	
2644	20・30	Ⅲ	土	15.0			1mm以下の粒を多く含む	灰	横ナデ	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2645	26E	Ⅲ	土	15.2				灰	横ナデ	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2646	30	Ⅲ	土	11.3	5.6		1mm以下の粒を多く含む	灰	ナデ・横ナデ	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	遺跡212	片割		205	50
2647	24D	Ⅲ	土	19.0			0.1~2mmの粒を多く含む	灰	横ナデ・縦線付	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2648	30	Ⅲ	土	15.0			1~2mmの粒を多く含む	灰	横ナデ・縦線付	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		205	50
2649	4P	Ⅲ	土	3.0			1~2mmの粒を多く含む	灰	横ナデ	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		205	50
2650	40	Ⅲ	土	13.2			0.5~1mmの粒を多く含む	灰	縦線付	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2651	20・40	Ⅲ	土	4.3			3mm以下の粒を多く含む	灰	縦線付	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		205	
2652	40	Ⅲ	土	4.3			0.5~3mmの粒を多く含む	灰	縦線付	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	褐色 (5YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2653	40	Ⅲ	土	4.2				灰	横ナデ	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		205	
2654	30	Ⅲ	土	3.8			1~2mmの粒を多く含む	灰	縦線付	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		205	
2655	2L	Ⅲ	土	5.1				灰	横ナデ	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2656	24	Ⅲ	土	13.0				灰	縦線付	褐色 (10YR6/4)	褐色 (10YR6/4)	褐色 (10YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2657	30	Ⅲ	土	3.2			縦線付	灰	横ナデ	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	褐色 (7.5YR6/4)	遺跡212	片割		205	
2658	29	Ⅰ	土				1~2mmの粒を多く含む	灰	横ナデ	褐色 (10YR6/3)	褐色 (10YR6/3)	褐色 (10YR6/3)	遺跡212	片割		205	
2659	24	Ⅲ	土				0.5~2mmの粒を多く含む	灰	横ナデ	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	褐色 (7.5YR7/4)	遺跡212	片割		205	

表31 I期土器観察表

遺物番号	出土地点	層位	形状	口径 (cm)	時期	土器様式	部位	施土	施装	胎土	文		備考	検出		
											外面	内面				
1001	2K	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	山形神楽文	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)	植物繊維類	201	65
1002	9Z	M	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	山形神楽文	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)	植物繊維類	201	65
1003	9Z	M	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	山形神楽文	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)	植物繊維類	201	65
1004	9X	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	山形神楽文	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)	植物繊維類	201	65
1005	4P	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1006	7U	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	山形神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1007	7Z	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽 爪痕文	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1008	6V	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽	5YR7/4 (2.5-3.0)	5YR7/4 (2.5-3.0)	植物繊維類 7.5-10.0mm	201	65
1009	6X	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽	5YR7/4 (2.5-3.0)	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	植物繊維類 を同一径種か	201	65
1010	5Y	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1011	8V	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	爪痕文	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1012	8W	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽文	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	7.5YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1013	7V	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1014	6W	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1015	5V	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	内側の波線	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1016	7Z	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ		10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1017	5X	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	7.5YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1018	5Y	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	波線文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1019	5A	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	山形神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)	神楽文系	201	65
1020	11A	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	山形神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)	神楽文系	201	65
1021	20L	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)	神楽文系	201	65
1022	22V	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	10YR7/4 (2.5-3.0)		201	65
1023	23A	E	縄文式 厚肉丸鉢	19.6	前期	縄文式	胴部	1mm以下の砂鉄、 灰質、粘土を多く含む	ナツ	ナツ	神楽文	10YR7/4 (2.5-3.0)	7.5YR7/4 (2.5-3.0)	神楽文系	201	65

表32 M期土器観察表

遺物番号	出土地点	層位	形状	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	胎土	施装	文		備考	検出	
									外面	内面			
3001	1号土坑	E	厚肉丸鉢	19.6	36.6	2.0	灰	灰	山形神楽文	山形神楽文	外側に埋封	244	74
3002	10号土坑	E	厚肉丸鉢	21.0	30.7	6.0	灰	灰	山形神楽文	山形神楽文	外側に埋封	246	74
3009	SXB01	E	丸	16.6	27.4	4.0	1mm以下の砂鉄、 粘土を多く含む	灰	ハク	ハク	外側に埋封	249	43
3081	SXB01	E	丸	12.1			1mm以下の砂鉄、 粘土を多く含む	灰	伊勢印	伊勢印	外側に埋封	249	55

表33 金属製品観察表

遺物番号	出土地点	層位	形状	寸法 (cm)			重量 (g)	備考	検出	関係	
				長さ	幅	厚さ					
7001	SBA C 5	E	銅製	3.6	1.8	0.3	3.6	任意形状	木質・水蝕状跡	22	73
7002	SBF C 6	E	銅製	0.46	2.5	0.55	54.8	両面彫文	透し穴4単位	126	73
7003	I号穴	E	銅製	4.1	3.9	3.5	15.1	任意形状	彫文	251	73
7004	9B	E	銅製	6.5	2.65	0.9	9.1	任意形状	有	226	73
7005	3D	E	銅製	7.7	3.75	0.6	20.4	彫文	有	226	73
7006	25J	E	銅製	15.2	4.25	0.65	18.9	任意形状	有	226	73
7007	9W	E	銅製	4.35	4.95	1.0	15.2	彫文	透し穴1単位	220	73

表34 石器属性表

遺物番号	出土地点	層位	時期	器種	石材	刃部接痕	素材	素材接痕	素材ハシクシク	加工接痕	加工ハシクシク	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	種別	図番	
6001	SBA07	2	弥生	磨製石矛	凝灰岩							26	23	6		227	56	
6002	SBA07	2	弥生	磨製石剣								14	25	5		227	56	
6003	SBA07	2	弥生	打製石片	流石		燧石削片			HvD		117	46	25	基部欠損、刃部わずかに研磨	227	66	
6004	SBB04	3	弥生	磨製石剣	凝灰岩							48	26	3		227	66	
6005	SBE27	4	弥生	石剣	輝石安山岩							66	53.3	49		227	66	
6006	跡部遺構	1	弥生	石剣	下呂石		削片	不明	不明	HvD/平削	1	38	15	7	凸基痕	227	66	
6007	跡部遺構	2	弥生	石剣	凝灰岩		削片	不明	不明	HvD/平削	1	30	18	4	凸基痕	227	66	
6008	跡部遺構	1	弥生	磨製	流石		燧石削片	不明	不明	HvD/平削	1	30.3	19	7.7		227	66	
6009	SXB06	1	弥生	磨石	凝灰岩							90.7	29.1	21	基部欠損	227	66	
6010	3N	Ⅲ	弥生	石剣	下呂石		削片	不明	不明	HvD/平削	1	46	15	8	凸基痕	228	67	
6011	29A	Ⅱ	弥生	石剣	凝灰岩		削片	不明	不明	HvD/平削	1	30	12	5	凸基痕	228	67	
6012	25B	Ⅱ	弥生	石剣	凝灰岩		削片	不明	不明	HvD/平削	1	25	13	5	凸基痕	228	67	
6013	6J	Ⅱ	弥生	石剣	下呂石							1	30	17	6	凹基痕	228	67
6014	22i	Ⅲ	弥生	石剣	流石		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	32	23	7	凸基痕未製品	228	67	
6015	8X	Ⅲ	弥生	石剣	凝灰岩		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	32	21	5	工具は金属の可能性あり	228	67	
6016	9i	Ⅱ	弥生	石剣	凝灰岩		不明	不明	不明	HvD/平削	1	26	19	8	凸基痕未製品	228	67	
6017	5X	Ⅲ	弥生	石剣	凝灰岩		燧石削片	不明	不明	HvD/平削	1	30	14	5		228	67	
6018	9W	Ⅱ	弥生	石剣	凝灰岩		削片	HvD	不明	HvD/平削	1	27	18	7		228	67	
6019	23H	Ⅲ	弥生	石剣	下呂石							1	24	16	3	凹基痕	226	67
6020	5X	Ⅱ	弥生	石剣	凝灰岩		削片	不明	不明	HvD/平削	1	22	19	5		228	67	
6021	5Y	Ⅲ	弥生	石剣	凝灰岩		不明	不明	不明	HvD/凸角磨	1	15	14	3	凹基痕	228	67	
6022	5X	Ⅲ	弥生	石剣	凝灰岩		不明	不明	不明	HvD/凸角磨	1	11	13	3	凹基痕	228	67	
6023	9Y	Ⅲ	弥生	石剣	石英		燧石削片	HvD	不明	HvD/凸角磨	1	17	12	3	凹基痕	228	67	
6024	5X	Ⅲ	弥生	石剣	下呂石		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	17	14	4	凹基痕未製品	228	67	
6025	8X	Ⅲ	弥生	石剣	下呂石		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	19	17	5		228	67	
6026	21L	Ⅲ	弥生	石剣	凝灰岩		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	19	15	4		228	67	
6027	8X	Ⅲ	弥生	石剣	凝灰岩		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	17	14	3		228	67	
6028	5X	Ⅱ	弥生	石剣	凝灰岩		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	22	19	7		228	67	
6029	8V	Ⅱ	弥生	石剣	凝灰岩		削片	不明	不明	HvD/平削	1	17	19	5		228	67	
6030	6X	Ⅲ	弥生	石剣	凝灰岩		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	26	20	5		228	67	
6031	7Z	Ⅲ	弥生	石剣	凝灰岩		燧石削片	HvD	不明	HvD/平削	1	18	22	5		228	67	
6032	13V	Ⅲ	弥生	石剣	下呂石							1	18	17	4		228	66
6033	遺構	Ⅰ	弥生以降	石剣(検査)	輝石安山岩		円盤					66.1	61.5	64.1		229	67	
6034	遺構	Ⅰ	弥生以降	石剣(検査)	砂岩		円盤					66.1	63.1	64.9		229	67	
6035	6N	Ⅲ	弥生以降	磨石	砂岩							77.4	47.2	32.9	V字状の溝が数個	229	67	
6036	5N	Ⅲ	弥生以降	磨石	砂岩		横円盤					74.6	50.7	25.1	深いV字状の溝が数個	229	67	
6037	4M	Ⅲ	弥生以降	砥石	砂岩							92.1	63.6	30.1	深いV字状の溝が数個	229	67	
6038	5J	Ⅲ	弥生以降	燧石打製(磨石片刃)	凝灰岩							69.7	47.4	15.6		229	67	
6039	22D	Ⅱ	弥生以降	磨石	凝灰岩							31	21	9		229	67	
6040	流石		旧石器	台形石剣	凝灰岩		燧石削片	不明	不明	HvD	1	40.1	26.6	8.9		230	68	
6041	24K	Ⅲ	旧石器	台形石剣	凝灰岩		燧石削片	不明	不明	HvD	1	42.9	24.9	12.1		230	68	
6042	流石		旧石器	台形石剣	凝灰岩		燧石削片	不明	不明	HvD	1	38.4	18.6	6.9		230	68	
6043	9V	Ⅲ	旧石器	台形石剣	凝灰岩		燧石削片	不明	不明	HvD	2	29.3	19.8	9.3	台形石剣の加工	230	68	
6044	8V	Ⅲ	旧石器	削片	凝灰岩		燧石削片	不明	不明	HvD	5	27.3	21	9.9	台形石剣の製法と同じ刃部	230	68	
6045	3V	Ⅰ	旧石器	打製加工石	流石		石片	HvD	不明	HvD	2	56.7	27.9	10.9		230	68	
6046	3M	Ⅲ	旧石器	アイブ彫石	凝灰岩		石片	不明	不明	HvD/刃渡し	不明	41.2	15.6	8		230	68	

遺物番号	出土地点	層位	時期	器種	石材	調理技法	素材	素材ハ ンマー	加工 技術	加工ハ ンマー	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備 考	検出	記録	
6047	8W	Ⅲ	旧石器	ナイフ形石器	珩岩		精製剥片	不明	不明	無し	不明	24.7	15.5	6.9		230	66
6048	8J	Ⅲ	旧石器	使用痕剥片	珩岩		剥片	HD	5			66	52	26	経路状の使用痕。	230	66
6049	12B	Ⅲ	旧石器	ノッチ	珩岩		磨製剥片	HD	不明		2	40.7	35.3	13.2		231	66
6050	SZ	Ⅲ	旧石器	器種不明	珩岩		剥片	HD	不明		3	43.9	40.6	16.6	ナイフ形石器の断片か。	231	66
6051	12W	Ⅲ	旧石器	磨製緑石製 解灰岩			磨製剥片 (石方)	HD	不明		1	35.9	45.4	13.7		231	66
6052	8V	Ⅲ	旧石器	器種不明	珩岩		精製剥片	HD	11	HD	3	57	47	16		231	66
6053	11V	Ⅲ	旧石器	磨製剥片石 核	珩岩		精製剥片	HD	5	HI	3	47.8	37.1	16.9		231	66
6054	5Y	Ⅲ	旧石器	石核	珩岩		磨製剥片	HD	不明	HI	2	32.7	33.2	17.2	磨製剥片石核	231	66
6055	5Y	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩	HP	両縁剥片	HB	不明		1	10	10	3	凹基縁(縄文早期)	232	66
6056	14V	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩	HP	両縁剥片	HB	不明		1	13	13	4	凹基縁(縄文早期)	232	66
6057	9X	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩	HP	両縁剥片	HB	不明		1	14	13	3	凹基縁(縄文早期)	232	66
6058	9F	Ⅲ	縄文	石鏃	白磁岩		不明	不明	不明		1	15	15	6	凹基縁	232	66
6059	3X	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		剥片	不明	不明		1	20	14	6		232	66
6060	9B	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	14	13	5		232	66
6061	9W	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石	HP	両縁剥片	HB	不明		1	16	12	4	凹基縁	232	66
6062	7Z	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩	HP	不明	不明	不明		1	14	9	4	凹基縁	232	66
6063	試掘	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	17	14	3	凹基縁	232	66
6064	9W	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	16	12	4	凹基縁	232	66
6065	6Y	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩	HP	不明	不明	不明		1	17	12	3	凹基縁	232	66
6066	5Y	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	13	15	5	凹基縁	232	66
6067	5X	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	12	14	3	凹基縁	232	66
6068	6X	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	18	19	4	凹基縁	232	66
6069	9E	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	18	18	4	凹基縁	232	66
6070	5Y	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	20	16	6	凹基縁	232	66
6071	7Z	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩	HP	不明	不明	不明		1	21	16	5	凹基縁	232	66
6072	15V	Ⅲ	縄文	磨製鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	18	14	3	凹基縁	232	66
6073	26V	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	20	17	3	凹基縁	232	66
6074	25L	Ⅲ	縄文	磨製鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	19	17	4	凹基縁	232	66
6075	7G	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	19	17	5		232	66
6076	8B	Ⅲ	縄文	石鏃	珩岩		不明	不明	不明		1	17	18	8		232	66
6077	8Y	Ⅲ	縄文	石鏃	赤磁岩		不明	不明	不明		1	21	18	5		232	66
6078	試掘	Ⅲ	縄文	石鏃	磨製珩岩		磨製剥片	HI	不明		1	28	18	5	補助資料。東北地方の産物。	232	66
6079	19H	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		両縁剥片	HB	不明		1	17	14	3	凹基縁	232	66
6080	試掘	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明		1	13	16	4		232	66
6081	27X	Ⅲ	縄文	石鏃	サヌカイト		不明	不明	不明		1	25	18	3	凹基縁	232	66
6082	4N	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明		1	26	17	4	凹基縁	232	66
6083	6Y	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明		1	25	18	4	凹基縁	232	66
6084	6Y	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明		1	18	15	3	凹基縁	232	66
6085	11Z	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明		1	23	20	4	凹基縁	232	66
6086	28U	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明		1	21	16	4	凹基縁	232	66
6087	7Y	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明		1	18	14	3	凹基縁	232	66
6088	6X	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		両縁剥片	不明	不明		1	16	14	4		232	66
6089	6Z	Ⅲ	縄文	石鏃	ハリ質安山 石		不明	不明	不明		1	18	14	4	凹基縁	232	66
6090	5Z	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明		1	18	14	4	凹基縁	232	66

遺物 番号	出土 地点	層位	時期	器種	石材	刻線 技法	素材	原料 技術	造材ハ ンマー 痕	加工 技術	加工ハ ンマー 痕	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	種類	位置	
6091	28B	Ⅲ	縄文	石鏃	下呂石		不明	不明	不明	SP/平 面		1	19	15	4	凹溝鏃	232	68
6092	30C	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		不明	不明	不明	SP/平 面		1	19	15	4	凹溝鏃	232	68
6093	9B	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井	SP	不明	不明	不明	SP/平 面		1	18	13	3	凹溝鏃	232	68
6094	3Y	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		不明	不明	不明	SP/平 面		1	16	21	4	凹溝鏃	232	68
6095	30	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		不明	不明	不明	SP/平 面		1	26	14	5	凹溝鏃	232	68
6096	3Y	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		製片	HI	不明	HP/凸 角度		1	31	21	8		233	69
6097	9W	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		製片	HI	不明	HP/凸 角度		1	27	15	6	先端磨丸	233	69
6098	24D	Ⅱ	縄文	石鏃	埴井		製片	なし	なし	HP/凸 角度		2	21	10	6		233	69
6099	試掘 M1	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		種小礫	なし	なし	HP/凸 角度		2	18	11	6		233	69
6100	5Y	Ⅱ	縄文	石鏃	埴井		H石核	HI	3	HP/凸 角度		2	34	30	9		233	69
6101	6I	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		製片	なし	なし	HP/平 面		1	22	23	10		233	69
6102	8M	Ⅱ	縄文	石鏃	埴井		製片	HD	不明	HP/凸 角度		2	37	49	11		233	69
6103	8G	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		製片	HD	不明	HP/凸 角度		1	33	30	11	加工は織みの部分のみ	233	69
6104	9A	Ⅳ	縄文	石鏃	埴井		埴井石	製片	HD	不明	HP/凸 角度	1	27	20	10		233	69
6105	試掘	Ⅲ	縄文	石鏃	サヌカイト		製片	HD	不明	HI		2	29	24	11		233	69
6106	試掘	Ⅱ	縄文	石鏃	埴井		製片	HD	不明	HP		2	25	16	8		233	69
6107	9Z	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		製片	HD	不明	HP/凸 角度		2	25	30	8		233	69
6108	20L	Ⅱ	縄文	石鏃	埴井		製片	HD	不明	HP/凸 角度		2	18	18	9		233	69
6109	9Z	Ⅲ	縄文	石鏃	埴井		製片	HD	不明	HP/平 面		2	34	22	11		233	69
6110	5X	Ⅱ	縄文	石鏃	埴井		製片	HD	不明	HP/凸 角度		2	34	21	8		233	69
6111	11Y	Ⅲ	縄文	石鏃	赤埴岩		両端削片	HvD	不明	HP/凸 角度		1	39	17	9		233	69
6112	9Z	Ⅳ	縄文	矢筈	赤埴岩		削片	HD	不明	HP/平 面		3	64	43	15	縄文前期	234	69
6113	試掘	Ⅲ	縄文	箭鏃	埴井		削片	HD	6	HP		2	48	53	14	加工は後の打撃から	234	69
6114	4Y	Ⅲ	縄文	箭鏃	埴井		両端削片	HD	4	SP/平 面		2	29	15	9		234	69
6115	8W	Ⅲ	縄文	箭鏃	埴井		埴井	HI	3	HP/平 面		1	21	17	6		234	69
6116	8W	Ⅲ	縄文	箭鏃	埴井		両端削片	不明	不明	HP		1	32.5	21.2	8.3		234	69
6117	試掘	Ⅲ	縄文	箭鏃	埴井		両端削片	HD	不明	HP		3	36.3	18.8	8.3		234	69
6118	8V	Ⅲ	縄文	箭鏃	埴井		両端削片	不明	不明	HP		1	23.7	23.5	6.7		234	69
6119	5T	Ⅲ	縄文	箭鏃	埴井		削片	HD	4	HP/平 面		1	34	28	8		234	69
6120	27L	Ⅲ	縄文	箭鏃	埴井		両端削片	不明	不明	HP/凸 角度		33.1	45.8	12.7			234	69
6121	5Y	Ⅱ	旧石器	細石不明	埴井		両端削片	HD	不明	HP/凸 角度		3	27.4	25.8	9.3		235	69
6122	9G	Ⅲ	縄文	埴井不明	埴井		両端削片	HI	1	HP		1	26	20	7		235	69
6123	試掘	Ⅲ	縄文	埴井不明	埴井		削片	HD	3			21	22	8	両端削片は埴井を磨く加工	235	69	
6124	9W	Ⅲ	縄文	使用痕	埴井		両端削片	HD	2			34.5	25.5	9.9		235	69	
6125	5X	Ⅲ	縄文	石核	埴井		削片	HD	不明	HI		3	30	44	26	両端打撃の両端削片石核	235	69
6126	23B	Ⅲ	縄文	打製石片	埴井		削片	HvD				52.7	29.9	8.9	刃部欠損	236	70	
6127	23B	Ⅲ	縄文	打製石片	埴井		削片	HD				42	36	12	刃部欠損、刃こぼれ磨丸	236	70	
6128	8Z	Ⅲ	縄文	打製石片	埴井		両端削片	HD				52	57	20	体部破片	236	70	
6129	23A	Ⅲ	縄文	打製石片	埴井		両端削片	HD				102	47	16	刃部材料磨丸、わずかに欠損	236	70	
6130	13Z	Ⅲ	縄文	打製石片	安山岩		両端削片	HD				102.2	51.3	20	刃部わずかに磨丸	236	70	
6131	8X	Ⅲ	縄文	埴井不明	安山岩		削片	HD				74.3	83.8	6		236	70	
6132	7Z	Ⅲ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HvD	65	55.4	21.4		237	70
6133	5Y	Ⅱ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HvD	50	56.1	19.7		237	70
6134	11V	Ⅱ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HvD	67	43	15		237	70
6135	9Y	Ⅲ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HD	62.7	43.9	26.5		237	70
6136	20	Ⅲ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HvD	76.5	49.2	19.6		237	70
6137	8B	Ⅲ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HvD	53	35.1	14		237	70
6138	7Y	Ⅲ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HvD	49.9	39.1	18.4		237	70
6139	4K	Ⅲ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HvD	51	38.9	12		237	70
6140	8W	Ⅱ	縄文	打製石片	砂岩		小形内縁					HvD	45	47	21		237	70

遺物番号	出土地点	層位	時期	器種	石材	副産物	素材	素材技術	漆材パ ンサー 色	加工 技術	加工パ ンサー 色	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考	検出	図帳
6141	試掘	Ⅱ	縄文 前期	打欠石鏃	灰岩		小形楕円鏃			HvD		50	37	12		237	70
6142	9V	Ⅱ	縄文 前期	打欠石鏃	灰岩		小形楕円鏃			HvD		35	33.0	11		237	70
6143	試掘	Ⅲ	縄文 前期	燧石	砂岩		長楕円鏃					125.1	62	39.8	下層部に敲打痕	238	71
6144	22C	Ⅲ	縄文 前期	燧石	凝灰岩		長楕円鏃					140.1	65.4	39.1	下層部に敲打痕	238	71
6145	12Z	Ⅲ	縄文 前期	燧石	凝灰岩		長楕円鏃					126.7	73.4	29.8	下層部に敲打痕	238	71
6146	9V	Ⅲ	縄文 前期	燧石	砂岩		楕円鏃					99.4	70.5	32.2	下層部に敲打痕	238	71
6147	23J	Ⅲ	縄文 前期	燧石	砂岩		楕円鏃					81.1	46.2	39.3	上下両部に滑らかな敲打痕	238	71
6148	5Y	Ⅲ	縄文 前期	燧石	輝石安山岩		楕円鏃					74.1	48.7	40	下層部に滑らかな敲打痕	238	71
6149	5Y	Ⅲ	縄文 前期	燧石	砂岩		楕円鏃					59.4	53.8	36.7	下層部に滑らかな敲打痕	238	71
6150	8Y	Ⅲ	縄文 前期	燧石	砂岩		楕円鏃					57.6	49.9	26	下層部に敲打痕	238	71
6151	6Z	Ⅲ	縄文 前期	燧石	砂岩		楕円鏃					69.5	42.8	40.7	下層部に滑らかな敲打痕	238	71
6152	9Z	Ⅳ	縄文 前期	特殊燧石	砂岩		楕円鏃					93.4	87.4	47.3	側辺ゼラザラの遺痕	239	72
6153	9A	Ⅲ	縄文 前期	特殊燧石	輝石安山岩		楕円鏃					124.1	90.9	53.6	両側面、側辺ゼラザラの遺痕	239	72
6154	10Z	Ⅳ	縄文 前期	燧石	砂岩		楕円鏃					86.7	76.2	52.2	両側面とアバタ状敲打痕、両側辺ゼラザラの遺痕	239	72
6155	7X	Ⅲ	縄文 前期	燧石	輝石安山岩		楕円鏃					86	78.2	36.3	両側面と敲打痕	239	72
6156	5V	Ⅱ	縄文 前期	燧石	輝石安山岩		楕円鏃					95.7	82.2	68.9	両側面と両側辺ゼラザラの遺痕	239	72
6157	6W	Ⅲ	縄文 前期	燧石	砂岩		楕円鏃					64.9	61.4	33.3	両側面とアバタ状敲打痕、両側辺ゼラザラの遺痕	239	72
6158	7Z	Ⅲ	縄文 前期	燧石	輝石安山岩		楕円鏃					73.8	76.4	42.9	両側面、両側辺ゼラザラの遺痕	239	72
6159	8Z	Ⅲ	縄文 前期	燧石	輝石安山岩		楕円鏃					99.7	78.3	45.6	両側面、両側辺ゼラザラの遺痕	239	72
6160	5Y	Ⅲ	縄文 前期	燧石	輝石安山岩		楕円鏃					110.5	89.3	43.2	両側面	239	72
6161	9K	Ⅲ	縄文 前期	燧石	輝石安山岩		楕円鏃					88.8	95.6	53.5	両側面	239	72

種別	出土位置・ 発掘 グリッド	種別	形状	長さ (mm)	幅 (mm)	重量 (g)	材質 (XRF)	状態 (XRF)	用途 (XRF)	内装	彩色調	内装調	時期	備考	検出 回数	
3036	3M	II	環状片	17.4	3.9	1	18.0	良好	片で	片で	2.5Y72灰黄	2.5Y72灰黄	6 C中		257	
3037	4P-4O	II	環状片	(10.2)	3.5	2	24.0	良好	環状へう割りで	片で	2.5Y41黄灰	2.5Y41黄灰	6 C末~7 C前半		257	
3038	4N	II	環状片	(11.6)	4.0	(3.7)	6	96.0	良好	片で	10YR5/2赤灰	10YR5/2赤灰	7 C		257	
3039	3P-4P	III	環状片		2.8		62.0	不良	環状へう割りで	片で	2.5Y72灰黄	2.5Y72灰黄	7 C中		257	
3040	SBE24	III	環			146.0	良好	環状へう割りで	片で	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白	7 C末~8 C前半		257		
3041	3O	III	小豆形底形		3.4		19.0	良好	片で	片で	10YR7/1灰白	10YR7/1灰白			257	
3042	SU-5	III	環口縁部	(19.4)	1.7		100.0	良好	片で	片で	7.5YR7/2暗赤灰	7.5YR7/2暗赤灰	8 C中		257	
3043	6A	III	環口縁部	(10.5)	7.6		157.0	良好	片で	片で	2.5Y72灰黄	10YR7/1灰白	時期不明		257	
3044	6B	III	環口縁部		4.4		27.0	良好	片で	片で	10YR7/2におい黄	10YR7/1灰白			257	
3045	3M	II	環状片	2.5	(8.4)	3	49.0	良好	片で	片で	10YR7/2におい黄	7.5YR7/4におい黄	時期不明		257	
3046	5M	II	砂底形		1.8	(8.0)	3	61.0	良好	片で	10YR6/1黄灰	10YR7/2におい黄	時期不明		257	
3047	7C	2.5Y72灰黄	環	33.0	14.8	5	640.0	不良	片で	片で	2.5Y72灰黄	10YR7/2におい黄			259	
3048	6Z	II	環状底		3.5	24.0	1	87.0	不良	片で	片で	10YR7/2におい黄	10YR7/2におい黄			258
3048	SU-6	III	環状底		1.1	24.0	1	71.0	良好	片で	片で	10YR7/2におい黄	10YR7/2におい黄			258
3050	11B	III	環状底		1.0	24.0	1	68.0	良好	片で	片で	10YR7/2におい黄	10YR7/2におい黄			258
3051	28X-28Y 25W	7.8	環状底		1.0	23.0	1	30.0	不良	片で	片で	10YR6/2赤白	10YR6/2赤白			258
3052	23W		環状底		1.3	23.0	1	23.0	不良	片で	片で	10YR7/2におい黄	2.5Y7/1灰白			258
3053	AN	7Y-6.0Y ALUMINUM	II	環状底			84.0	良好	片で	片で	2.5Y6/1黄灰	2.5Y7/1灰白			259	
3054	2L	III	環状底			156.0	良好	片で	片で	2.5Y6/1黄灰	2.5Y7/1灰白	7 C		259		
3055	7L	III	環状底		3.7		59.0	良好	片で	片で	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	8 C末		259	
3056	7L	III	環状底			13.0	良好	片で	片で	5Y6/1灰	5Y6/1灰	8 C末		259		
3057	8K	III	砂底形			37.0	良好	片で	片で	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	8 C末		259		
3058	7L	III	砂底形			84.0	良好	片で	片で	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	8 C末		259		
3059	6J	III	環状底			81.0	良好	片で	片で	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	8 C末		259		

上へより、暗赤
色、暗赤色、黄赤色

検出として利用。

遺構 番号	遺構 タイプ	遺構 位置	遺構 形状	遺構 面積	遺構 容積	遺構 高さ	遺構 厚さ	遺構 重量	遺構 材質	遺構 状態	遺構 用途	遺構 備考	遺構 図面																
4315	SKD15	M1	14.5	4.2	7.6	6	3	138	50	良好	3.0	9.5	7.3	欄	c	D2	重	○	非	2.0	遺跡	混合	遺構	307	304	78			
4316	SKD15	M1	16.4	5.2	8.9	11	10	189	90	不良	3.0	10.5	8.0	欄	c	A2	内	○	×		遺跡	混合	遺構	307	304	78			
4317	SKD15	M1	17.3	4.9	9.0	7	7	141	60	不良	3.0	12.0	8.3	欄	c+d	D2	内	○	×	下	1.6	遺跡	混合	遺構	307	304	78		
4318	SKD15	M1	16.6	4.9	6.6	6	5	193	70	不良	3.5	10.0	8.3	欄	c	H2	内	○	×		遺跡	混合	遺構	307	304	78			
4341	SK	III	14.3	4.4	7.1	5	12	139	60	良好	3.0	7.0	7.7	欄	a	A	内	○	×	下	2.7	遺跡	混合	遺構	307	304	78		
4342	SK	III	14.0	4.5	7.5	8	12	161	80	良好	3.5	6.5	8.5	欄	c	E	重	○	×	下	1.4	遺跡	混合	遺構	307	304	78		
4343	SA	III	16.0	4.9	8.0	3	12	57	20	不良	3.5	11.0	8.0	欄	c	C3	内	○	×		遺跡	混合	遺構	307	304	78			
4344	SK	III	14.6	4.7	7.5	5	8	111	50	良好	4.0	9.5	9.5	欄	c	D2	内	○	×		遺跡	混合	遺構	307	304	78			
4345	10C	III	10A,10C	18.0	4.9	6.0	3	90	70	良好	4.0	9.5	7.5	欄	c	H2	F	○	×	下	2.4	遺跡	混合	遺構	307	304	78		
4346	SK	III	14.6	4.5	7.8	12	12	178	100	不良	3.5	10.5	7.5	欄	c	H2	F	○	×	下	2.0	遺跡	混合	遺構	307	304	78		
4347	SK	III	14.6	4.2	7.8	7	11	183	70	良好	3.0	10.0	7.5	欄	c+d	H2	重	○	×	下	2.0	遺跡	混合	遺構	307	304	78		
4348	SK	III	16.0	4.8	8.6	11	8	157	75	不良	4.0	11.0	8.6	欄	c	C2	重	○	×		遺跡	混合	遺構	307	304	78			
4349	SK	III	16.0	5.0	8.6	9	12	205	90	良好	3.5	11.0	8.6	欄	b	B2	重	○	×		遺跡	混合	遺構	307	304	78			
4350	SA	III	10A,11A,10B	18.0	6.4	9.0	2	173	50	良好	3.0	18.0	8.0	欄	a	A3	内	○	×	下	3.6	遺跡	混合	遺構	307	304	78		
4353	10A	III	10B	17.5	6.0	9.0	2	251	10	不良	3.5	9.5	9.0	欄	a	C3	重	○	×	下	4.9	遺跡	混合	遺構	307	304	78		
4361	11B	III	10C	16.5	4.2	8.3	4	80	137	4	60	10	5	9.5	6.6	欄	a	H2	重	○	×	下	3.1	遺跡	混合	遺構	307	304	78
4365	SA	III	16.5	4.2	8.3	3	55	20	良好	2.5	7.5	7.5	欄	a	H2	内	○	×		遺跡	混合	遺構	307	304	78				
4371	SKD16	III	18.2	6.2	10.0	12	11	105	40	良好	3.5	12.0	8.0	欄	a	B2	内	○	×		遺跡	混合	遺構	307	304	78			
4372	SKD27	III	18.2	8.8	13.7	12	132	30	良好	4.0	9.0	9.0	欄	b	F2	内	○	×	下	1.1	遺跡	混合	遺構	307	304	78			

四墳

墳名	所在地	形状	高さ(m)	幅(m)	周囲長(m)	築年	出土品	調査者	備考					
4003	山十福橋・アリスド	M7	15.0	2.9	6.2	7	110 50 銅貨	4.0 6.5	8.0	正	○	山十福橋・アリスド	273 77	
4011	山十福橋	M1	14.0	2.4	7.4	5	89 50 銅貨	4.0 6.5	7.0	正	○	山十福橋	273 77	
4012	山十福橋	M1	14.0	2.5	7.5	11	123 60 銅貨	2.0 6.0	6.0	正	○	山十福橋	273 77	
4013	山十福橋	M1	14.2	2.6	7.4	6	12 105 70 銅貨	4.0 6.5	7.5	正	○	山十福橋	273 77	
4014	山十福橋	M1	14.0	2.8	7.3	6	114 70 銅貨	2.9 7.0	6.0	正	○	山十福橋	273 77	
4015	山十福橋	M1	14.5	2.6	6.0	2	21 5 銅貨	3.5 3.5	6.0	正	○	山十福橋	273 77	
4027	山十福橋	M1	14.3	2.7	7.2	12	105 100 銅貨	3.0 6.0	6.0	正	○	山十福橋	273 77	
4028	山十福橋	M1	15.3	2.5	7.9	2	96 50 銅貨	2.5 6.5	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4029	山十福橋	M1	15.0	2.8	8.2	6	123 70 銅貨	3.5 5.5	7.2	正	○	山十福橋	273 77	
4030	山十福橋	M1	15.1	2.9	8.6	4	128 50 銅貨	3.5 7.5	8.5	正	○	山十福橋	273 77	
4037	山十福橋	M1	14.7	3.0	7.6	11	67 30 銅貨	3.5 6.5	6.9	正	○	山十福橋	273 77	
4038	山十福橋	M1	15.2	3.1	7.5	5	126 75 銅貨	3.0 6.0	7.6	正	○	山十福橋	273 77	
4039	山十福橋	M1	13.2	3.1	7.2	4	110 50 銅貨	3.0 7.0	7.5	正	○	山十福橋	273 77	
4054	山十福橋	M1	14.4	2.9	7.5	6	72 50 銅貨	3.0 6.5	7.5	正	○	山十福橋	273 77	
4055	山十福橋	M1	15.6	2.4	6.0	1	41 10 銅貨	3.0 6.5	7.2	正	○	山十福橋	273 77	
4057	山十福橋	M1	14.0	2.5	6.0	5	90 50 銅貨	3.0 6.8	8.5	正	○	山十福橋	273 77	
4058	山十福橋	M1	15.4	2.7	7.7	11	4	90 10 銅貨	3.5 6.5	9.5	正	○	山十福橋	273 77
4059	山十福橋	M1	15.1	3.0	8.0	2	45 20 銅貨	2.5 5.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4060	山十福橋	M1	15.8	2.8	7.5	4	118 50 銅貨	3.5 7.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4061	山十福橋	M1	14.6	2.9	7.8	5	122 50 銅貨	3.0 6.0	7.5	正	○	山十福橋	273 77	
4062	山十福橋	M1	14.7	3.1	7.8	2	97 50 銅貨	3.5 7.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4063	山十福橋	M1	15.0	3.1	7.5	5	107 50 銅貨	3.5 6.0	7.5	正	○	山十福橋	273 77	
4064	山十福橋	M1	14.9	3.0	7.5	9	126 50 銅貨	3.5 6.0	7.0	正	○	山十福橋	273 77	
4065	山十福橋	M1	14.9	3.0	7.8	7	105 40 銅貨	3.0 7.5	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4066	山十福橋	M1	14.5	2.7	8.3	9	104 60 銅貨	3.5 5.5	7.2	正	○	山十福橋	273 77	
4067	山十福橋	M1	14.9	2.9	8.0	2	102 30 銅貨	3.5 5.5	7.3	正	○	山十福橋	273 77	
4070	山十福橋	M1	14.4	2.6	7.1	2	85 20 銅貨	3.5 6.5	7.0	正	○	山十福橋	273 77	
4084	山十福橋	M1	13.8	2.6	7.2	2	87 50 銅貨	3.0 7.5	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4091	山十福橋	M1	13.0	3.1	7.2	1	121 60 銅貨	4.0 2.0	7.5	正	○	山十福橋	273 77	
4092	山十福橋	M1	10.0	4.1	9.1	2	127 60 銅貨	4.0 20.0	11.0	正	○	山十福橋	273 77	
4093	山十福橋	M1	14.0	2.9	7.1	4	139 70 銅貨	4.5 5.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4165	山十福橋	M1	14.5	3.1	7.7	5	92 50 銅貨	3.0 7.0	7.2	正	○	山十福橋	273 77	
4166	山十福橋	M1	14.6	2.6	8.2	6	12 116 70 銅貨	3.5 4.5	7.0	正	○	山十福橋	273 77	
4168	山十福橋	M1	14.0	2.6	8.2	6	12 130 60 銅貨	3.5 6.0	6.9	正	○	山十福橋	273 77	
4169	山十福橋	M1	14.4	2.9	8.2	6	130 60 銅貨	4.0 6.0	6.0	正	○	山十福橋	273 77	
4185	山十福橋	M1	15.3	2.5	8.5	5	10 112 50 銅貨	4.0 6.5	7.6	正	○	山十福橋	273 77	
4187	山十福橋	M1	14.6	2.8	8.0	10	11 59 60 銅貨	3.0 7.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4188	山十福橋	M1	15.8	2.4	8.0	4	12 112 50 銅貨	3.0 7.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4189	山十福橋	M1	16.0	3.0	7.5	11	6 168 90 銅貨	3.0 6.0	7.5	正	○	山十福橋	273 77	
4170	山十福橋	M1	14.3	3.1	8.3	12	171 90 銅貨	4.0 7.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4171	山十福橋	M1	14.0	2.4	7.6	6	12 130 70 銅貨	3.0 6.5	7.5	正	○	山十福橋	273 77	
4172	山十福橋	M1	14.0	2.5	7.8	4	12 119 60 銅貨	3.0 6.5	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4173	山十福橋	M1	13.4	2.7	7.4	5	4 130 70 銅貨	4.0 6.5	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4174	山十福橋	M1	13.0	3.0	7.8	4	12 131 70 銅貨	3.5 7.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	
4175	山十福橋	M1	14.2	2.8	7.8	10	9 127 60 銅貨	2.5 7.0	8.0	正	○	山十福橋	273 77	

Table with 20 columns: 調査種別, 調査内容, 調査地, 調査日時, 調査者, 調査結果, 調査結果の概要, 調査結果の概要. The table lists various field survey results for different sites and dates.

皿状焼台

焼台 番号	出土場所・ グリッド	単位	検出された層位	検出されたグリッド	口徑 (cm)	高さ (cm)	口縁径 (cm)	底径 (cm)	口縁径/底径 $X/1/2 X/1/2$	容量 (g)	残存率 残 (%)	焼成	底径 口徑 (cm)	焼成 位置	備 考	焼台 番号
4020	NE11			S02.25X.25X.26X.26X.26Y	18.8	3.6	8.6	6.9	6	9	256	60	良好	底径僅 5 X 3 出土。		273
4071	S03-A	ME1		S701.25X.24X.24W	17.3	3.0	8.0	6.0	9	201	75	良好	底径僅			277
4072	S03-A	M1-3	7.4	24X.26X.25W	16.8	3.3	8.3	10	12	204	90	良好	10.0	z	内面付焼物有り。	277
4073	S03			S001.26W	18.3	3.0	10.0	8	8	226	70	良好	10.5	z	5 X 3 出土。底径内面・底縁の凹凸。	277
4080	S01			S02.26Y.25X.26X.24Y.24X	18.7	3.5	9.8	12	12	362	95	良好	10.0	z	5 X 3 出土。底径内面・底縁の凹凸。	278
4081	S03	Ⅱ	Ⅱ	SK1.24W.23X.26X.25V	18.5	3.1	8.5	5	10	284	70	良好	9.4	b	5 X 3 出土。底径僅	278
4095	24X.25X	2	Ⅱ	27X.25X.26W.26Y.24Y	22.0	4.1	10.0	6	6	317	60	良好	10.0	a	底径僅 5 X 3 出土。底径内面・底縁の凹凸。	279
4152	25X.26X	2	Ⅱ	S51.36X.17X.16W.17W.180J.34X	17.1	3.2	8.1	6	12	277	60	良好	10.0	b	底径僅	280
4153	25X.26X	2	Ⅱ	S41.25X.24Y.26Y	18.7	4.3	11.8	7	10	468	75	良好	14.9	z	底径僅	280
4154	26X.26Y	8	2	26X.26Y	17.0	3.2	9.0	12	12	352	95	良好	10.5	a	底径僅	283
4255	26X.26Y	4	Ⅱ	26Y.26X.27X	19.5	3.9	10.0	7	3	168	40	良好	11.0	c	底径僅	283
4256	26W	4		S701.24A	20.5	4.3	11.5	5	5	267	50	良好	10.0	z	不明	283
4257	26X.26Y	4		26X	20.0	2.5	8.1	10	10	431	90	良好	7.0	c	不明	283
4258	26W.26X	7	4	25W	16.0	2.9	5.7	5	11	147	60	良好	7.0	c	不明	283
4259	25W	7		20X.25W	15.0	3.2	6.7	9	12	185	90	良好	6.0	a	底径僅	283
4260	25X.26Y	7	4	26W.25X.26X	14.6	3.6	7.5	1	10	71	50	不良	7.0	a	底径僅	284
4261	25W	7		24W.25W.26X	17.3	3.4	8.2	5	12	308	60	良好	10.0	a	底径僅	284
4262	25X	7		25W.24W.23X	16.2	3.2	9.3	10	12	265	90	良好	不明	a	底径僅	284
4263	25W	7		20X	18.9	2.8	9.7	9	12	414	90	不良	14.0	c	底径僅	284
4264	25W	7		26X.25V	18.7	4.9	10.1	10	12	468	95	良好	12.0	z	底径僅	284
4265	25Y			26X.25X	15.0	3.1	5.5	2	6	71	10	不良	8.0	a	底径僅	284
4266	26X			26X	15.5	3.9	6.3	6	12	110	70	不良	不明	a	底径僅	284
4267	26W			27X	15.0	3.3	6.1	8	8	121	50	良好	7.0	b	底径僅	284
4268	26X				18.3	2.5	9.5	10	10	369	90	不良	8.9	c	底径僅	284
4279	26X				18.0	2.8	9.0	2.5	11	948	不明	12.0	c	底径僅	284	
4309	S0D14	M1	Ⅱ	9A10A.11A.11B	16.4			6	0	117	30	良好	不明	b	底径僅	305
4338	S0D15	M1	Ⅱ		18.2	3.1	7.8	4	12	260	90	良好	9.0	a	底径僅	305
4339	S0D15	M1	Ⅱ	11Z.10Z.10A	17.6	3.1	8.5	11	12	338	90	良好	9.0	a	底径僅	305
4340	S0D15	M1	7.Ⅱ	25W.24W.10A.11A	16.5	3.5	9.5	9	11	298	90	良好	9.5	z	底径僅	305
4374	10A	Ⅱ		9A.26X.26Y	18.0	2.9	8.3	8	10	204	80	良好	10.0	a	底径僅	309
4375	5B	Ⅱ		9D.5K	20.4	3.7	9.2	1以下	6	166	20	良好	12.0	a	底径僅	309

鉢類

器種・番号	出土位置・層位	器口径 (cm)	高さ (cm)	口径 (cm)	器底径 (cm)	重量 (g)	口径残存径 (cm)	口径底径 (cm)	口径底厚 (cm)								
4235, 26X	組合であったブワッド	25.5	4.9	3	63.0	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
4302 SX006 M2	3A, 3B, 3C, 3D, 3E, 3F, 3G	27.0	7.4	4	210.0	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
4311 SX016 M1	3A, 3B, 3C, 3D, 3E, 3F, 3G	28.0	6.0	3	138.0	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
4335 SX015	9A, 10A, 11A	28.0	2.7	3	117.0	不良	不良	不良	不良	不良	不良	不良	不良	不良	不良	不良	不良
4336 SX015 M1	9A, 10A, 10B, 11 12, 13, 14, 15, 16 17, 18, 19, 20X	33.6	11.6	15.5	10.20	4.0	8.0	803.0	50.0	良好	14.0	F3	○	半	縁残り	肩部分	2.5X72区画
4337 SX015 M1	3.5	13.0	6	336.0	10.0	不良	13.8	鉢	○	下	縁残り	下	半	縁残り	肩部分	2.5X72区画	2.5X72区画
4370 8Z I, SUJ6	29.0	6.2	1	74.0	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好

蓋類

器種・番号	出土位置・層位	器口径 (cm)	高さ (cm)	口径 (cm)	口径底径 (cm)	口径底厚 (cm)											
4233	25X	7	25X	15.5	3.7	6.0	11	149.0	99.0	良好	14.0	2.5X76区画	黒	2.5X72区画	黒	2.5X72区画	黒
4234	25X	7	25X, 24X, 25W	15.5	3.0	6.0	8	131.0	80.0	良好	14.0	5X83区画	白	5X77区画	黒	5X77区画	黒

土師器 壺・甕・甕道具

器種・番号	出土位置・層位	器口径 (cm)	高さ (cm)	口径 (cm)	口径底径 (cm)	口径底厚 (cm)										
4019 沈雲堂 M1	3.5	14.1	6.5	(8.2)	12	346	80	不良	蓋道具?	蓋	蓋	蓋	蓋	蓋	蓋	蓋
4086 SK4 M1	21.0	26.8	26.0	(23.2)	9.5	18.5	10.6	1647	80	不良	蓋	蓋	蓋	蓋	蓋	蓋
4236 26W, 28X, 4	7	25W	11.5	7.5	5.0	11.4	6.4	7.5	1.1	1.0	4	12	81	70	不良	小壺
4372 10A 壺	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	6.0	73	5	不良	蓋道具	蓋	蓋	蓋	蓋	蓋

焼台類

産地	産名	産年	産量 (kg)	産高 (cm)	産幅 (cm)	産厚 (cm)	産重 (kg)	産長 (cm)	産幅 (cm)	産厚 (cm)	産重 (kg)	産色	産味	産臭	産質	産価	産評		
4070	803 A	新庄産	10.1	15.2	10.1	41	2061	14.5	8.4	9	80	8.5	11.7	下	J			277	104
4276	20X-20X	7 新庄産	5.1	12.9	5.1	29	877	14.5	8.4	9	80	8.5	11.7	下	J			205	104
4277	20X-20X	2 新庄産	4.8	14.4	4.8	16	868	15.3	7.5	11	90	7.5	11.7	下	E			205	104
4278	20X	新庄産	4.0	15.5	4.4	38	794	17.0	2.9	1	9.0	9.0	3.0	下	H12			295	104

とち類

産地	産名	産年	産量 (kg)	産高 (cm)	産幅 (cm)	産厚 (cm)	産重 (kg)	産長 (cm)	産幅 (cm)	産厚 (cm)	産重 (kg)	産色	産味	産臭	産質	産価	産評		
4269	20X		1.9	6.5	1.9	46	12	2.5Y7/2	淡黄	外油								297	103
4270	20X		1.9	5.5	1.9	32	12	2.5Y7/2	淡黄	無								297	103
4271	20X	7	4.5	5.5	4.5	1.9	26	12	2.5Y7/2	淡黄	外油							297	103
4272	20X	7	6.5	7.0	6.5	2.0	41	11	2.5Y7/2	淡黄	外油							297	103
4273	20X-20X	2	1.9	6.5	1.9	39	11	2.5Y6/1	黄灰	無								297	103
4274	20X		2.0	6.0	2.0	41	11	2.5Y7/2	淡黄	外油								297	103
4275	20X-20X	7	4.0	4.5	4.0	1.6	17	10	2.5Y6/2	淡白	原油							297	103

表37 山茶観察表

山茶産

採種 番号	土壌標・ フリット	組合せられた フリット	葉の上 の葉位 付番号	葉種	葉		葉の 長さ (cm)	葉の 幅 (cm)	葉の 厚さ (mm)	葉の 重量 (g)	葉の 水分 率 (%)	焼成	製		内色調	外色調	時期	備考	採種 番号	採種 年
					葉 口長(cm)	葉 幅(cm)							葉 厚(mm)	葉 重(g)						
5001	28B			油底部	2.1	6.5	12	76.0				良好	葉で	10YR8/2灰白	13C前半			106		
5002	29C		I	油破片	5.8	4.9	1	57.0			良好	葉で	10YR8/2灰白	13~14C			106			
5003	24X	27W,22X	7	油破片	13.4	(13.5)	6	51.0			良好	葉で	10YR8/2灰白	13~14C			310			
5004	12Y	11Z,19Y,12Z	Ⅱ	油破片	12.8	5.5	12	93.0			良好	葉で	2.5YR2/2灰白	13~14C			310			
5005	11A		Ⅱ	油破片	14.0	4.2	2	19.0			良好	葉で	10YR7/3にぶい黄褐色	14~15C			310			
5006	灰密			小油破片	8.3	1.2	7.0	3	9.0		良好	葉で	2.5YR8/1灰白				310			
5007	22M		Ⅱ	小油破片	8.5	1.3	(4.4)	2	8.0		良好	葉で	10YR8/2灰黄褐色				310			
5008	養得			小油破片	8.4	1.2	(4.5)	2	11.0		良好	葉で	10YR7/2にぶい黄褐色				310			
5009	9H		Ⅱ	小油破片	8.2	1.5	(4.2)	3	16.0		良好	葉で	10YR7/1灰白				310			
5010	13X		Ⅱ	かわらけ	(11.9)	2.3	1	11.0			不良	葉で	10YR8/3淡黄褐色				310			
5011	50		Ⅱ	油破片	(13.8)	2.2	1	14.0			良好	葉で	10YR8/1灰白	15C後半			310			
5012	23J		Ⅱ	油破片	(6.0)	1.7	5	19.0			良好	葉で	10YR8/2灰白	葉茶一芽法			310			
5013	33U		Ⅱ	油底部		4.8	5.0	12	101.0		良好	葉で	10YR8/2灰白	葉茶			310			

圖 版



調査開始前 (深橋前古墳)



調査開始前 (D・E区)



調査開始前 (深橋前古墳より吉田沖を望む)



調査開始前 (F区)



調査開始前 (A区)



調査開始前 (深橋前古窯跡)



調査開始前 (B区)



調査開始直前 (表土剥ぎ終了後)



調査終了後 (D・E区)



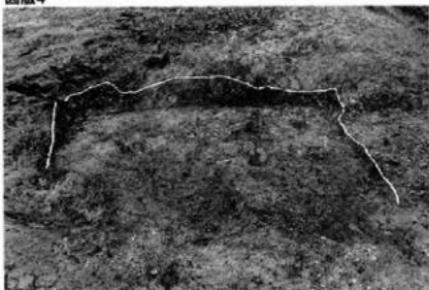
調査終了後 (A・B区)



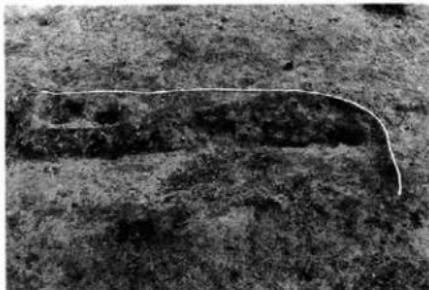
調査終了後 (F区)



調査終了後 (A~E区、F区は調査前)



SBA01



SBA06



SBA03・09



SBA07



SBA04



SBA05 (床面焼土の状況)



SBA05 (銅鏝(7001)出土状況)



SBA05



SBA08



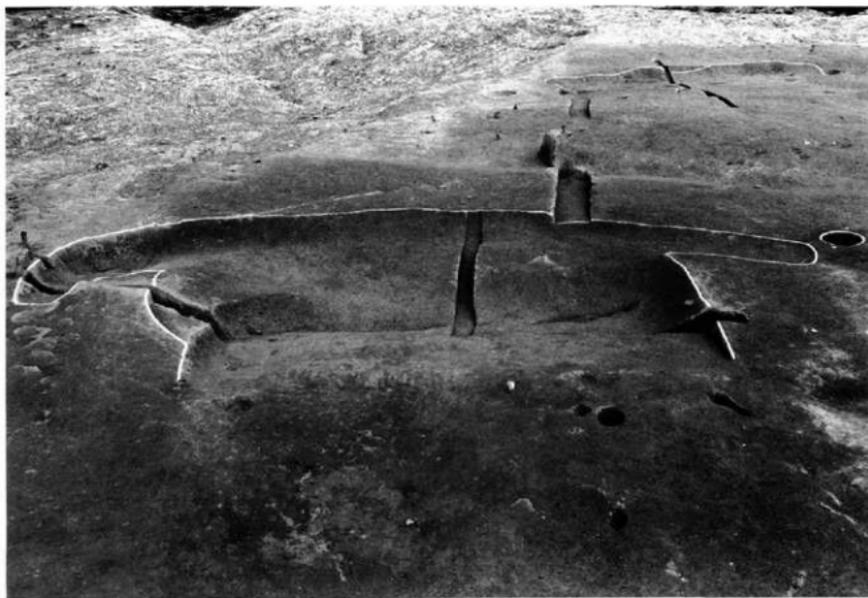
SBA14 (掘削前)



SBA10



SBA14



SBB04



SBB01



SBB08



SBB05



SBB11



SBB06 · 10



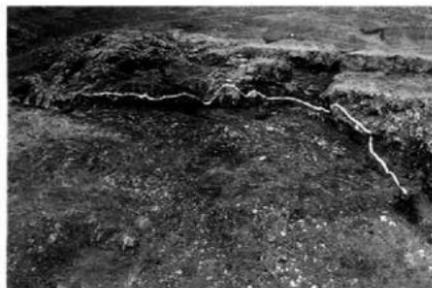
SBB12



SBB07



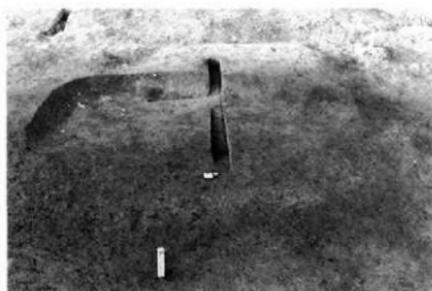
SBB13



SBD01



SBD10



SBD03



SBE01



SBD05



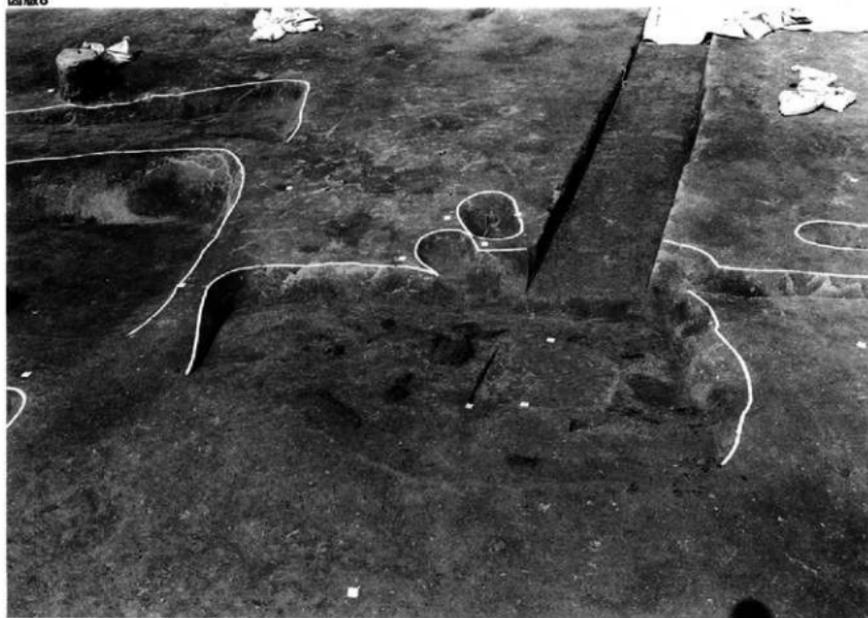
SBE03



SBD08



SBE04



SBE06



SBE06 (S字甕 (2102) 出土状況)



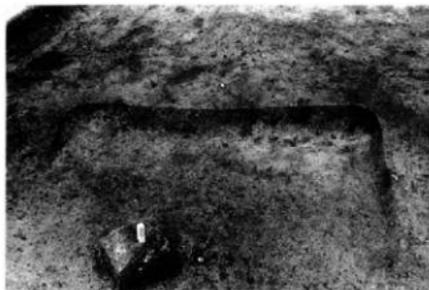
SBE06 (甕 (2103) 出土状況)



SBE05



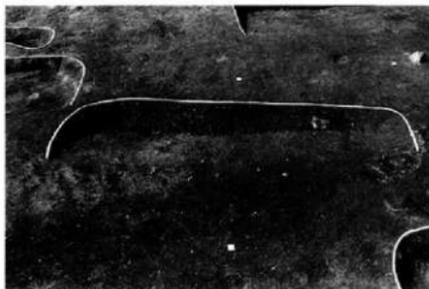
SBE06 (甕 (2106) 出土状況)



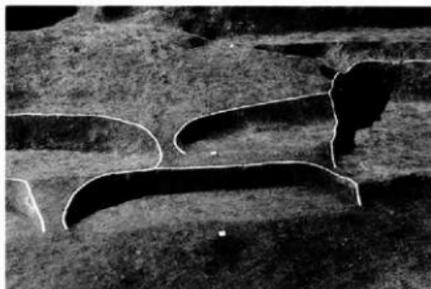
SBE01



SBE17 • 21 • 32



SBE08



SBE18 • 28



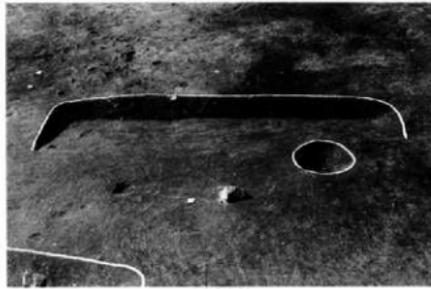
SBE09 • 10 • 11



SBE28 • 29



SBE15 • 16



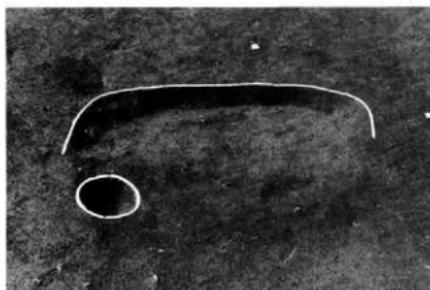
SBE19



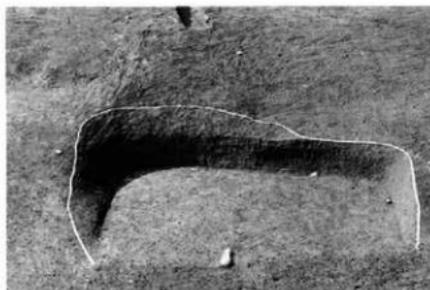
SBE22



SBE24



SBE23



SBE27



SBE25 · 33 · 34



SBE33 · 34



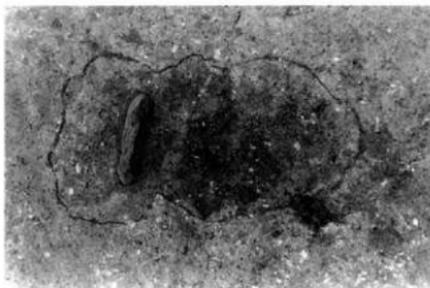
SBE33 (燒土遺構)



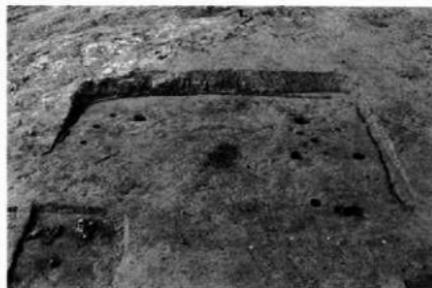
SBF01



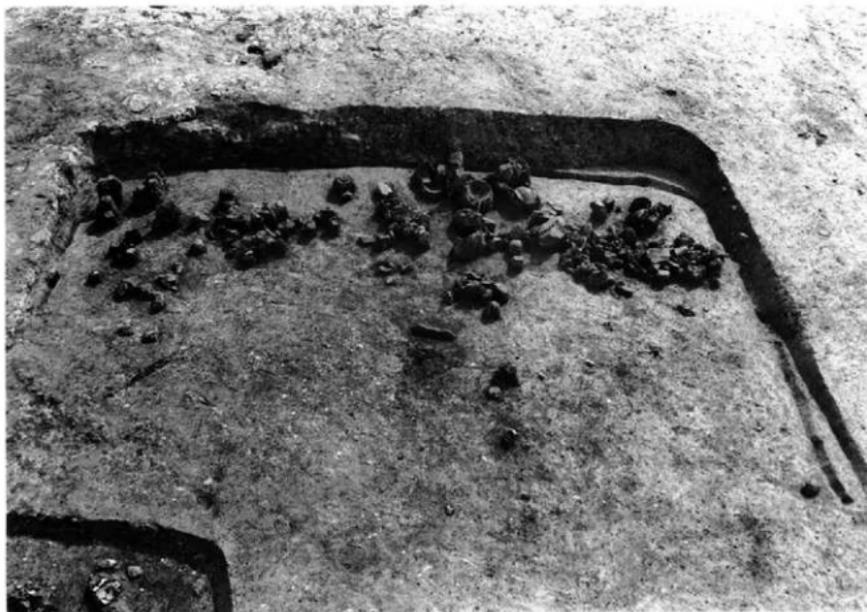
SBF01 (壘〈2156〉出土狀況)



SBF02 (地床炉)



SBF02



SBF02 (遺物出土狀況)



東丘陵尾根筋の平坦地 (SBA05・SBF02・SBF08付近)



SBF04



SBF06



SBF05



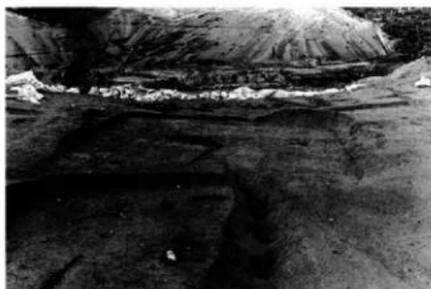
SBF11



SBF08 (筒状銅製品〈7002〉出土状況)



SBF08 (筒状銅製品〈7002〉出土状況)



SBF08



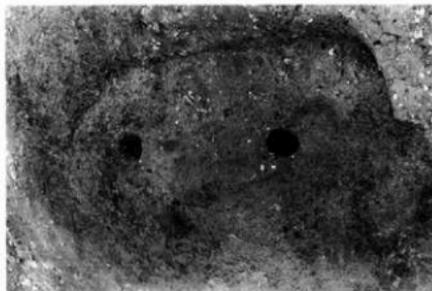
SBF08付近



SBF08 (遺物出土状況)



SBF13 · 15



SBF18



SBF16



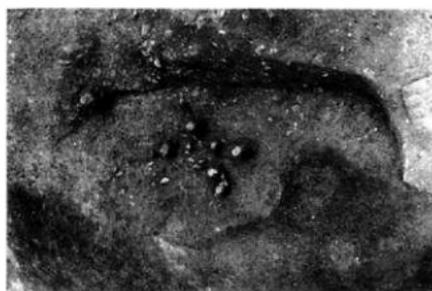
SBF19



SBF14



SBF20



SBF17



SBF23 · 24



SBF25 (甕(2237)・鉢(2241)出土状況)



SBF25



SBF25 (甕(2237)・鉢(2241)出土状況)



SBF25 (S字甕(2239)出土状況)



SBF25



SBF27



SBF28



SBF29 (炭化材出土状況)



SBF29 (付近)



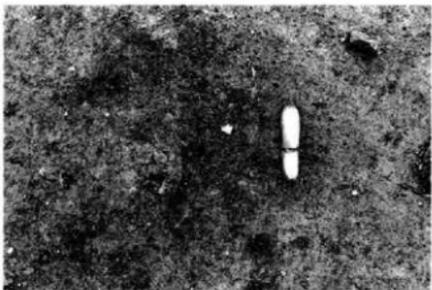
SBF29



SBF34 · 35



SBF31



SBF38 (地床炉)



SBF39



SBF38



1号方形周溝墓



2号方形周溝墓



3号方形周溝墓 (遺物出土狀況)



4号方形周溝墓



3号方形周溝墓



段状遺構



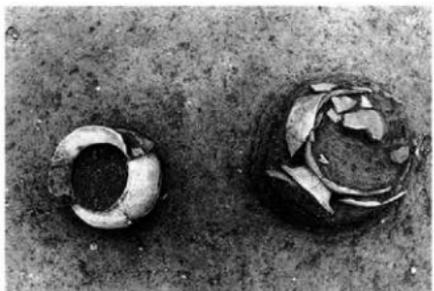
SUA01



段状遺構



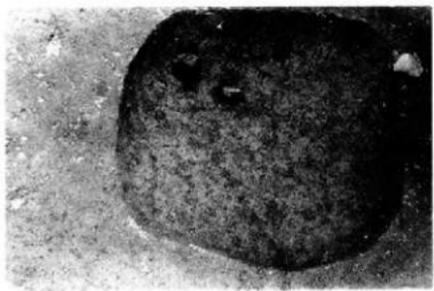
作業風景 (B区)



3・4号土坑墓



作業風景 (F区)



SKA01



雪景色 (深橋前古墳方面)



深橋前古墳（羨道方面から）



深橋前古墳（航空撮影）



深橋前古墳（奥壁方向から）



深橋前古墳（東壁方向から）



深橋前古墳（奥壁と据石の連結部分〈上から〉）



深橋前古墳（盗掘口）



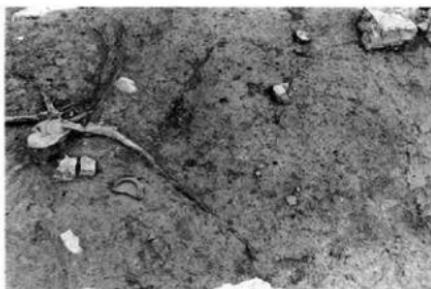
深橋前古墳（奥壁と据石の連結部分〈横から〉）



深橋前古墳（遺物出土状況）



深橋前古墳（奥壁）



深橋前古墳（遺物出土状況）



深橋前古墳（吉田沖を望む）



深橋前古墳（奥壁の後方より）



1号土坑墓断面（西から）



2号土坑墓断面（東から）



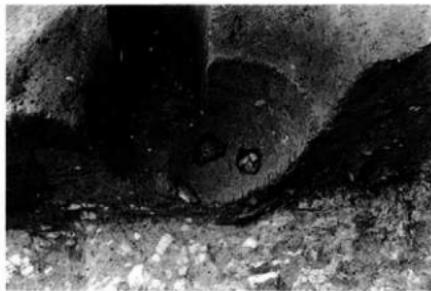
2号土坑墓埋土1層除去後（南から）



2号土坑墓鉢半分除去後（南から）



2号土坑墓鉢除去後（南から）



2号土坑墓鉢窪出土状況（東から）



SXB01、SXB02完掘状況（西から）



小石室検出状況（南東から）



1号火葬墓断面 (西から)



1号火葬墓鉸貝出土状況 (北から)



1号火葬墓完掘状況 (西から)



5号火葬墓断面 (西から)



1号・5号火葬墓 (南から)



3号火葬墓出土状況 (南東から)



2号火葬墓出土状況① (北から)



2号火葬墓出土状況② (北から)



4号火葬墓検出土状況（南東から）



4号火葬墓出土状況①（南東から）



4号火葬墓出土状況②（南東から）



6号火葬墓検出土状況（南から）



6号火葬墓人骨出土状況（東から）



6号火葬墓完掘状況（南から）



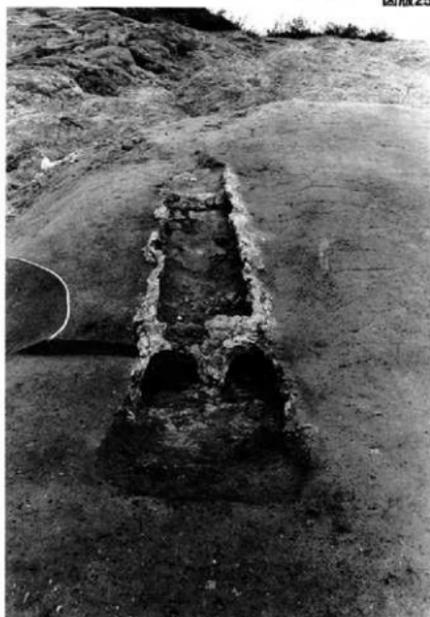
SXD13遺物出土状況（南東から）



SXD13完掘状況（南東から）



窯体検出状況（西から）



窯体完掘状況（西から）



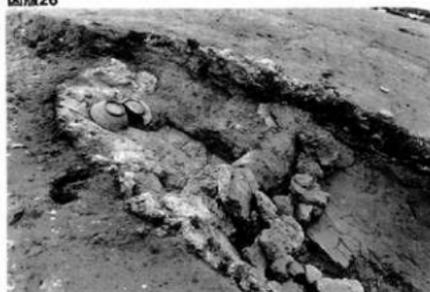
窯内天井壁崩落状況（西から）



作業風景（南東から）



煙道部 布目尻痕



煙道部 (北から)



焼成室 (西から)



焼成室 (西から)



焼成室断面 (南西から)



灰厚黒色灰層検出状況 (北西から)



灰厚断面 (北西から)



灰厚断面 27X—27Y (南西から)



灰厚断面 26X—27X (北から)



SD01 検出状況 (北から)



SD01断面 24X-25X (南から)



SK1, SK2検出状況 (西から)



SK1, SK2断面 (北西から)



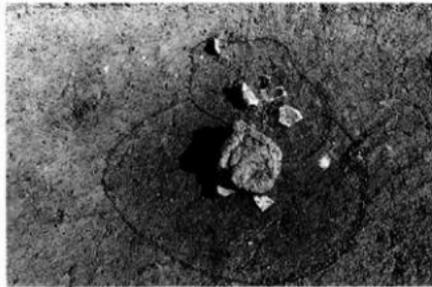
SK3 (西から)



SK5断面 (西から)



SK6 (西から)



SK8 (西から)



SXD08 遺物出土状況① (南東から)



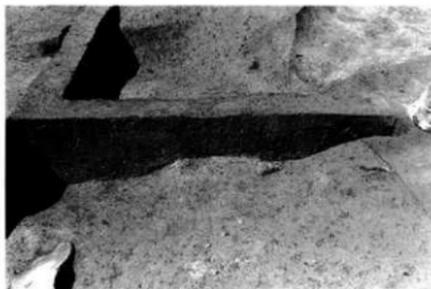
SXD08 遺物出土状況② (南東から)



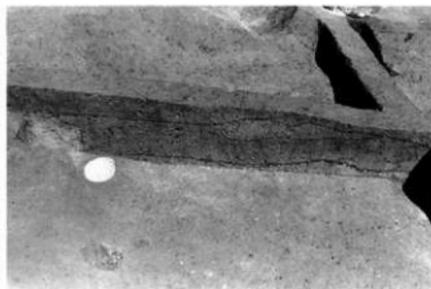
SXD07、SXD08 完掘状況 (南東から)



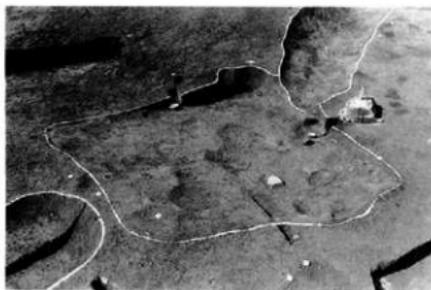
SXD15遺物出土状況 (南東から)



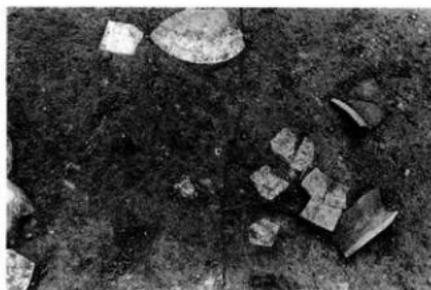
SXD15断面 (南東から)



SXD15断面 (南から)



SXD15完掘状況 (南東から)



SXD15土器甕出土状況 (東から)



SXD15遺物出土状況① (南から)



SXD15遺物出土状況② (東から)



SXD15遺物出土状況③ (南東から)



SXD14・16 完掘状況 (南東から)



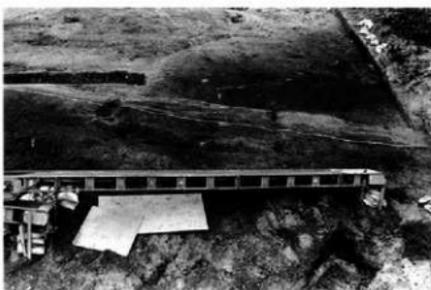
SDB01・SRB01 完掘状況 (西から)



SRD01 完掘状況 (南から)



SRD04 検出状況 (南から)



SRD05 検出状況 (南東から)



2001



2041



2028



2147



2030



2120



2032



2125

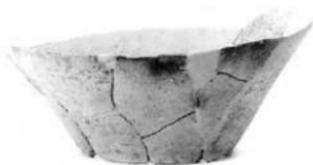
遺構出土土器（立面1）高环・器台



2124



2159



2169



2191



2160



2192



2175



2196



2219

遺構出土土器（立面2）高坏・器台



2246



2251



2247



2374



2276



2375



2252



2335



2324



2336

遺構出土土器（立面3）高坏・器台



2039 (脚部)



2027



2123



2083



2049



2081



2127



2052



2095



2130



2069



2109



2121



2068



2126



2158

遺構出土土器 (立面4) 高坏・器台



2166



2257



2356



2161



2368



2378



2168



2357



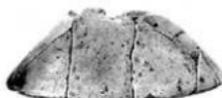
2331



2377



2275



2337



2354



2282



2358



2381

遺構出土土器 (立面5) 高坏・器台



2027



2089



2045



2112



2062



2151



2082



2152



2190



2248



2289



2167



2319



2235



2253



2234



2379

遺構出土土器（立面7）変



2355



2336



2365



2372



2384



2339



2361

遺構出土土器 (立面B) 壺



2020



2033



2020 (有目压痕)



2026



2057



2029



2102



2103



2141



2101



2131



2155



2154



2138



2136



2189



2156



2181



2185



2182



2186



2241



2195



2215



2239



2216



2238

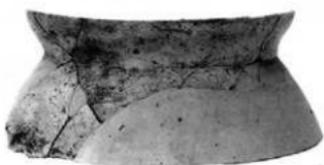


2237

遺構出土土器 (立面12) 甕・鉢



2318



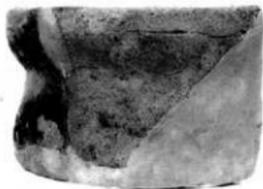
2268



2305



2329



2303



2330



2298



2106



2365



3060



2350



2334



2353



2367



2061



2309



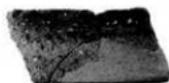
2274



2091



2315



2272



2139



2312



2272



2135



2292



2326



2314



2188



2317



2050



2208



2273



2392



2402



2407



2460



2493



2410



2495



2494



2425

包含層出土土器 (立面1) 高环・器台



2425



2459



2419



2444



2514



2457



2450



2488



2465



2445



2464



2466



2479



2433



2487



2486



2476

包含層出土土器(立面2)高坏·器台



2478



2491



2427



2492



2470



2443



2477



2490



2437



2428



2586



2584

包含層出土土器 (立面3) 高环·器台·甕·鉢



2585



2671



2717



2680



2738



2672



2684

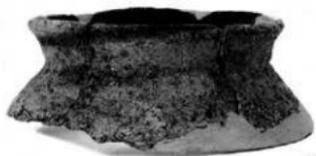
包含層出土土器 (立面4) 壺・甕



2707



2713



2756



2731



2806



2788



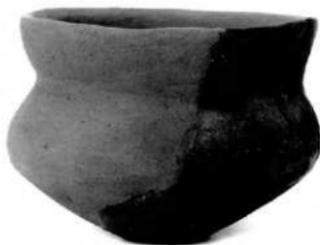
2815



2716



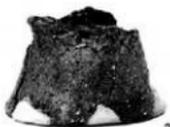
2663



2666



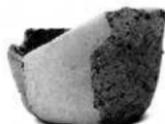
2846



2829



2839



2848



2784



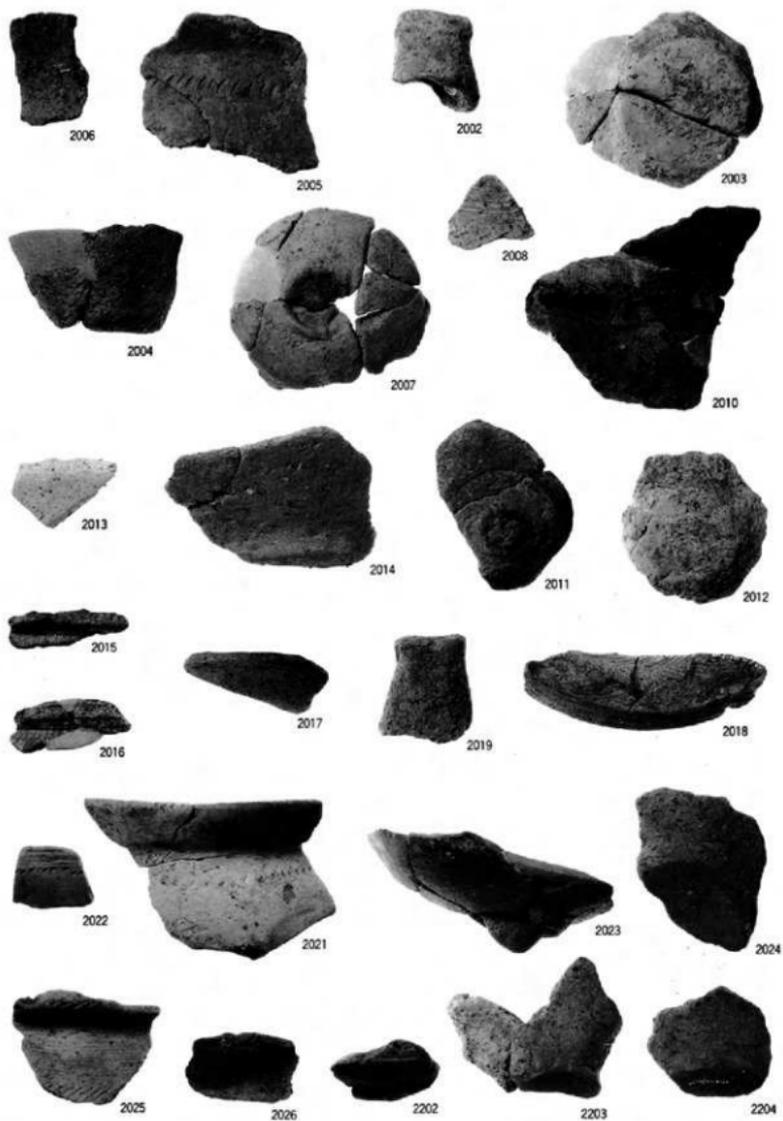
2832



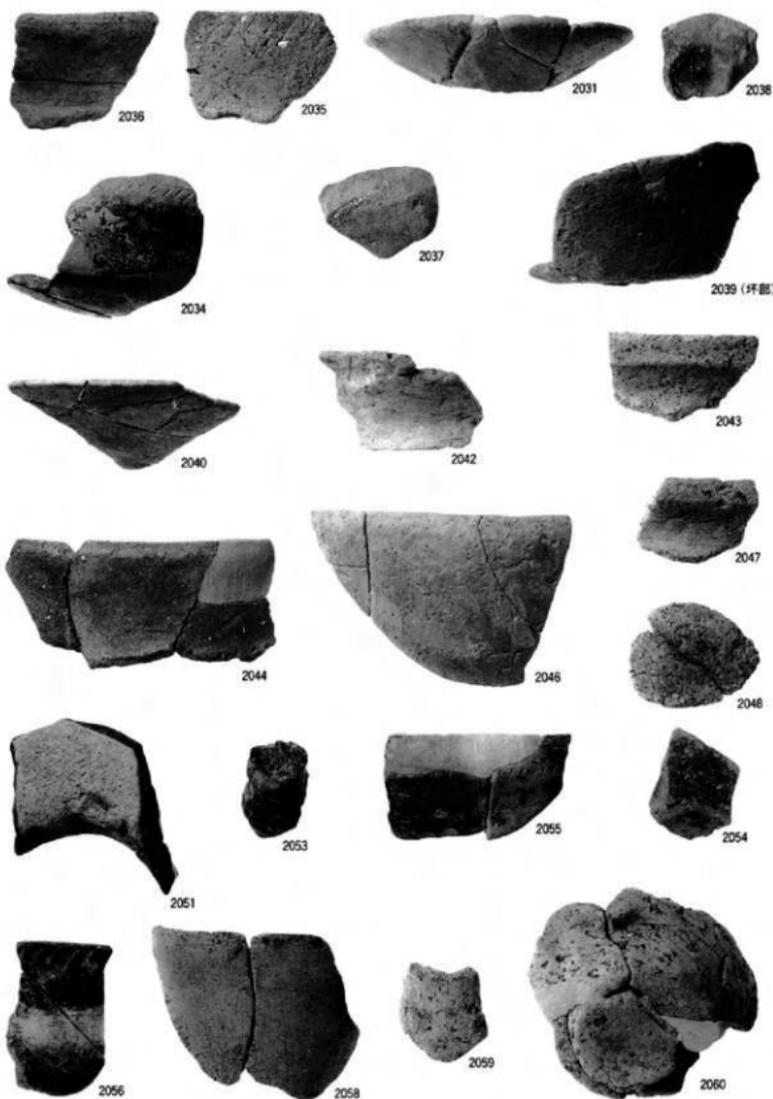
2849



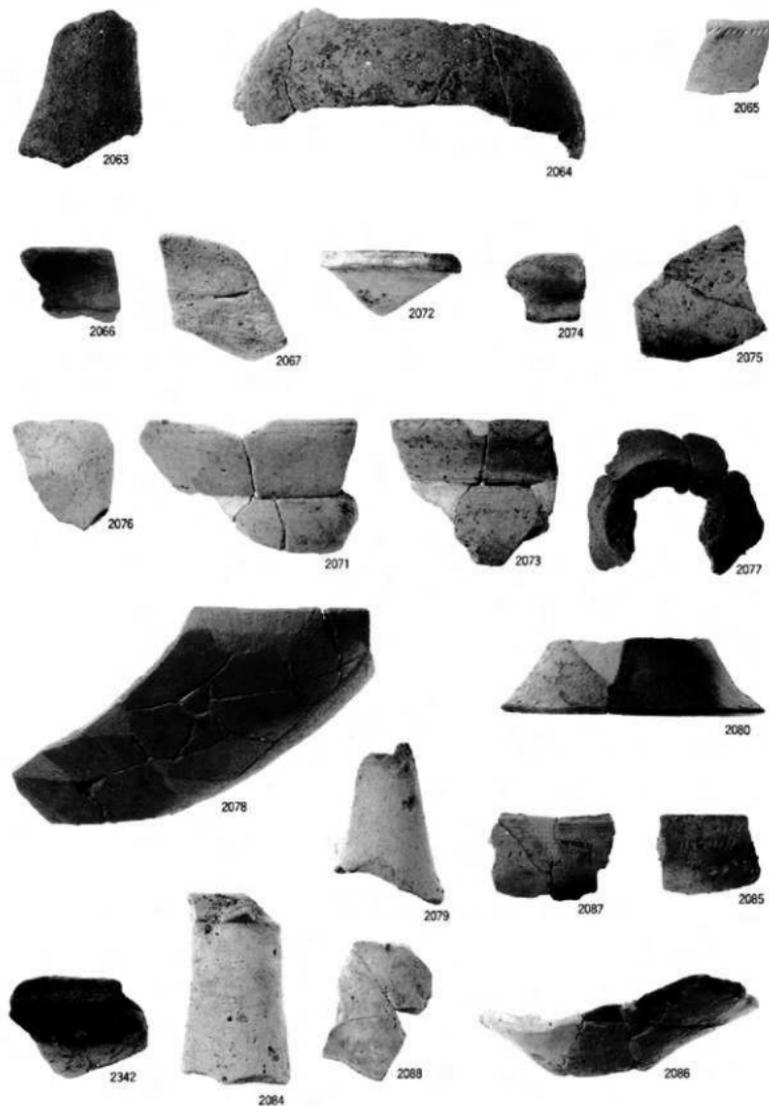
2627



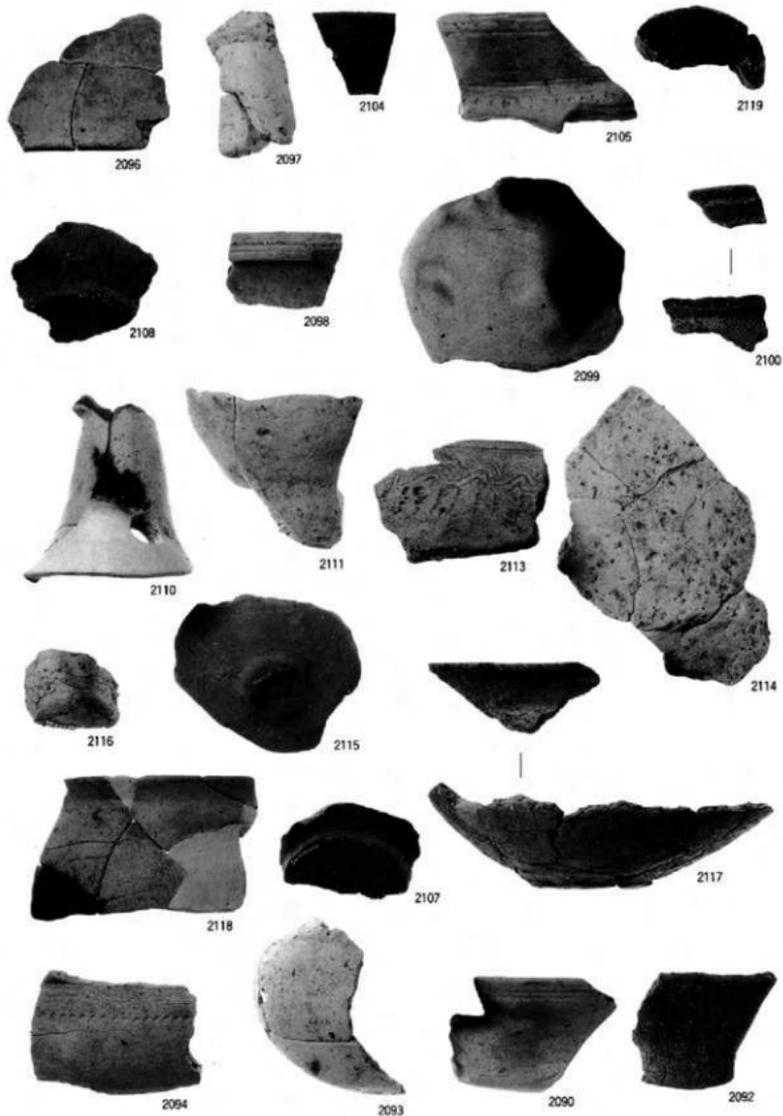
遺構出土土器（仿職1）



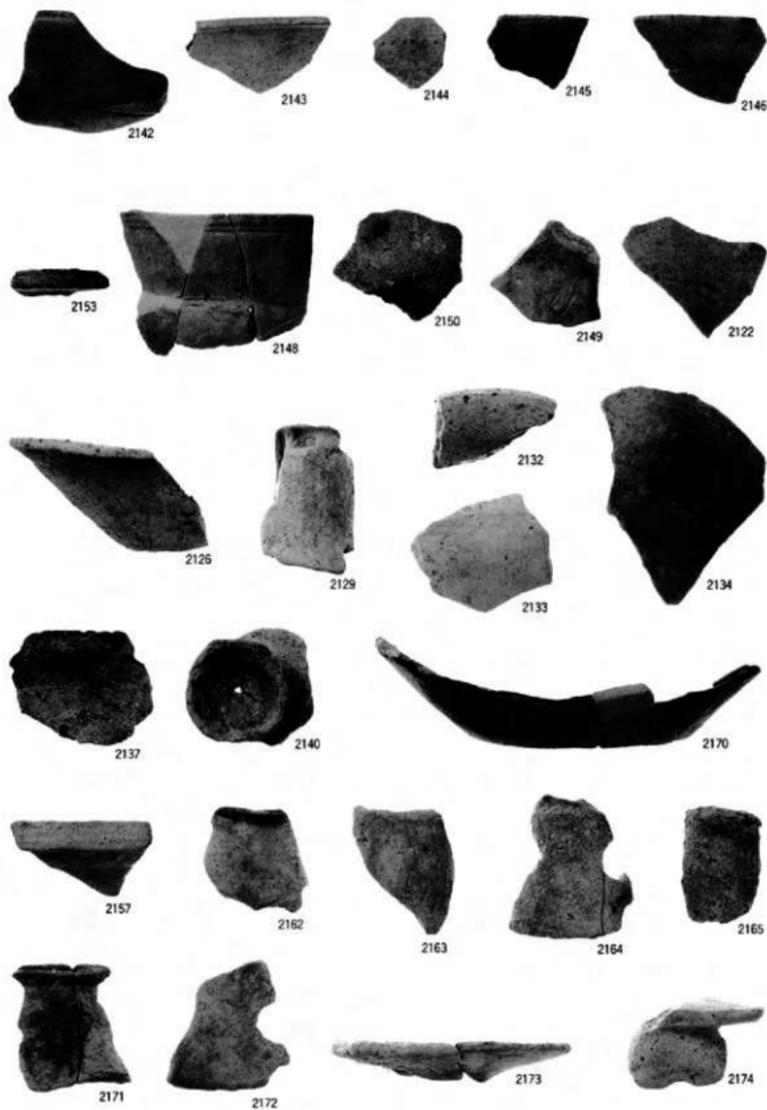
遺構出土土器 (俯瞰2)



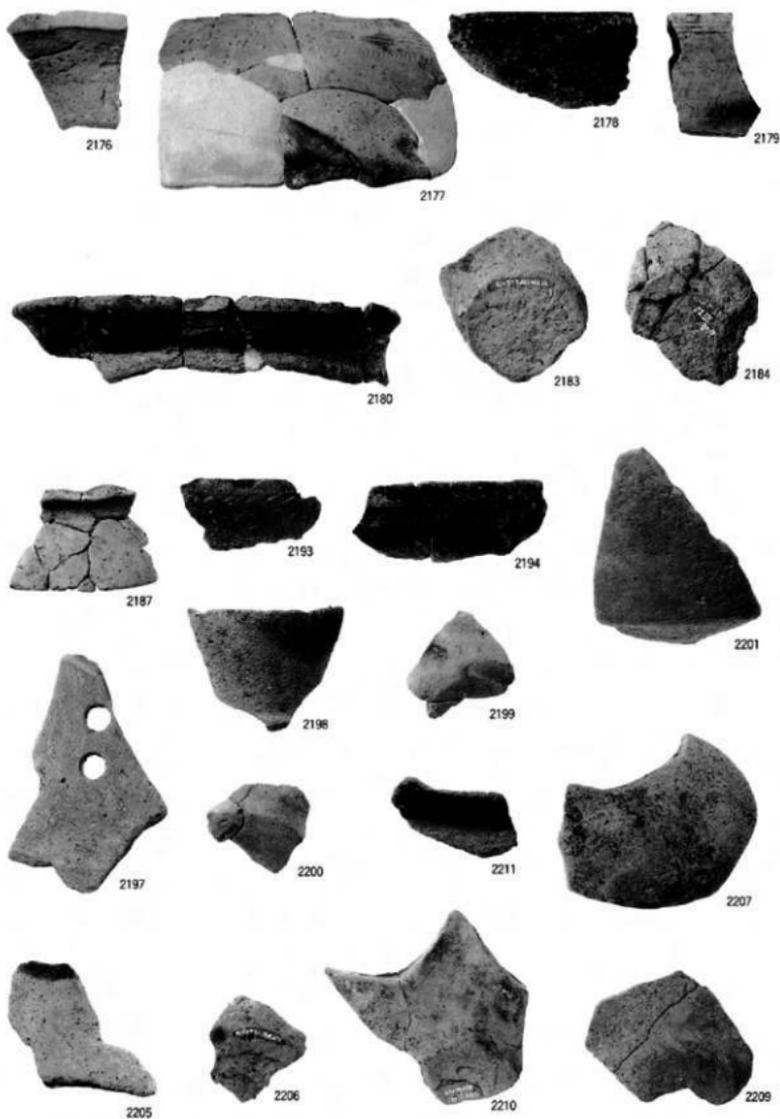
遺構出土土器（俯瞰3）



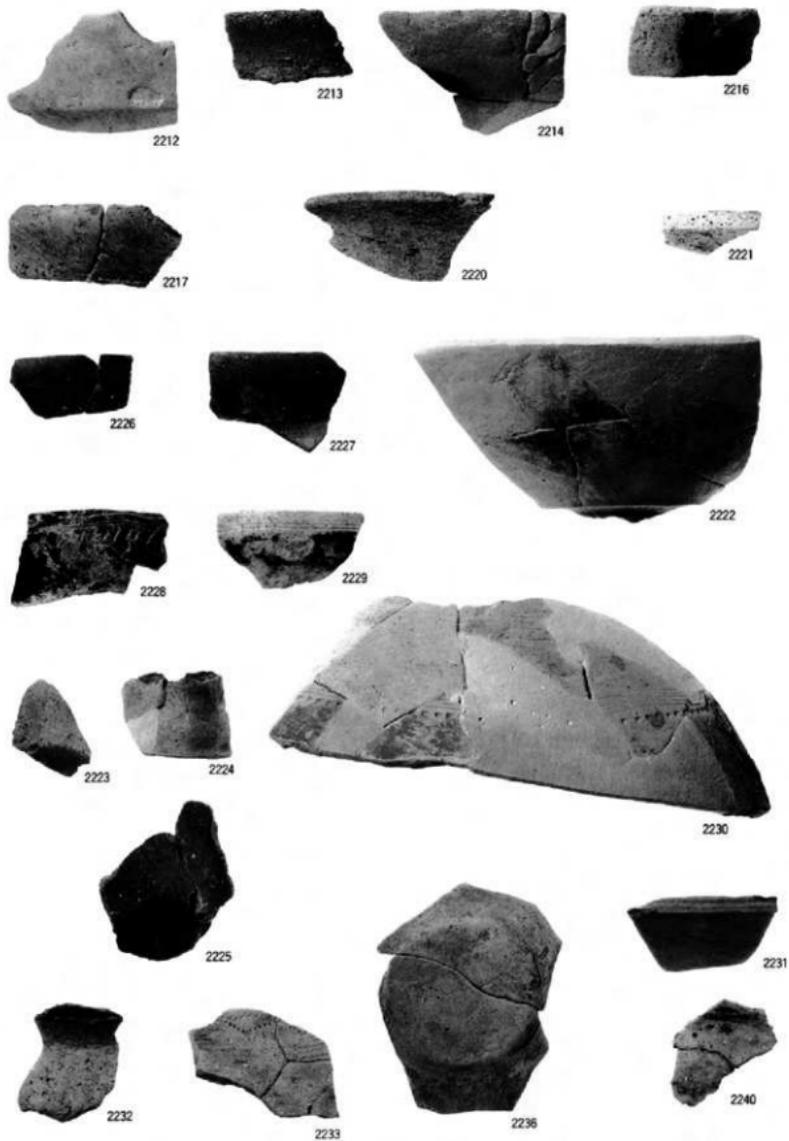
遺構出土土器 (俯瞰4)



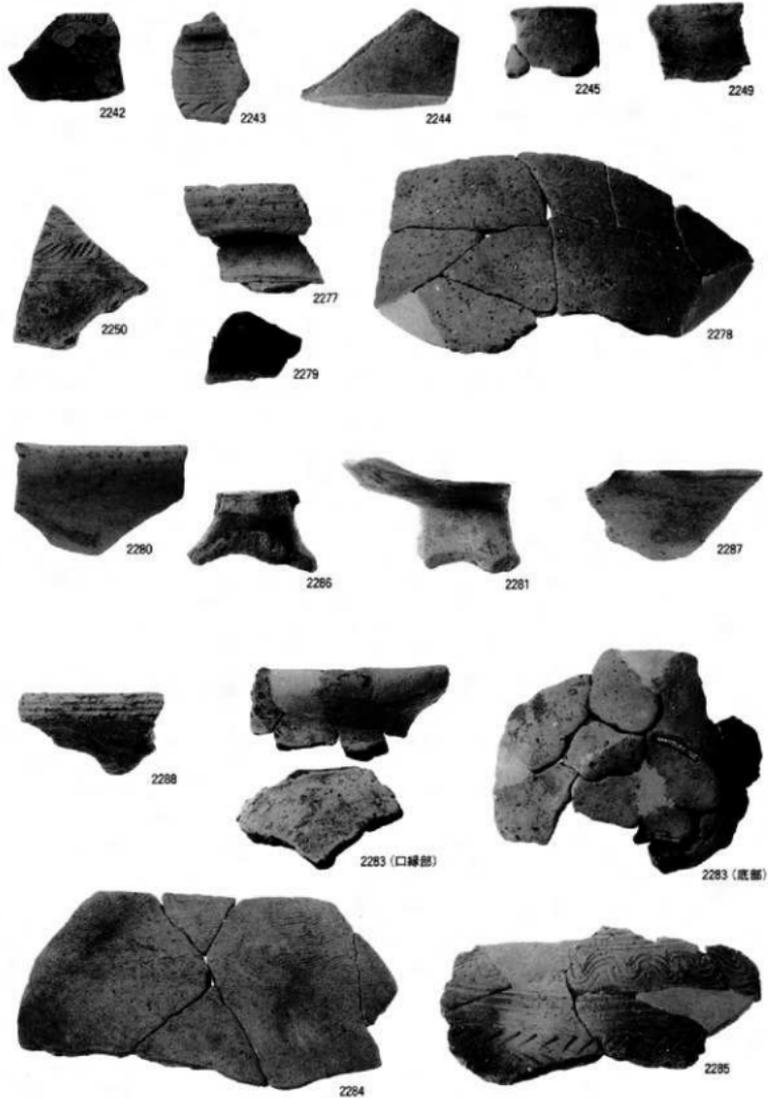
遺構出土土器（俯瞰5）



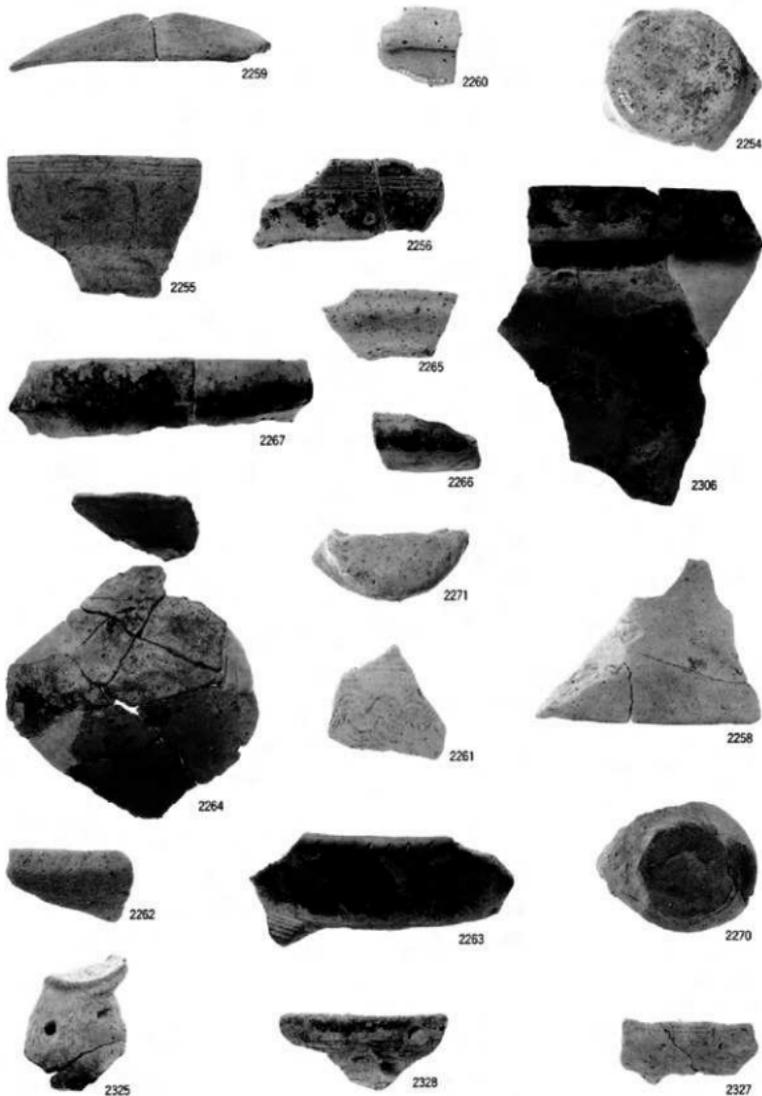
遺構出土土器 (俯瞰6)



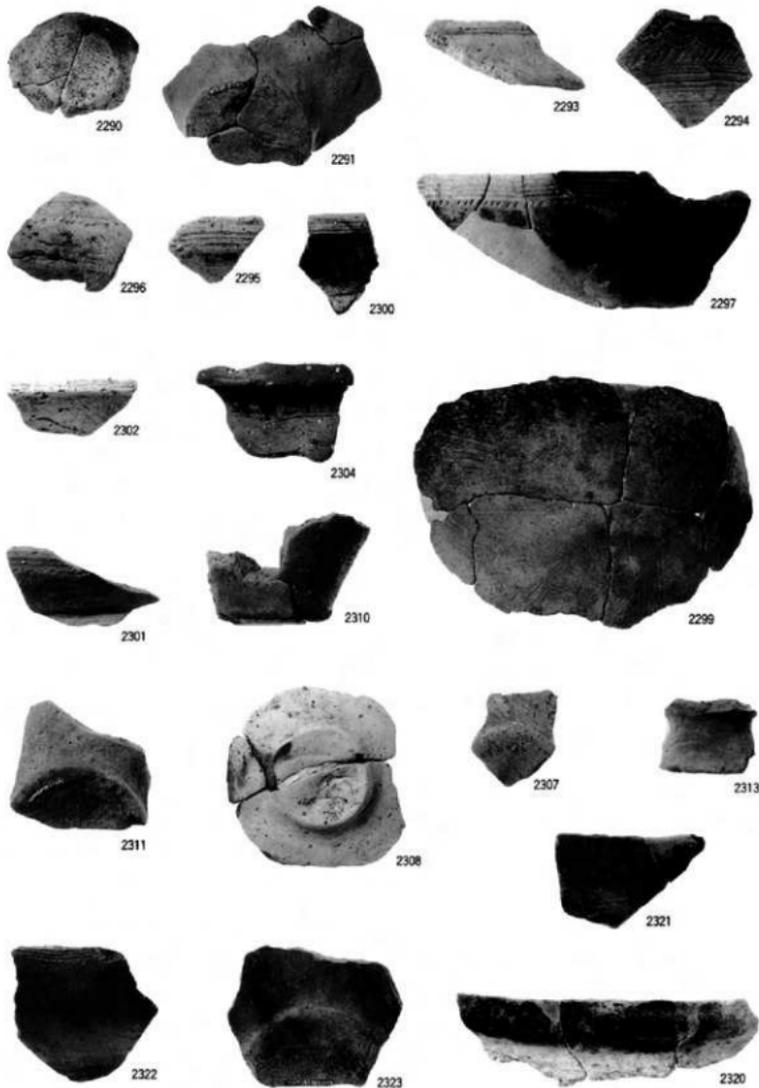
遺構出土土器（俯瞰7）



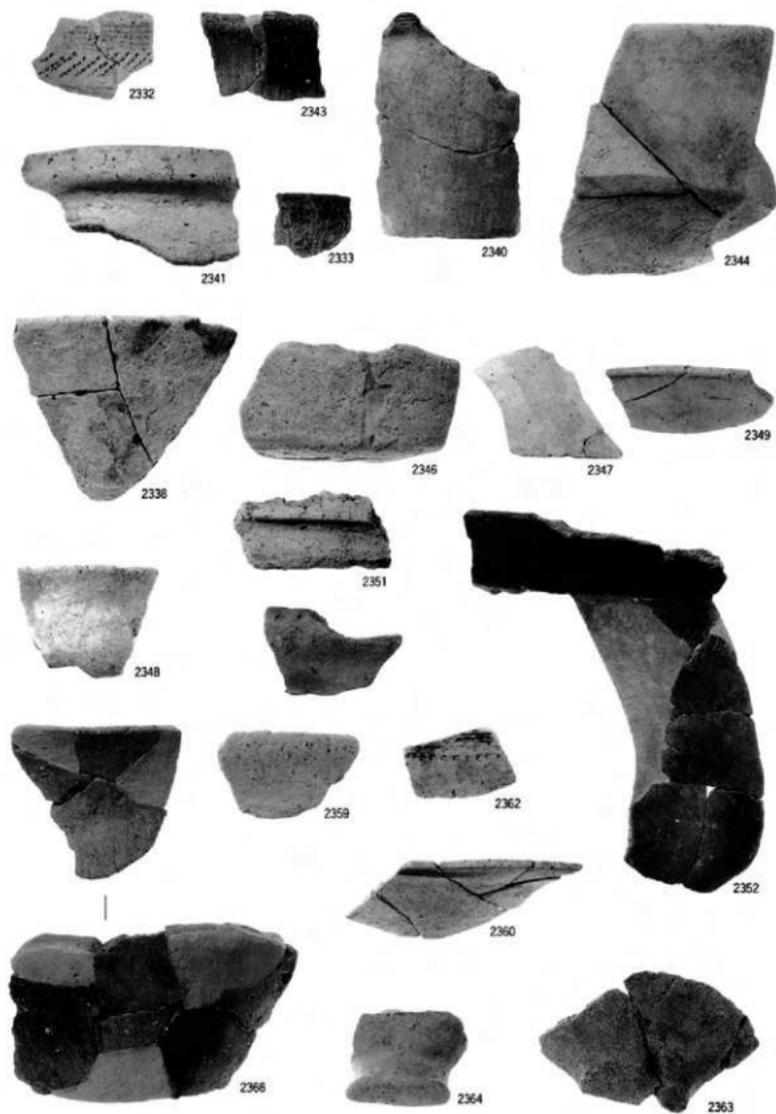
遺構出土土器 (俯瞰8)



遺構出土土器 (俯観9)



淮阴出土土器（俯瞰10）



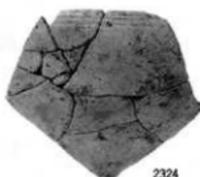
遺構出土土器 (俯瞰11)



2371



2376



2324



2380



2382



2383



2390



2391



2386



2387



2388



2389



2369



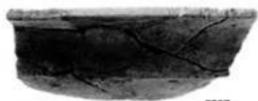
2370



2373



2061



2397



2395



2409



2412



2489



2511



2530



2531



2520



2549



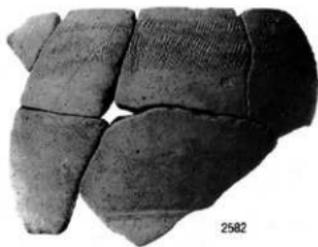
2517



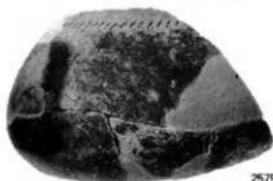
2592



2581



2582



2579



2718



2820



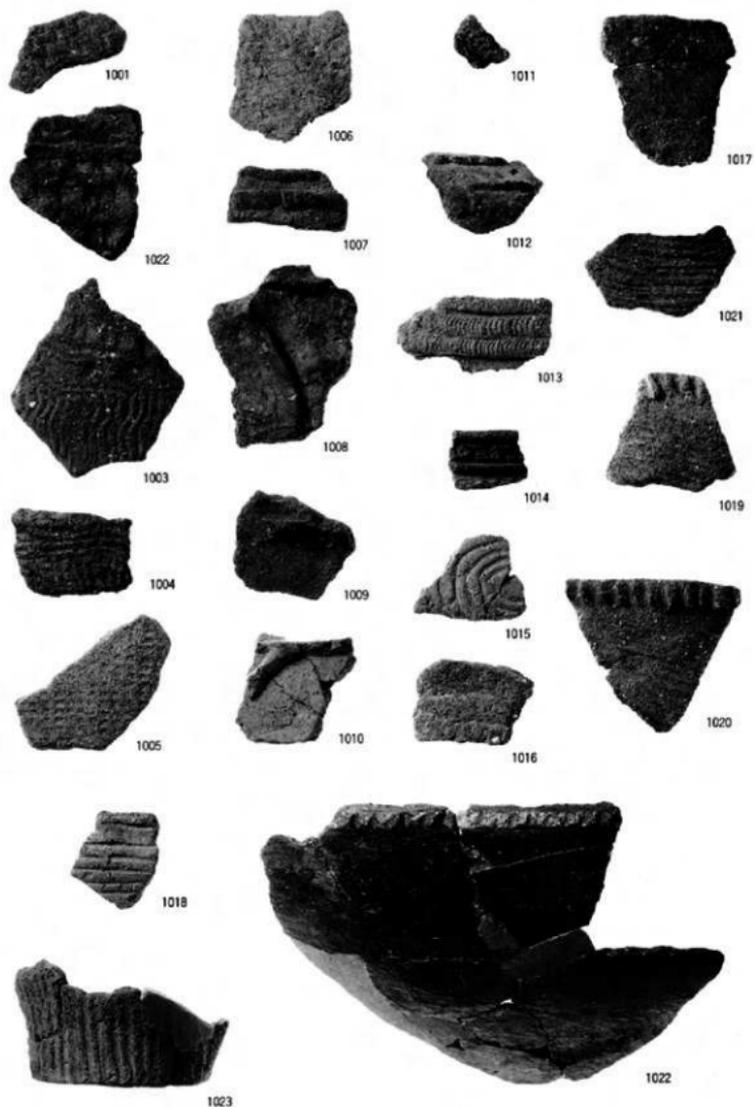
2657



2719



2729



繩文・弥生土器（俯視）



6001



6002



6003



6004



6032



6005



6009



6006

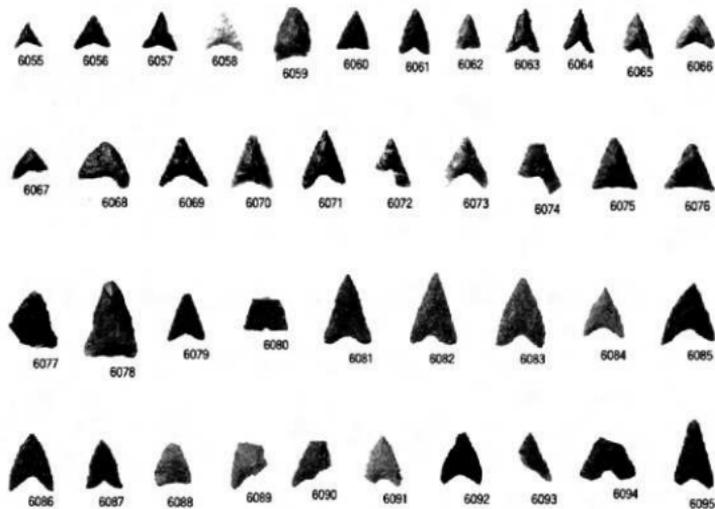
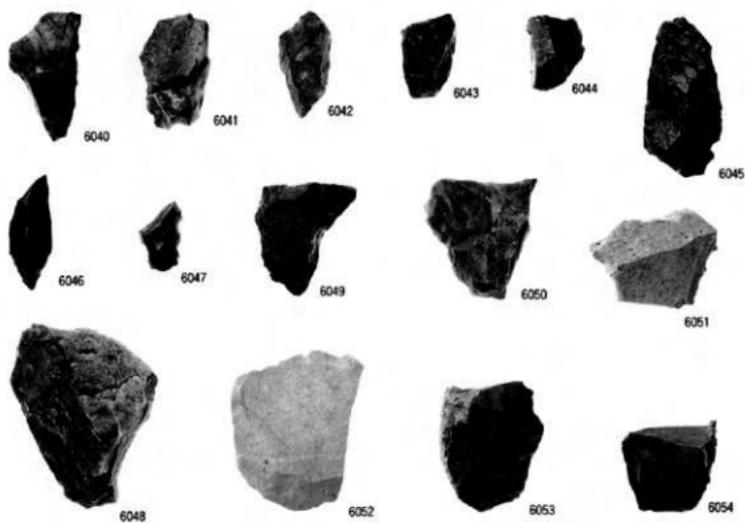


6007



6008







6096



6097



6098



6099



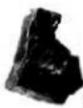
6100



6101



6102



6103



6104



6105



6106



6107



6108



6109



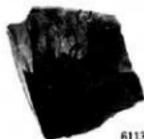
6110



6111



6112



6113



6114



6115



6116



6117



6118



6119



6120



6121



6122



6123



6124



6125



6126



6127



6128



6129



6130



6131



6132



6133



6134



6135



6136



6137



6138



6139



6140



6141



6142



6143



6144



6145



6146



6147



6148



6149



6150



6151



6152



6153



6154



6155



6156



6157



6158



6159



6160



6161



7002



7003



7006



7007



7005



7004



7001



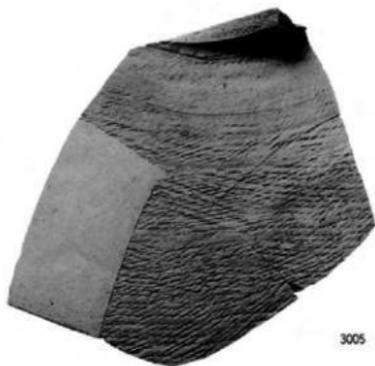
3001



3002



3003



3005



3004

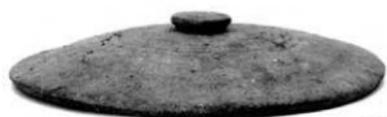


3006



3007

遺構出土須惠器（埋納塹・小石室）



3015



3012



3014



3008



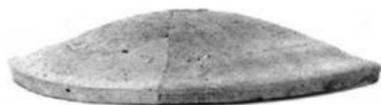
3013



3009



3011



3010

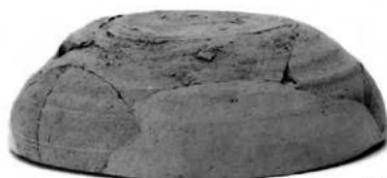
遺構出土須恵器（火葬墓）



3016



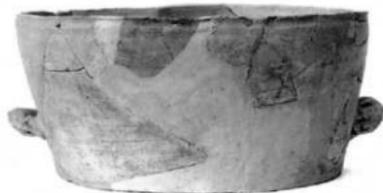
3017



3040



3024



3047



3035

3036

3037



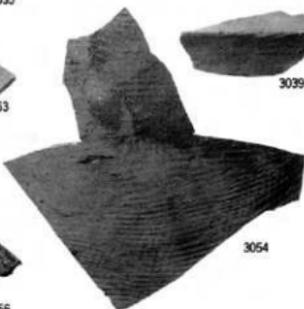
3053



3039



3056



3054



3057



3055



3018



3023



3020



3027



3029

3030



3022



3034



3032

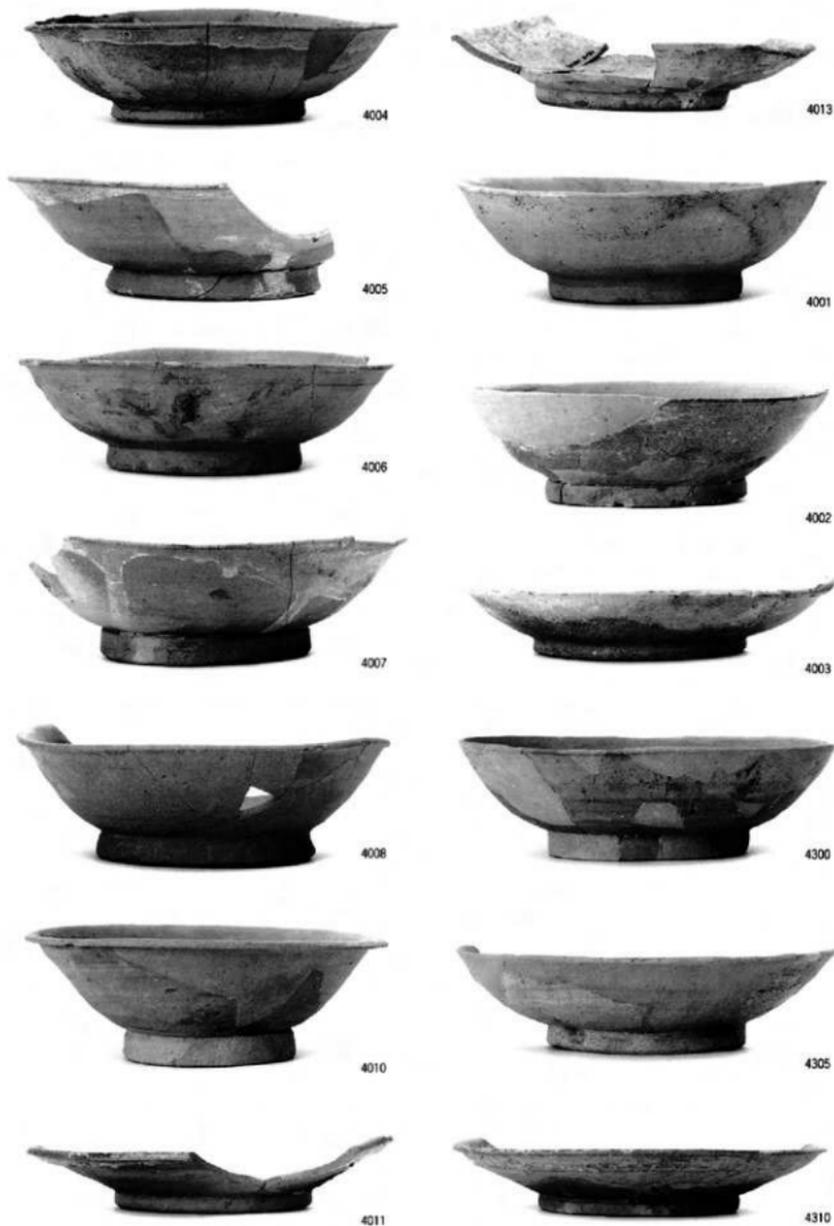


3031



3033

遺構出土須惠器・包含層出土須惠器



深橋前古窯跡（焼成室・煙道部出土）、D区遺構出土遺物



4299



4307



4312



4308



4306



4312



4315



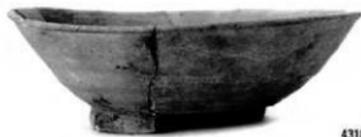
4313



4317



4314



4318



4320



4324



4328



4329



4330



4291



4285



4286



4033



SXD15出土土

SXD15出土遺物、重ね焼き、筆ぬり、細部



はけぬり・つげかけ細部



4096



4105



4097



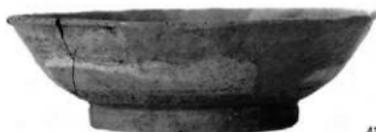
4108



4098



4111



4100



4113



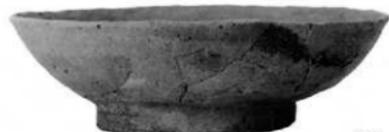
4101



4114



4104



4118



4116



4133



4121



4134



4126



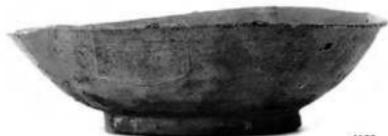
4135



4124



4138



4129



4140



4128



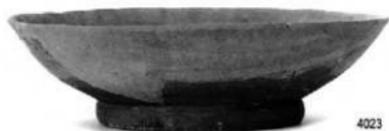
4142



4141



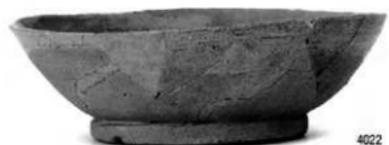
4075



4023



4046



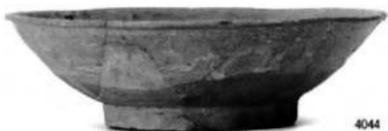
4022



4045



4024



4044



4077



4051



4035



4053



4082



4160



4087



4163



4088



4165



4090



4167



4347



4169



4345



4170



4171



4174



4175



4060



4177



4065



4180



4067



4184



4357



4186



4363



4188



4364



4189



4365



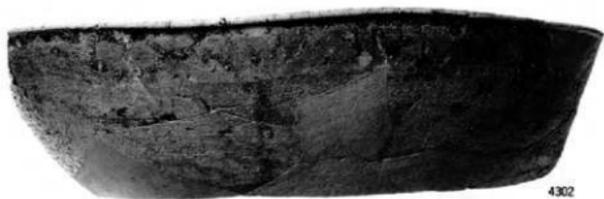
4027



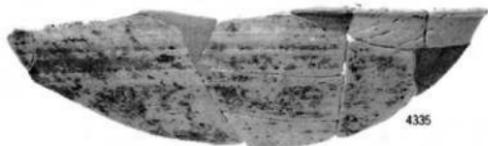
4362



小碗·深碗·盖·段皿·有台皿·鉢



4302



4335



4235



4311



4311



4370



4337



4207



4221



4206



4034

长頸瓶 (1)



4219



4033



4085



4210

長頸瓶 (2)



422



4018



4212



4217

長頸瓶 (3)



4040



4332



4094



4016

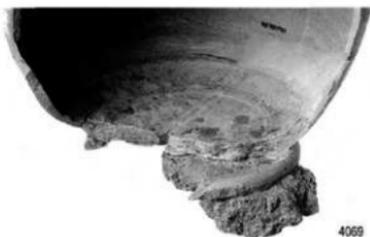
長頸瓶 (4)・短頸壺



4209



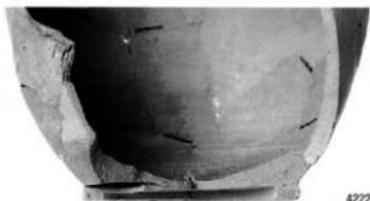
4214



4068



4222



4222



横成室出土



長頸瓶 調整1



調整1



4099



調整1



調整2



4039



調整2



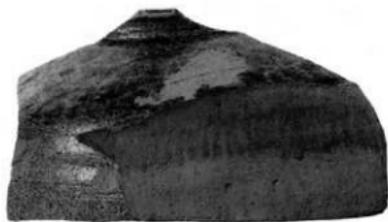
4334



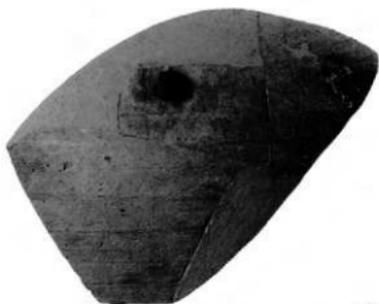
4227



4226



4228



4367



4368



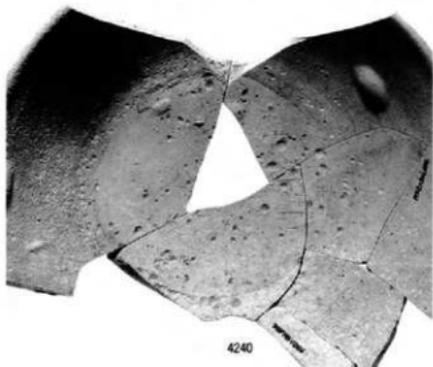
4230

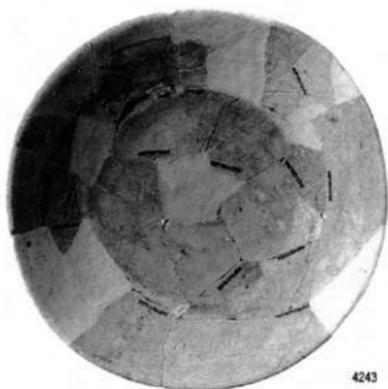


4229



4333





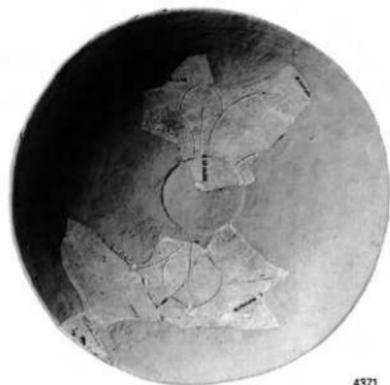
4243



4244



4245



4371



4246



4248

絵、線刻



輪花碗 (円文)



4083



4156



4083



4156



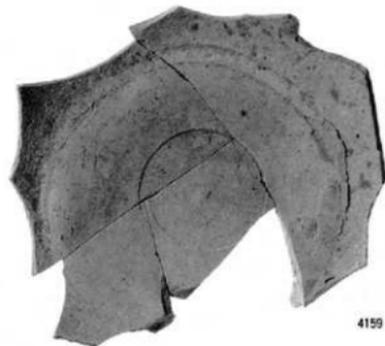
4352



4158



4352



4159

深碗 (円文)



4202



4192



4202



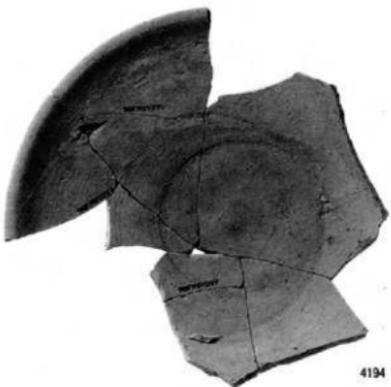
4025



4203

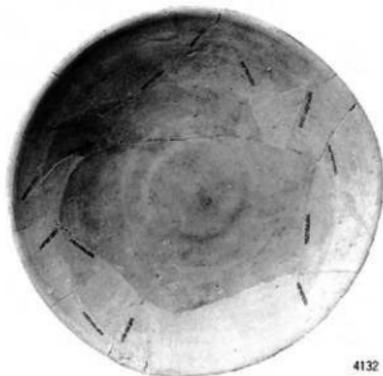


4203



4194

大皿、皿 (円文)



4132



4350



4132



4109



4316



4143

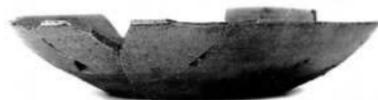
底部内面、外面（凹文）、爪形压痕、高台压痕、回纹系切残



4258



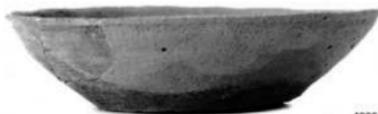
4255



4259



4263



4266



4257



4339



4072



4252



4253



4374



4256



4262



4095

皿状烧台



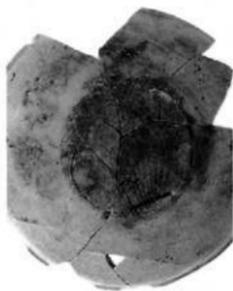
4338



4261



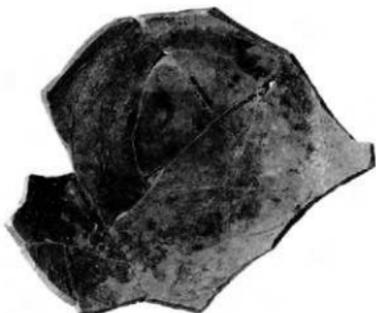
4258



4259



4253



皿状烧台、付盖物



4281



4019



4282



4086



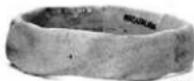
4272



4269



4273



4274



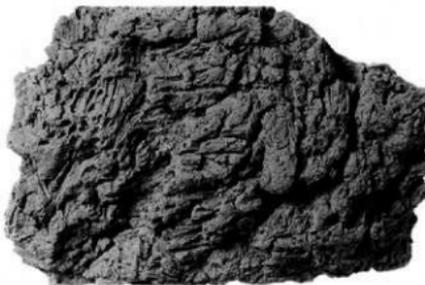
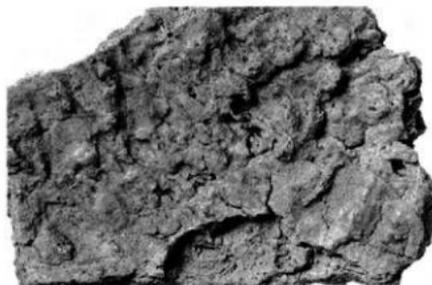
4275



4271



4270



窑道具、窑壁



4276



4280



4277



4279



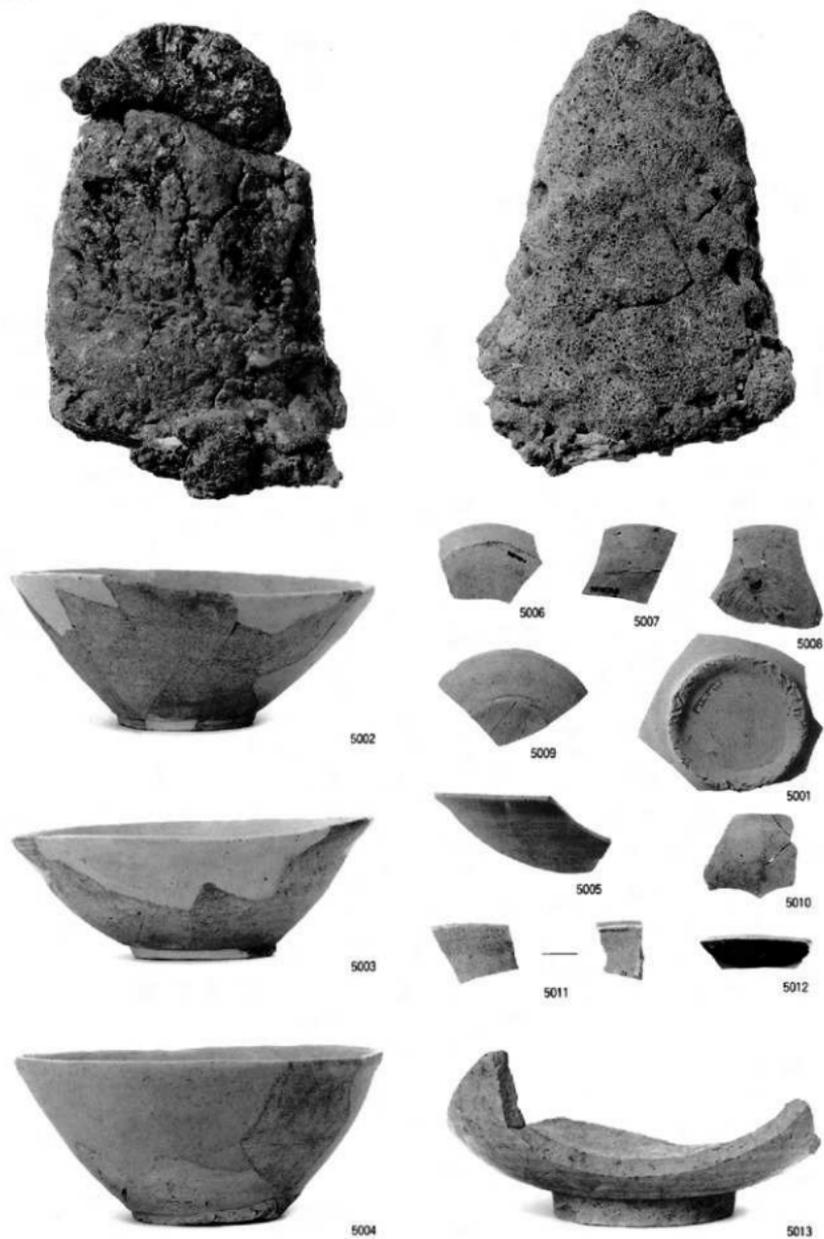
4278



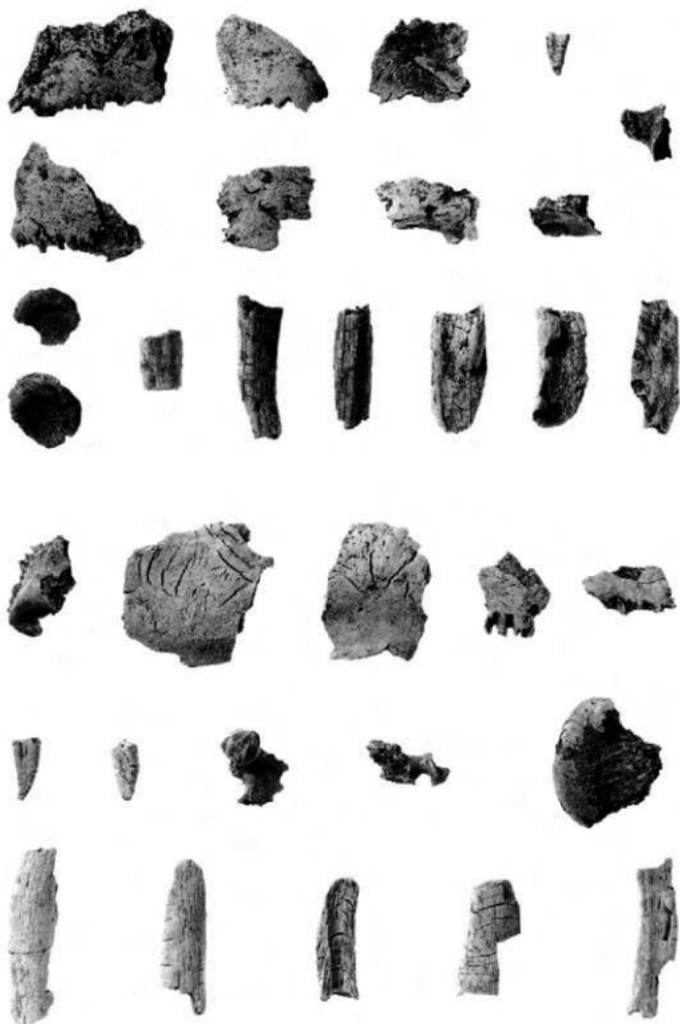
4070



檢台2



分夾棒、中近世陶器



火葬骨

報 告 書 抄 録

ふりがな	ふかばしまえいせき						
書名	深橋前遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番号	第79集						
編著者名	松岡千年 安田正枝						
編集機関	財団法人 岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜市三田洞東1-26-1 TEL.058-237-8550						
発行年月日	西暦2003年3月20日						
ふりがな 集録遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
深橋前遺跡	関市下有知深橋前小田	21205	09075	35°	136°	1997.4.24～	関テクノハイ
深橋前古墳	関市下有知深橋前	21205	09076	30°	55°	1998.12.10	ランド開発
深橋前古窯跡	関市下有知深橋前	21205	09080	44°	30°		
深橋前 1～3号火葬墓	関市下有知深橋前	21205	09077～ 09079				
深橋前 4～6号火葬墓	関市下有知深橋前	21205	09245～ 09247			12,800m ²	
集録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な時代	特記事項		
深橋前遺跡	集落跡	弥生末～	竪穴住居	80軒	弥生上器	弥生時代末から古墳時代初頭の急傾斜地に造られた竪穴住居跡から、多くの土器とともに、銅鏝・筒状銅製品が出土。須恵器・灰釉陶器を火葬壺とする火葬墓を6基確認。平安時代後期の灰釉陶器窯跡から線刻の文字・文様を持つ碗などが多く出土。	
深橋前古墳	古墳	平安末	方形周溝墓	4基	上器		
深橋前古窯跡	古窯跡		古墳	1基	須恵器		
深橋前1～6号 火葬墓	火葬墓		古窯跡	1基	灰釉陶器		
			小石室	1基	金属製品		
			火葬墓	6基			
			土坑墓	5基			

岐阜県文化財保護センター 調査報告書 第79集

深 橋 前 遺 跡

2003年3月20日

編集・発行 財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜市三田河東1-26-1
印 刷 梶谷印刷株式会社